

大日山 35 号墳発掘調査報告書

－特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 2－

2013 年 3 月

和歌山県教育委員会

序 文

岩橋千塚古墳群は、千塚の名のごとく狭い地域に約 800 基の古墳が密集し、石棚・石梁を有する「岩橋型」と称される特徴的な横穴式石室をはじめ多種多様な埋葬施設が存在することから昭和 6 年に国の史跡指定を受け、昭和 27 年には特別史跡に指定されました。

「木の国」と称された本県は自然が豊かで、先人が遺した文化遺産である史蹟・遺跡等が数多く存在します。なかでも、「岩橋千塚古墳群」は国内最大規模を誇り、古墳群として特別史跡に指定されているのは当古墳群と宮崎県西都原古墳群のみです。

和歌山県立紀伊風土記の丘は、この全国にも比類ない貴重な歴史遺産である古墳群を保護し、かつ文化財の学習の場として活用するために、昭和 46 年に開館しました。昭和 48 年に取りまとめられた「基本計画」をもとに「第 1 期整備計画（平成 15～26 年）」を策定し整備に努めてきたところです。

平成 21 年度には、平成 15 年度から 20 年度までの発掘調査および整備事業を実施した古墳について『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 1』として刊行しました。本年度は大日山 35 号墳の墳丘部分の発掘調査成果について『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 2』として刊行します。

調査と整備を経て報告書をまとめるにあたり、関係者の方々のご支援とご協力を得ましたこと、ここに深く感謝申し上げます。

本書が整備報告書として広く活用されますれば幸いです。

平成 25 年 3 月 29 日

和歌山県教育委員会

教育長 西 下 博 通



1. 岩橋千塚古墳群 全景 (平成2年2月撮影)



2. 大日山35号墳から和歌山平野をのぞむ (東から)



3. 大日山 35号墳 全景 (西から)



4. 東造出 全景 (東から)



5. 東造出 埴輪検出状況(北から)



6. 東造出 埴輪出土状況(北西から)



7. 東造出 円筒埴輪樹立状況（西から）



8. 東造出 家形埴輪・人物埴輪・須恵器大甕 出土状況（南西から）



9. 東造出 翼を広げた鳥形埴輪出土状況（北から）



10. 東造出 人物埴輪（力士）出土状況（北から）



11. 西造出 全景 (東から)



12. 西造出 埴輪検出状況 (南から)



13. 西造出 埴輪出土状況（南東から）



14. 西造出 埴輪樹立状況（東から）



15. 西造出 人物埴輪出土状況（北西から）



16. 西造出 人物埴輪台部出土状況（北から）

例 言

- 1 本書は和歌山県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）が実施した和歌山市に所在する特別史跡岩橋千塚古墳群の整備報告書である。
- 2 事業期間は平成15～26年度の計画で、現在継続中である。整備報告書は分冊にして刊行する。今回は2分冊目にあたり、平成15～20年度までの整備事業については、『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書1』（平成22年3月）としてすでに刊行している。
- 3 当報告書はそのうち平成15～17年度に実施した大日山35号墳の発掘調査について報告する。ただし、石室の調査については、整備事業の最終年度に刊行する整備報告書において報告する予定である。
- 4 発掘調査は平成15～17年度、遺物整理は平成16～24年度に実施した。事業は、平成15・16年度は県教育委員会文化遺産課、平成17～24年度は県立紀伊風土記の丘が担当した。
- 5 本書の執筆分担は下記のとおりであるが、遺構の報告については調査担当者による実績報告を元にして仲原が加筆・修正して作成した。
 - 第1章：丹野、富加見、仲原、萩野谷
 - 第2章：仲原、萩野谷
 - 第3章：黒石、丹野、仲原、藤井、萩野谷
 - 第4章：仲原
 - 第5章：仲原
 - 第6章：仲原
 - 第7章：富加見
 - 第8章：仲原
- 6 本書の編集は仲原がおこなった。
- 7 調査・整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料及び出土遺物は県立紀伊風土記の丘が保管している。
- 8 調査・整備・報告書刊行にあたり、下記の方々と機関からご指導・ご協力を賜った。
 - 文化庁・和歌山市教育委員会
 - 青柳泰介・有馬義人・井上裕一・犬木努・今西康宏・小栗明彦・賀来孝代・鐘方正樹・河内一浩・車崎正彦・設楽博己・杉山晋作・関真一・高橋克壽・忽那敬三・辻川哲朗・花熊祐基・坂靖・藤藪勝則・前田敬彦・松田度・宮崎康雄・山田隆文・丸山真史・若松良一

凡 例

- 1 本報告は、平面直角座標系第四系（世界測地系）に基づき、図示した北方位は座標北を示す。
- 2 基準高は、東京湾標準潮位（T.P.）を使用した。
- 3 土器及び調査時の土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人二本色彩研究所色票監修小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』を使用した。

調査組織

和歌山県教育委員会

- 教育長 小関洋治（平成15～18年度） 山口裕市（平成19～22年度） 西下博通（平成23・24年度）
生涯学習局長 松永宣詔（平成15年度） 西畑行庸（平成16・17年度） 板橋孝志（平成18年度）
山路正雅（平成19年度） 宮下和己（平成20年度） 井上誠（平成21～23年度）
喜多英夫（平成24年度）

文化遺産課（平成15～24年度）

- 文化遺産課長 西畑行庸（平成15年度） 前山哲雄（平成16年度）
藤井保夫（平成17～18年度／平成15・16年度副課長）
木下淳（平成19～20年度） 津井宏之（平成21～23年度） 川端真理（平成24年度）
副課長 額田誠規（平成15・16年度） 武内雅人（平成17年度／15・16年度調査班長）
根岡知宏（平成17・18年度） 永光寛（平成19年度／16年度専門員、18年度教育企画員）
田中亨（平成19年度） 吉田政弘（平成20・21年度） 濱口洋（平成22・23年度）
松本幸久（平成24年度）
専門員 吉田宣夫（平成15年度） 富加見泰彦（平成15・16年度）
調査班長 渋谷高秀（平成19～22年度） 黒石哲夫（平成23・24年度／22年度主任／17・18年度主査）
主査 佐々木宏治（平成22～24年度／15・16年度技師） 藤井幸司（平成24年度／7～23年度副主査）
副主査 高橋智也（平成21～23年度／19・20年度技師）
萩野谷正宏（平成20・21年度／17～19年度技師）
瀬谷（渡辺）今日子（平成23・24年度／17～22年度技師）
技師 仲原知之（平成15・16年度） 津村かおり（平成20・21年度） 田中元浩（平成24年度）

紀伊風土記の丘（平成17～24年度）

- 館長 和田正（平成17～19年度／20年度副館長館長職務代理者）
高瀬要一（平成21・22年度） 水田義一（平成23・24年度）
副館長 山本新平（平成17年度） 武内雅人（平成18年度） 酒部三依（平成19年度）
辻本勝（平成21～23年度） 中野一三（平成24年度／22・23年度教育企画員（22～24年度総務課長事務取扱）／20・21年度総務課長／19年度学芸課長）
総務課長 畑中伸之（平成17～18年度）
主査 井上佳典（平成18～21年度） 大藤久信（平成24年度）
副主査 平田育子（平成17年度） 額田誠規（平成24年度） 志水敦（平成23・24年度／22年度主事）
主幹 山本高照（平成22年度（学芸課長事務取扱）／平成20・21年度学芸課長／17・18年度主任）
富加見泰彦（平成23・24年度（学芸課長事務取扱）／17年度専門員）
学芸員 萩野谷正宏（平成22～24年度） 仲原知之（平成22～24年度／20・21年度副主査）
副主査 丹野拓（平成18～21年度）
技師 岩井顕彦（平成19年度） 佐竹智光（平成20年度）

本文目次

巻頭カラー写真	
第1章 整備事業の経緯と経過	1
第1節 整備事業の経緯	1
第2節 整備事業の経過	1
第3節 整備委員会	3
第2章 大日山35号墳の調査概要	4
第1節 大日山35号墳の位置と環境	4
第2節 発掘調査・整理作業の経過	8
第3節 調査の方法	11
第3章 調査の成果	16
第1節 調査の目的	16
第2節 後円部の調査	16
第3節 前方部の調査	17
第4節 東造出の調査	20
第5節 西造出の調査	23
第4章 東造出の形象埴輪	43
第1節 家形埴輪	43
第2節 人物埴輪	44
第3節 動物埴輪	44
第4節 器財埴輪	46
第5節 不明形象埴輪・形象埴輪基部	46
第5章 西造出の形象埴輪	149
第1節 家形埴輪	149
第2節 人物埴輪	149
第3節 動物埴輪	150
第4節 器財埴輪	151
第5節 不明形象埴輪・形象埴輪基部	151
第6章 円筒埴輪・朝顔形埴輪	205
第1節 円筒埴輪	205
第2節 朝顔形埴輪	205
第7章 東造出・西造出の須恵器・土師器	211
第1節 東造出出土の須恵器	211
第2節 西造出出土の須恵器・土師器	211
第8章 総括	218
遺物観察表	220
写真図版	
遺物写真図版	
報告書抄録	

図版目次

<巻頭カラー図版>

1. 岩橋千塚古墳群全景、2. 大日山35号墳から和歌山平野をのぞむ
3. 大日山35号墳全景、4. 東造出全景
5. 東造出墳輪検出状況、6. 東造出墳輪出土状況
7. 東造出円筒埴輪検出状況、8. 東造出家形・人物埴輪・須恵器出土状況
9. 東造出翼を広げた鳥形埴輪出土状況、10. 東造出力土埴輪出土状況
11. 西造出全景、12. 西造出墳輪検出状況
13. 西造出墳輪出土状況、14. 西造出埴輪検出状況
15. 西造出人物埴輪出土状況、16. 西造出人物埴輪台部出土状況

<図版目次>

- 図2.1 岩橋千塚古墳群および大日山35号墳位置図・・・5
- 図2.2 大日山35号墳調査区配置図・・・10
- 図2.3 大日山35号墳墳丘測量図・・・13
- 図2.4 調査グリッド図・・・14
- 図2.5 1・5トレンチ調査グリッド割付図・・・15
- 図3-1.7 18トレンチ平面図・土層断面図・・・25
- 図3-2 2トレンチ平面図・土層断面図・・・26
- 図3-3 3トレンチ平面図・土層断面図・・・27
- 図3-4.15 15トレンチ平面図・土層断面図・・・28
- 図3.5.15 15トレンチ埴輪出土状況(平面図・立面図)・・・29
- 図3.6. 6・9トレンチ平面図・土層断面図・・・30
- 図3.7. 7トレンチ平面図・土層断面図・・・31
- 図3.8. 8トレンチ平面図・土層断面図・・・32
- 図3.9.10 12トレンチ平面図・土層断面図・・・33
- 図3.10.11 1トレンチ・1トレンチ南側サブトレンチ・16トレンチ平面図・土層断面図・・・34
- 図3.11. 1・11トレンチ平面図・・・35
- 図3.12. 1・13・14トレンチ平面図・土層断面図・・・36
- 図3.13. 1トレンチ東造出墳輪出土状況平面図1・・・37
- 図3.14. 1トレンチ東造出墳輪出土状況平面図2・・・38
- 図3.15. 5トレンチ平面図・・・39
- 図3.16. 5トレンチ西造出墳輪出土状況平面図1・・・40
- 図3.17. 5トレンチ西造出墳輪出土状況平面図2・・・41
- 図3.18. 5トレンチ断面図・埴輪出土状況断面図・・・42
- 図4-1～4-26 東造出家形埴輪 1-1・・・47～72
- 図4-27～4-30 東造出家形埴輪 1-2・・・73～76
- 図4-31～4-35 東造出家形埴輪 1-3・・・77～81
- 図4-36～4-38 東造出家形埴輪 1-4・・・82～84
- 図4-39～4-40 東造出家形埴輪 1-5・1-8・・・85～86
- 図4-41～4-42 東造出家形埴輪(千木)・・・87～88
- 図4.43 東造出家形埴輪(各種部材)・・・89
- 図4.44～4.46 東造出人物埴輪(盛装男子・東女)・・・90～92
- 図4.47～4.51 東造出人物埴輪(力士)・・・93～97
- 図4.52～4.56 東造出鳥形埴輪 1-1・・・98～102
- 図4.57～4.62 東造出宇形埴輪 1-1・・・103～108
- 図4.63～4.64 東造出不明形象埴輪・形象埴輪基部・・・109～110
- 図4.65～4.66 東造出大形埴輪 1-1・・・111～112
- 図4.67 東造出動物埴輪・・・113
- 図4.68～4.84 東造出翼を広げた鳥形埴輪 1-1・1-2・1-3・・・114～130
- 図4.85～4.91 東造出水鳥形埴輪 1-1・1-2・1-3・・・131～137
- 図4.92～4.93 東造出器財埴輪(大刀・靴)・・・138～139
- 図4.94～4.102 東造出蓋形埴輪・・・140～147
- 図4.103 東造出不明形象埴輪・形象埴輪基部・・・148
- 図5-1～5-4 西造出鳥形埴輪 5-1・・・152～155
- 図5-5～5-6 西造出家形埴輪 5-2～5-5・・・156～157
- 図5-7～5-8 西造出人物埴輪(足跡輪状文彩冠帯をかぶった人物 5-1・5-2)・・・158～159
- 図5.9 西造出西面人物埴輪・・・160
- 図5.10～5.15 西造出人物埴輪(武人・盛装男子)・・・161～166
- 図5.16～5.17 西造出人物埴輪(両手をあげる人物)・・・167～168
- 図5.18～5.19 西造出人物埴輪(東女)・・・169～170

- 図5-20～5-27 西造出鳥形埴輪 5-1・・・171～178
- 図5-28～5-35 西造出鳥形埴輪 5-2・・・179～186
- 図5-36 西造出翼を広げた鳥形埴輪・・・187
- 図5-37～5-39 西造出羽跡形埴輪 5-1・5-2・・・188～190
- 図5-40～5-41 西造出鞍形埴輪 5-1・・・191～192
- 図5-42～5-52 西造出蓋形埴輪・・・193～203
- 図5.53 西造出不明形象埴輪・形象埴輪基部・・・204
- 図6-1～6-5 円筒埴輪・朝顔形埴輪・・・206～210
- 図7-1～7-2 東造出須恵器・・・212～213
- 図7-3～7-6 西造出須恵器・土師器・・・214～217

<表目次>

- 表2.1 大日山35号墳発掘調査・整理作業一覧・・・9
遺物観察表・・・220～230

<写真図版>

- 写真図版1～3 岩橋千塚古墳群航空写真・遠景、大日山35号墳全景
写真図版4～5 調査前風景
写真図版6 後門部墳頂 17・18トレンチ
写真図版7～9 後門部東側 2トレンチ
写真図版10～11 後門部北側 3トレンチ
写真図版12～14 後門部北側 15トレンチ
写真図版15～17 前方部東側 11トレンチ
写真図版18～19 前方部東側 10トレンチ
写真図版20～21 前方部南側 16トレンチ
写真図版22 前方部南側 9トレンチ
写真図版23～25 前方部南側 8トレンチ
写真図版26～27 前方部西側 7トレンチ
写真図版28～29 前方部墳頂部 6トレンチ
写真図版30～34 東造出埴輪検出状況・出土状況1トレンチ
写真図版35～40 1段目テラス(東造出側) 円筒埴輪列1トレンチ
写真図版41～45 東造出北辺円筒埴輪列1トレンチ
写真図版46 東造出1トレンチ南側サブトレンチ
写真図版47～60 東造出埴輪出土状況1トレンチ
写真図版61～62 東造出須恵器大甕出土状況1トレンチ
写真図版63～64 1段目テラス埴輪出土状況1トレンチ
写真図版65～67 東造出東斜面～基壇テラス埴輪出土状況1トレンチ
写真図版68～73 基壇テラス(東造出側) 円筒埴輪列1トレンチ
写真図版74 2段目斜面北壁断面1トレンチ
写真図版75 東造出北斜面 13トレンチ
写真図版76～78 基壇テラス(東造出側) 円筒埴輪列14トレンチ
写真図版79～83 西造出全景・埴輪出土状況5トレンチ
写真図版84～86 1段目テラス(西造出側) 円筒埴輪列5トレンチ
写真図版87 西造出西辺円筒埴輪列5トレンチ
写真図版88 西造出北辺円筒埴輪列5トレンチ
写真図版89 西造出西辺円筒埴輪列5トレンチ
写真図版90～100 西造出埴輪出土状況5トレンチ
写真図版101 西造出須恵器出土状況5トレンチ
写真図版102 西造出西斜面埴輪出土状況5トレンチ
写真図版103～104 基壇テラス(西造出側) 円筒埴輪列5トレンチ

<遺物写真図版>

- 遺物写真図版1～21 東造出家形埴輪
遺物写真図版22～25 東造出人物埴輪
遺物写真図版26～31 東造出動物埴輪
遺物写真図版32 東造出器財埴輪
遺物写真図版33 西造出家形埴輪
遺物写真図版34～39 西造出人物埴輪
遺物写真図版40～43 西造出動物埴輪
遺物写真図版44～45 西造出器財埴輪
遺物写真図版46 東造出・西造出蓋形埴輪

第1章 整備事業の経緯と経過

第1節 整備事業の経緯

和歌山県教育委員会は、平成15年度から紀伊風土記の丘にある特別史跡岩橋千塚古墳群の保存修理事業に着手した。この事業は、古墳群を保存修理ならびに整備することによって、貴重な文化財を後世に伝えるとともに、その価値を広く国民が享受できるようにすることを目的とするものである。加えて、この事業は和歌山県の「紀ノ川緑の歴史回廊推進事業」の一つとして、特別史跡岩橋千塚古墳群を紀ノ川流域の文化遺産を連ねるための重要なポイントとして位置づけることも考慮された。事業は年度毎に下記のとおり委員会を設置し、その指導の下に行われた。事務局は平成15・16年度が文化遺産課で、平成17年度以降は紀伊風土記の丘に置いて実施している。なお、当該事業は現在も継続中である。

第2節 整備事業の経過

<平成15年度> 発掘調査等支援業務として、(財)和歌山県文化財センターに委託して、大日山35号墳の墳丘測量、墳丘調査、後円部横穴式石室の調査、応急遺物整理を実施した。東造出の発掘調査で、翼を広げた鳥形埴輪や大形の冢形埴輪など、注目すべき埴輪群を発見した。また、大日山35号墳の石室の保存修理をおこない、写真・図面等を焼き付けたセラミック製の説明板を2基設置した。石室の保存修理は、玄室の石棚・両袖部・玄門部を対象にエポキシ樹脂による接着・補填と欠落部の石材を補填し、樹脂部については近似色で着色した。大日山35号墳では、墳丘上に生育している危険木を伐採した。なお、特別史跡整備の基本的考え方や追加指定方針等を内容とする「特別史跡岩橋千塚古墳群整備計画」を策定した。

<平成16年度> 発掘調査等支援業務として、大日山35号墳、前山A2号墳、前山B41号墳の発掘調査を(財)和歌山県文化財センターに委託して実施した。大日山35号墳では東側のくびれ部・墳丘基壇裾部にトレンチを設けて調査した。T字形石室の前山A2号墳では墳丘測量、墳丘調査、石室調査をおこなった。また、前山B41号墳については、墳丘測量、石室調査、石室埋め戻し、墳丘修景作業を実施した。なお、前山A2号墳では、調査終了後、石室の樹脂強化措置、セラミック製説明板の設置をおこなった。古墳上に生育している危険木の伐採として、大日山35号墳と、その他21基の古墳を対象に実施した。

<平成17年度> 発掘調査等支援業務として、(財)和歌山県文化財センターに委託して、大日山35号墳と前山A67号墳の発掘調査を実施した。大日山35号墳の西造出より、両面人物埴輪や胡録形埴輪、馬形埴輪等が出土した。また、大日山35号墳の出土遺物整理をおこなった。前山A67号墳については、羨道部の調査を実施した。発掘調査の結果をもとに、大日山35号墳と前山A67号墳の保存公開施設の実施設計をおこない、前山A2号墳の石室上部にはガラス覆屋を設置した。前山B53号墳(将軍塚)他29基の危険木を伐採し、前山B67号墳(知事塚)他8基の墳丘盛土保存修景工事も実施した。

<平成18年度> 発掘調査等支援業務として、前山A13号墳の横穴式石室の排水機能回復等を目的とした発掘調査を(財)和歌山県文化財センターに委託して実施した。大日山35号墳出土遺物整理も引き続きおこなった。危険木伐採は前山A46号墳他12基で実施した。保存修景工事は

前山A 51号墳他27基を対象とし、露出した石室の埋め戻し保護等の整備を実施した。前山A 67号墳については、玄室奥壁を修復し、墓道に保存公開施設を設置するとともに、玄室にソーラー発電による照明装置を設置した。

<平成19年度> 発掘調査等支援業務として、(財)和歌山県文化財センターに委託して、前山A 9号墳・A 17号墳の発掘調査を実施した。大日山35号墳東西造出等の盛土整備工事を実施し、大日山35号墳等の出土遺物整理も継続しておこなった。危険木の伐採は大日山35号墳他43基で、保存修景工事は前山A 16号墳他14基で実施した。また、説明板を大日山35号墳、前山A 67号墳、前山B 53号墳(将軍塚)、前山A 46号墳の4基に設置した。

<平成20年度> 発掘調査等支援業務として、前山A 9号墳・A 13号墳周辺の古墳状隆起部の発掘調査を(財)和歌山県文化財センターに委託して実施し、古墳でないことを確認した。大日山35号墳等の出土遺物整理も引き続き実施している。危険木伐採は前山B 114号墳他9基を対象とした。石室公開古墳のうち、見学者が特に多くて岩橋千塚古墳群における代表的な横穴式石室をもつ前山B 53号墳(将軍塚)と前山A 46号墳にソーラー発電による照明装置を設置するための実施設計書を作成した。前山A地区に岩橋千塚古墳群全体の説明板2基と各古墳の説明板10基、古墳群の案内標識板10基を設置した。

<平成21年度> 古墳保存修景工事として、毀損の進む石室を保護するため、前山B地区の11基の古墳について、砂・真砂土で埋め戻しをおこなうとともに、削平された墳丘の盛土による修景を実施した。岩橋型横穴式石室の代表的な石室の公開に便宜を図るため将軍塚古墳と前山A 46号墳について、ソーラーパネルを利用した照明施設設置工事を実施した。また、次年度に前山A 13号墳に照明施設設置工事を実施予定で、そのための実施設計をおこなった。知事塚古墳と郡長塚古墳など主稜線にある古墳を中心に説明板10基、案内標識15基を設置した。発掘調査等支援業務として、(財)和歌山県文化財センターに委託して、前山A 58号墳の発掘調査と大日山35号墳の整理作業を実施した。平成15年度からはじまった整備事業のうち、平成21年度まで実施した内容について整備報告書を作成した。

<平成22年度> 古墳修景工事は、前山B地区2基・大日山地区3基の古墳について実施した。園内に説明板4基と案内標識32基を設置した。岩橋千塚古墳群を代表する公開古墳である前山A 13号墳にソーラーパネルを利用した照明施設を設置した。発掘調査等支援業務として、前山A 58号墳の発掘調査を(財)和歌山県文化財センターに委託して実施し、墳形および墳輪樹立状況の確認をおこなった。引き続き大日山35号墳の出土遺物整理作業を実施した。

<平成23年度> 古墳保存修景工事は、前山B地区の5基の古墳について実施した。また、前山A・B地区に地区説明板7基、案内標識3基を設置し、既設案内標識5基に標識板を追加して取り付けた。大日山35号墳整備に伴う造出に設置するための形象墳輪等のレプリカとして、蓋形墳輪および円筒墳輪9点、翼を広げた鳥形墳輪2点、家形墳輪1点、須臾器大甕1点を製作した。継続して大日山35号墳の出土遺物整理を実施し、平成23年度から整理補助員・整理作業員は直接雇用した。

<平成24年度> 古墳保存修景工事は、前山B地区・大日山地区の5基の古墳について実施した。園内の排水路工事のため実施設計をおこなった。引き続き整理補助員・整理作業員を直接雇用し、大日山35号墳の出土遺物整理を実施した。

第3節 整備委員会

当整備事業は、整備委員会の指導のもとで実施している。整備委員会の開催日と委員の構成は以下のとおりである。

<整備委員会開催日>

平成 15 年度大日山 35 号墳保存修理委員会	： 第 1 回目平成 15 年 8 月 21 日 第 2 回目平成 15 年 10 月 10 日
平成 16 年度特別史跡岩橋千塚古墳群保存整備委員会	：平成 16 年 11 月 1 日
平成 17 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：平成 17 年 11 月 15 日
平成 18 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：平成 18 年 9 月 7 日
平成 19 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：平成 19 年 10 月 31 日
平成 20 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：平成 20 年 10 月 29 日
平成 21 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：平成 22 年 1 月 20 日
平成 22 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	： 第 1 回目平成 22 年 5 月 26 日 第 2 回目平成 23 年 2 月 22 日
平成 23 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	： 第 1 回目平成 23 年 6 月 10 日 第 2 回目平成 24 年 2 月 22 日
平成 24 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	： 第 1 回目平成 24 年 7 月 27 日 第 2 回目平成 25 年 1 月 24 日

<整備委員>

和田晴吾	立命館大学教授（平成 15 年度～）
森 郁夫	帝塚山大学客員教授（平成 15 年度～／平成 15～21 年度は同大学教授）
菅谷文則	奈良県立橿原考古学研究所所長（平成 15 年度～） （平成 15～19 年度は滋賀県立大学教授／20 年度は同大学名誉教授）
増測 徹	京都橋大学教授（平成 15 年度～／平成 15～17 年度は橘女子大学教授）
高瀬要一	奈良文化財研究所計測修景調査室長（平成 15 年度）
内田和伸	奈良文化財研究所景観研究室長（平成 18～20 年度）
小野健吉	奈良文化財研究所文化遺産部長（平成 21 年度～）



平成 22 年度第 1 回整備委員会写真



平成 24 年度第 1 回整備委員会写真

第2章 大日山 35 号墳の調査概要

第1節 大日山 35 号墳の位置と環境

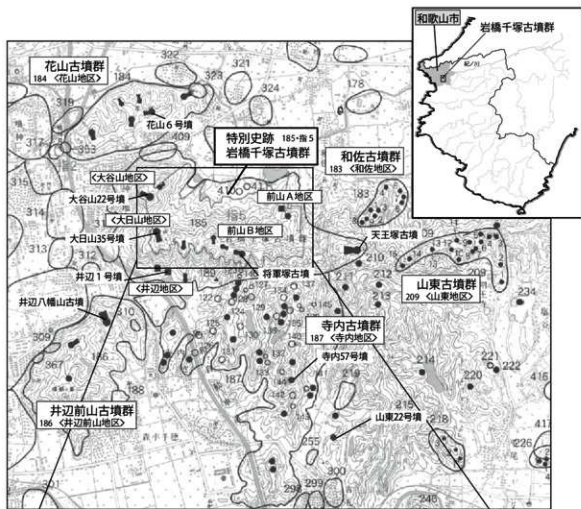
1. 大日山 35 号墳の立地

和歌山県の北端を西流する紀ノ川の河口部には、和歌山平野が開けている。この和歌山平野の東側、紀ノ川南岸には岩橋山塊があり、その周辺の東西 3km、南北 2.5km に広がる範囲には、5 世紀から 7 世紀までの古墳が群集しており、「岩橋千塚古墳群」と呼称される。ここでいう岩橋千塚古墳群の名称は、前山 A 地区、前山 B 地区、大日山地区、大谷山地区、井辺地区と、これに寺内古墳群、花山古墳群、井辺前山古墳群を含めた広義の意味で用いている。また、これに和佐古墳群（前山 C 地区、天王塚山古墳群含む）、山東古墳群を含めると、岩橋山塊周辺の古墳の総数は 800 基超にも及ぶ。大日山 35 号墳は、この岩橋千塚古墳群の西端にあり、最も標高が高い大日山（標高 141 m）の山頂に所在する。この大日山からは、和歌山平野や紀伊水道が一望でき、晴天の日は遠く淡路島まで見渡せる眺望の地である。

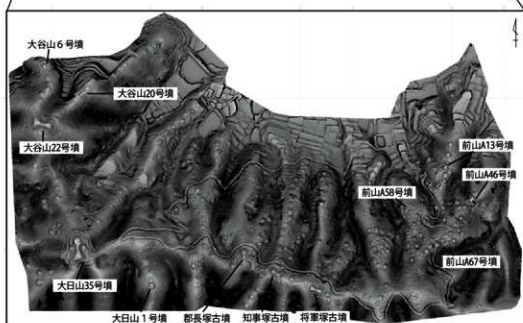
2. 大日山 35 号墳の既往調査

岩橋千塚古墳群の調査の歴史は、明治期にまで遡る。江戸時代にはすでにその存在が知られていたが、当時は「陶器山」「トツキ山」と呼ばれ（『紀伊名所図会』、『誰の墳なるや詳ならず』（『紀伊続風土記』）であった。江戸時代には紀州藩家老安藤家（田辺藩主）の所領であったが、明治 4 年（1871）に西和佐村の共有地となった。明治期には徳川頼倫、大野雲外の踏査や現地調査が実施され、さらに大正 7 年から 10 年（1918～1921）の和歌山県の委嘱を受けた内務省嘱託田沢金吾・岩井武俊、東大教授黒板勝美による前山 A 地区の調査が実施された（和歌山県 1921）。その報告で初めて「岩橋千塚」の名が公式に登場する。このように岩橋千塚古墳群の実態が明らかになった結果、明治末から大正にかけて大規模な盗掘がおこなわれるようになった。昭和 7 年（1932）には大日山山頂部隣接地で整地作業中に石室から鏡・刀身・馬具・須恵器などが出土したと報告されている（勝田 1933）。

昭和 38 年（1963）から 41 年（1966）に和歌山市教育委員会の委嘱を受けた関西大学によって岩橋千塚古墳群の学術調査が実施されるが、その際に大日山 35 号墳についても墳丘の測量と石室の実測がおこなわれ、墳丘および石室の実測図が公表されている（関西大学考古学研究室 1967）。この調査時に、墳丘東側のくびれ部から前方部にかけて土取りなどの大きな変化が確認されている。また、墳丘西側の横穴式石室開口部を中心に大日如来を祀るための施設が造られ、それにともない西側くびれ部では土取りによって削平されたうえに、後円部から前方部にかけて平坦面が造成されていた。さらに前方部墳頂部では高圧線鉄塔の工事により大きく攪乱された箇所があった。このように昭和 30 年代までに墳丘は、大きく改変を受けていたことがわかっている。ただし、全体的には前方後円墳の形状を保っており、墳丘測量の成果から墳長は約 73 m と推定された。測量図では西側くびれ部が造出状になっているが、改変による平坦面の造成のため、この時点では造出とは想定されていなかった。その後、大日山 35 号墳においては、岩橋型横穴式石室には関心が向けられるが、墳丘に対する認識はこの調査報告を踏襲するのみであった。昭和 46 年（1971）に県立紀伊風土記の丘が設立され、それ以降、園内の古墳群を日常的に管理し、大日山 35 号墳周辺も草刈りなどを実施するようになった。その結果、墳丘の観察が容易になると、墳長が 73



和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図転載 一部改変)



航空レーザー測量による彩色立体地形図(和歌山県立紀伊風土記の左)

図 2-1 岩橋千塚古墳群および大日山 35 号墳位置図

mよりも大きくなることや西側に造出が存在することなどが想定されるようになってきた。ただし調査開始までに東側の造出は想定されていなかった。このように墳丘測量によって墳形などは想定できていたが、造出の存在や何段築成といった墳丘構造は不明であった。

【岩橋千塚古墳群調査関連報告書】

- 大野雲外 1907「紀伊海草郡岩橋古墳見視部土器」『東京人類学会雑誌』第22巻(258)(第一書房)
- 大野雲外 1908「紀伊国古墳石柵構造に就て」『東京人類学会雑誌』第23巻(259)(第一書房)
- (大野雲外 1925「紀伊国海草郡古墳石柵構造に就て」『日本古代 遺物遺跡の研究』(磯部甲陽堂))
- NEIL.GORDON.MUNRO 1911『PREHISTORIC JAPAN』
- 和歌山県 1921「岩橋千塚第一期調査」『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書』第一輯
- 大野雲外 1925「甲冑と埴輪土偶」『日本古代 遺物遺跡の研究』(磯部甲陽堂)
- 勝田良太郎 1933「大日ノ古墳」『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告』第12輯
- 宮田啓二 1962「岩橋千塚前山北麓古墳」『和歌山市文化財現地調査記録』第2集(和歌山市教育委員会)
- 和歌山市教育委員会 1964「花山古墳(花山古墳緊急調査報告)』
- 和歌山県教育委員会 1966「井辺前山三十二号墳発掘調査報告」『和歌山県文化財学術調査報告』第一冊
- 関西大学考古学研究室・和歌山市教委 1966「和歌山市花山西部地区古墳群調査概報」
- 大野嶺夫 1966「和歌山市の形象埴輪の窯址」『古代学研究』46(古代学研究会)
- 関西大学文学部考古学研究室 1967「岩橋千塚」
- 和歌山県教育委員会 1967「井辺前山6号墳発掘調査概報」『昭和41年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
- 和歌山県教育委員会 1967「森小手徳(猪塚)古墳緊急発掘調査略報」『昭和41年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
- 関西大学考古学研究室編 1967「花山西部地区古墳」(和歌山市教委・市水道局)
- 関西大学考古学研究室編(和歌山市教委)1967「和歌山市東部地区埋蔵文化財(古墳)第一次分布調査概報」
- 和歌山県文化財研究所 1968「寺内35号墳発掘調査報告」『和歌山県文化財学術調査報告書』第三冊
- 関西大学考古学研究室編(和歌山市教委)1968「和歌山市森小手徳・寺内59・60号墳緊急調査概報」
- 関西大学考古学研究会 1968「和歌山市森小手徳寺内59・60号墳調査報告 付載 吉礼砂羅谷之須器窯跡群調査報告」『関西大学考古学研究年報』2
- 関西大学考古学研究室編 1969「和歌山市晒山・総綱寺谷古墳群調査概報」(和歌山市教委)
- 森 浩一 1969「和歌山市井辺前山10号墳調査概報」『古代学研究』55(古代学研究会)
- 和歌山県教育委員会 1970「花山50号墳」『近畿自動車道と和歌山線関係遺跡 第1次発掘調査概報』
- 中野栄治 1971「花山古墳群の破壊と保存の記録」『和歌山史学』第13号(和歌山史学会)
- 和歌山市教育委員会 1972「和歌山市における古墳文化」
- 同志社大学考古学研究室編 1972「井辺八幡山古墳」(和歌山市教委)
- 和歌山県教育委員会 1972「大谷山4・5・6・39号墳発掘調査概報」
- (社)和歌山県文化財研究会 1973「大谷山古墳群現地説明会資料」(大谷山27・28号墳)
- 紀伊風土記の丘管理事務所 1976「特別史跡岩橋千塚古墳群花木園地区古墳群調査概報」
- 紀伊風土記の丘管理事務所 1976「花木園東部地区の古墳」『紀伊風土記の丘年報』3
- 大野嶺夫 1981「紀伊風土記の丘万葉植物園出土彫面埴輪について」『和歌山県埋蔵文化財情報』15(社)和歌山県文化財研究会)
- 和歌山県 1983「和歌山県史 考古資料」
- 和歌山県教育委員会 1987「広域遺跡群詳細分布調査I 井辺前山古墳群とその関連遺跡」
- (財)和歌山県文化財センター 1992「山東22号墳」・1993「山東22号墳(Ⅱ)」

- 松下 彰 1993「前山 B 53 号墳出土の土器」『紀伊風土記の丘年報』第 20 号
- (財)和歌山県文化体育振興事業団 1996「寺内古墳群確認調査」『和歌山県埋蔵文化財発掘調査年報 3』
- 和歌山県教育委員会 2000「岩橋千塚周辺古墳群緊急確認調査報告書」
- 大野嶺夫 2003「岩橋千塚とところ・どころ」
- 和歌山県教育委員会 2004「保存処理鉄器の再実測及び平成 6 年度調査の出土遺物」『和歌山県埋蔵文化財調査年報平成 14 年度』
- 藤井幸司 2005「大日山 35 号墳の調査成果」『日本考古学』19(日本考古学協会)
- 和歌山県教育委員会 2005「和坂南垣内古墳群発掘調査」『和歌山県市内遺跡発掘調査概報-平成 15 年度-』
- 佐藤純一・清水邦彦・関真一・辻川哲朗・松田度 2007「井辺八幡山古墳の再検討-造り出し墳輪群の配置復原を中心に-」『同志社大学歴史資料館館報』10
- 藤井幸司 2008「岩橋千塚古墳群の墳輪群像-和歌山 大日山三五号墳の調査成果から-」『墳輪群像の考古学』(青木書店)
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 2008「岩橋千塚」(平成 20 年度特別展図録)
- 文化庁編 2009「特別史跡岩橋千塚古墳群大日山 35 号墳」『発掘された日本列島 2009 新発見考古速報』(朝日新聞社)
- 植田法彦・前田敬彦 2009「和歌山県井辺前山 36 号墳について」『和歌山県立博物館研究紀要』第 23 号
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 2011「大王の墳輪・紀氏の墳輪-今城塚と岩橋千塚-」(平成 23 年度特別展図録)

*平成 15 年度からの保存整備事業の概要は以下の文献にも掲載している。

- 和歌山県教育委員会：2005「特別史跡 岩橋千塚古墳群：大日山 35 号墳(現状変更)」『和歌山県埋蔵文化財調査年報 平成 15 年度』、2006「特別史跡岩橋千塚古墳群：大日山 35 号墳・前山 A2 号墳・前山 B41 号墳(現状変更)」『年報 平成 16 年度』、2010「特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 1」
- 和歌山県立紀伊風土記の丘：2007「大日山 35 号墳の第 3 次発掘調査・出土遺物整理と保存整備実施設計」『平成 17 年度 紀伊風土記の丘年報』第 33 号、2007「大日山 35 号墳西造出土の墳輪」『平成 18 年度 年報』第 34 号、2009「特別史跡岩橋千塚古墳群の整備」『特別史跡岩橋千塚古墳群の踏査』「前山 B117 号墳の墳丘測量と遺物表採」『平成 19 年度 年報』第 35 号、「大日山 35 号墳の墳輪の整理」『前山 A9-13 号墳周辺の発掘調査』『平成 20 年度 年報』第 36 号、2011「前山 A58 号墳発掘調査・大日山 35 号墳出土遺物整理業務」『平成 21 年古墳保存修景工事に係る立会調査』『平成 21 年度 年報』第 37 号、2012「前山 A58 号墳第 2 次発掘調査及び大日山 35 号墳・前山 A58 号墳出土遺物整理」『平成 22 年古墳保存修景工事に係る調査』『平成 22 年度 年報』第 38 号、2013「大日山 35 号墳の出土遺物整理」『平成 23 年古墳保存修景工事に係る調査』『平成 23 年度 年報』第 39 号
- (財)和歌山県文化財センター：2004「大日山 35 号墳の保存修理に伴う支援業務」[(財)和歌山県文化財センター年報 2003]、2005「平成 16 年度岩橋千塚古墳群の発掘調査」『年報 2004』、2006「特別史跡岩橋千塚古墳群の保存修理事業に伴う第 3 次調査」『年報 2005(平成 17 年度)』、2007「特別史跡岩橋千塚古墳群前山 A 13 号墳の発掘調査」『年報 2006(平成 18 年度)』、2008「大日山 35 号墳等の出土遺物整理」『年報 2007』、2009「特別史跡岩橋千塚古墳群の発掘調査・出土遺物整理」[2008]、2010「特別史跡岩橋千塚古墳群の発掘調査・出土遺物整理」『年報 2009』

第2節 発掘調査・整理事業の経過

1. 測量調査

平成15年度に大日山35号墳の発掘調査に先立って墳丘の測量調査を実施した。平板測量により大日山35号墳およびその周辺の12,484㎡の範囲の測量図（S=1/200）を作成した。

2. 発掘調査

大日山35号墳の発掘調査は、平成15年度に1次調査、平成16年度に2次調査、平成17年度に3次調査を実施した。1・2次調査は県教育委員会文化遺産課、3次調査は県立紀伊風土記の丘が担当し、現地調査を支援するため（財）和歌山県文化財センターに発掘調査等支援業務を委託した。

1次調査では、墳形や埴輪樹立の有無などを確認するため、1～12トレンチ（4トレンチは未実施）を設定して調査をおこなった。調査面積は約670㎡で、墳丘裾や各段のテラス面、円筒埴輪列や形象埴輪群の確認といった成果が得られた。特に東造出を調査した1トレンチでは、多量に形象埴輪が出土し、井辺八幡山古墳に匹敵するような豊富な種類の形象埴輪群として注目された。西造出を調査した5トレンチでも旧表土を掘削中に多量に埴輪が出土し、東造出と同様な状況が予想されたため、調査体制や期間などの問題もあり、翌年以降に再調査することを前提に養生して埋め戻した。

なお、石室の調査も実施し、石室床面および排水溝の確認、石室実測図の作成をおこなったが、今回は墳丘の調査についての報告とし、石室については平成26年度刊行予定の整備報告書3で報告する。

2次調査は、1次調査で明らかにできなかった東造出北斜面からくびれ部の状況を確認することと、最下段の基壇テラスが前方後円墳形であるか盾形であるかの確認を目的として調査を実施した。調査の結果、14トレンチで基壇テラスの円筒埴輪列が直線的に続いている状況を確認することができ、基壇が盾形の形状をしていたことが判明した。

3次調査では、1次調査で調査途中になっていた5トレンチを再調査し、西造出の形状および埴輪群の確認をおこなった。また、墳丘規模や形状を確定するため15・16トレンチを設定し調査した。さらに後円部の墳頂部に17・18トレンチを設けて調査をおこなった。

1～3次調査で18箇所の調査区を設定し、約985.5㎡を調査した（石室除く）。墳丘の調査では、最下段の基壇は盾形を呈しており、その基壇上に2段築成で前方後円墳形の墳丘が築かれている状況が確認できた。墳丘規模は、最下段の基壇の総長は約105m、前方後円墳形の墳丘の墳長は約86mであることが判明した。

3. 整理事業

発掘調査によってコンテナ300箱近い量の遺物が出土し、平成15年度から整理事業を継続している。平成15・16年度は県文化遺産課、平成17年度以降は紀伊風土記の丘が整理事業を担当した。平成15～22年までは（財）和歌山県文化財センターに発掘調査等支援業務を委託して実施し、平成23・24年度は紀伊風土記の丘が直接整理補助員・整理事業員を雇用して作業をおこなった。

表2-1. 大日山35号墳 発掘調査・整理作業一覧

年度	次数	調査区	面積 (㎡)	期間	調査箇所	目的・成果	調査主体	業務支援	担当者
15	1	墳丘測量	12,484	平成15年7月1日 ～平成16年3月30日	墳丘全体	大日山35号墳およびその周辺の調査図作成 (S=1/200)	県文化遺産課 県文化財センター		藤井
		1トレンチ	109.10		東造出	東造出から多数の形象埴輪群出土、基壇テラス円筒埴輪群検出			
		1トレンチ南側サブトレンチ	8.25		東造出南斜面	1・11トレンチ間、調査中は文化遺産課トレンチ、東造出南側円筒埴輪群			
		2トレンチ	42.0		後円部東側	基壇テラス円筒埴輪群検出、基壇裾確認			
		3トレンチ	46.0		後円部北側	基壇裾確認			
		4トレンチ	未調査			横穴式石室入口付近の調査を予定したが実施せず			
		5トレンチ	138.0		西造出	多数の形象埴輪出土、養生・埋戻後、平成17年度再調査			
		6トレンチ	49.0		前方部墳頂	前方部の覆乱土を掘削、墳丘盛土単位を確認			
		7トレンチ	40.0		前方部西側	基壇テラス円筒埴輪群検出、北城外周平坦面確認			
		8トレンチ	36.0		前方部南側	基壇裾・北城外周平坦面確認			
		9トレンチ	16.0		前方部南東側	前方部南東隅の調査			
		10トレンチ	50.0		前方部東側	1段目テラス～2段目斜面の確認			
		11トレンチ	58.0		前方部東側	1段目テラス・基壇テラスで円筒埴輪群付着を検出			
12トレンチ	80.0	古墳より東側尾根	大日山35号墳から東へのびる尾根の調査、古墳確認できず						
1次調査合計	672.4		＊石室調査面積除く						
16	2	13トレンチ	10.64	平成16年7月1日 ～平成17年1月31日	東造出北斜面	東造出北斜面・くびれ部の調査	県文化遺産課 県文化財センター		黒石
		14トレンチ	3.6		東造出基壇テラス	基壇テラス円筒埴輪群の調査、基壇が直形であることを確認			
		2次調査合計	14.2						
17	3	5トレンチ	185.0	平成17年9月2日 ～平成18年3月28日	西造出	西造出から多数の形象埴輪出土、基壇テラス円筒埴輪群検出	紀伊風土記の丘 県文化財センター		丹野
		15トレンチ	37.0		後円部北西側	1段目テラス・基壇テラスで円筒埴輪群を検出、基壇裾確認			
		16トレンチ	36.4		前方部南東側	基壇テラス円筒埴輪群を検出、基壇裾部の溝状遺構検出			
		17トレンチ	23.25		後円部墳頂	墳頂部の調査、埴輪片・須恵器片出土			
		18トレンチ	17.25		後円部墳頂	墳頂部の調査、埴輪片・須恵器片出土			
		3次調査合計	298.9						
発掘調査合計	985.5								
15	応急整理		平成15年7月1日 ～平成16年3月30日		埴輪等の洗浄・台帳整備	県文化遺産課 県文化財センター		藤井	
16	整理作業		平成16年7月1日 ～平成17年1月31日		埴輪の接合・復元（翼を広げた鳥形埴輪等）	県文化遺産課 県文化財センター		藤井	
17	応急整理		平成17年9月2日 ～平成18年3月28日		埴輪等の洗浄	紀伊風土記の丘 県文化財センター		丹野	
18	整理作業		平成18年6月1日 ～平成19年3月28日		埴輪の復元・実測（両面人物埴輪等）	紀伊風土記の丘 県文化財センター		丹野	
19	整理作業		平成19年8月16日 ～平成20年3月14日		埴輪の復元・実測（胡蝶形埴輪等）	紀伊風土記の丘 県文化財センター		丹野	
20	整理作業		平成20年12月2日 ～平成21年2月22日		埴輪の復元・実測（双脚輪状冠帯を被る人物埴輪等）	紀伊風土記の丘 県文化財センター		丹野	
21	整理作業		平成21年10月27日 ～平成22年3月25日		埴輪の復元・実測（水鳥形埴輪、ゆぎ形埴輪等）	紀伊風土記の丘 県文化財センター		丹野	
22	整理作業		平成22年9月30日 ～平成23年3月25日		埴輪の復元・実測（3分割焼成の家形埴輪等）	紀伊風土記の丘 県文化財センター		丹野	
23	整理作業		平成23年4月1日 ～平成24年3月30日		埴輪の復元・実測（牛形埴輪等）	紀伊風土記の丘 新野谷			
24	整理作業		平成24年4月10日 ～平成25年3月31日		埴輪の復元・実測・トレース・報告書刊行	紀伊風土記の丘		仲原	

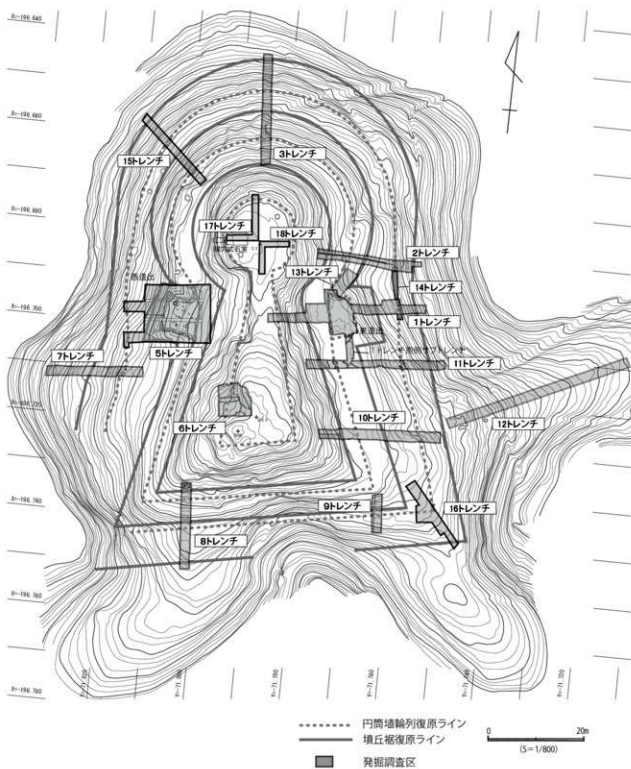


図 2-2 大日山 35 号墳 調査区配置図

第3節 調査の方法

1. 調査回数と調査コード

発掘調査は平成15・16・17年度に実施し、調査回数はそれぞれ1次調査、2次調査、3次調査とした。1次調査は「03-01・185-132」（03 = 2003年度、01 = 和歌山市、185 = 岩橋千塚古墳群、132 = 大日山35号墳）、2次調査は「04-01・185-132」、3次調査は「05-01・185-132」の調査コードを付した。出土遺物の注記や記録類の管理などにこのコード名を記している。

2. 基準点と墳丘測量

基準点は、大日山山頂の三等三角点「岡崎」（ $X = -196720.367\text{m}$, $Y = -71794.061\text{m}$ ）、紀伊風土記の丘設置の三級基準点 No.324 ($X = -196765.441\text{m}$, $Y = -71166.305\text{m}$) をもとに P1 ~ 15 の平板測量用基準点を算出した。ただし、No.324 のデータは旧日本測地系データ $X = -197112.732\text{m}$, $Y = -70904.777\text{m}$ を変換ソフト TKY2JGD により世界測地系（日本測地系 2000）変換した数値を用いた。水準測量は、三等三角点「岡崎」（ $H = 141.78\text{m}$ ）の標高値をもとに水準測量を行い、測量用基準 P1 ~ 15 に標高を付与した。

平板測量により大日山 35 号墳およびその周辺について、墳丘測量図 ($S=1/200$) を 25cm コンターで作成した。

3. 調査区・調査グリッド設定

墳丘の調査では、P1 ~ 15 を基に作成した墳丘測量図から後円部に任意の中心 (0.0) 点および主軸を設定し、主軸の方向に (S36.0) 点を木杭により打設した。この主軸を南北軸 (NS0) とし、これと直交する方向に東西軸 (EW0) を設定し、この 2 つの軸を基準として 4 m 四方のグリッドを設定し、グリッドの四隅のうち (0.0) 点に近い隅を地区名として付与した (例: S0.E0, S4.E12 など)。この 4 m 四方のグリッドを基準として遺物を取り上げ、実測図の作成もこのグリッドを基準にした。ただし、後述するように 1 トレンチの一部で遺出を検出し、埴輪が多量に出土したことから、4 m 四方グリッド内を 50cm 四方グリッドに分割して遺物の取り上げを実施した。50cm グリッドの名称は、4 m 四方グリッドの (0.0) 点に近い隅から南北方向に (0.0) 点から離れる方向へ 1 ~ 8 を設定し、(0.0) 点から東西方向へ離れる方向へ 9 ~ 16、17 ~ 24...64 と順次名称を付与した。なお、主軸は座標北より $N-4^{\circ} 26' 13'' - E$ の方向を示す。

4. 図面作成

調査区内の図化については 1/20 の平面図・立面図・土層図を基本として、必要に応じて 1/10、1/50、1/100 で作図した。また、遺物出土状況の一部については 1/10 の平面図・立面図を作成した。土層断面図は 1/20 で作成した。

5. 写真撮影

4 × 5 判カラーポジフィルム・モノクロームフィルム、6 × 7 判カラーネガフィルム・モノクロームフィルムを使用して撮影した。調査年度によっては 35mm カラーポジフィルム・カラーネガフィルムも使用した。また、適宜デジタルカメラで撮影し、JPEG 形式で CD-R に保存した。6 × 7 判の一部は Kodak ProphotoCD (64BASE) により写真資料のデジタル化 (PCD 形式で保存) を実施し、

CDに保存した。

古墳全景写真は、平成15年11月5日に6×6判カラーポジフィルムを使用してラジコンヘリにより航空写真撮影を実施した。航空写真の一部はスキャンしてTIFF形式でCD-Rに保存した。

6. 掘削の方法・出土遺物の取り扱い

今回の調査は、特別史跡地内の調査であったため、調査に際しては重機類の使用は極力制限すべきであったが、表土や攪乱土などの掘削や埋め戻し、養生用砂搬入などについては0.1m相当のバックホーとキャリヤダンプ2tを導入した。いずれも未掘削の地下に影響を与えない軽量なものを選択した。

調査に際しては、基本的に幅2mのトレンチ掘削をおこない、東西の造出など一部については適宜拡張して面的な調査を実施した。調査は、機械掘削により表土・攪乱土除去後、堆積層ごとに人力掘削により掘り下げ、墳丘盛土面や埴輪列などの検出に努めた。これらが直ちに認識できなかったトレンチについては、トレンチ内半分の幅1mをサブトレンチ状に設定し、再度検出に努めた。これらを検出後、写真撮影・図化・測量を実施した。図化後、遺物の取り上げをおこなったが、原位置を保持する造出（1・5トレンチ）の円筒埴輪は図化・写真撮影後に埋め戻し、その他の形象埴輪は取り上げた。それ以外のトレンチについては、原位置を保持する円筒埴輪は、造出の形象埴輪同様に取り上げた後、その据付坑の検出をおこなった。

7. 養生・埋め戻し作業

すべての作業完了後にトレンチの埋め戻しを排土により実施した。ただし、原位置を保持した埴輪と埴輪据付坑が検出された範囲には、遺構面保護のため砂（海砂・細目）により10cm以上の厚さで養生したのち埋め戻した。養生をおこなった範囲は、原位置で確認され埋め戻した円筒埴輪および埴輪据付坑である。

各トレンチの埋め戻しには1トレンチ、5トレンチを除いてバックホウを使用しておこなった。なお、墳丘の復元・修景及び造出の整備については別途報告する。

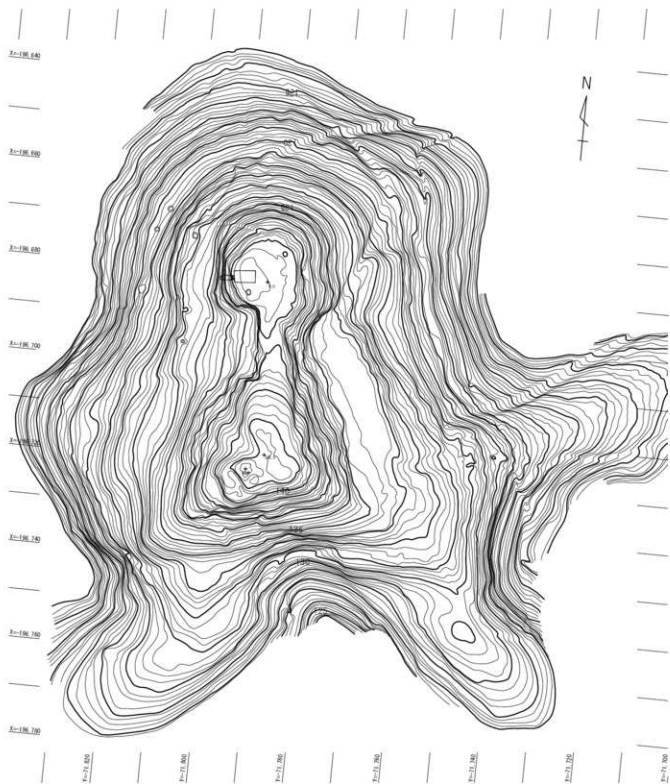


图 2-3 大日山 35号墳 墳丘測量図

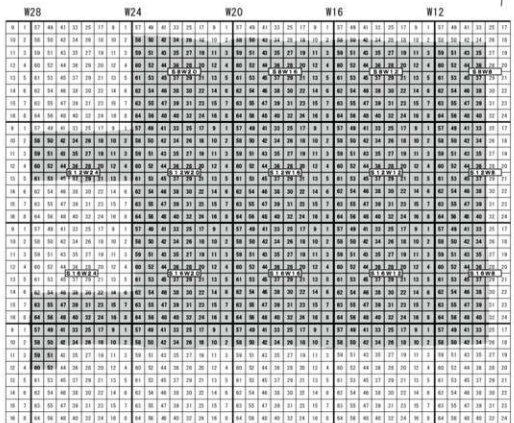
0 20m
(S=1/800)



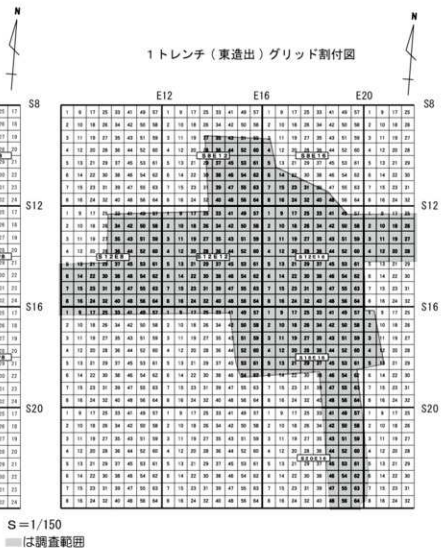
図 2-4 調査グリッド図

図2.5 1・5トレンチ調査グリッド割付図

5トレンチ（西造出）グリッド割付図



1トレンチ（東造出）グリッド割付図



第3章 調査の成果

第1節 調査の目的

墳丘の形状および規模・構造の把握、造出の確認などを目的として、墳丘各地点に調査区を設定して発掘調査を実施することとなった。以下、後円部、前方部、東造出、西造出の順に調査の成果を報告する。なお、調査の結果、墳丘は3段構成であることが判明したが、最下段については前方後円墳形ではなく盾形を呈すること、最下段のテラス面の幅が広いこと、前方部南半では最下段の斜面が造成されていないこと、最下段ではなくその上の中間段に造出が取り付くことなどから、最下段を「基壇」とし、造出が取り付く中間段を「墳丘1段目」、その上が最上段の「墳丘2段目」と認識した墳丘復原案が発掘担当者によって提示され（藤井2005）、この復原案に基づいて記述していく。各調査区の結果から、基壇の総長は約105mと想定できるようになった。

第2節 後円部の調査

1. 17・18トレンチ（後円部墳頂）

後円部墳頂部における埴輪の有無などの検証を目的とした調査区で、17トレンチは後円部の中心点（0.0点）から幅1.5mで、北へ10m・西へ7m、面積23.25m²の範囲を設定した。18トレンチは中心点から幅1.5m、東へ6m・南へ7m、面積17.25m²の範囲を設定した。墳丘盛土の上に表土が1～5cm、第2層（暗褐色シルト層）が5～10cmほど堆積する。17トレンチの中央から西にかけて年代不詳の遺構があり、焼土塊が1点出土した。これらの遺構は、大日山35号墳にまつられていた大日如来に關係する遺構の可能性がある。古墳時代の遺構は確認できなかった。17トレンチの北端・西端とも、墳頂から墳丘斜面への傾斜変換点上に円筒埴輪片が集中的に散布している。18トレンチでは南側で円筒埴輪片が少量出土している。墳頂部の平坦面では形象埴輪片の出土は認められず、須恵器片が若干出土し、細片ではあるが、高杯や壺類などの器種が確認できる。後円部墳頂では、形象埴輪は確認できなかったものの、円筒埴輪が墳丘斜面への傾斜変換点付近で多く出土することから、円筒埴輪に圍繞された空間があったと推察できる。また須恵器片が出土することから、墳頂部における須恵器の使用が確認できたことは重要な成果である。

2. 2トレンチ（後円部東側）

後円部の墳丘裾および各段の状況を調査する目的で、1トレンチの北側に設定した。この調査区では、盛土とみられる7層をE28区で検出した時点で、掘削深度が深くなることが予想されたため、トレンチ北半1m幅で遺構の検出に努めた。E28ライン付近で、後述する1トレンチで検出した基壇テラス円筒埴輪列の延長にあたりとみられる原位置の円筒埴輪を1個体検出した。この基壇テラス円筒埴輪および7層（盛土）は、旧表土とみられる6層の堆積により、その上の層位とは分離できる。6層は調査区東端からE24ライン付近まで確認され、埴輪の出土が一程度認められることから、E24ライン以東では墳丘面が残存していたと判断できる。また、基壇テラス円筒埴輪の東側はすぐ傾斜し、その4m東側で傾斜変換点が認められたため、これを墳丘裾（基壇裾）と認識した。E24ライン以西では現地表から1.5m以上掘削したところで岩盤を検出したが、3～5層は6層との層位の重複関係から墳丘盛土ではなく擾乱土と判断でき、墳丘が破壊されている

たことを確認した。そのため、1段目テラス円筒埴輪列など墳丘築造時の状況は判明しなかった。以上のように、2トレンチでは幅4.5m以上の基壇テラスと円筒埴輪、基壇斜面を検出したものの、1段目斜面より上の状況はすでに墳丘が破壊されていたため明らかにできなかった。

3.3 トレンチ（後円部北側）

後円部北側の墳丘主軸ライン上に設定した3トレンチでは、1・2トレンチで検出したような円筒埴輪列、据付坑などの墳丘外表施設は検出できず、墳丘築造時の状況は不明である。結果的には、土層観察により、墳丘盛土と判断される層を一部掘削してしまったことが判明し、盛土単位をいくつか確認できた。また、N32ラインとN36ラインの間で岩盤が露出した斜面を検出し、位置関係から基壇斜面と考えられ、その傾斜が緩慢となる傾斜変換点を後円部の墳丘裾（基壇裾）と判断した。なお、4層は埴輪の出土もなく、土層観察から盛土の可能性が高い層位である。3層では、3g～i層は盛土である可能性を残すが、他の3層を細分した層位は盛土起源の土壌と考えられるものの、埴輪を包含する層、その層との重複関係から盛土ではないと判断している。

4. 15 トレンチ（後円部北西側）

後円部の北西側の状況を確認するため、長さ18.5m、幅2m、面積37.0㎡の調査区を設定した。調査の結果、1段目テラスと基壇テラスを検出することができ、1段目テラスでは原位置を保つ円筒埴輪を6個体、基壇テラスでは円筒埴輪を2個体確認した。また、墳丘裾（基壇裾）では、傾斜変換点となる岩盤と地山を削った溝状の掘り込みを確認した。基壇テラスでは、V群系（Ⅳ・Ⅴ群系については第6章参照）の円筒埴輪が据付られていた。南側の1本が須恵質で、北側が土師質であった。他のトレンチの検出状況を考慮すると、この2本の中間にもう1本円筒埴輪があったことが推定されたが、円筒埴輪の底部や据付坑は確認できなかった。1段目テラス円筒埴輪列は密に並んでいるが、トレンチ北側では残存していなかった。この円筒埴輪列周辺には埴輪はほとんど散布していなかったが、これより墳頂部には多数の円筒埴輪片が散布している。これらは墳頂部から転落してきた円筒埴輪片と考えられる。1段目テラスで出土した円筒埴輪はすべてⅣ群系であった。

第3節 前方部の調査

1.6 トレンチ（前方部墳頂）

前方部墳頂付近で墳丘測量図の等高線からやや凹んでいる範囲に調査区を設定した。この凹みが盗掘の痕跡である可能性が考えられたため、前方部埋葬施設の有無の確認を目的とした調査区である。現地表面から約1m掘削した時点でも調査区の大半は攪乱土であったため、S32ライン付近に幅1mのサブトレンチを設定し、慎重に機械により掘削した。その結果、東西幅約4m、深さ約2m以上の攪乱を確認した。攪乱埋土の3a～c層では埴輪が出土し、攪乱底面では岩盤を検出した。また、サブトレンチ東端では墳丘盛土の単位が確認できた。本来ならば、攪乱内にさらにサブトレンチを設定し、埋葬施設の有無を追及すべきであったものの、掘削深度や期間上の問題から、これ以上の作業を実施しなかった。そのため前方部埋葬施設の有無については不明のままであるが、今回の調査では少なくとも石室などの施設に関する痕跡は見発できなかった。

2. 7トレンチ（前方部西側）

前方部西側の状況を確認するため設定した調査区である。掘削してすぐに全面で岩盤を検出した。W28ライン付近で円筒埴輪3個体を確認したが、北端の1個体は底部ではなく、原位置の円筒埴輪ではなかった。しかし、円筒埴輪据付坑1箇所、原位置の円筒埴輪2個体を検出したことにより、円筒埴輪列が確認できた。この円筒埴輪列は、5トレンチの西造出よりも下段に位置することから、基壇テラス円筒埴輪列と考えられる。円筒埴輪列が据え付けられていた地点は、東側の平坦面が幅5m以上を測る基壇テラスで、西側斜面が基壇斜面となる。基壇斜面は、円筒埴輪列から西側約4mで傾斜変換点があり、さらにその西側には幅5mほどの平坦面が認められた。この平坦面より西側は緩やかに傾斜していて、埴輪の出土もほとんどないことから、この平坦面は兆域内外を明示するために岩盤が整形された範囲と推察される。以上のように、7トレンチでは岩盤を整形した基壇テラスと円筒埴輪列、岩盤を整形した兆域外周の平坦面などが検出できた。

3. 8トレンチ（前方部南側）

前方部前端の検出を目的とした調査区で、東半は過去に鉄塔のアース線およびアンカーが埋められていたため、擾乱が及んでいた。S56ライン以北では岩盤を一部で検出したが、土層観察から盛土（4a～o層）を掘り込んでしまったことが判明した。しかし、円筒埴輪据付坑などは土層観察でも確認されず、墳丘外表は残存していないと判断できる。S56ライン以南では岩盤が検出され、S56ラインとS60ラインの中間で岩盤の傾斜変換点があり、埴輪が多量に出土した。この傾斜変換点から南側6mは平坦面であったが、ここでは埴輪はほとんど出土せず、さらに円筒埴輪列なども確認できない、7トレンチで検出した兆域外周の岩盤を整形した範囲と同様の平坦面と考えられる。このことから、埴輪が多量に出土した傾斜変換点が前方部前面の墳丘裾（基壇裾）と判断した。このように、墳丘自体は擾乱により残存状況は良くないものの、前方部前面の墳丘裾（基壇裾）とみられる傾斜変換点と岩盤を整形した兆域外周の平坦面を検出した。

4. 9トレンチ（前方部南側）

8トレンチ同様、前方部前面の墳丘裾の検出を目的とした調査区である。この調査区でも円筒埴輪列は検出されず、岩盤も確認できなかった。4g層で埴輪の出土があったため、5a～e層が墳丘築造時の層位と判断している。ただし、3・6・8トレンチで検出されたような異なる土質の小さな単位による盛土とは様相が異なるため、ただちに5層を盛土と判断するのは躊躇される。現段階では、古墳築造時に大日山にすでに堆積していた地山であった可能性が考えられる。

5. 10トレンチ（前方部東側）

前方部東側の状況を確認することを目的とした調査区である。E16ラインとE20ラインの中間から東では岩盤を検出した。E24ライン付近では埴輪が集中して出土し、岩盤がやや凹んでいたため、1トレンチで検出した1段目テラス円筒埴輪列や11トレンチで検出した円筒埴輪据付坑の可能性も考えられるが、それらを直線的のぼした延長上よりもやや東側に位置している点から、その可能性を指摘するに留めておきたい。この箇所以外は、緩慢な傾斜で東側へ下がっていくだけで、明確な平坦面や傾斜は確認できなかった。E16ラインやや東側にある傾斜変換点は、位置関係から1・11トレンチで検出した1段目テラスから2段目斜面への傾斜変換点と推測され、2段目斜面

では盛土単位を確認した。以上のように、10トレンチでは1トレンチや11トレンチで検出したような基壇テラス、基壇斜面は確認できず、東方向への尾根へと継続している。

6. 11トレンチ（前方部東側）

1トレンチと10トレンチの間に設定した前方部東側の状況を確認するための調査区で、調査区内全域で岩盤が検出でき、盛土や原位置を保持する円筒埴輪は確認できなかった。ただし、1トレンチで検出した1段目テラス円筒埴輪列の延長線上の岩盤に溝状の凹みが検出でき、布掘り状の円筒埴輪掘付坑である可能性が高い。また、1トレンチで検出した基壇円筒埴輪列の延長線上の岩盤には径50cm前後の不整形な2つの坑が痕跡的に検出できた。これらは、その位置関係から基壇テラス円筒埴輪の掘付坑と判断している。1トレンチ同様に、1段目テラスでは布掘り状に、基壇テラスでは個別に掘付坑が掘削されており、両者の掘付方法が異なっていたことがわかる。これらの掘付坑や1トレンチ南側サブトレンチ（文化遺産課トレンチ）の成果を加味して、岩盤の傾斜変換点をテラス面と斜面の変換点として認識すると、基壇斜面は幅約7m、基壇テラスは幅約9.5mを測り、非常に幅広になるのに対して、1段目斜面は幅2m程度、1段目テラスも幅3m前後と狭くなる。ただし、基壇テラスについては、平坦面というよりも、1段目斜面や基壇斜面よりも緩やかな傾斜の範囲という程度で、岩盤を整形して基壇テラスを形成する際に、十分な平坦面化が達成されていない。なお、造出南斜面の裾にもあたるS24E20区の4層では他の範囲に比べて多量の埴輪が出土し、これらの埴輪は1トレンチ南側サブトレンチ（文化遺産課トレンチ）の出土埴輪とともに、すでに削平されていた東造出南半に樹立されていた埴輪が落ち込んでいると推測される。以上のように、11トレンチでは原位置を保持する埴輪は確認できなかったが、1トレンチの成果から円筒埴輪掘付坑とみられる遺構とともに、岩盤を整形することにより形成された基壇斜面、基壇テラス、1段目斜面、1段目テラス、2段目斜面を確認することができた。

7. 16トレンチ（前方部南東隅）

前方部南東隅に長さ16m、幅2mの調査区を設定した。基壇テラスを検出し、円筒埴輪2個体を確認した。また、基壇テラスと斜面、裾の位置を確認するために、西側と南側の拡張区を加えて、調査面積は36.4㎡となった。南側拡張区では、基壇斜面裾部を明示するものと考えられる溝状遺構を確認した。溝状遺構は、幅50～70cm、深さ10～14cmで、墳丘主軸にはほぼ直交している。溝状遺構は埴輪片を覆う第2層で埋まっている。前方部端の溝状の掘り込みを確認したことにより、大日山35号墳の基壇の総長は約105mであることが判明した。

8. 12トレンチ（墳丘東側の尾根）

大日山から東へ通じる尾根上に設定し、この尾根上に古墳の有無を確認することを目的とした調査区である。調査区西端から10mくらいまでの範囲で埴輪が少量採集される以外ほとんど遺物は出土していない。現地表面から60cm前後で岩盤が検出でき、緩やかな東側への傾斜が認められたのみである。古墳の存在は確認できず、岩盤上に土壌が自然に堆積した状況が認められ、出土した埴輪は大日山35号墳から流出したものと考えられる。

第4節 東造出の調査

1. 1 トレンチ

東側くびれ部付近の前方部に配置したトレンチで、墳丘測量の時点で形象埴輪片が採集され、造出の存在が予想されたことから、造出の有無の確認を目的としたトレンチである。さらに、前方部東側面の墳頂から墳丘裾までの各段のテラス、斜面などの検出も目的とした。

掘削開始後すぐに、従来墳丘裾と認識されていた箇所よりも東側で円筒埴輪列が検出されたため、この時点で従来考えられていた墳丘規模より大きくなることが想定された。この円筒埴輪列は原位置で5個体を確認し、樹立間隔は中心間で0.7～1.1mを測り一定せず、まばらに樹立されている。樹立に際しては、各々据付坑が掘削され、いずれも円筒埴輪設置後その内側に径10cm程度の結晶片岩を配置して固定している。この円筒埴輪据付坑が掘削された盛土が円筒埴輪列のすぐ東側で傾斜をはじめ、そこから3.5m東側でその斜面がやや緩慢になる傾斜変換点が墳丘裾とみられ、検出された円筒埴輪列は最下段テラスの円筒埴輪列と考えられる。この最下段テラスは、基壇テラスと位置づけられることから、その東側斜面は基壇斜面と考えられる。この基壇テラス面は幅約2mを測り、多数の埴輪片とともに馬形埴輪が横転した状況で出土した。ただし、この馬形埴輪は昼神車塚古墳（高槻市）のように墳丘テラスに列状に樹立された形象埴輪ではなく、墳丘盛土面よりもやや浮いたレベルで出土する点、馬形埴輪の部材が本体部分から斜面的方向に流れて発見されている点などから、東造出に樹立されていたものが転落したものと判断している。なお、この馬形埴輪は整理作業の結果、横置き用の短冊形水平板を装着していることが判明した。

基壇テラスから幅約5m、高さ約2mほどの斜面を西側へ上がると平坦面が広がる。この平坦面は、調査前には墳丘が破壊されたことにより形成されたものと予想していたが、先述したとおり墳丘測量時に形象埴輪が多量に採集されたことから、造出の存在が想定された。この平坦面の範囲では、他のトレンチと異なり当初から幅4mの調査区を設定していたが、その範囲でほぼ南北の方向性をもつ円筒埴輪列、人物埴輪2体、家形埴輪3棟、水鳥形埴輪、須恵器甕のほか、多数の埴輪片を検出したことにより、東造出の存在が確認できた。この南北方向の円筒埴輪列は、検出時には2段目テラス円筒埴輪列と認識していたが、調査の進展により先述の最下段テラスが基壇テラスと位置づけられたことに伴い、1段目テラス円筒埴輪列と認識するに至った。

保存整備委員会終了後、東造出の範囲を確定するために1トレンチを南北に拡張することになったが、1トレンチ南側は1・11トレンチの排土置き場であった。そのため、排土の移動および拡張区の表土掘削は期間短縮のためバックホウでおこない、拡張は当初の調査区から南北にそれぞれ3mの範囲で実施した。拡張する範囲は、後述する5トレンチにおいて、その時点で明らかとなりつつあった西造出の南北長を参考とした。

南側拡張部分では、岩盤が当初の調査区に比して高くなっていたため、1段目テラス円筒埴輪列も途中で途切れ、原位置での形象埴輪や造出の範囲を明示する南辺円筒埴輪列も検出されなかった。北側拡張部分では、当初の調査区の検出面よりも若干低くなっていたため、埴輪の残存状況は良好で、1段目テラス円筒埴輪列の延長部分、東造出の北辺円筒埴輪列が検出できた結果、1段目円筒埴輪列で27個体、北辺円筒埴輪列で9個体の原位置の円筒埴輪が確認できた。

造出の規模確定のため、1トレンチ南側の拡張部分と11トレンチの間に1トレンチ南側サブトレンチ（調査時は文化遺産課トレンチと呼称）が設定され、造出南辺円筒埴輪列の据付坑と円筒埴輪底部の3個体が確認できた。

東造出の造出上面の復原される規模は、西側の南北長12m、東側の南北長7m、東西幅5m前後の台形状の平面プランである。ただし、北辺円筒埴輪列は直線ではなく途中で屈曲することから、造出の平面プランも同様であったと推察される。また、造出上面では東辺は残存していなかったものの、北辺、南辺の円筒埴輪列、西辺を1段目円筒埴輪列により囲繞した範囲に形象埴輪群の樹立、須恵器大甕の据付などをおこない、埴輪祭祀が執りおこなわれていたとみられる。造出中央から北側では、須恵器の甕が原位置で出土し、家形埴輪1-3、水鳥形埴輪1-3基部も原位置での出土の可能性が。さらに横転した状況で出土した人物埴輪(力士1-1)や翼を広げた鳥形埴輪1-1・1-2、蓋形埴輪の一部なども原位置に近いものと推測できる。また、人物埴輪(力士1-1)の脇では犬形埴輪の頭部が出土しており、近くで動物埴輪の脚部が出土することから、本来の樹立位置に近い場所での出土と推測できる。これに対し、造出南半では岩盤が露出し、やや高くなっていたため、原位置の埴輪は検出できず詳細は不明である。出土した形象埴輪の数量に比べて、形象埴輪基部の出土や形象埴輪据付坑は少なく、造出上面が削平されている可能性があり、本来形象埴輪が樹立されていた地点を示す状況証拠は少ない。造出上面は南高北低の状況で、南側では岩盤を整形し、中央から北側では盛土をおこなって埴輪祭祀の空間を創出していると推察できる。そのため、1段目テラス円筒埴輪列の南半や造出南辺円筒埴輪列の据付坑は岩盤を削り込んで掘削されていた。

これら形象埴輪群を囲繞する円筒埴輪列は、1段目円筒埴輪1-9の1本のみがV群系円筒埴輪であったが、それ以外はすべてIV群系円筒埴輪である。また、一部で朝顔形埴輪が含まれており、円筒埴輪列近くでは蓋形埴輪がまとめて出土する箇所がある。この円筒埴輪列は、基壇テラス円筒埴輪列とは異なり、中心間で30～50cm間隔で樹立されており、円筒埴輪樹立当初は口縁部が接するほど密に並べられていたものと推測される。また、据付坑も各々掘削されておらず、布掘りによるものであり、基壇テラスで認められた各々掘削された据付坑や円筒埴輪内部への結晶片岩の据付がないなど、基壇テラス円筒埴輪の据付状況とは異なるものである。さらに、1段目円筒埴輪列は南半では直線的であったものが、後円部へ向けて北半部では徐々に方向が変化しはじめており、後円部へと続いていく。北辺円筒埴輪列は、先述したとおり途中で屈曲しているが、1段目テラス円筒埴輪列との接続部分には円筒埴輪が確認できず、岩盤の露出部分でも明確な据付坑は検出できなかった。

1段目テラス円筒埴輪列の西側には4mほどの平坦面があり、2段目斜面裾に至る。この平坦面でも埴輪が出土しているが、原位置での検出とみられる埴輪は認められない。また、据付坑は検出できず、造出内ほどの出土量もないことから、埴輪部や造出に樹立されていた埴輪群の一部が転落や横転などによりこの範囲で出土したものとみられ、現時点では井辺八幡山古墳(和歌山市)のように造出外への埴輪の樹立はおこなわれていなかったと判断している。ただし、水鳥形埴輪1-1の基部や人物埴輪(力士1-1)、須恵器甕の一部がこの平坦面で一定量出土している点は埴輪樹立状況を復元するうえで考慮しなければならない。

2段目斜面から埴輪部では明確な遺構は検出できなかったが、2段目斜面の標高137m前後までは岩盤を整形することにより斜面を形成し、それ以上では盛土されていた状況が確認できた。なお、埴輪部に樹立されていた円筒埴輪列を確認できなかったものの、2段目斜面裾では全容がわかるIV群系の円筒埴輪が出土し、埴輪部に樹立されていた円筒埴輪が転落したものと考えられる。また、この空間では蓋形埴輪片や家形埴輪1-5の破片も出土することから、埴輪部には蓋形埴輪や家形埴輪が樹立されていたことが推測できる。

以上のように、1トレンチでは東造出の規模および造出上でおこなわれた埴輪による祭祀の概

況、基壇テラスおよび基壇円筒埴輪列の状況など多数の成果を得ることができた。調査の結果、2つのテラス面と3つの斜面が検出でき、墳丘が3段構成になっていることが判明した。

2. 13 トレンチ（東造出北斜面）

墳丘東くびれ部に設定した東西1.9m、南北5.6mの調査区で、1トレンチの北側に接続する。土層堆積は5層に分かれ、すべての層から円筒埴輪の破片が出土したが、4・5層からの出土が顕著であった。すべて上部の造出から流失したものと推定され、少数ではあるが家形埴輪の破片もみられる。2層からは瓦器碗の破片が出土した。

検出した地盤は、後円部と東造出の接合部と推定される。等高線は北北東方向に緩やかに下がっていて、西側ではやや軟質の結晶片岩の岩盤が露出する。岩盤の板状節理面はほぼ東西方向である。接合部の斜面地点で、長さ50cm、幅15cmほどの結晶片岩の石材2つが連なって水平方向に据えられていた。土留めのための作業であると推測される。

3. 14 トレンチ（東造出側基壇テラス）

1次調査の時点では基壇テラス円筒埴輪列が前方後円墳形か盾形に巡るか判明していなかった。2次調査において東造出側の基壇テラスに樹立された円筒埴輪列を確認する目的で1・2トレンチ間に設定した長さ6.0m、幅0.6mの調査区である。

円筒埴輪は8個体検出し、南側から円筒埴輪14-1～8とする。円筒埴輪は、基底部に直径25cm前後の小形のもので、上部は削平されていた。円筒埴輪列はほぼ直線状に並ぶが、北側ではやや外側に開き気味になる。埴輪の据付面は南側が高く、北側が低くなっており、検出面で約40cmの比高差がある。このため埴輪の遺存度は南側のものほど低い。埴輪の間隔は中心間で、南から85、75、78、90、78、66、75cmである。布掘りではなく、埴輪据付坑は各々掘削されている。

第5節 西造出の調査

1.5 トレンチ

西側くびれ部および西造出の検出を目的として、当初より面的な調査区として設定した。1次調査で調査を開始したが、多量に埴輪が出土したことや東造出など他の調査区の調査を優先したことなどから、埴輪出土状況を確認した時点で埋め戻して調査を終了し、3次調査で改めて調査を実施することにした。

1次調査では、表土と2層の一部である現地表面から最大約30cmを機械により掘削し、その排土を5トレンチ東側の西くびれ部の修景作業に利用した。この調査区では、2層を除去し、旧表土とみられる3層を掘削しはじめた時点で、原位置を保持するとみられる埴輪群が確認されはじめており、この時点で埋め戻すこととなった。3次調査では、12×12mの調査区に加えて、東側に2×12m、北西側に2×4m、南西側に2×4m、さらに南西側に再拡張1×1mの範囲を拡張して計161㎡の調査を実施した。西造出の円筒埴輪列および形象埴輪の検出を目的とし、北西側・南西側では基壇テラス円筒埴輪列の検出も目的とした。

5トレンチの調査では、調査区全体が結晶片岩の岩盤上にあたり、部分的に盛土をすることにより造出が造成されている状況を確認した。西造出は基本的に岩盤がベースとなっており、南斜面は岩盤を少しだけ削り、北斜面は地山を深く削りこむ。造出の遺物は厚手の均質なシルト層（3層）で埋まることから、長い時間をかけて埋没していった状況がうかがえる。その層の上には墳丘盛土を主体とする再堆積層（2層）があり、後世に石室入口の平坦面と同一の高さまで平坦面が造られている。この平坦面は石室に祀られている大日如来に関連する造成と考えられ、瓦や陶器が散布していることから、墳丘を切り崩して西造出上に盛った土を2層と認識した。地表面の土壌化した部分は1層とした。

5トレンチでは、1層（表土）、2層（2a～o層）、3層（3a～e層）を掘削対象とし、4層（4a～e層）は盛土と考えられたため掘削をおこなっていない。東側拡張部分で4e層を検証のため一部掘削し、無遺物層であることを確認した。また、4a・4b層上面では形象埴輪や須恵器甕の据付坑のほか、円筒埴輪列を検出した。

西造出の形状は、造出上面に南北6.5～9.0m、東西6.0～7.0m程度の平坦面が造られている。四方を円筒埴輪列で囲繞しており、1段目テラス円筒埴輪列は原位置で円筒埴輪38個体を検出し、東造出同様に密に樹立されていた。1段目テラス円筒埴輪列はやや弧状に配列されている。また、造出北辺および南辺、西辺円筒埴輪列もそれぞれ14個体、17個体、7個体の原位置の円筒埴輪が確認できた。出土した破片などから円筒埴輪列には数本に1本の割合で朝顔形埴輪が含まれている可能性がある。また円筒埴輪列に沿って蓋形埴輪が数個体出土している。

北辺円筒埴輪列は、途中で屈曲しており東造出と同様の形態を示す。ただし、東造出北辺円筒埴輪列が1段目テラス円筒埴輪列から8個体目で屈曲するのに対して、西造出北辺円筒埴輪列では6個体目で屈曲し、細部で異なる。また、北辺円筒埴輪5-11および南辺円筒埴輪列5-3・16でもやや屈曲しており、北辺円筒埴輪5-15の地点でも屈曲している可能性がある。西辺円筒埴輪列は残存状況がよくないが、やはり一直線ではなく曲線ないしは屈曲を描くものと推測される。1段目テラス円筒埴輪列と北辺・南辺円筒埴輪列とが接続する部分の南北長は約8mを測り、東造出より約4m短く、規模も異なる。円筒埴輪列は、浅い布掘り状の溝を掘削して据付られており、さらに溝内に1個体ずつ据付坑を掘り下げている箇所があり、据付坑を掘り下げることによって、

1段目の突帯下部まで埋めようとした状況が想定できる。

造出下端のラインは、北西隅と南西隅は等高線の最も張り出した地点がやや鋭角的になっており、旧状が判明した。造出北斜面も北辺円筒埴輪5-6の屈折点から北西へと明確な谷となっている。造出南斜面は岩盤がベースであるためあまり急傾斜に削られていない。南辺円筒埴輪5-3・16といった造出上面の屈折点に対応して、斜面下の円筒埴輪片がたまっている地点があり、屈折している状況が観察できる。このことから、造出南辺は上端と下端が対応した形をとっているものと推定できる。造出西斜面は、急角度の斜面となっており、造出から転落した埴輪片が散乱している。これらの埴輪片がまとも出土する標高132.0mの等高線に沿ったラインが造出の下端と認識される。

円筒埴輪列に圍繞された範囲では、特に造出南半を中心に馬形埴輪2体、人物埴輪の草摺部分およびその下部にあたる人物の台などの形象埴輪が原位置とみられる状況で検出できた。形象基部および据付坑と判断できるものは10個体程度確認できているが、その上部がどのような形象埴輪になるのか判別できたものはほとんどない。馬形埴輪2体は飾り馬で、検出面では前脚2本と後脚2本を据えた楕円形の坑となっているが、その下部はそれぞれ脚部が4本ずつ据えられる形状になっている。近くでは杏葉などの馬具やたてがみなどの破片が散乱していた。家形埴輪5-2は基部が剥離した状態ではあるが、調査中の認識では据付坑に据え置かれた可能性が考えられていた。また胡録形埴輪や奴形埴輪といった器財埴輪も倒れた状態で出土している。さらに両面人物埴輪や双脚輪状文形冠靴をかぶった人物5-1・2、冑を装着した武人、巫女などの頭部が出土しているが、これらの頭部は体部や基部が判明していない。

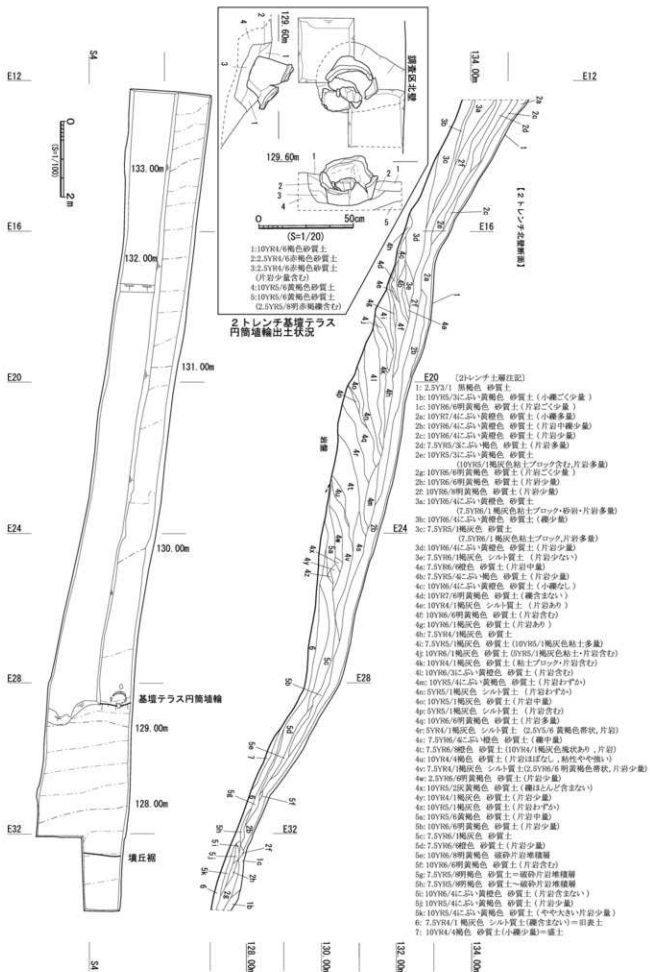
西造出北半では須恵器の甕が2個体据えられた状態で出土している。また、据付坑は確認できなかったが、付近ではもう1個体の須恵器甕の破片が集中して散布しており、大形の甕が3個体据付られていた可能性が高い。この周辺には原位置をとどめる埴輪が認められず、埴輪の出土数も少ないことから、須恵器を設置したエリアであったと想定でき、飲食物供献儀礼の場となっていた可能性がある。

この他、造出上には小さなビット状の遺構が検出されており、須恵器高杯や土師器などの破片が出土したものがあつた。確実な掘り込みと認識できないものが多いが、馬形埴輪や胡録形埴輪が出土した周辺および造出西側にみられる傾向にある。

西造出西半については削平を受けており判然としませんが、家形埴輪5-1の破片が散乱している。また、西造出西斜面に転落した形で翼を広げた鳥形埴輪の破片がまとも出土しており、おそらく造出の北西部付近に樹立していたものが転落したものと推測できる。なお、西造出では馬形埴輪2体と翼を広げた鳥形埴輪以外の動物埴輪は確認できていない。

北西および南西拡張部分では基壇テラスと円筒埴輪列を検出した。北西拡張部では原位置をとどめた円筒埴輪を2個体と据付坑1箇所、南西拡張部では円筒埴輪3個体と据付坑1箇所を確認できた。据付坑は径30～45cmで各々掘削されており、残存する深さは約15cm程度である。据付坑の中心間の距離は60～70cm程度であった。この基壇テラス円筒埴輪列で検出した円筒埴輪は、いずれもV群系円筒埴輪であった。

以上のように5トレンチでは西造出を検出し、円筒埴輪、形象埴輪群の残存状況は良好であった。



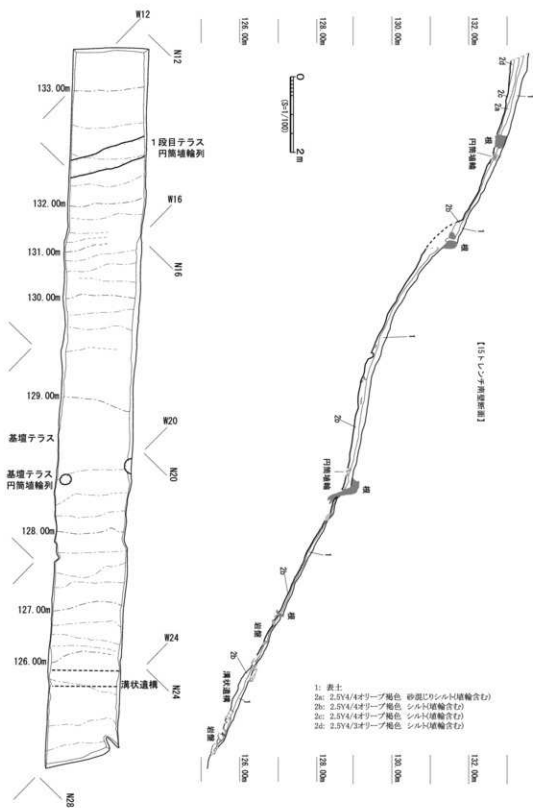


図 3-4 15トレンチ 平面図・土層断面図 (S=1/100)

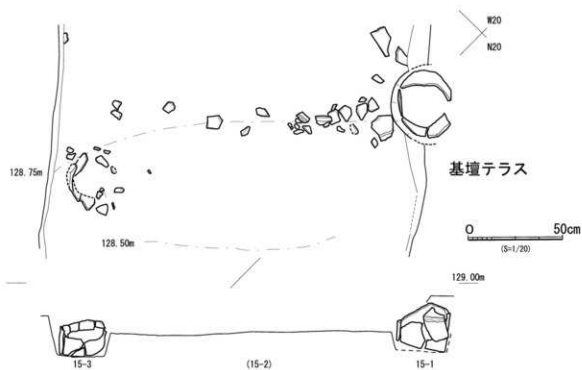
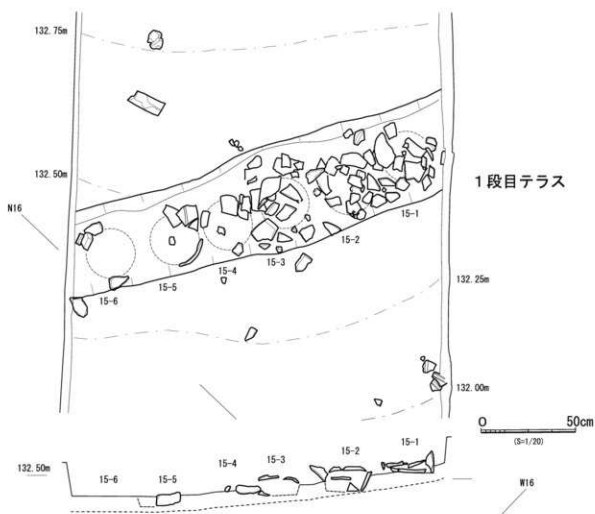
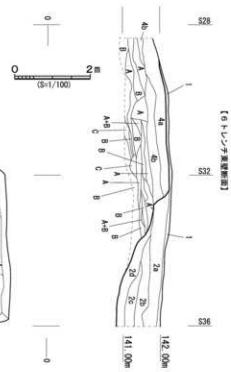
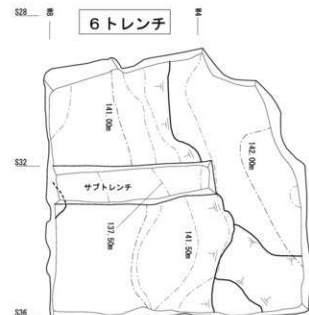
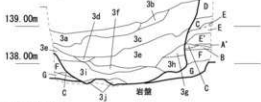


図3-5 15 トレンチ 埴輪出土状況図(平面図・立面図) (S=1/20)

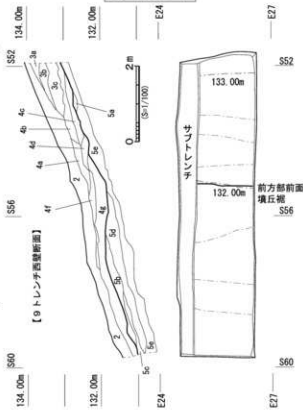


【6トレンチサブトレンチ内 北壁断面】



- 【6トレンチ土層注記】
- 表土
 - 2.5V4/6オリーブ褐色 砂質土(小礫・片岩中量,粘性やや高い)→覆乱埋土
 - 2.5V6/1黄灰色 砂質土(小礫・片岩中量,粘性高い)→覆乱埋土
 - 2.5V3/2灰オリーブ色 砂質土(小礫少量,粘性高い)→覆乱埋土
 - 2.5V8/1褐色色 砂質土(2cmより細・片岩多量,粘性高い,層輪あり)→覆乱埋土
 - 2.5V8/2に似た黄色 砂質土
 - 10YR7/3淡黄褐色 砂質土(中礫・片岩中量,粘性低い)→覆乱埋土
 - 10YR8/3淡黄褐色 砂質土(A層ブロック中量,片岩少量)→覆乱埋土
 - 2.5V3/1黒褐色 砂質土(A層にB層混ざる,粘性なし)→覆乱埋土
 - 7.5YR6/1褐色色 砂質土(B層に少量のA層混ざる)→覆乱埋土
 - 10YR5/4に似た黄褐色 砂質土
 - 0層に帯状のA層2.5V3/1黒褐色シルト中量,片岩中量,粘性低い→覆乱埋土
 - 10YR4/1褐色色 シルト質土(片岩中量,A層が少量に少量,粘性低い)→覆乱埋土
 - 2.5V6/2に似た黄色 砂質土
 - 2.5V6/3に似た黄色 砂質土(片岩少量,粘性低い)→覆乱埋土
 - 2.5V8/2に似た黄色 砂質土→覆乱埋土
 - (10YR5/8黄褐色～2.5V4/1黄灰色シルトブロック多量,片岩・小礫少量,粘性低い)
 - 10YR5/3に似た黄褐色 砂質土
 - (10YR4/1褐色色シルトブロック少量,片岩・小礫少量,粘性低い)→覆乱埋土
 - 2.5V2/2オリーブ色 シルト質土
 - (C層に類似する片岩風化層A・D・G層ブロック少量,粘性低い)→覆乱埋土
 - 10YR5/8黄褐色 砂礫土(砂は粗砂主体,礫は片岩主体,粘性やや低い)→墳丘盛土
 - 5Y5/2灰オリーブ色 砂質土(中礫～細砂主体,礫は片岩主体,粘性低い)→墳丘盛土
 - 10YR5/6黄褐色 砂礫土(中礫～細砂混在,片岩多量)→墳丘盛土
 - A: 2.5V6/1黄灰色 シルト質土(片岩・炭化物少量,粘性高い,Aより顕色有り)→墳丘盛土
 - 5Y5/2灰オリーブ色 砂質土(4層類似混在,片岩多量)→墳丘盛土
 - C: 5Y5/2灰オリーブ色 砂質土(片岩風化層A層ブロック少量,粘性なし)→墳丘盛土
 - D: 2.5V6/4に似た黄色 砂質土(A層ブロック少量,片岩多量,粘性低い)→墳丘盛土
 - 5Y5/8明赤褐色 砂質土(片岩中量,A・B層ブロック少量,粘性やや低い)→墳丘盛土
 - E: 5YR5/8明赤褐色 砂礫土(層に炭化物混在,粘性やや低い)→墳丘盛土
 - F: 10YR4/1褐色色 シルト質土(片岩・褐色ブロック・炭化物少量,粘性高い)→墳丘盛土
 - G: 2.5V4/1黄灰色 シルト質土(褐色ブロック・炭化物少量,片岩なし,粘性高い)→墳丘盛土

9トレンチ



【9トレンチ土層注記】

- 表土
- 2.5V6/4に似た黄色 砂質土(片岩中量,層輪あり,粘性なし)
- 2.5V6/3に似た黄色 砂質土(片岩中量,粘性なし)
- 2.5V5/4黄褐色 砂質土(小礫多量,粘性ややあり)
- 2.5V3/2明オリーブ褐色 砂質土(小礫少量,片岩中量,粘性あり)
- 2.5V5/2黄褐色 砂質土(片岩少量,砂岩少量,粘性あり)
- 2.5V3/2灰オリーブ褐色 砂質土(片岩・小礫・砂岩少量,粘性あり)
- 2.5V4/2暗灰黄色 砂質土(片岩少量,小礫中量,粘性あり)
- 10YR5/4に似た黄褐色 砂質土(片岩・小礫中量,粘性あり)
- 2.5V6/6明黄褐色 砂質土(片岩主体の礫含む,粘性やや低い)
- 2.5V4/2オリーブ褐色 砂質土(片岩・小礫中量,炭輪あり,粘性あり)
- 5Y4/4暗オリーブ色 砂質土(片岩・小礫多量,粘性やや低い)→地山か
- 2.5V4/3オリーブ褐色 砂質土(片岩中量,粘性やや高い)→地山か
- 2.5V5/2暗灰黄色 砂質土(片岩・小礫・砂岩少量,粘性あり)→地山か
- 5Y3/1オリーブ褐色 砂質土(小礫少量,10YR4/3に似た黄褐色砂質土少量含む,粘性あり)→地山か
- 2.5V4/2黒灰黄色 砂質土(小礫・片岩少量,粘性高い)→地山か

図3-6 6・9トレンチ 平面図・土層断面図 (S=1/100)

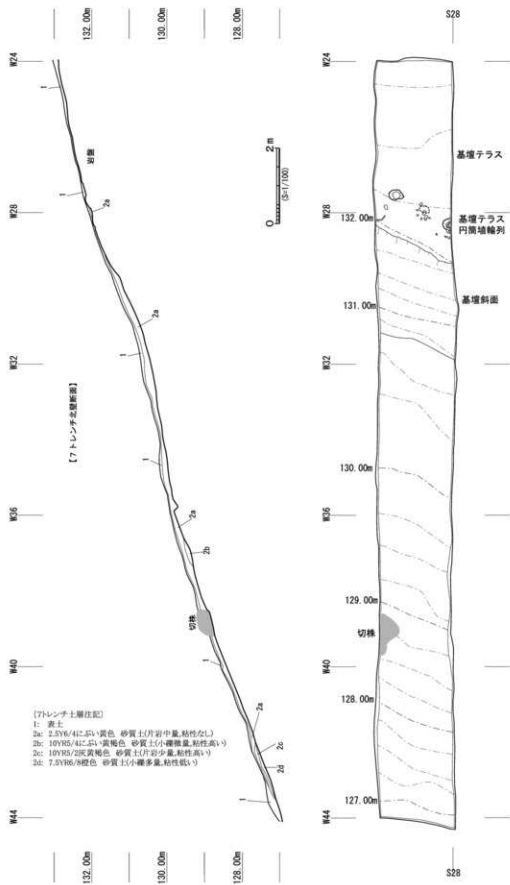


図 3-7 7トレンチ 平面図・土層断面図 (S=1/100)

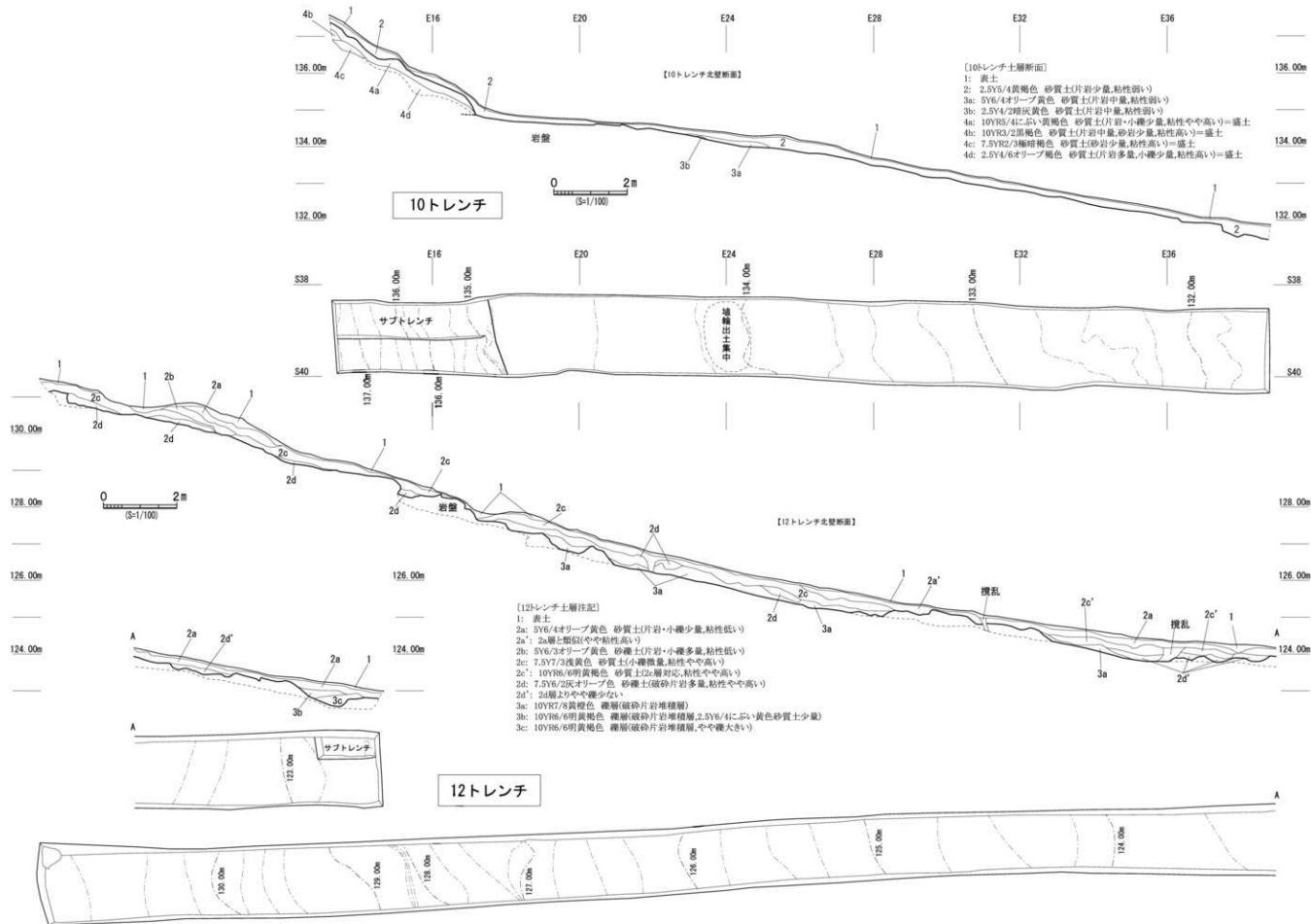
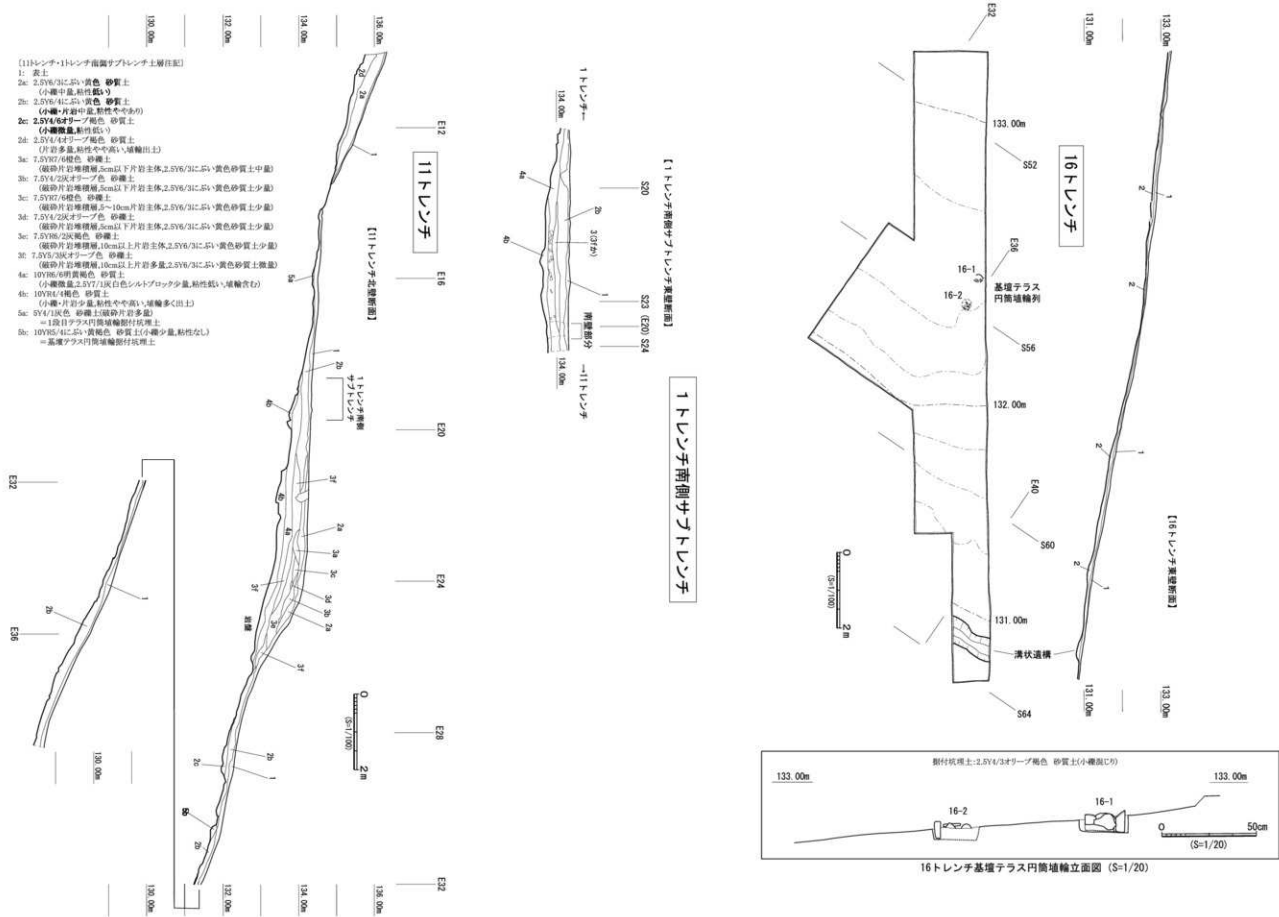


図3-9 10・12トレンチ 平面図・土層断面図(S=1/100)



- 【11トレンチ・1トレンチ南側サブトレンチ土層(左記)】
- 1: 表土
 - 2a: 2.5V6/31に5%黄褐色 砂質土 (小礫少量, 粘性弱)
 - 2b: 2.5V6/4に5%黄褐色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2c: 2.5V6/30サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性弱)
 - 2d: 2.5V6/4サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2e: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2f: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2g: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2h: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2i: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2j: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2k: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2l: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2m: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2n: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2o: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2p: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2q: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2r: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2s: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2t: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2u: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2v: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2w: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2x: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2y: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)
 - 2z: 2.5V6/25サブ層色 砂質土 (小礫少量, 粘性やや弱)

図3-10 11トレンチ・1トレンチ南側サブトレンチ・16トレンチ 平面図・土層断面図 (S=1/100)

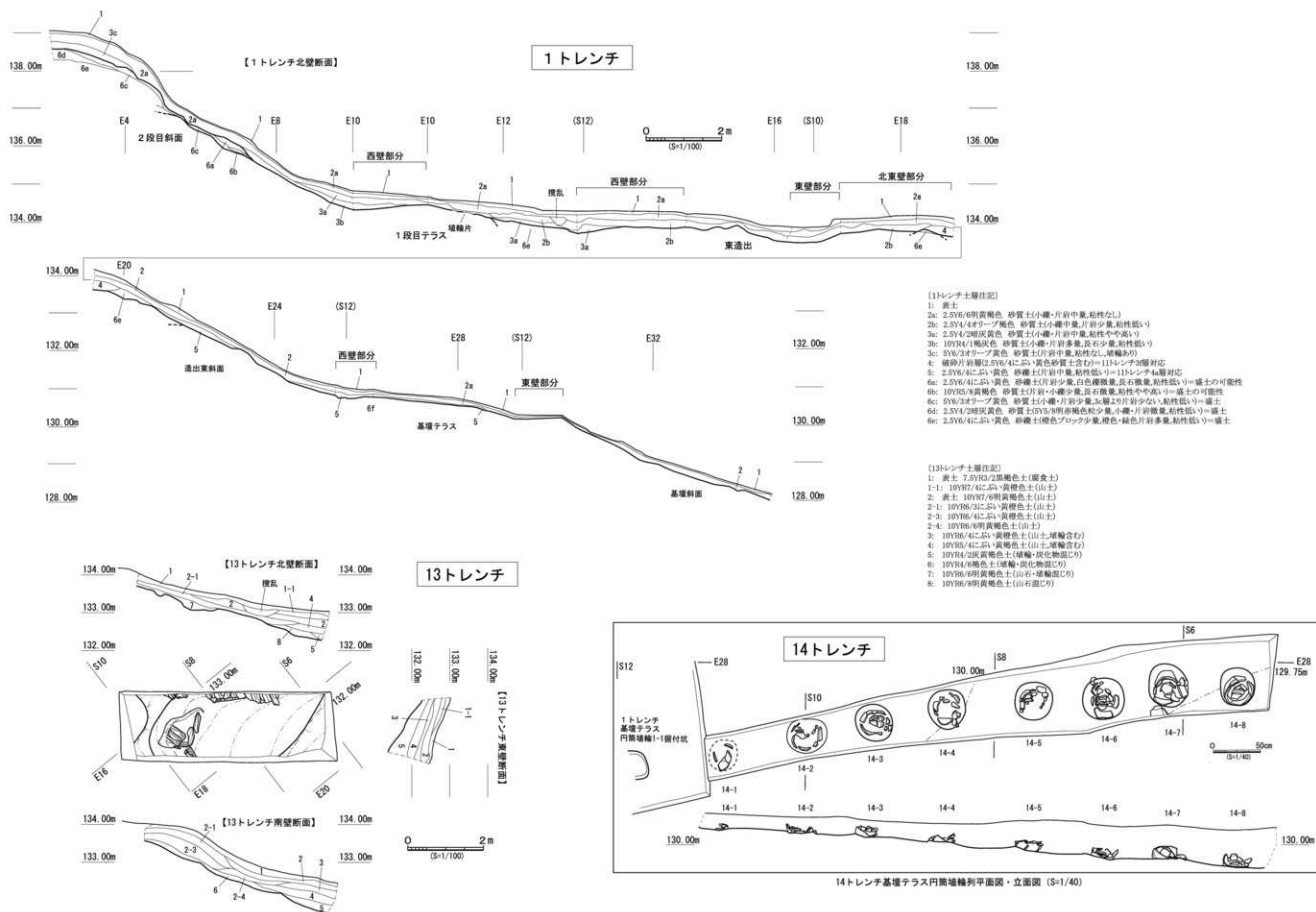


図3-12 1・13・14トレンチ 平面図・土層断面図(S=1/100)



図3-13 1トレンチ 東造出 埴輪出土状況平面図1(S=1/30)



図3-14 1トレンチ 東造出 埴輪出土状況平面図2(S=1/30)

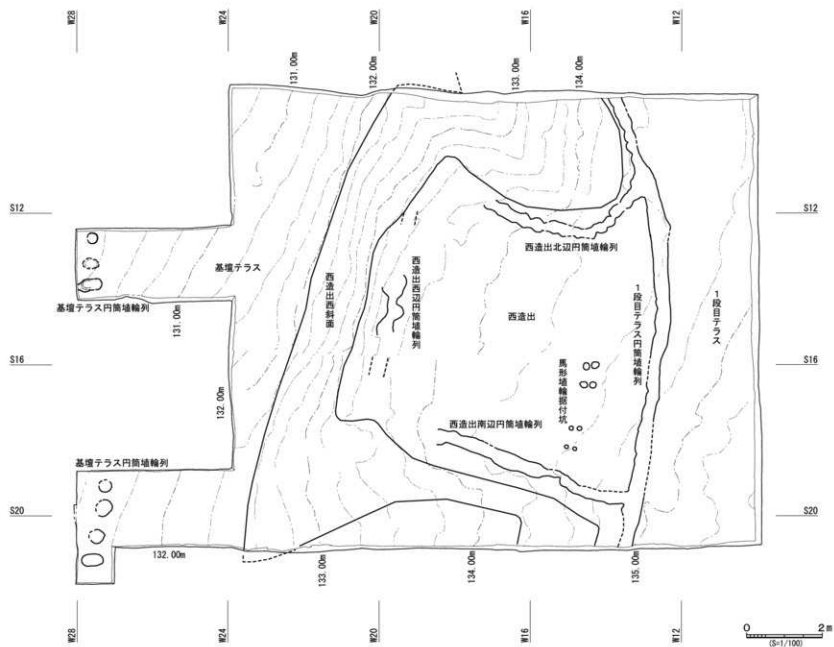
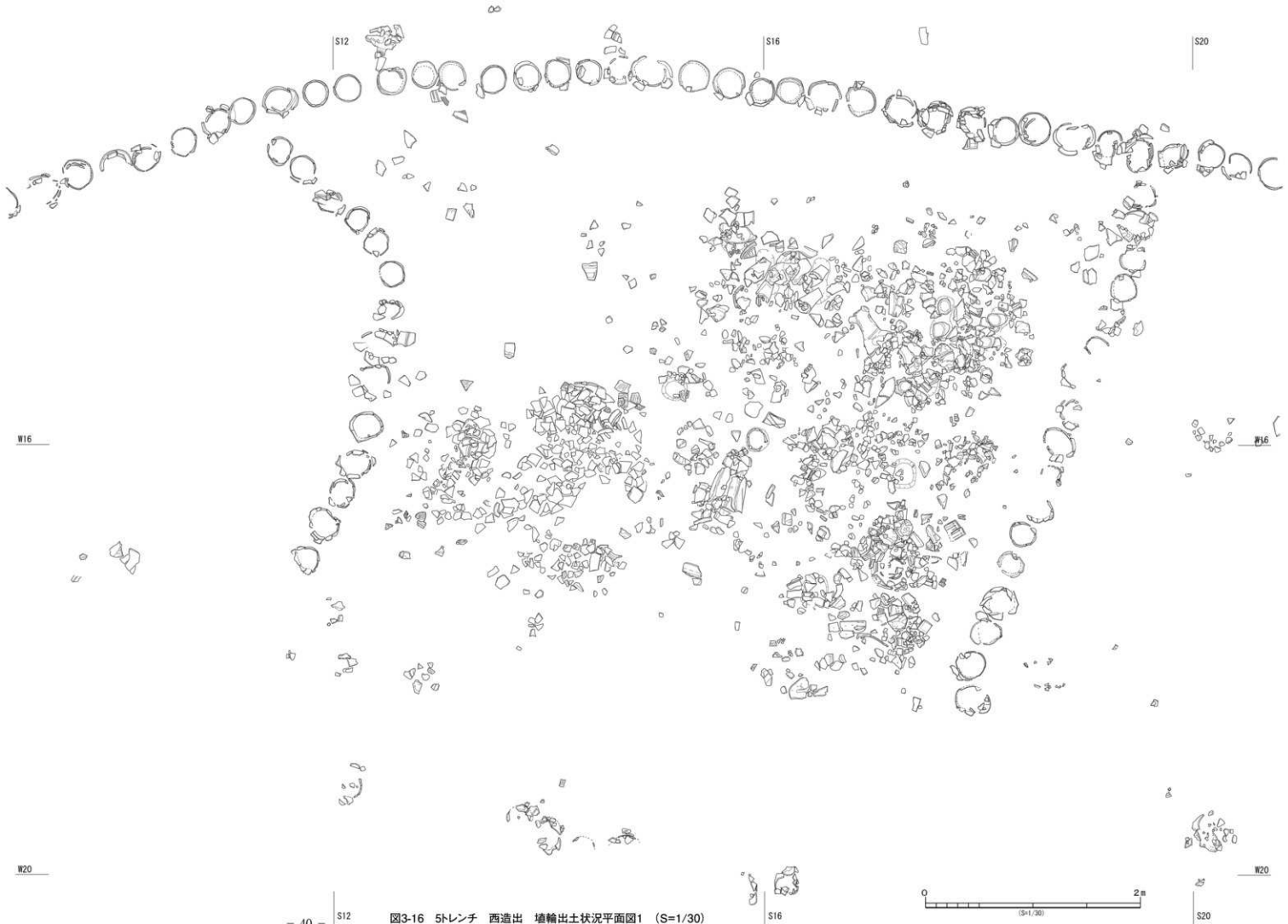


図3-15 5トレンチ 平面図(S=1/100)



- 40 -

S12

図3-16 5トレンチ 西造出 埴輪出土状況平面図1 (S=1/30)

S16



S20

W20

W16

W16

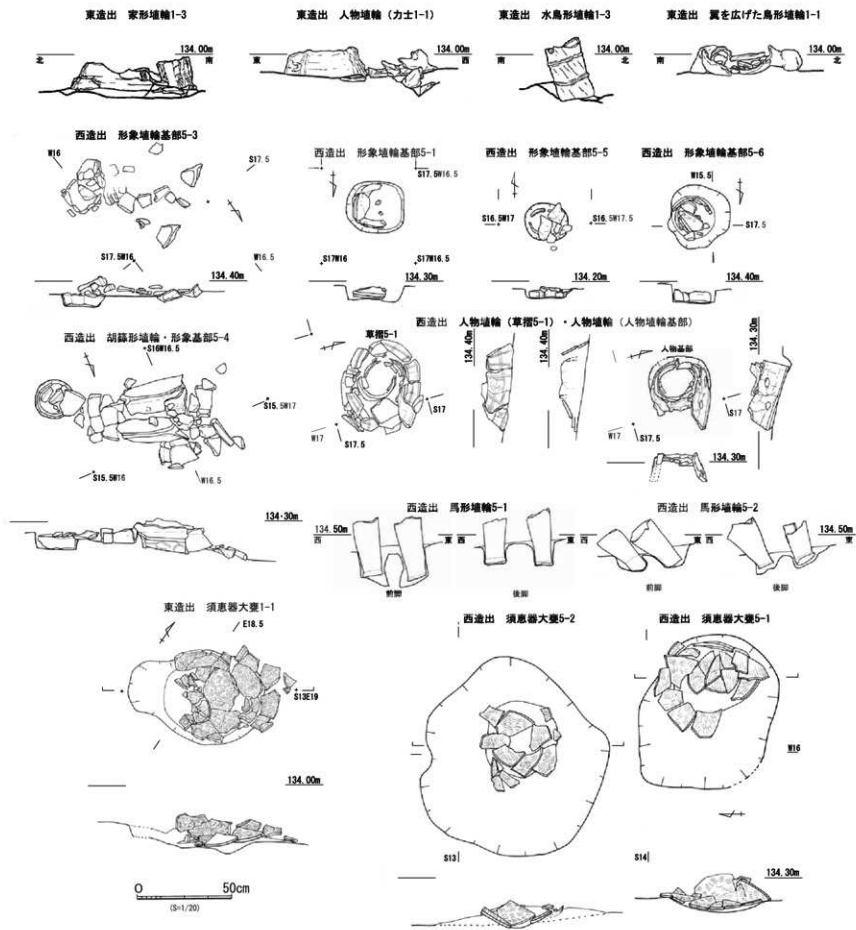


図3-18 5トレンチ 土層断面図(S=1/100) / 東西造出 形象埴輪・須恵器 出土状況立面図(S=1/20)

第4章 東造出の形象埴輪

第1節 家形埴輪 (図4-1～4-43)

東造出中央部から3分割焼成された高床式入母屋造(家1-1)、入母屋造上屋根の切妻部(家1-2)、平屋の身舎(家1-3)が出土している。家1-3は基部を下にして出土し、原位置であった可能性がある。家1-1は屋根部分がひっくり返されたように大きく動いているが、基部が出土した付近に樹立されていた可能性がある。平屋の寄棟造(家1-4)は造出南東側で集中して出土した。

家1-1(図4-1～26)は、入母屋上屋根(切妻部)、入母屋下屋根(寄棟部)と身舎の壁、高床部・基部の3つに分けて成形して焼成されている。上屋根は破風上部が欠損し、千木が取り付くか不明である。大形の堅魚木が4本のせられる構造であり、3本が残存する。屋根には鱗飾り状の棟覆いを格子形に貼り付けている。妻側の壁にはスカシ孔が2つあり、方柱状の棟持柱が取り付けられる。破風にはわずかに線刻が確認できる。入母屋下屋根(寄棟部)は、上屋根がのる部分に板状の平坦面を作り出している。妻側には沈線と刺突文で盾の文様が表現された方柱状の棟持柱が取り付けられ、その上部に上屋根の棟持柱がのる構造となる。平側には2条一括沈線と1点刺突文による文様が施された障泥板を貼り付けている。軒先にも2条一括沈線による文様があるが、刺突文は施されていない。内面には身舎の壁が接された部分を確認できるが、実際には身舎の壁とは接合せず、身舎の壁の高さは未確定である。身舎の壁には外面四隅と壁中央に粘土の板を貼り付けて柱を表現する。その柱部分には2条一括沈線と刺突文による盾状の表現と×に-を加えた文様が施されている。出入口は各面とも2つずつ設けられる。内面には四隅と壁中央に縦方向の補強突帯が貼り付けられ、柱表現の可能性もあるが、指押さえが強く残り丁寧に貼り付けられていないことから、補強材であったと推察する。3分割焼成の最下部は、高床・9本総柱の円柱・基部で構成される。円柱の残存状況は悪く、2本が一部残るのみである。本来円柱は基部の下にも続いていたと推測できるがその部分は残存しない。図4-43-1・2は家形埴輪1-1の棟木、図4-43-3～5は大棟の堅魚木がのる部分、図4-43-6は大棟の可能性のある破片である。

家1-2(図4-27～30)は、分割焼成の入母屋造の上屋根と考えられ、2条一括沈線を2つ重ねた4条沈線で格子状に施文する。大棟から破損している側の一部に破断面ではなくいきている箇所がある。穴があいていたか、整形の際に粘土を埋めた痕跡であろうか。大棟部分は堅魚木が取り付け構造で、接合しないが、同一個体と考えられる堅魚木2本と入母屋下屋根の軒先、棟持柱、障泥板が出土する。家1-2は出土地点が近く家1-3の身舎に組み合わせる可能性は否定できない。

家1-3(図4-31～35)は平屋の壁で、基部には半円形のスカシがあり、一部は円形にあげられている。出入口部は2箇所あり、外面中央には縦方向に粘土を貼り付けて柱を表現している。内面の四隅と中央に補強突帯を貼り付けており、柱を表現していた可能性もある。

家1-4(図4-36～38)は、全体像を復元できていないが、屋根や壁の形状から平屋の寄棟造と考えられる。2箇所の円形のスカシ孔がある部分(妻側か)と方形の出入口部がある部分が確認できる。造出東斜面で出土した家1-7とした寄棟部の軒先(図4-39)は、家1-4と同一個体と想定できるが、直接接合しないことと出土地点が少し離れることから可能性をとどめるにしておく。

この他、これらとは別個体でやや小形の破風と棟木(家1-5)が1段目テラス(円筒埴輪列より墳丘側)で出土している(図4-40-1・2)。同一個体の破片が少ないことや出土した地点から、造出ではなく、墳丘上に樹立していたものが転落した可能性もある。これ以外に小形の棟木や筭がつ

く棟覆、身舎基部の破片があり、家1-1～1-5の部材とは考えにくいため家1-6、1-8としている（図4-40-3～14）。家1-8は家1-4もしくは家1-6と同一個体の可能性がある。

いずれの家に取り付くか確定できない大形の千木（図4-41・42）があり、現状では家1-1と家1-2は破風上部が未確認のため、これらに取り付く可能性がある。ただし、これらの破風にはこの千木と同じ文様がないため、別個体の大形の家形埴輪があった可能性も否定できない。

以上のように東造出および1段目テラスから複数の家形埴輪が確認できた。東造出では4個体（家1-1、1-2、1-3、1-4）、埴丘側で1個体（家1-5）を確認できたといえる。部位不明の家形埴輪と考えられる破片もあり（図4-43-7～11）、家1-6～8も別個体であればさらに個体数が増えることになる。

第2節 人物埴輪（図4-44～4-51）

東造出の人物埴輪の種類としては、盛装男子、巫女、力士があげられる。

盛装男子1-1（図4-44）は頭部や脚部を欠損するものの、体部はほぼ残存しており、沈線と浮文で施文された衣服をまとい、手には手甲を付けている。この個体とは直接接合しないが、大刀を取り付けた腰部分の個体（図4-45-6）がある。盛装男子と同一個体と考えていたが、取り付く角度を考えると別個体である可能性がある。この他、冠や髷、草摺など（図4-45-1～5）、男子像に関連する埴輪が出土しているが、盛装男子1-1に取り付く可能性もあるが判然としにくい。

巫女は、それぞれ接合しないが頭頂部の島田髻部分と袷袢状衣、腕などの部位が出土している（図4-45-7～9、図4-46-1～7）。腕の数から少なくとも4体以上の巫女がいたと推測できる。

力士1-1（図4-47～50）は、頭部と腕、脚台部を欠損するが、ほぼ全身がわかる個体で、左手をあげる姿勢で、胸は円形の粘土を貼り付けてふくらみを表現する。まわしを付けて、ひざ付近では紐状のもので結び、それより下部には足玉状の浮文を貼り付けた痕跡がある。左腕にも紐状の貼り付けが残る。脚部内面には補強突帯がある。同一個体の可能性が高いくるぶし付近と足先の個体（図4-51-1・2）があり、くるぶし付近にも足玉状のものを貼り付けている。足先は素足で、5本指が表現される。この力士1-1とは胎土が違うくるぶし付近と足先の破片（図4-51-3～5）があり、別個体（力士1-2）と判断した。くるぶし付近には足玉状の浮文が貼り付けられ、足の甲にも同様に貼り付けられている。足先の浮文は、突起状のものが付いた靴などの想定もあるが、指が表現されており、素足であったとすれば、素足に何らかの形で玉類を装着した状況を表現したものと想定することもできる。器や玉類、手甲などが取り付かない腕が2個体（図4-46-8・9）出土し、形状から同一人物のものとも推測できる。このうち図4-46-9は力士1-1と同一地点で出土しており、また形態や胎土などからもこれらの腕は力士1-1のものである可能性が高い。

第3節 動物埴輪（図4-52～4-91）

東造出の動物埴輪は、四足動物（馬形埴輪、牛形埴輪、猪形埴輪、犬形埴輪）と鳥（翼をひろげた鳥形埴輪、水鳥形埴輪）が出土している。

馬形埴輪1-1（図4-52～56）は、基壇テラスから転落した状態で出土したが、本来は東造出上の樹立と推測している。欠損部が多いものの、たてがみから背中、尻尾、頬、脚部1本などの部位が出土し、西造出の馬形埴輪とほぼ同形のものだと推察できる。注目すべき点は、右側面の障泥に水平方向に取り付けられた粘土板で、これは横座り用の短冊形水平板と考えられる。左側面に

は輪鍔が取り付けられる。たてがみは断面T字状で、側面には線刻が施される。頭部は板状の形状をした側面のみ残存する。体部内面下部には補強突帯が貼り付けられる。脚端部は八字状に開く形態である。帯や障泥は2条一括沈線・2点一括刺突文、鞍は凹形浮文・竹管文が施される。

牛形埴輪 1-1 (図 4-57～62) は、脚部を欠損するもののほぼ全身がわかる個体である。頭部に3箇所の穴があり、目・耳・角に相当すると考えられる。角がある動物埴輪には鹿も存在するが、短く太い首、少し盛り上がる背中など全身のプロポーションから牛と判断した。差込式の耳と角が出土し、外側前方へのびる角の形状や平らな顔なども牛の特徴を捉えているといえる。

猪形埴輪 1-1 (図 4-63・64) は、たてがみの剥離痕跡が残り、馬または猪が候補にあげられる。両頬の口部分に牙の表現の可能性がある痕跡が認められるため猪と判断した。ただし、牙の痕跡が不明瞭で、また、頬から下あご部分に馬形埴輪と同じように粘土板を貼り付けた痕跡があることなどから、馬形埴輪の可能性も残る。鼻部分は犬形埴輪同様に平らに作り出されている。

犬形埴輪 1-1 (図 4-65・66) は、猪形埴輪と同様に鼻部分を平らに製作している。背中部分が残存していないため、猪形埴輪である可能性も残る。ただし、猪形埴輪に比べて頭部がスリムで首が立つことから犬形埴輪の可能性が高いと判断している。脚端部は馬形埴輪と違って、突帯を貼り付けている。牛、猪形埴輪とは違って明褐色の胎土をしている。

牛、猪は4本、犬は2本の脚部が欠損している状態であるが、この他に四足動物の脚部が出土している。いずれも端部に突帯状の粘土を貼り付けており、内面の観察から、切開再接合技法により製作されている。このうち図 4-67-7 は胎土から犬形埴輪である可能性が高い。牛、猪形埴輪は胎土が似ていることから、その他の脚部 (図 4-67-4～6) についてはどちらに属するかは判断できない。この他、四足動物の破片として、耳の破片 (図 4-67-1)、耳と角の穴の可能性がある破片 (図 4-67-2)、牛のど袋の可能性がある破片 (図 4-67-3) などが出土している。他にも牛形埴輪の可能性のある部位が認められることから、牛形埴輪が2体存在したことが示唆される。

翼を広げた鳥形埴輪は、全国的に類例がないものである。全身を復元できたものが2羽で、いずれも同じ形態で、4段の円筒台部上にある。翼を広げた鳥形埴輪 1-1 (図 4-68～74) は、左羽以外は全体が残存している個体である。頭部・体部上面と頭部側面、体部側面、羽・尾羽側面に小孔があげられる。体部前面と後面にはスカシ孔がある。羽の下面には補強突帯を3条貼り付けている。翼を広げた鳥形埴輪 1-2 (図 4-75～82) は全体の残存状況はよくないが、体部前面と後面以外に側面にもやや大きめのスカシ孔があげられている。また、羽の下面に2条の補強突帯が貼り付けられるほか、羽の上面から体部上面にかけて補強突帯の痕跡を残す。

この他に翼を広げた鳥形埴輪 1-1・1-2 とは異なる頭部 (図 4-83-1)、体下半部 (図 4-83-2)、体部上面から羽部 (図 4-83-3)、尾羽 (図 4-83-4)、羽 (図 4-84-5～7) などの破片が出土している。これらの中には胎土の違うものがあり、1個体ではなく2～3個体の破片が含まれると推測できる。つまり、東造出では計4個体以上の翼を広げた鳥形埴輪が出土していることになる。

水鳥形埴輪は、同形態のものが3羽出土した (図 4-85～91)。1-1・1-2 はほぼ全体を復元でき、1-3 は頭部、尾羽、円筒台部が出土している。長い首、細長く丸いくちばし、水平に取り付く尾羽で、脚の表現はない。目は竹管文で施され、貫通していない。翼の部分は粘土を貼り付けて段差を作って表現する。埴輪で確認できる種類で考えれば、白鳥やカモなどとはくちばしの形態が違うため、形態的にはツルやサギ類がモデルと推定できる。ただし、体部の形態が水平を保ち、ツルなどが立っているというより、白鳥などが水に浮かんでいる形態に近いともいえる。したがって、ツルやサギ類を想定したいが、実際の鳥を忠実にモデルにしたかは疑問が残る点である。

第4節 器財埴輪 (図4-92～102)

東遺出から出土した器財埴輪は、大刀、鞆、蓋形埴輪がある。盾形埴輪は確認できなかった。

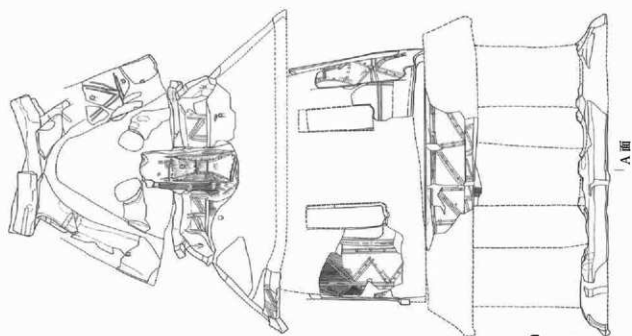
大刀形埴輪は、各部位が出土し、ほぼ1個体分を確認できるが、文様の施文方法や工具が異なるものが含まれるため、2個体以上あった可能性がある。護拳部(図4-93-3)は、断面台形状の貼り付けが2箇所あり、両辺を2条一括沈線と1点刺突文で施文する。沈線による区画内部の刺突文は外側の刺突文とは違う小さい工具で2点一括刺突文を施す。柄頭部分(図4-93-1)は、2点一括刺突文と2条沈線で外周を施文し、内部は細い沈線で施文する。護拳部が剥離した部分に多数の沈線状のキズが付けられている。鞘口(柄口)部(図4-93-2)は、2条一括沈線による縦方向と斜め方向の線刻が施され、一部に護拳部が剥離したと推測できる箇所が残り、柄頭部と同様に沈線状のキズが付けられる。鞘部(図4-93-4)は、縦方向の2条の沈線と3点一括刺突文、4条の×形の文様が施される。3点一括刺突文は、大刀形埴輪と考えられる個体ではこの部材にだけ施される。鞘部両側面に取り付く盾部(図4-92-6・7)が2つ出土し、大きさや文様構成などは類似して同一個体の可能性があるが、若干胎土が異なるように見えるので別個体の可能性も残る。外周は2条一括沈線と1点刺突文で施文し、中央には斜め上方から小孔があげられる。盾部に使用された工具は、鞘部や柄部の工具とは違ってやや太いものである。鞘部と円筒台部の部位(図4-93-5)には盾部が剥離した痕跡が残り、施文工具も盾部のものに類似する。

鞆形埴輪1-1(図4-92-8)は、左上方部の破片が確認できる。外周は2条一括沈線と2点一括刺突文で施文し、内部は直弧文風の文様になっている。裏面には円筒部から続く補強突帯が残存する。この他には、鞆・大刀とは区別できない破片(図4-92-9～13)が複数出土している。形態、文様構成とも似ており区別は難しいが、大刀形埴輪の盾部と鞆形埴輪は外周の施文が1点刺突文と2点刺突文で異なっており、1点のものは大刀形、2点のものは鞆形の可能性が高い。

蓋形埴輪の立飾部は、施文方法や胎土などから2種類に分けることができる。1つは3条一括沈線を用いて、胎土は明褐色である(図4-94・95)。もう一方は、1条ずつ沈線を施すもので、外周は2条帯、内部は3～4条帯で構成される。黄褐色の胎土で、ハケ目を残すものが多く、やや幅広である(図4-96～101)。蓋形埴輪の笠部(図4-102)は、軸受部の口縁部に突帯を貼り付けている。突帯を貼り付けていない口縁もあるが、蓋形埴輪以外の形象埴輪基部の可能性も残る。

第5節 不明形象埴輪・形象埴輪基部 (図4-103)

図4-103-1・2は弧状を描く板状の個体で、弧状の沈線が施される。力士形埴輪のまげ部分の可能性もある。図4-103-3～6は、大刀形埴輪や鞆形埴輪に比べ薄く、器財埴輪ではなく、人物の服や馬形埴輪の障泥などが考えられる。図4-103-7は人物埴輪のかかと部分もしくは鳥形埴輪の首、図4-103-8は巫女などのスカート部分などが想定できるが、いずれも確定的な根拠はない。図4-103-9～12は、円板状になった埴輪片で、周囲が削られて円形を呈する。非人為的に円板状になっただけかもしれない。図4-103-13・14は鈴で、馬形埴輪1-1に取り付く鈴に比べてかなり小形で、人物埴輪または小形の馬形埴輪の部品であろう。図4-103-15～17は形象埴輪の基部で、17は器財埴輪もしくは人物埴輪の基部である可能性がある。



40 cm
(S=1/8)

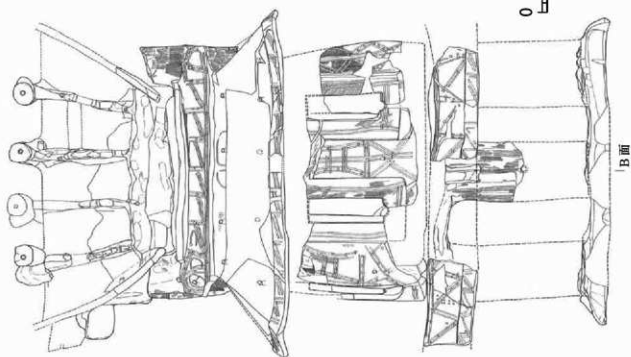
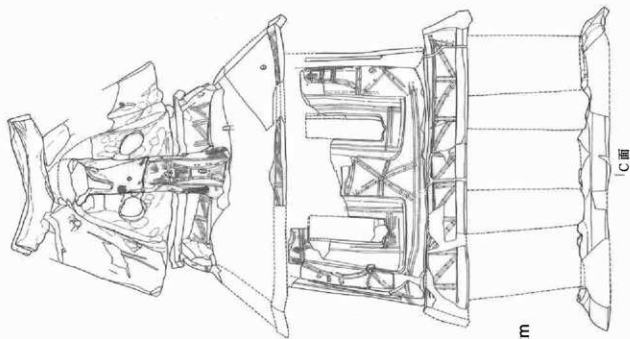


图 4-1 東造出 家形埴輪 1-1 全体①(S=1/8)



40 cm
 (S=1/8)

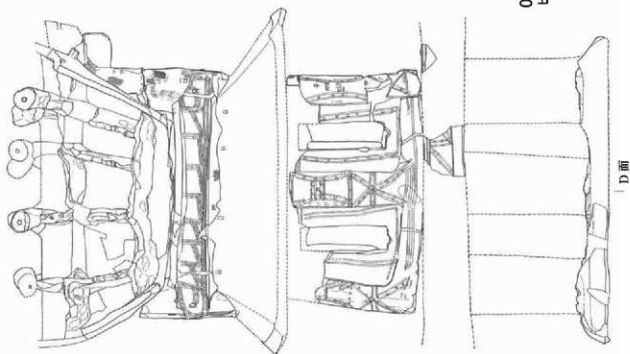


图4-2 東造出 家形埴輪 1-1 全体②(S=1/8)

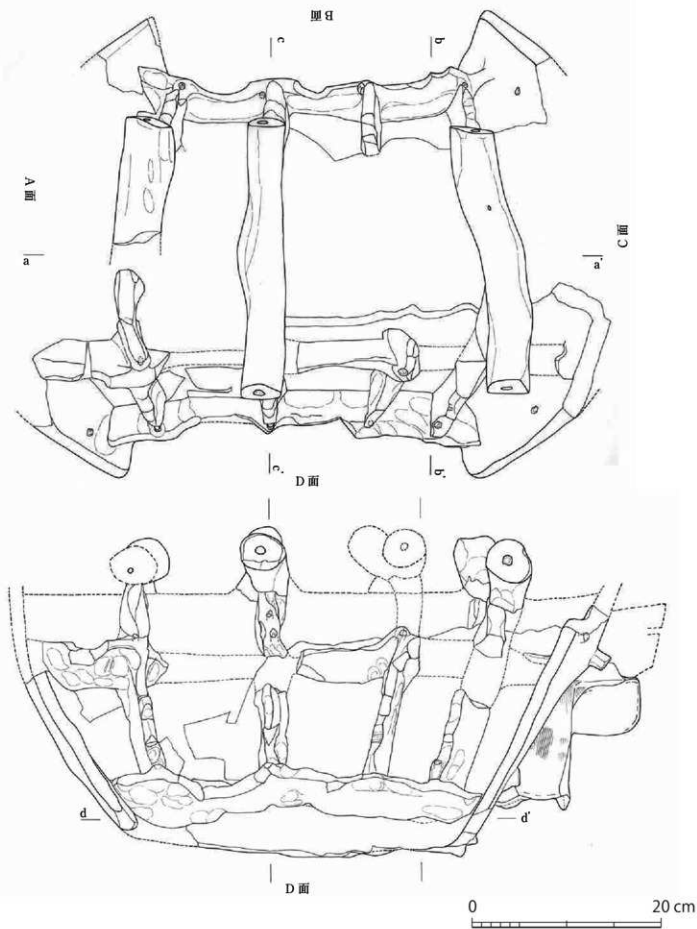
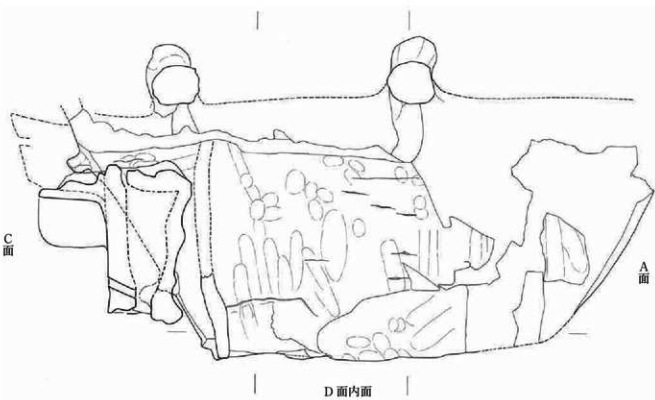
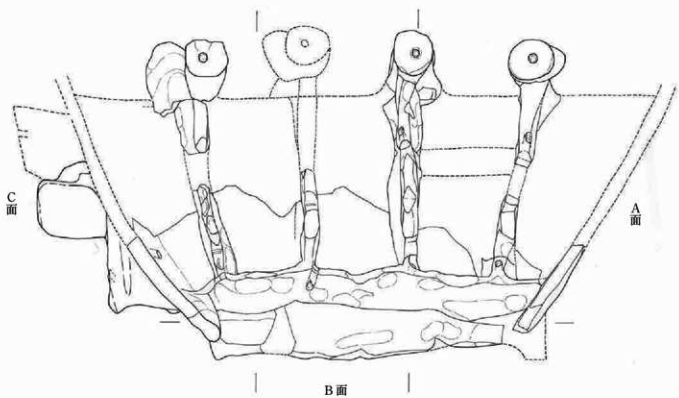


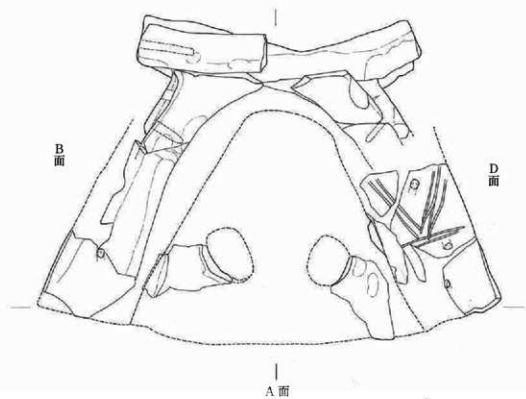
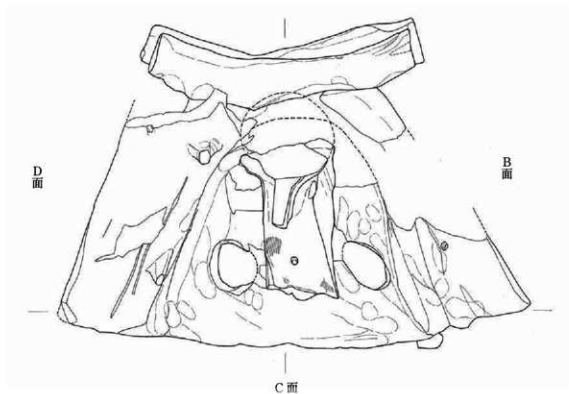
图 4-3 東造出 家形埴輪 1-1 上屋根 (切妻部) ①



0 20 cm

(S=1/4)

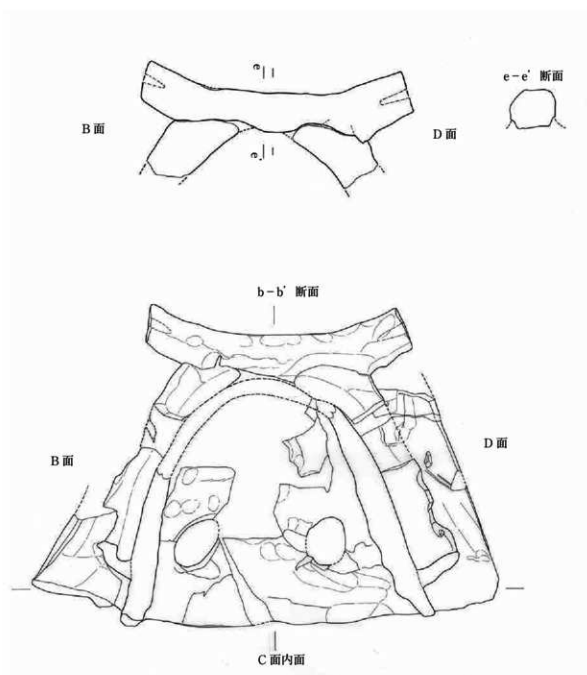
图4-4 東造出 家形埴輪1-1 上屋根(切妻部)②



0 20 cm

(S=1/4)

图 4-5 東造出 家形埴輪 1-1 上屋根 (切妻部)③



0 20 cm
 (S=1/4)

图 4-6 東造出 家形埴輪 1-1 上屋根 (切妻部)④

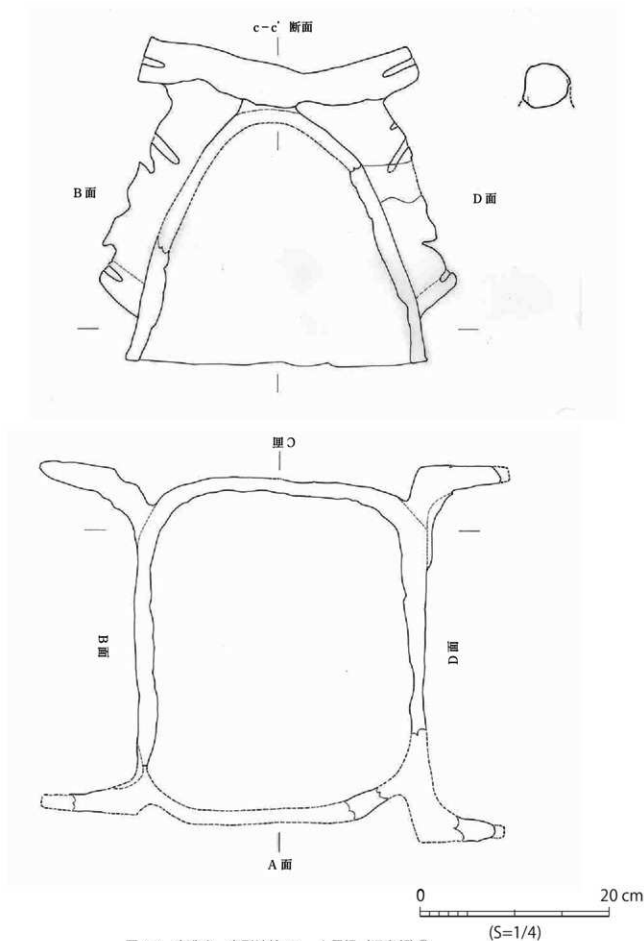


图 4-7 東造出 家形埴輪 1-1 上屋根 (切妻部) ⑤

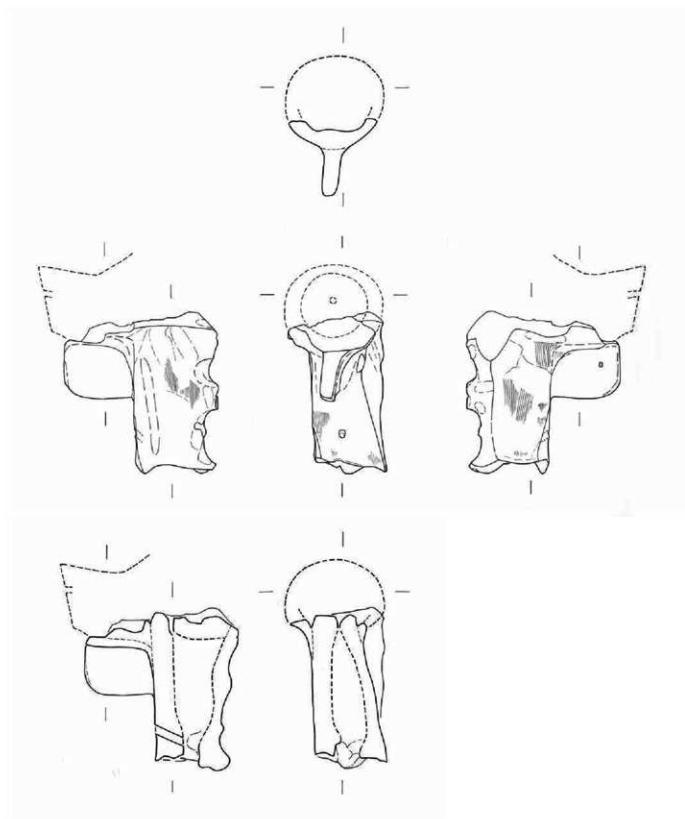


图 4-8 東造出 家形埴輪 1-1 上屋根 (切妻部)⑥

0 20 cm
(S=1/4)

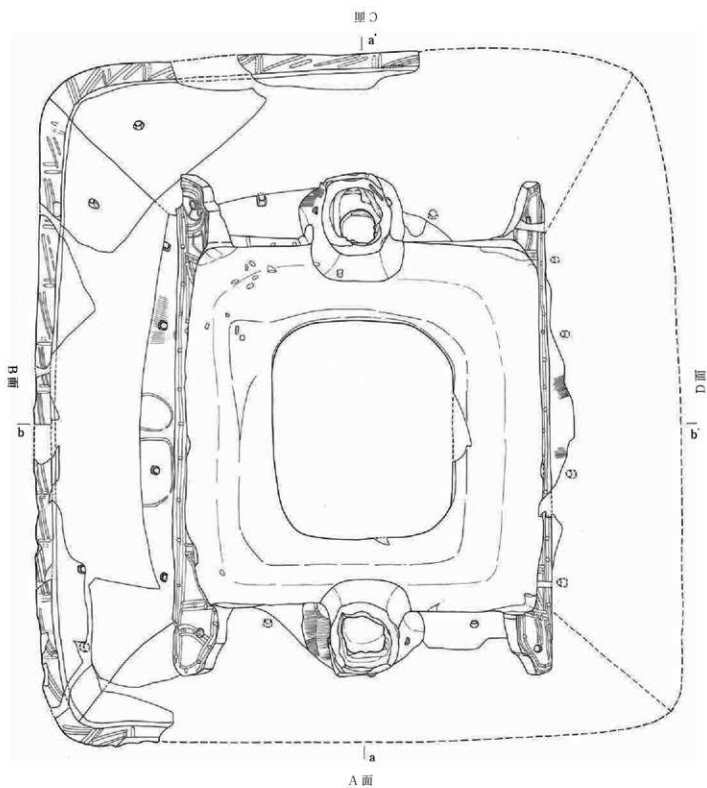


图 4-9 東造出 家形埴輪 1-1 入母屋下屋根 (寄棟部)①

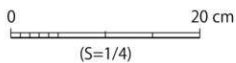
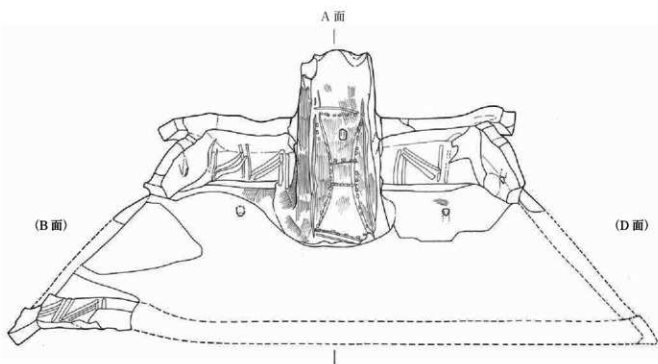
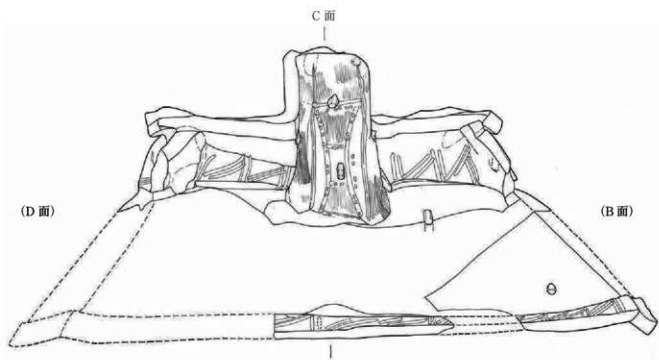


图 4-10 東造出 家形埴輪 1-1 入母屋下屋根（寄棟部）②

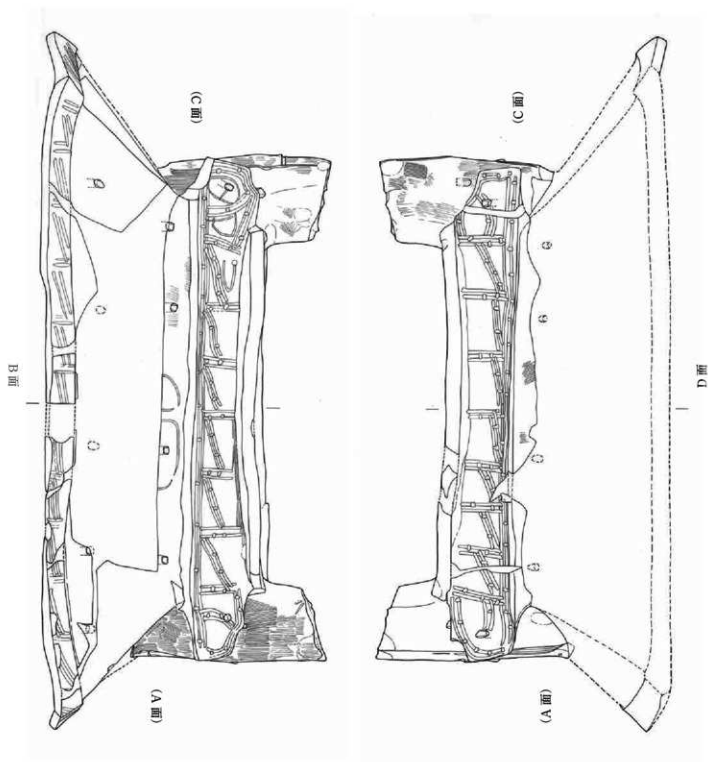


图 4-11 東造出 家形埴輪 1-1 入母屋下屋根 (寄棟部)③

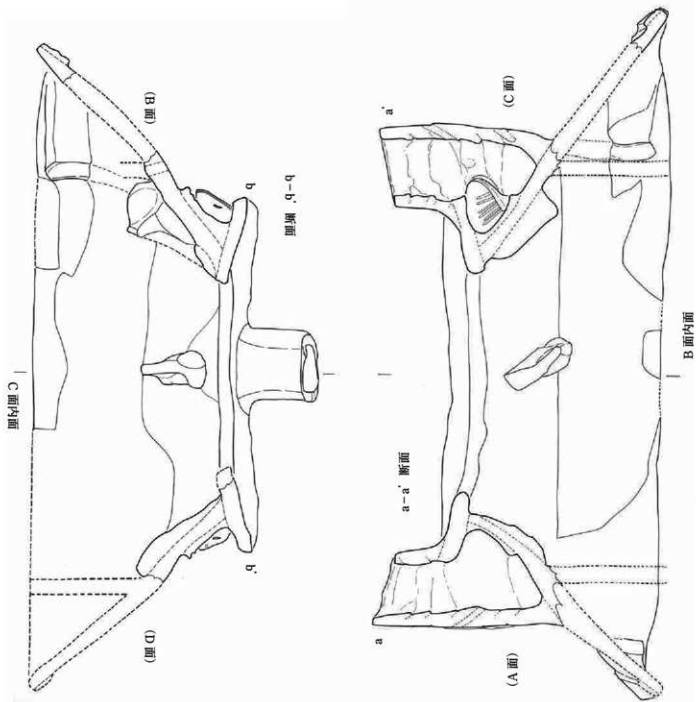


図 4-12 東造出 家形埴輪 1-1 入母屋下屋根 (寄棟部)④

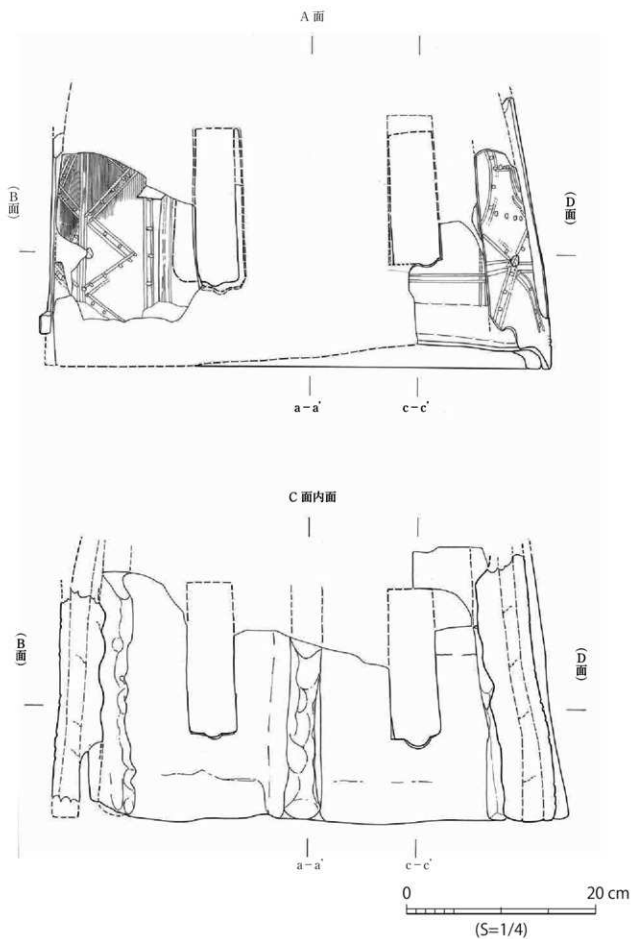


图 4-13 東造出 家形埴輪 1-1 身舍 壁①

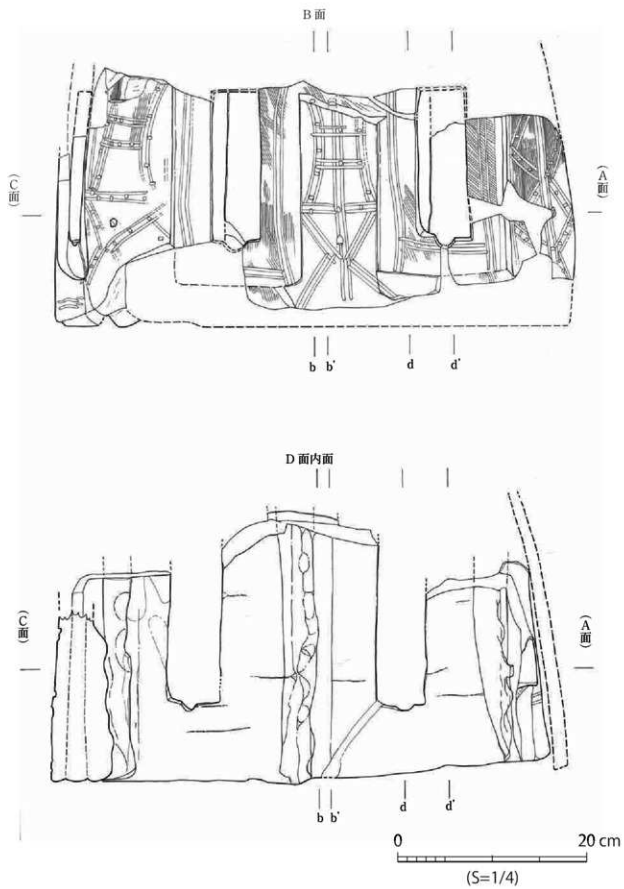


图 4-14 東造出 家形埴輪 1-1 身舎 壁②

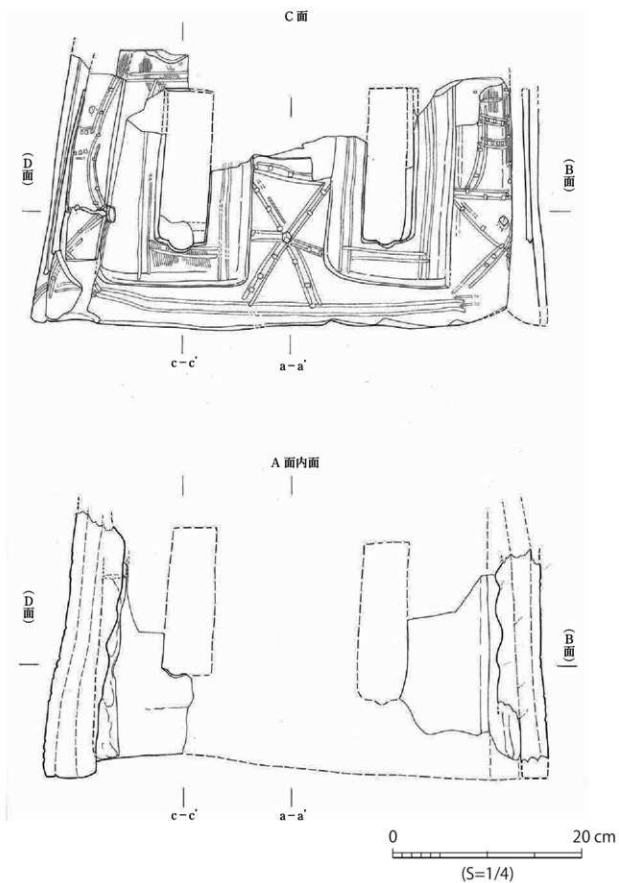


图 4-15 東造出 家形埴輪 1-1 身舍 壁③

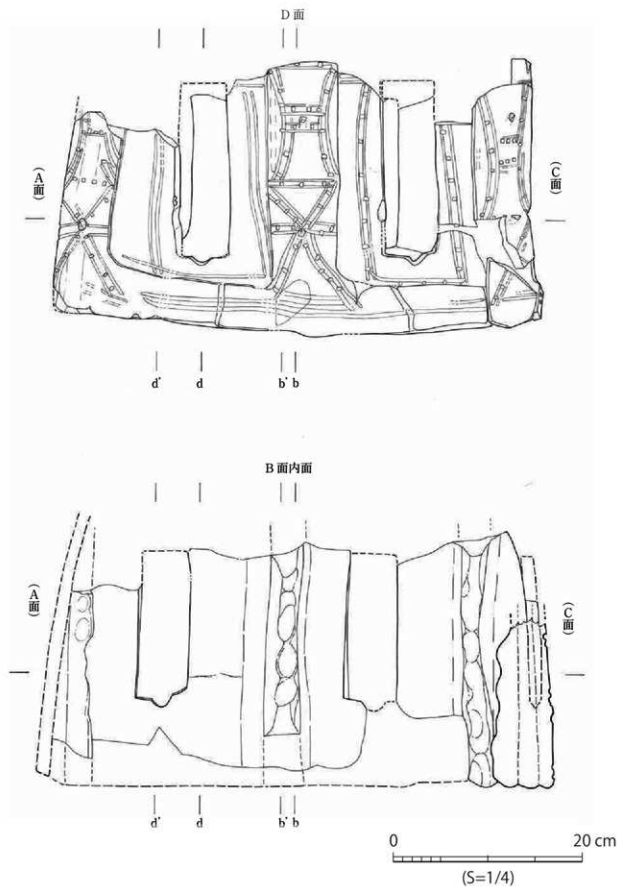


图 4-16 东晋出 家形埴輪 1-1 身舍 壁④

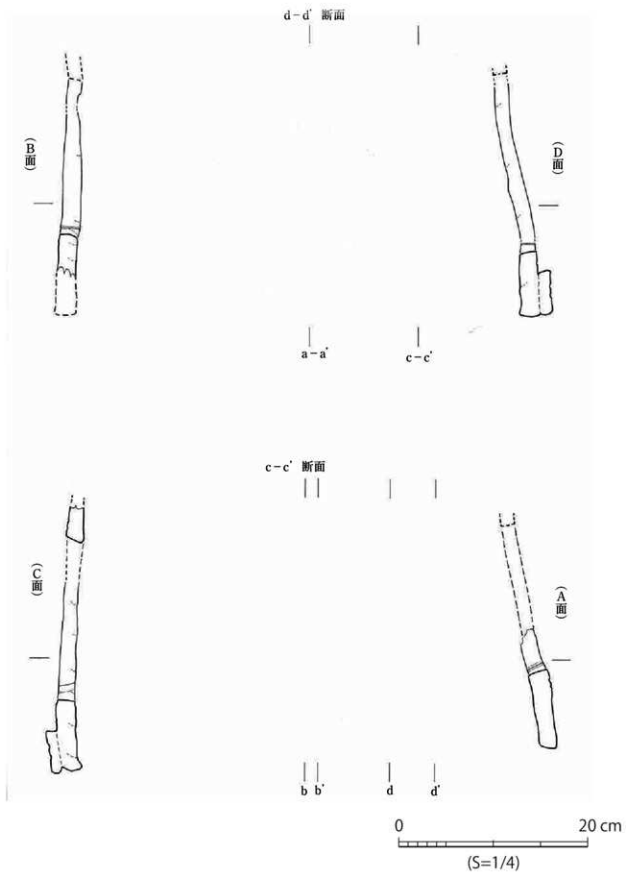


图 4-17 東造出 家形埴輪 1-1 身舍 壁⑤

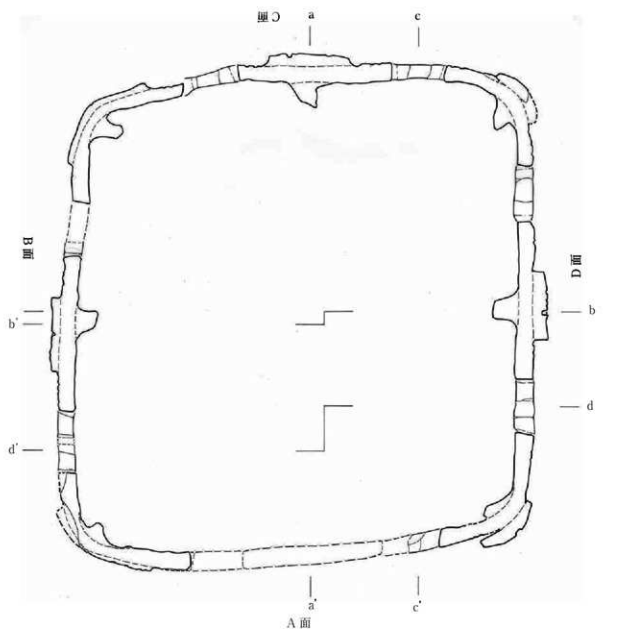


图 4-18 東造出 家形埴輪 1-1 身舍 壁⑥

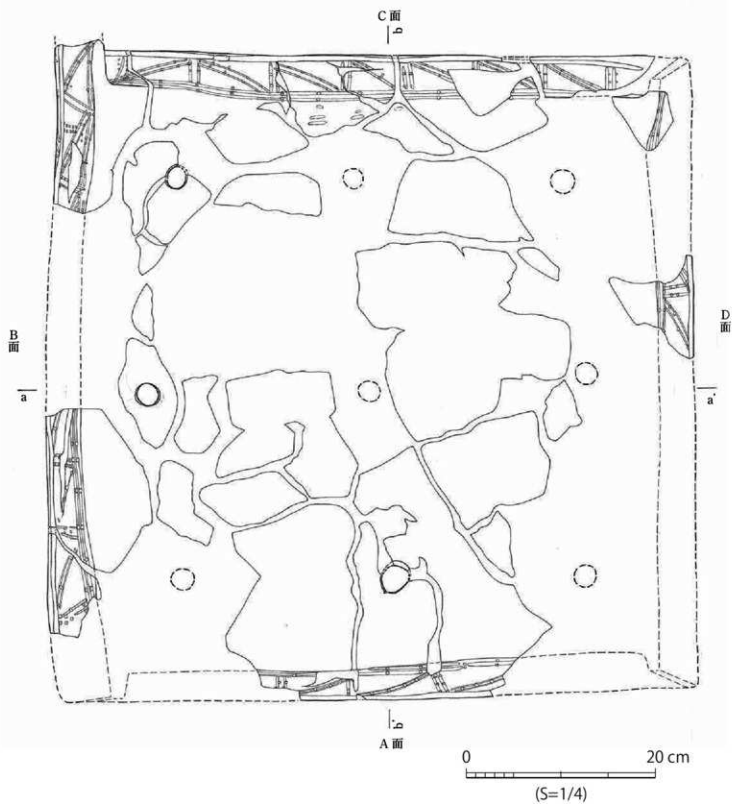


图 4-19 東造出 家形埴輪 1-1 高床部①

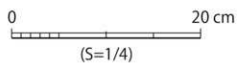
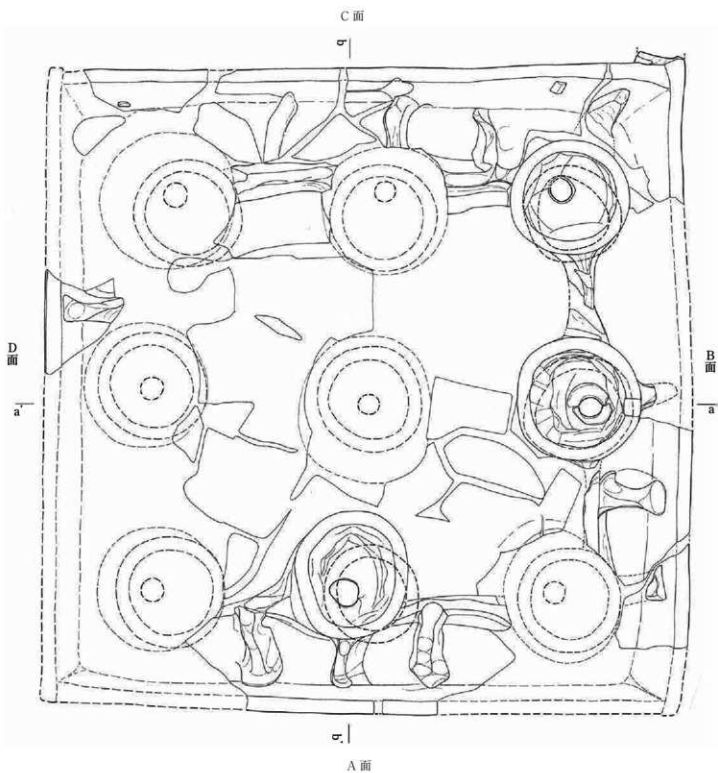
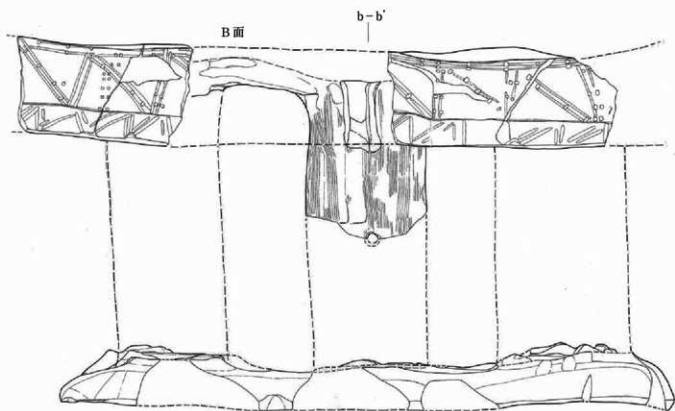


图 4-20 東造出 家形埴輪 1-1 高床部②(裏面)



0 20 cm
(S=1/4)

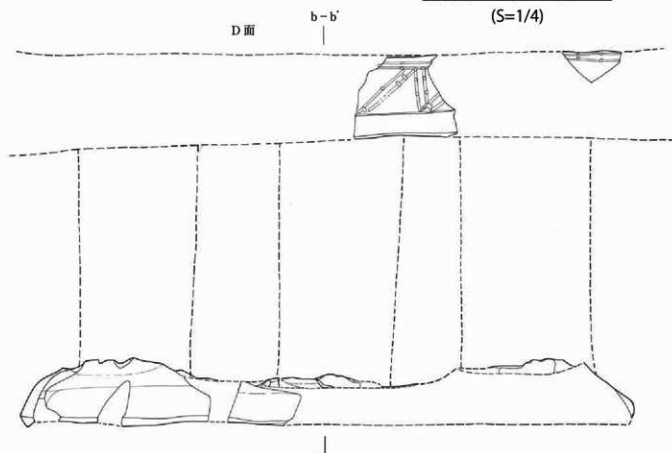
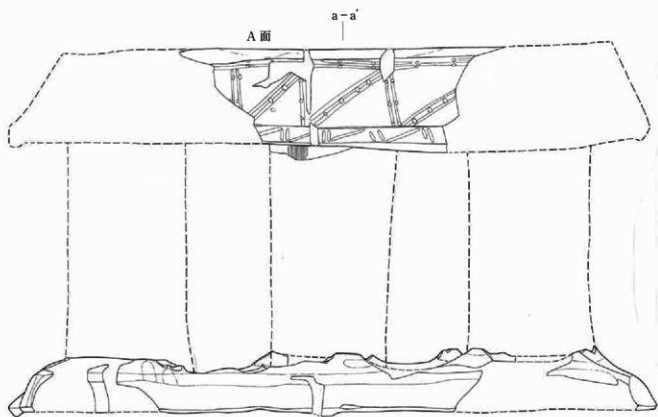


图 4-21 東造出 家形埴輪 1-1 高床部③



0 20 cm
(S=1/4)

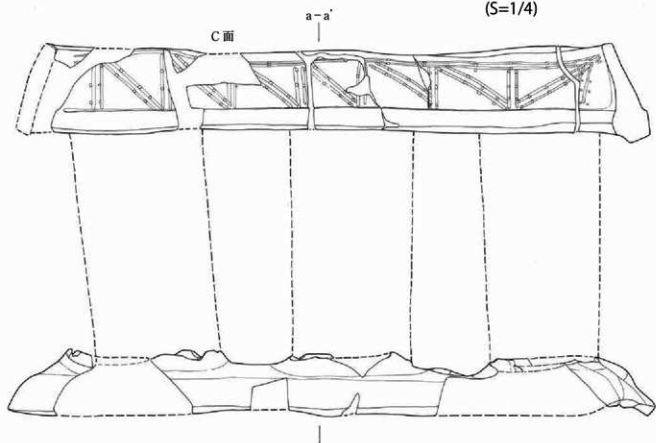


图 4-22 東造出 家形壇輪 1-1 高床部④

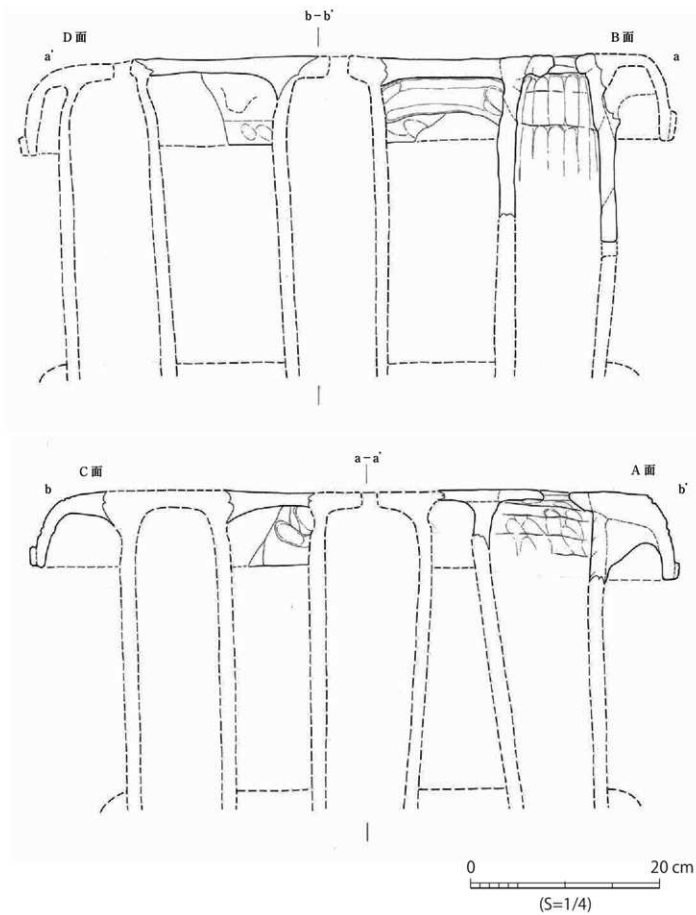


图 4-23 東造出 家形埴輪 1-1 高床部⑤(断面)

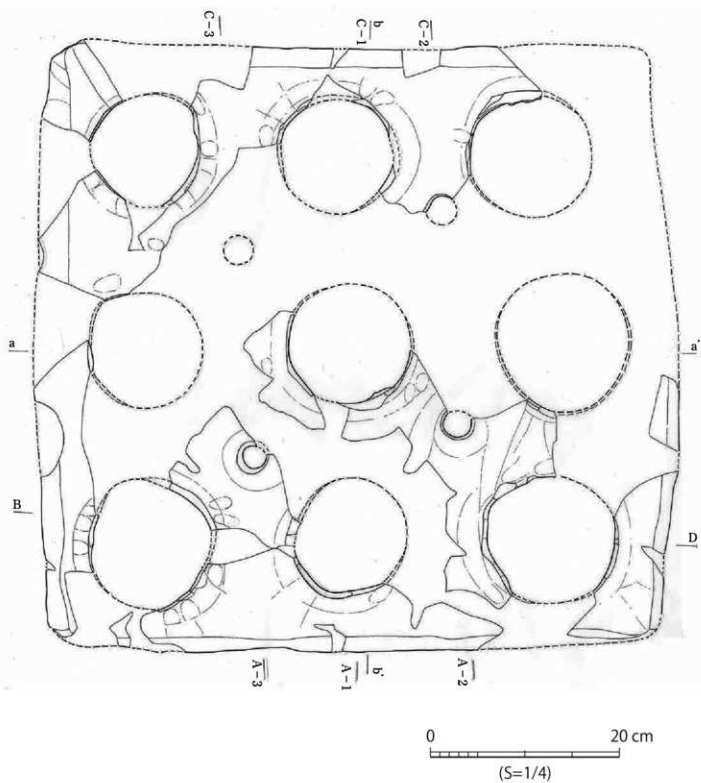


图 4-24 東造出 家形埴輪 1-1 基部①

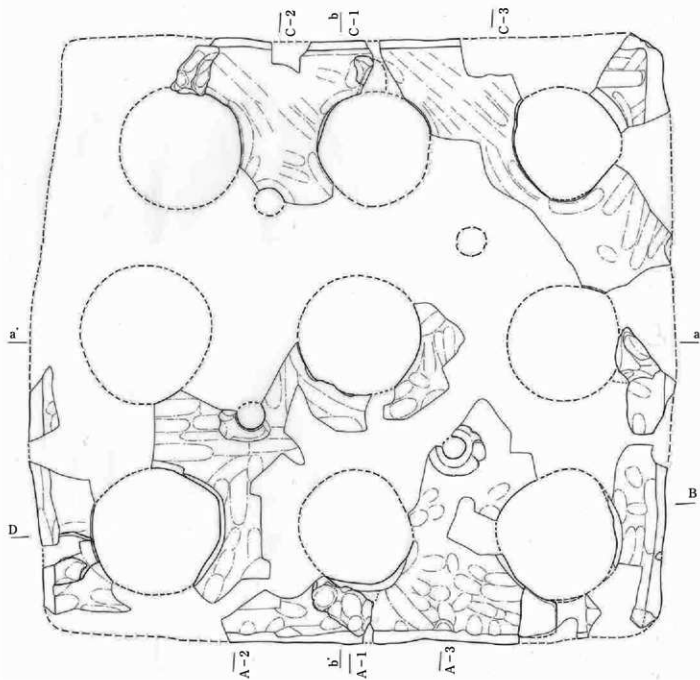


図 4-25 東造出 家形埴輪 1-1 基部②(裏面)

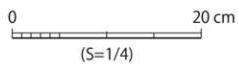
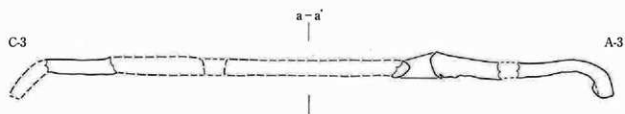
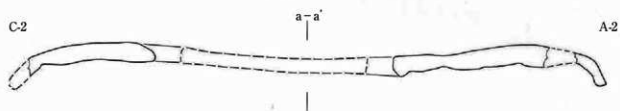
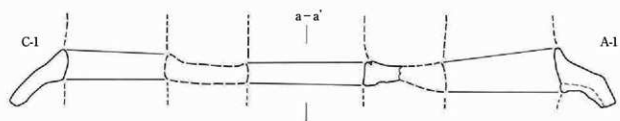
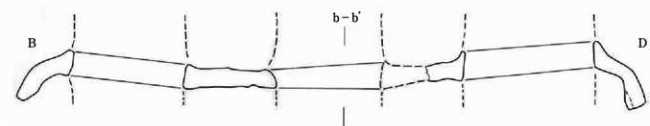


图 4-26 東造出 冢形埴輪 1-1 基部③(断面)

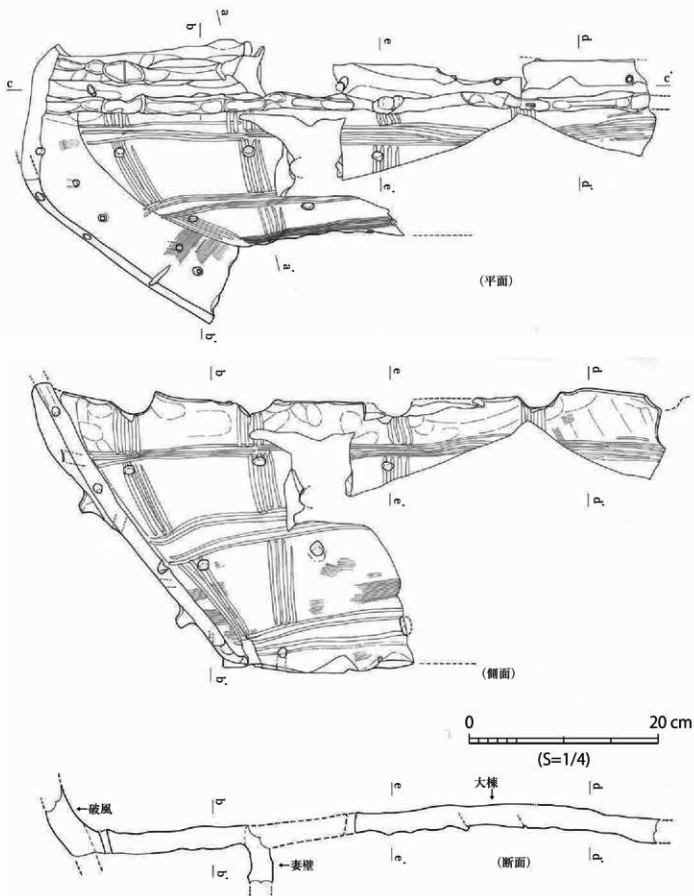


图 4-27 東造出 家形埴輪 1-2①

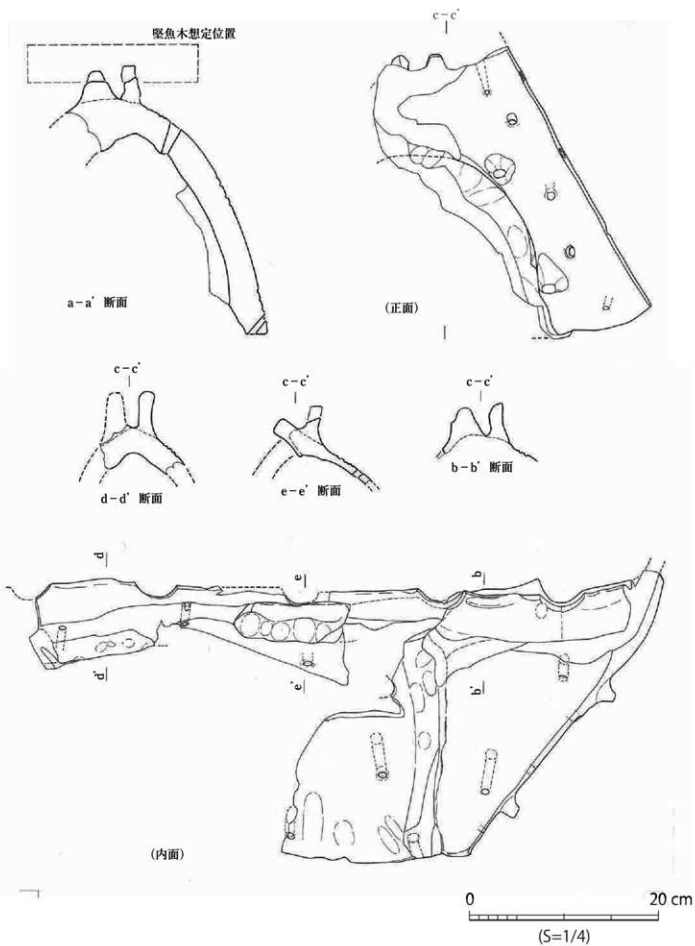


图 4-28 東造出 家形壇輪 1-2②

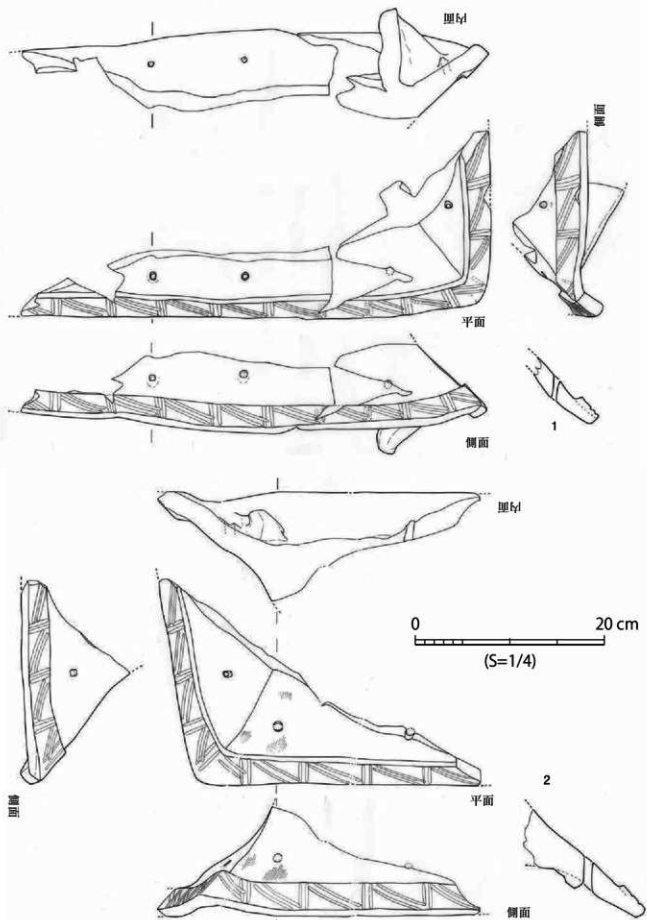


圖 4-29 東造出 家形埴輪 1-2 入母屋下屋根（寄棟部）

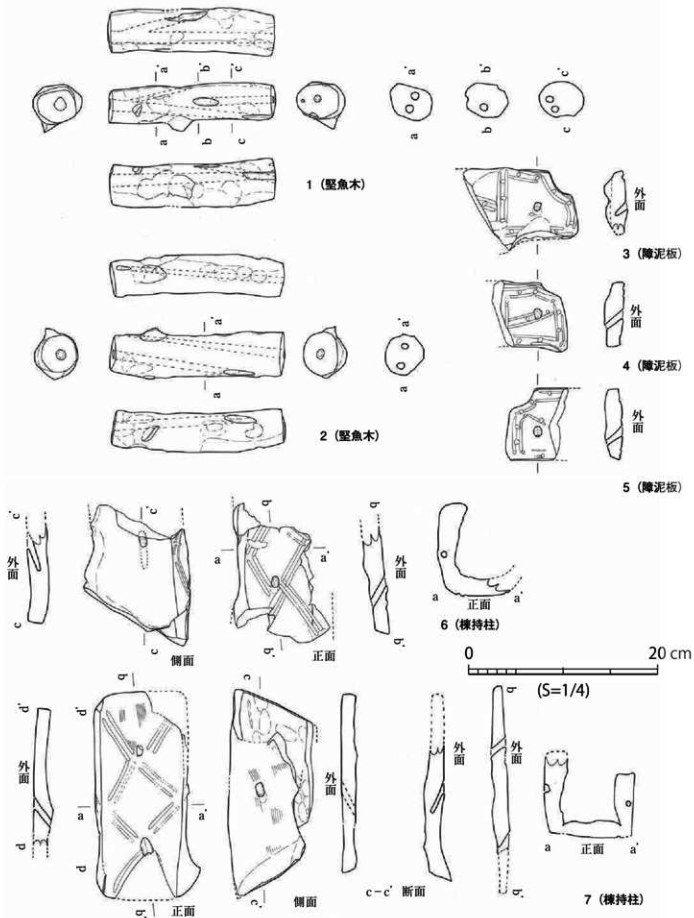


图 4-30 東造出 家形埴輪 1-2 関連部材

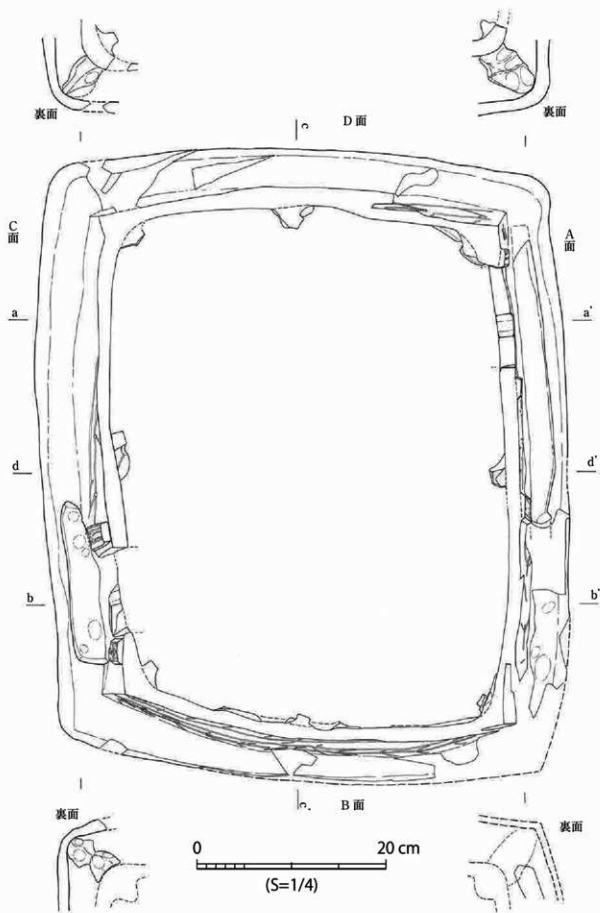


圖 4-31 東造出 家形壇輪 1-3①

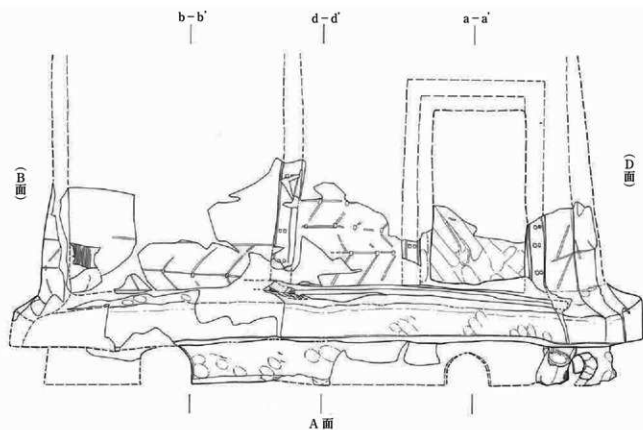
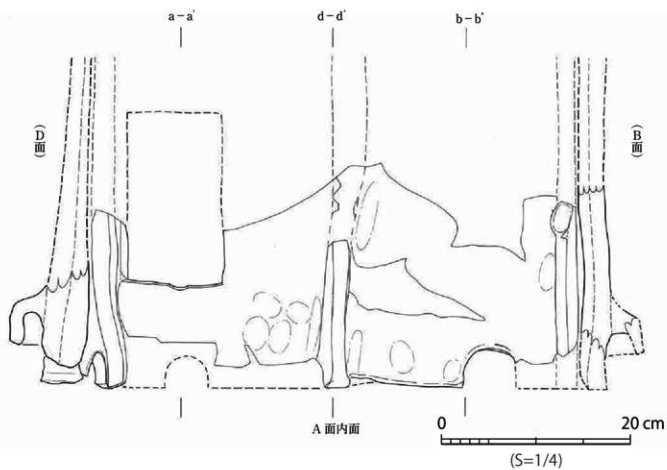


图 4-32 東造出 家形埴輪 1-3②

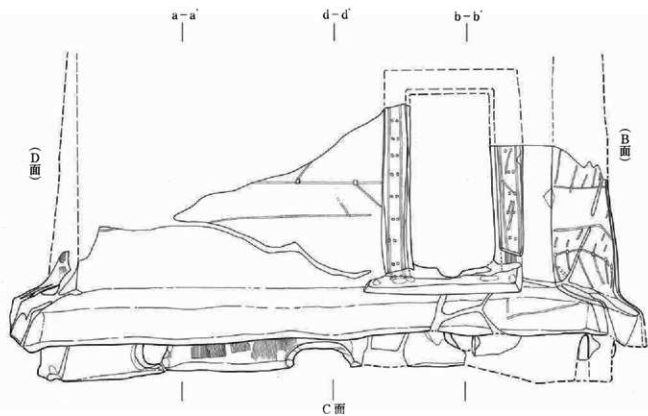
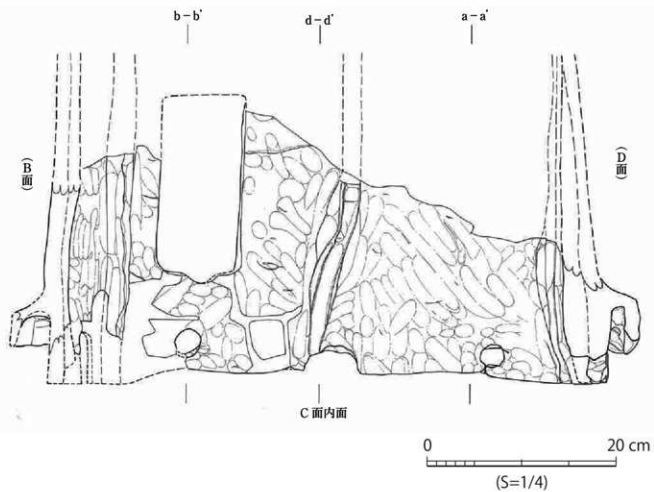


图 4-33 東造出家形埴輪 1-3③

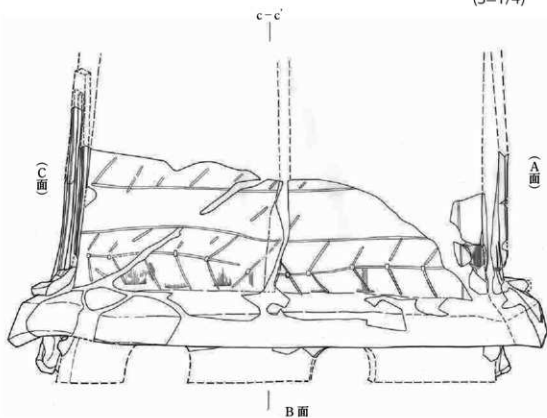
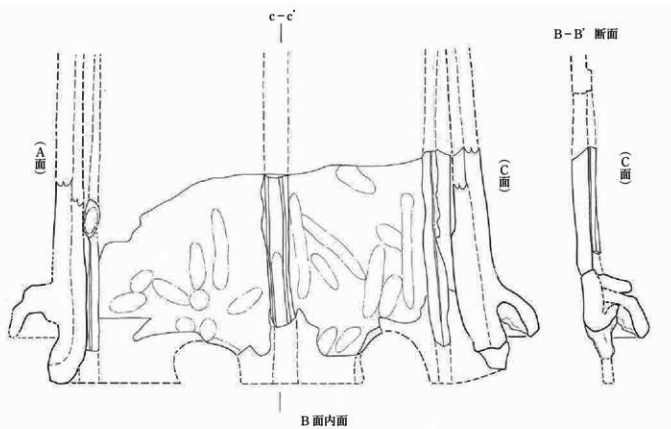


图 4-34 東造出 家形埴輪 1-3④

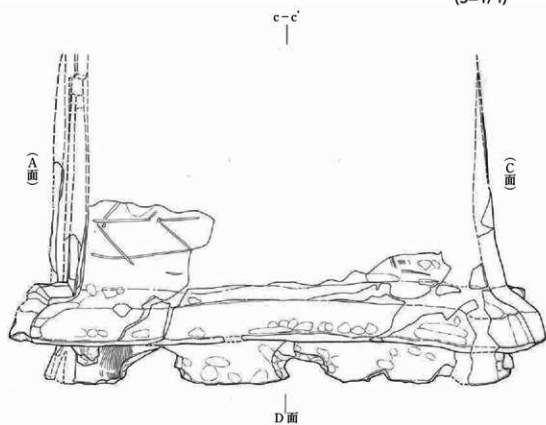
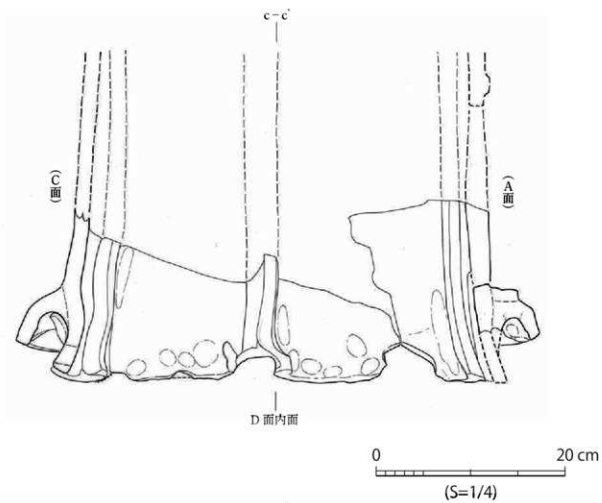


图 4-35 東遺出 家形埴輪 1-3⑤

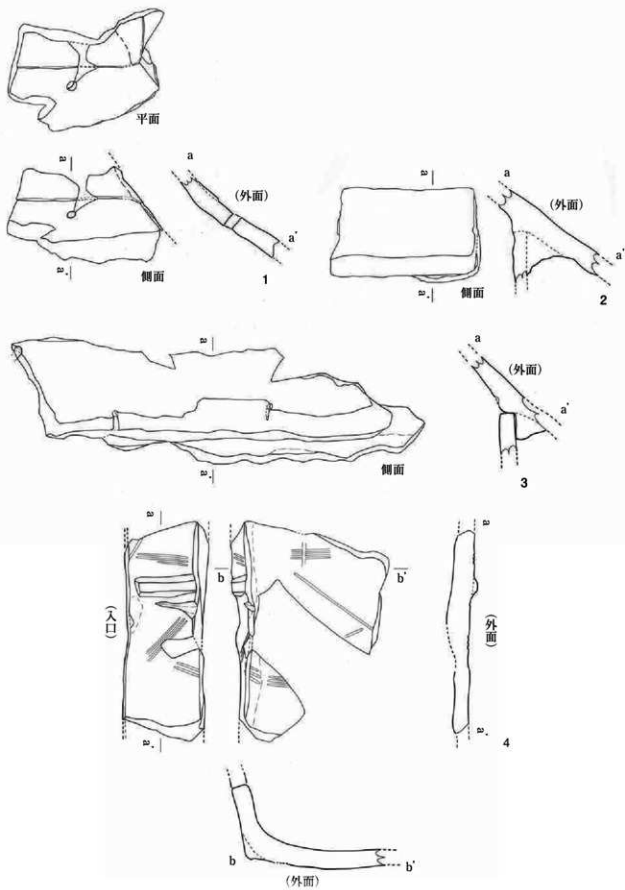


图 4-36 東造出 家形埴輪 1-4①

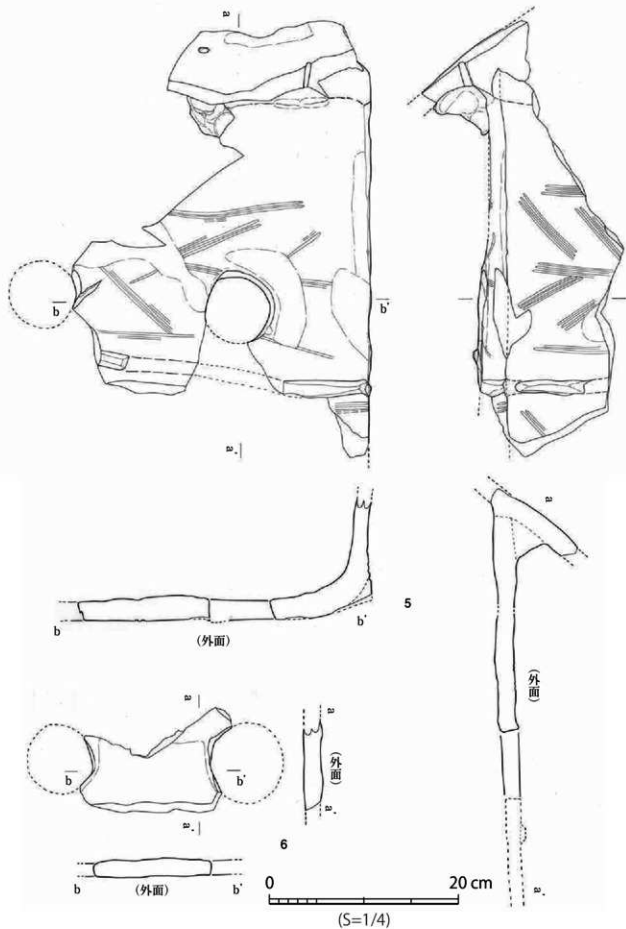


圖 4-37 東造出 家形埴輪 1-4②

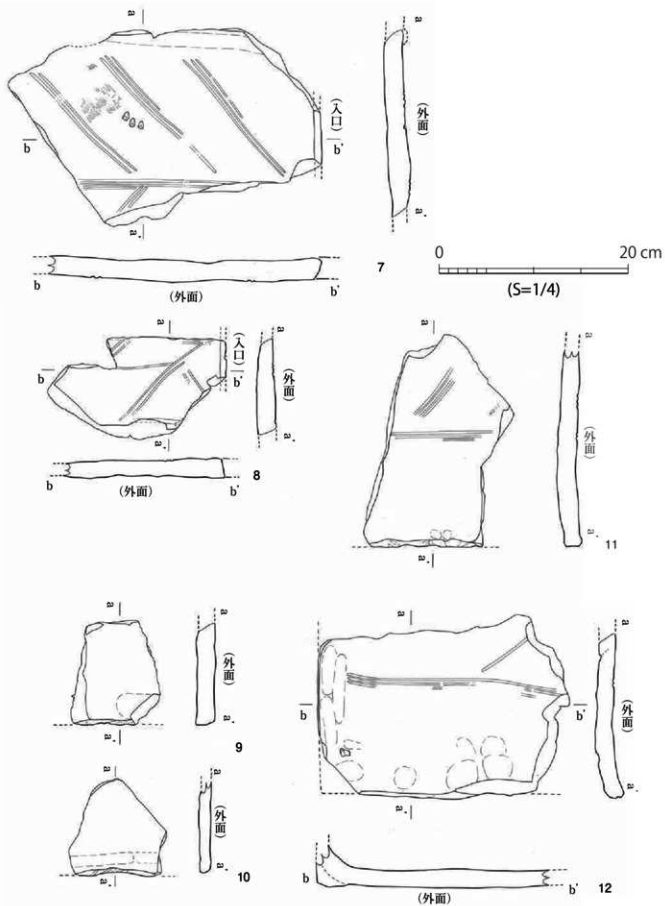


图 4-38 東造出 家形埴輪 1-4③

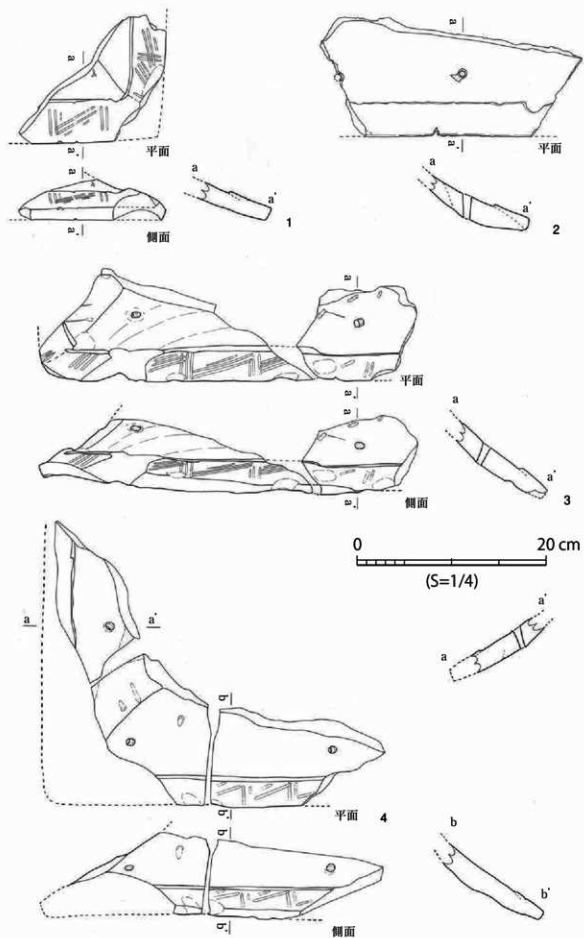
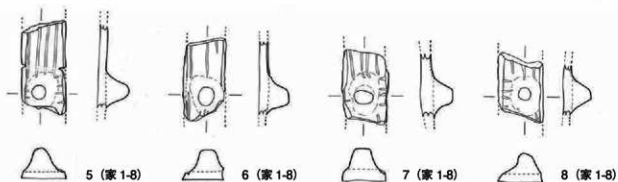
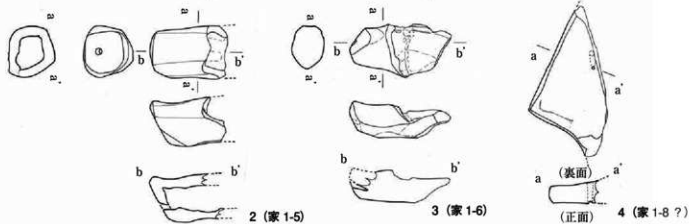
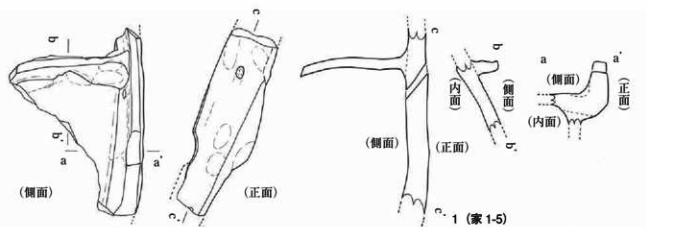


图 4-39 東造出 家形埴輪 1-7



0 20 cm

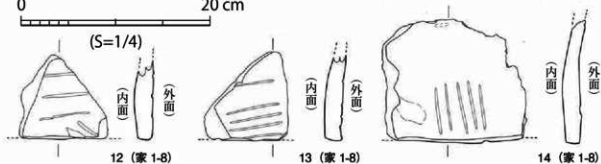


图 4-40 東造出 家形埴輪 1-5、1-6、1-8

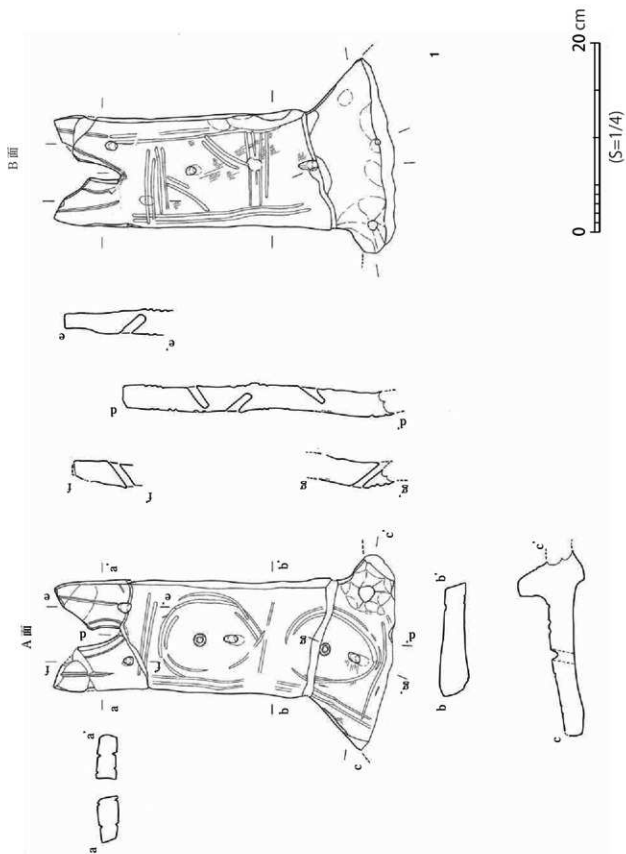


图 4-41 東造出 家形埴輪 (千木①)

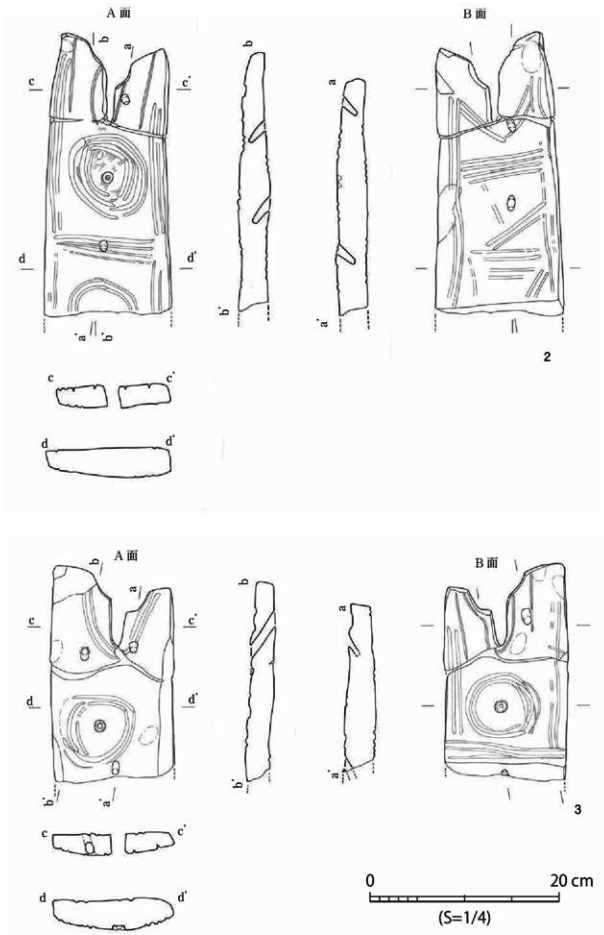


图 4-42 東造出 家形埴輪 (千木②)

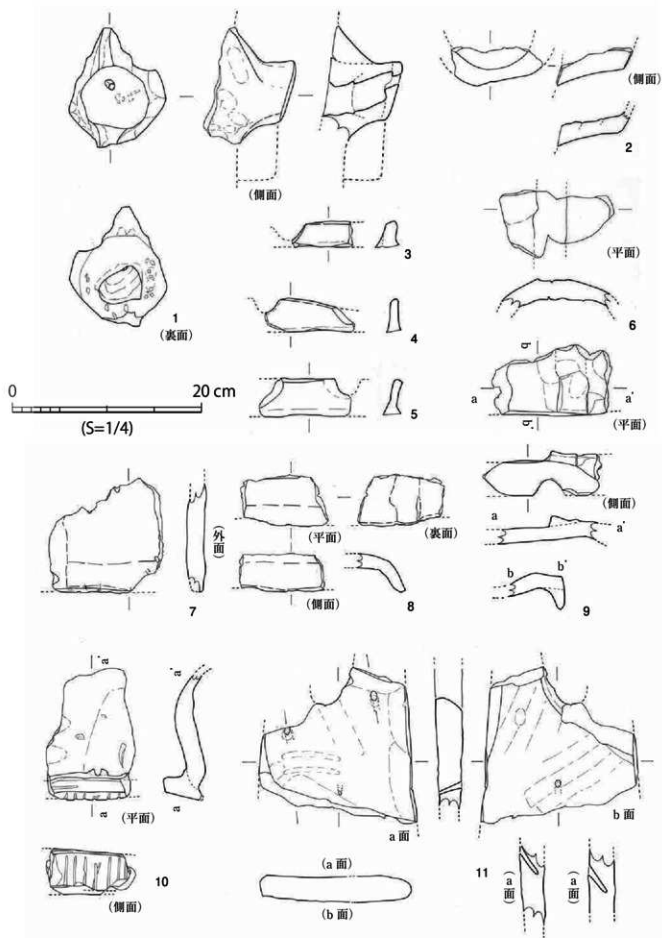


图 4-43 東遺出 家形埴輪 (各種部材)

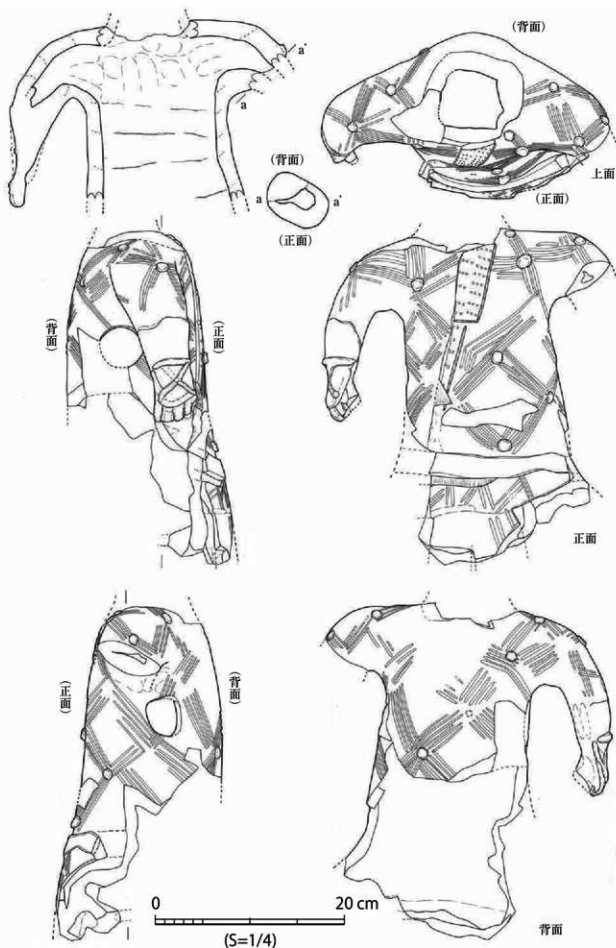


图 4-44 东遗址 人物填轮 盛装男子 1-1

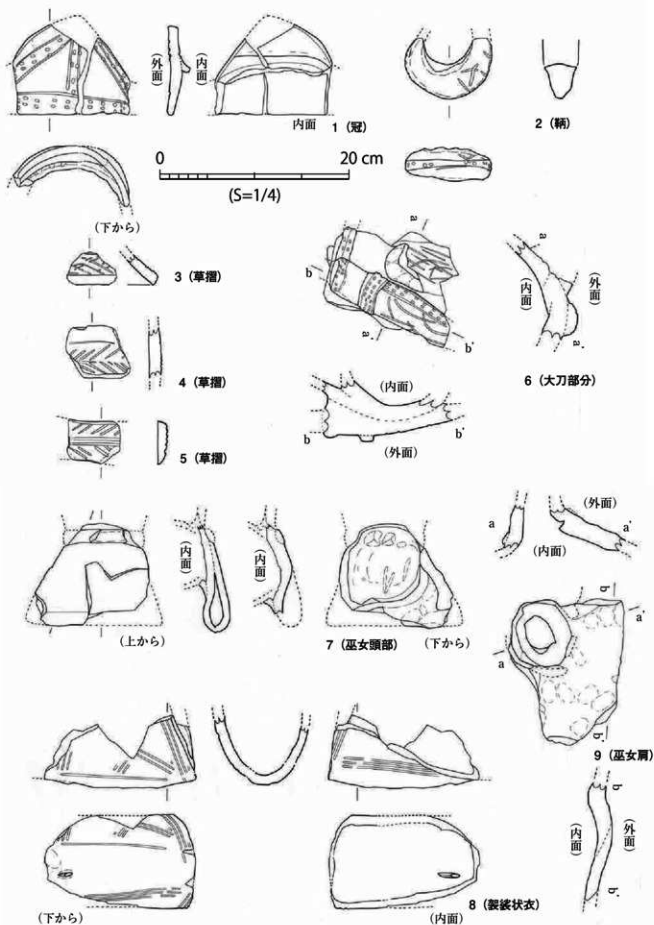


図4-45 東造出 人物埴輪 (盛装男子・巫女)

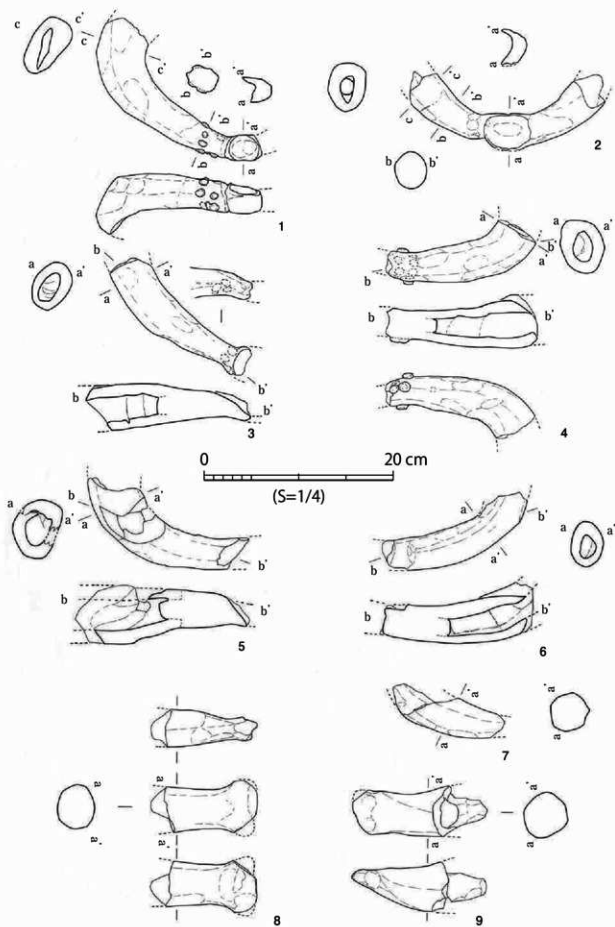


图 4-46 東造出 人物埴輪 (腕)

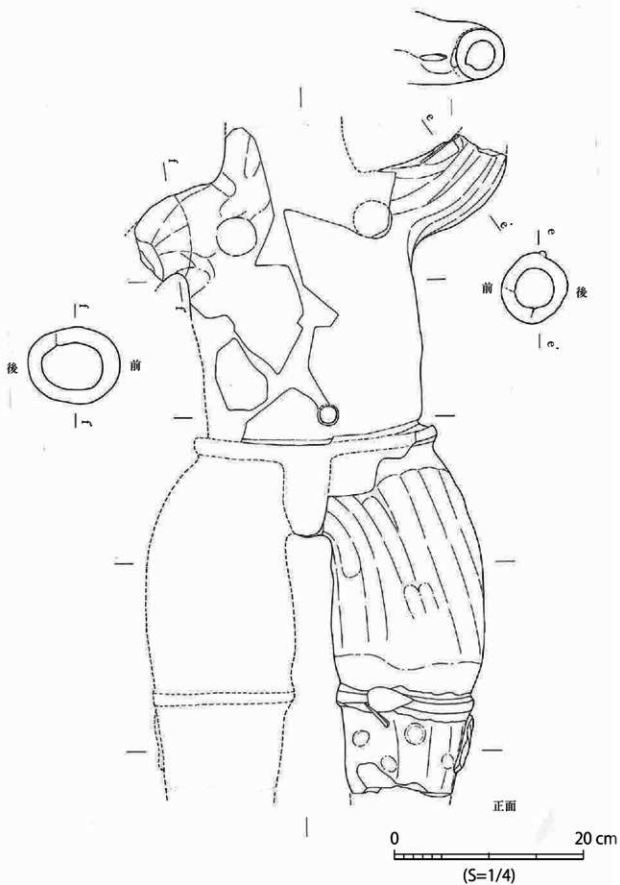


图 4-47 東進出 人物埴輪 (力士 1-1)①

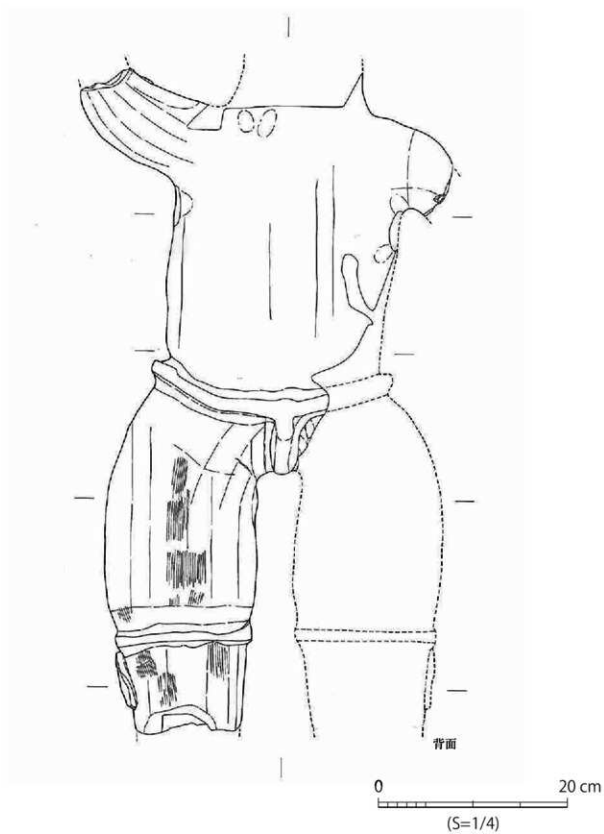


图 4-48 東造出 人物埴輪 (力士 1-1)②

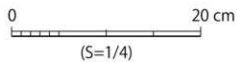
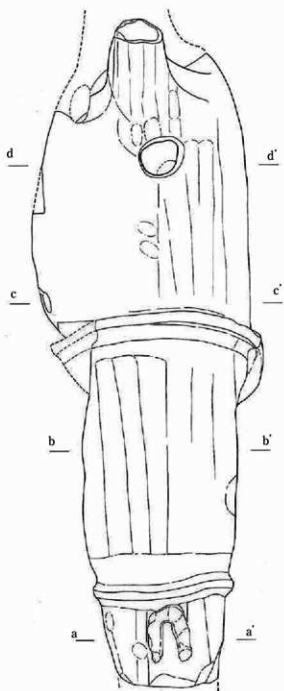
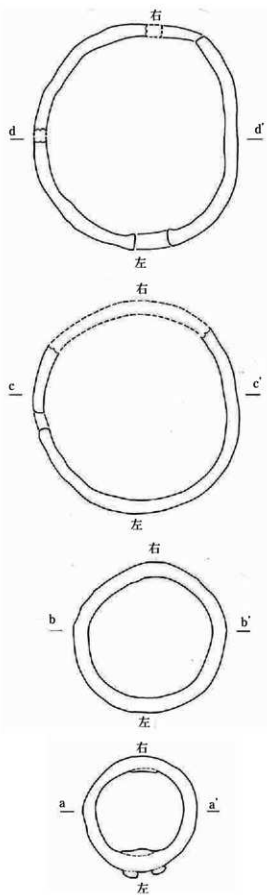
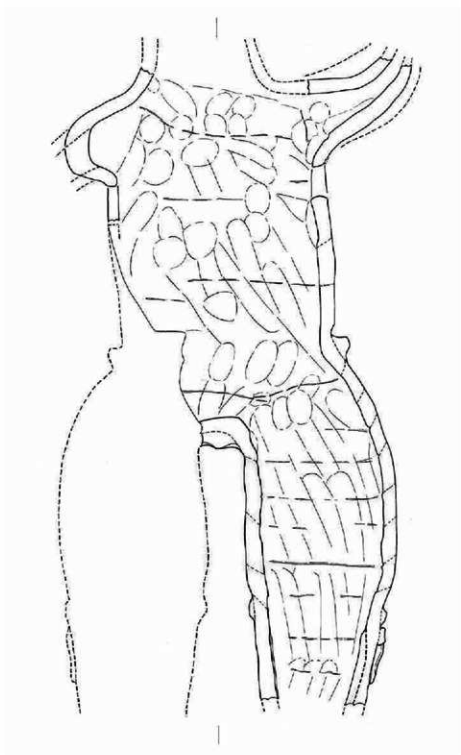


图 4-49 東造出 人物埴輪 (力士 1-1)③



0 20 cm
(S=1/4)

图 4-50 東造出 人物植輪 (力士 1-1)④

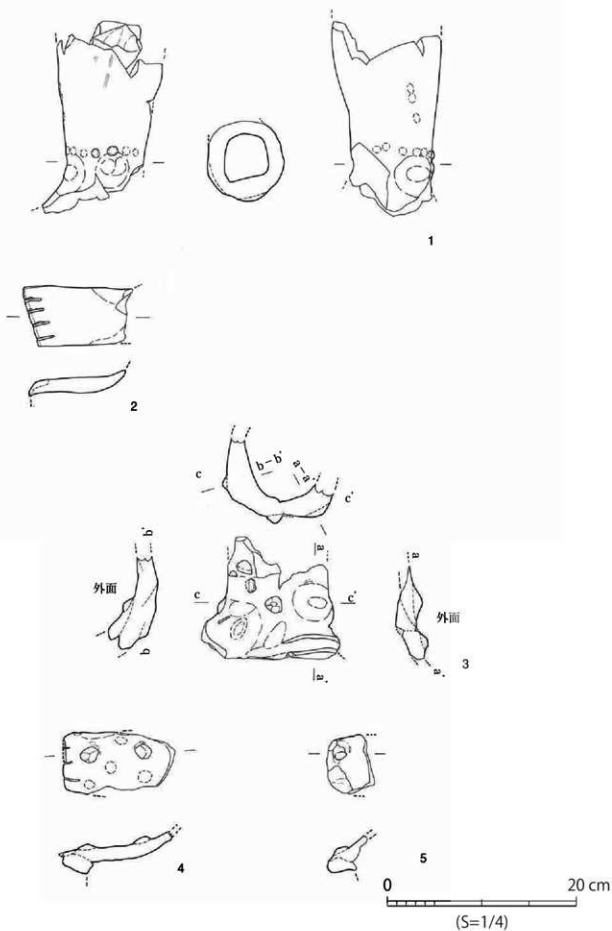


图 4-51 人物埴輪 (力士脚部)

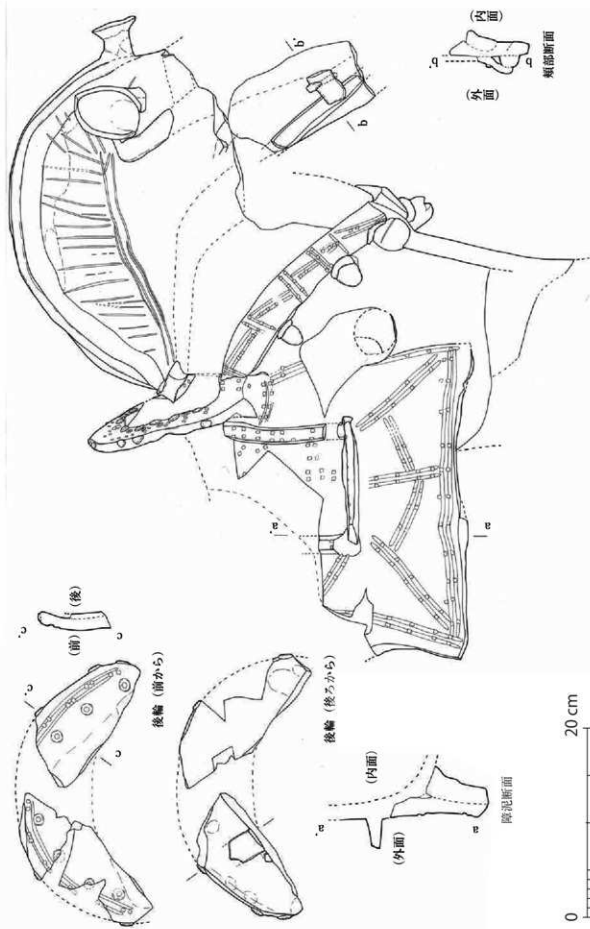


図 4-52 東造出 馬形植輪 1-1①

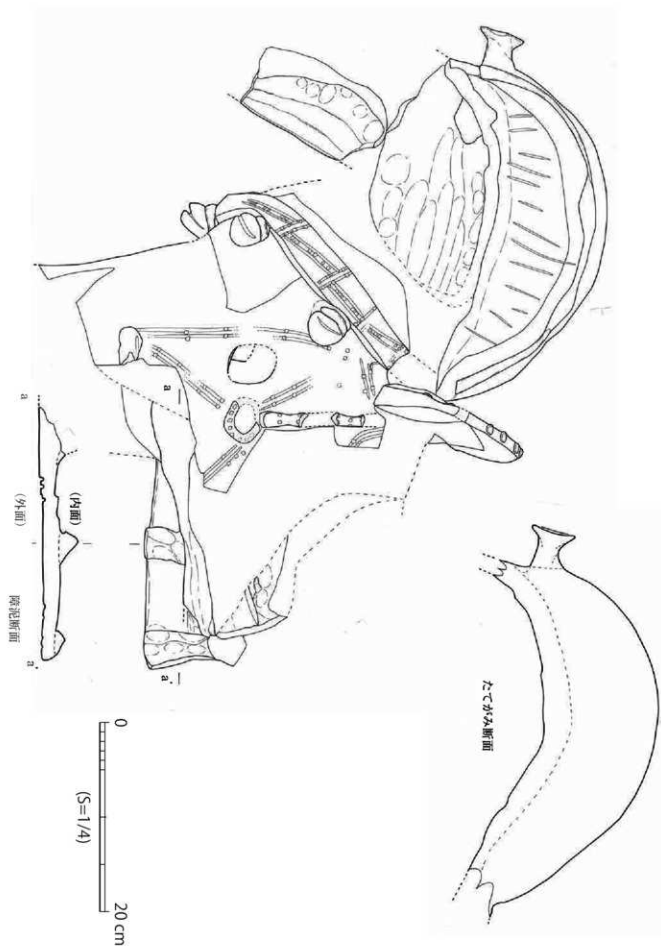


図4-53 東造出 馬形埴輪 1-1②

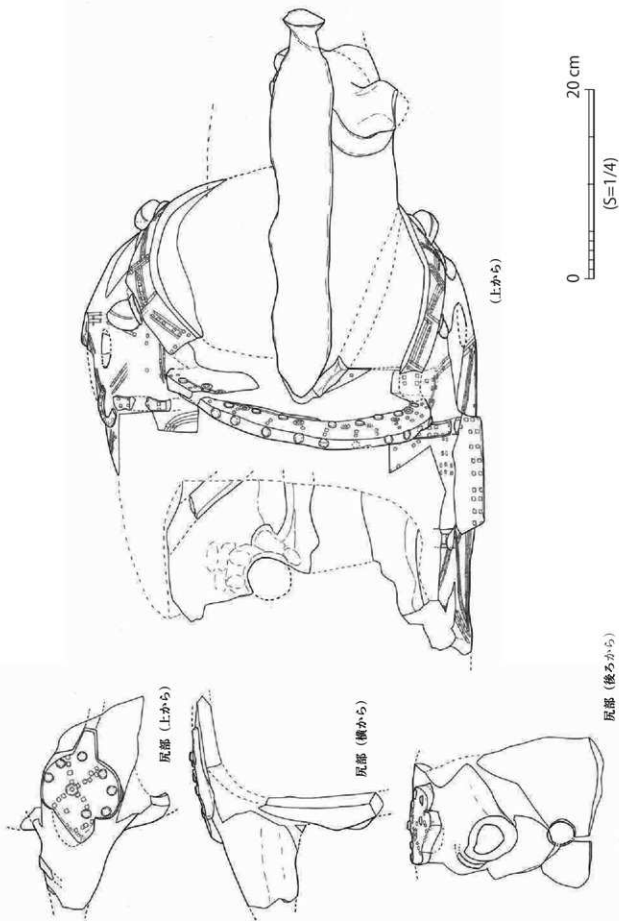


図 4-54 東造出 馬形埴輪 1-1③

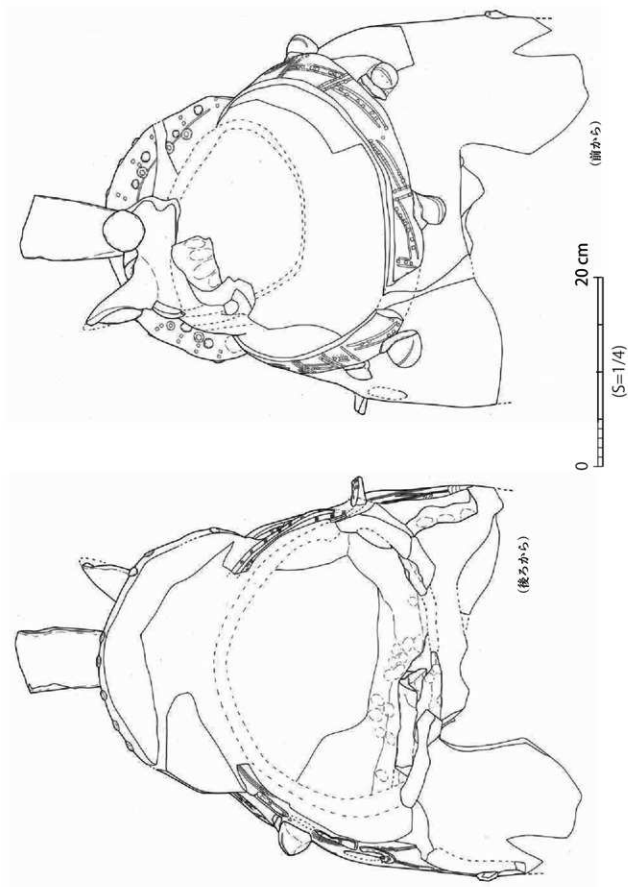


図 4-55 東造出 馬形埴輪 1-1④

0 20 cm

(S=1/4)

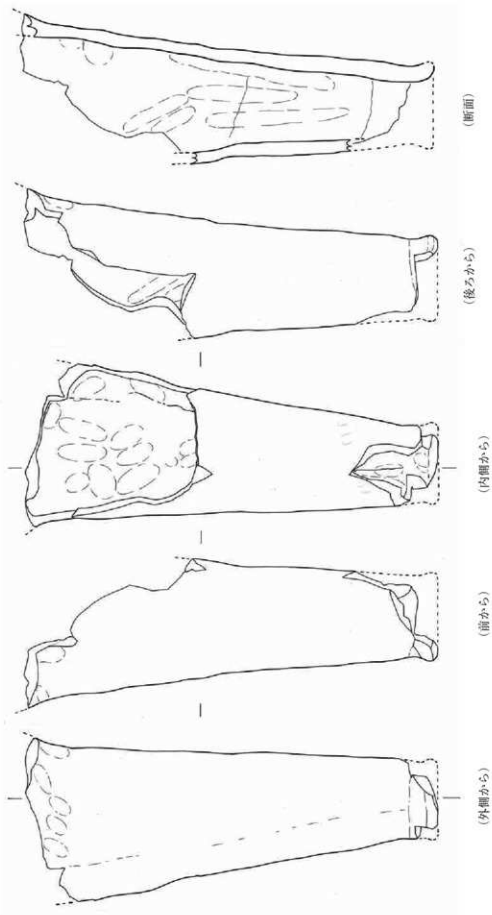


図 4-56 東造出 馬形埴輪 1-1⑤ (右前脚)

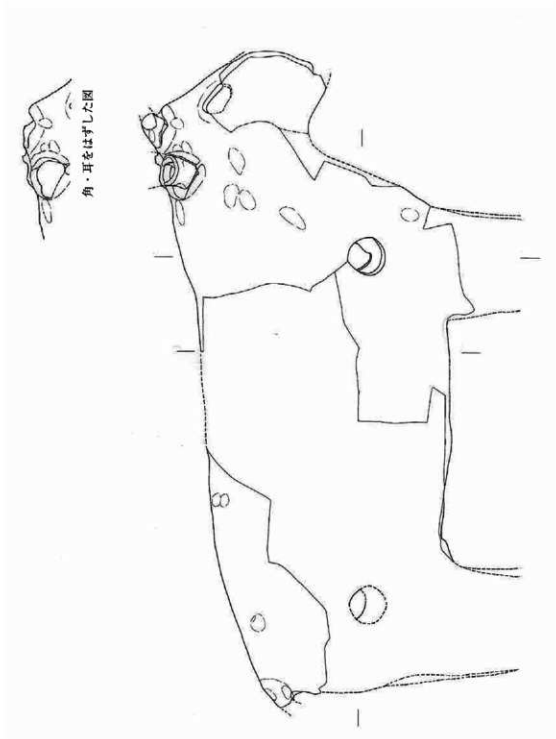


図 4-57 東遺出 牛形埴輪 1-1①

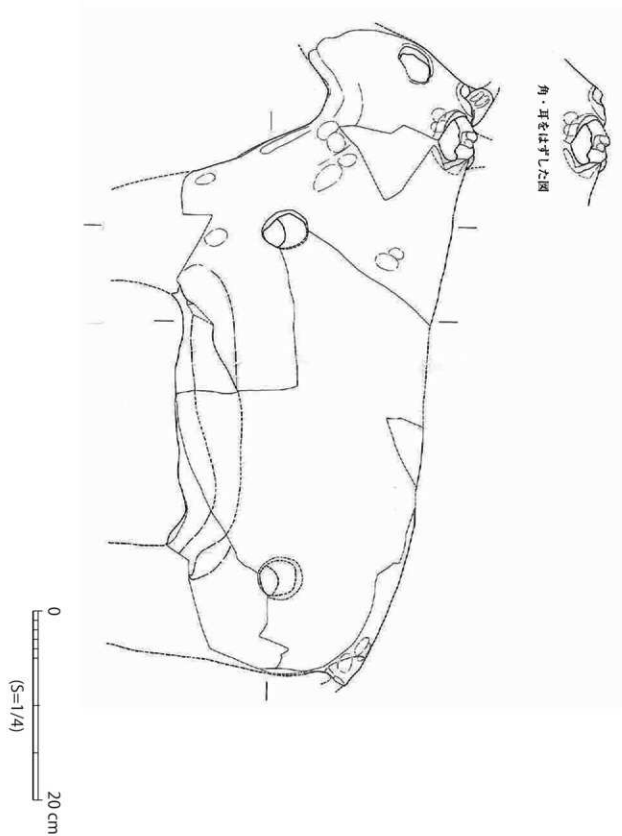


図 4-58 東造出 牛形埴輪 1-1②

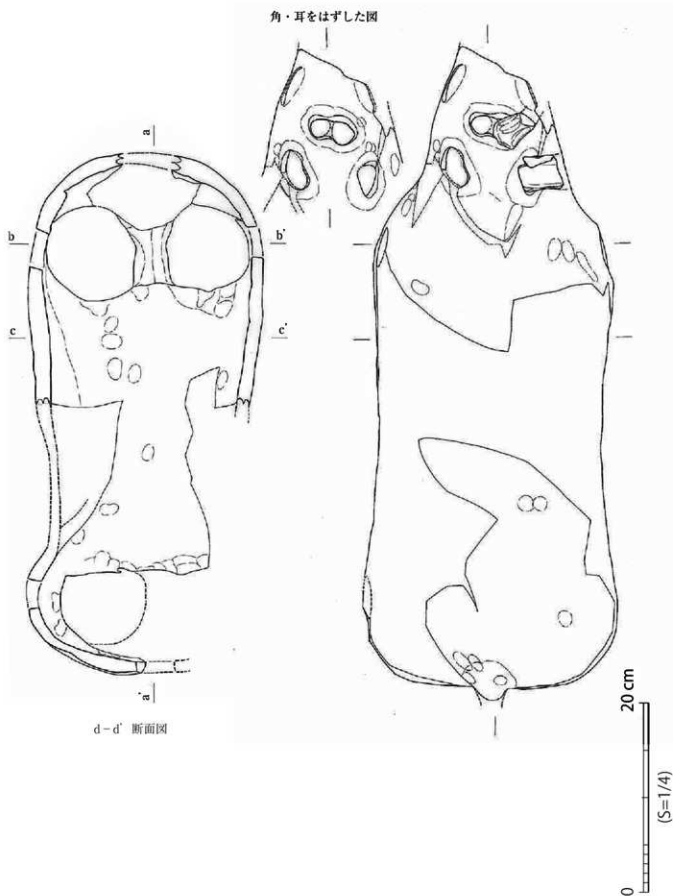


図4-59 東造出 牛形埴輪 1-1③

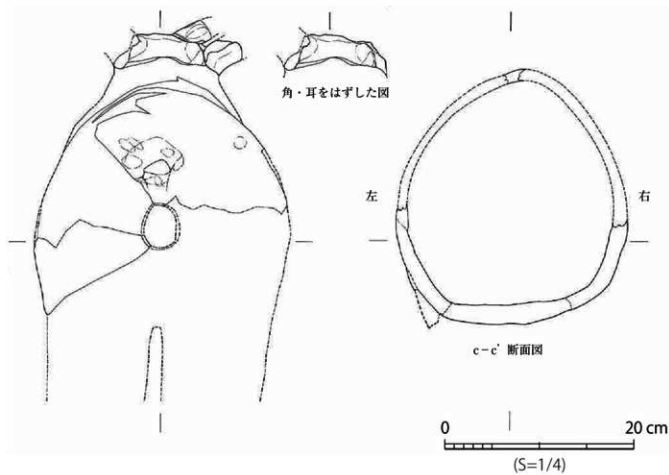
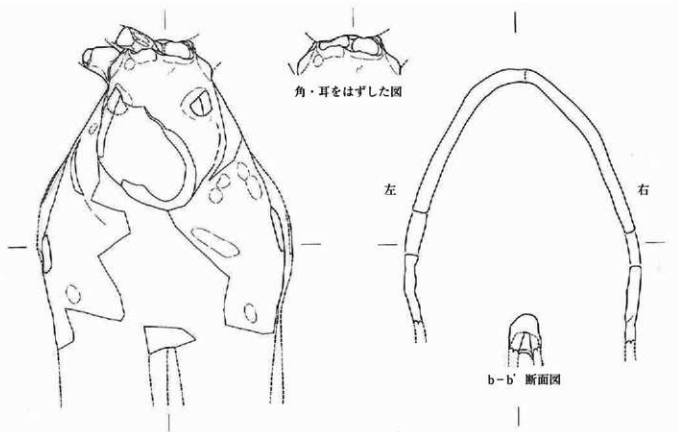


図 4-60 東造出 牛形埴輪 1-1④

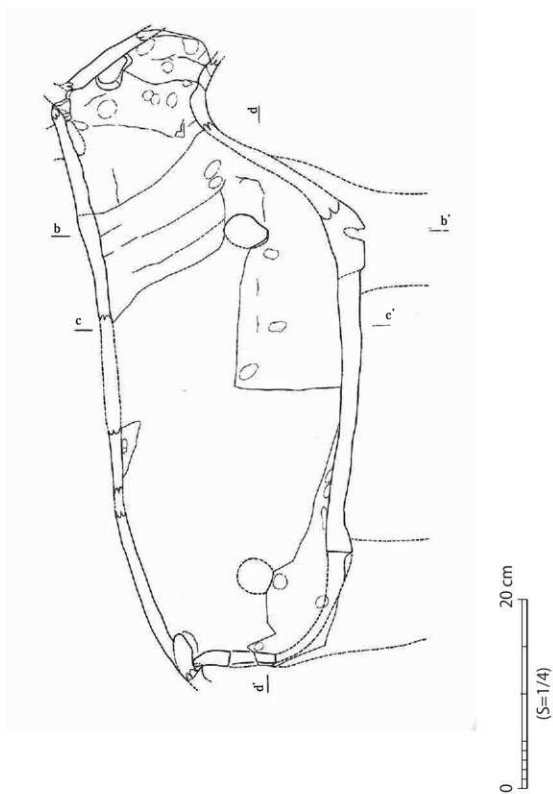


图 4-61 東造出 牛形埴輪 1-1⑤

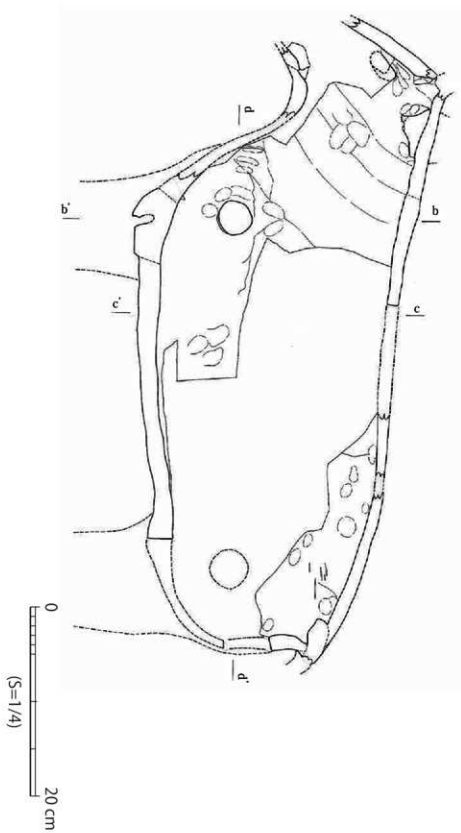


圖 4-62 東遺出 牛形埴輪 1-1⑥

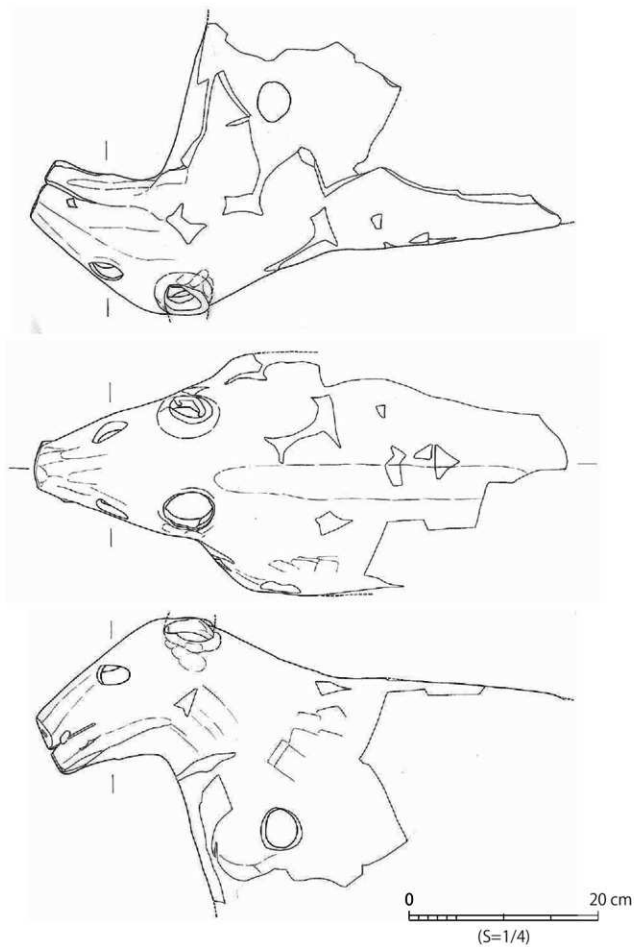


圖 4-63 東遺出 猪形埴輪 1-1①

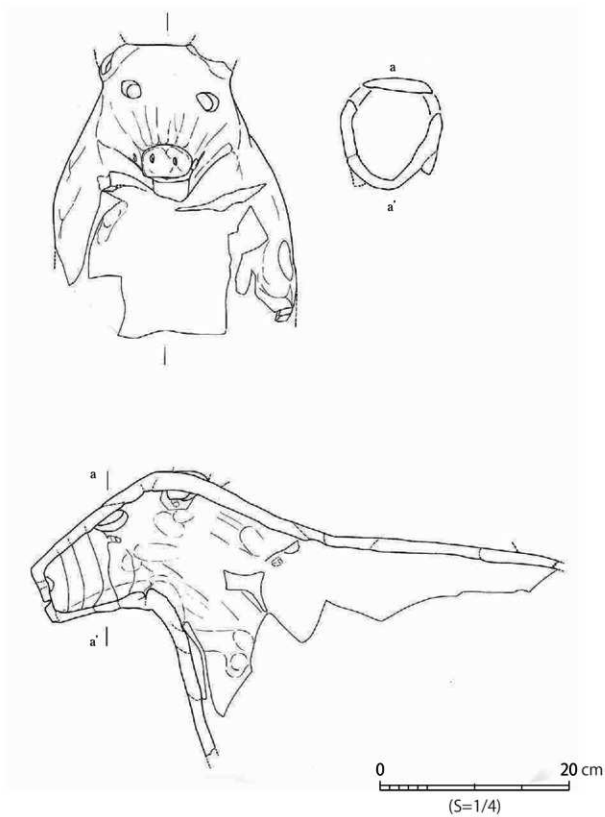


図 4-64 東造出 猪形埴輪 1-1②

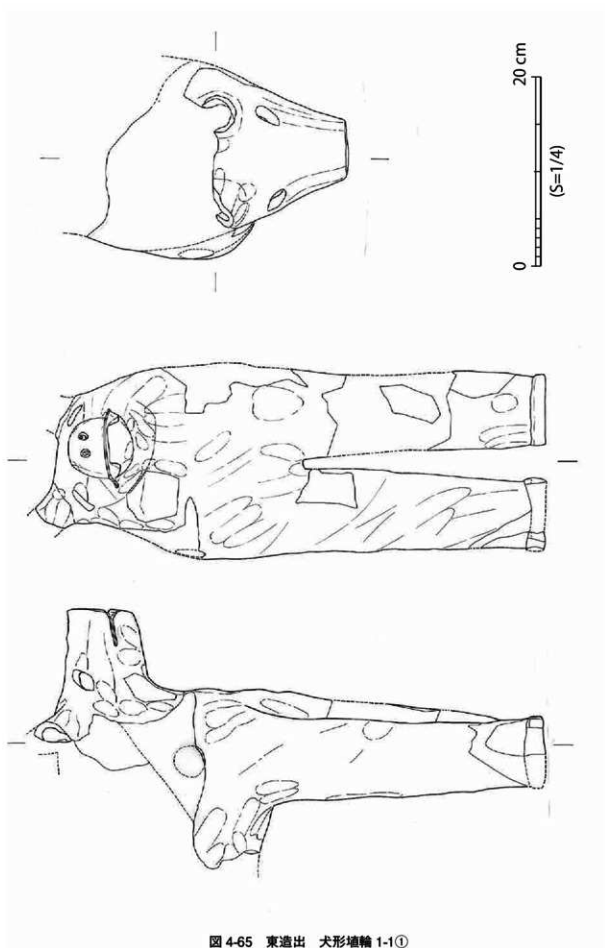


圖 4-65 東遺出 犬形埴輪 1-10

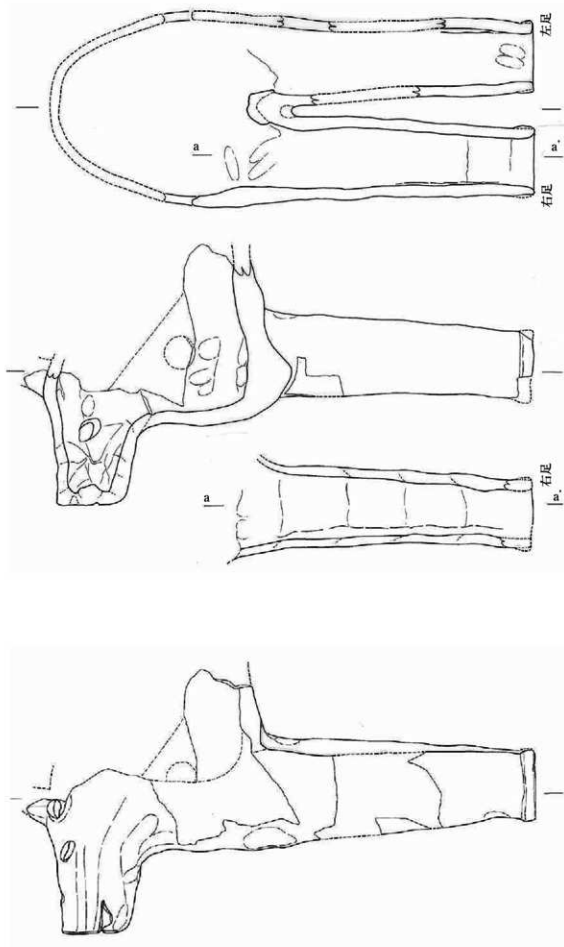
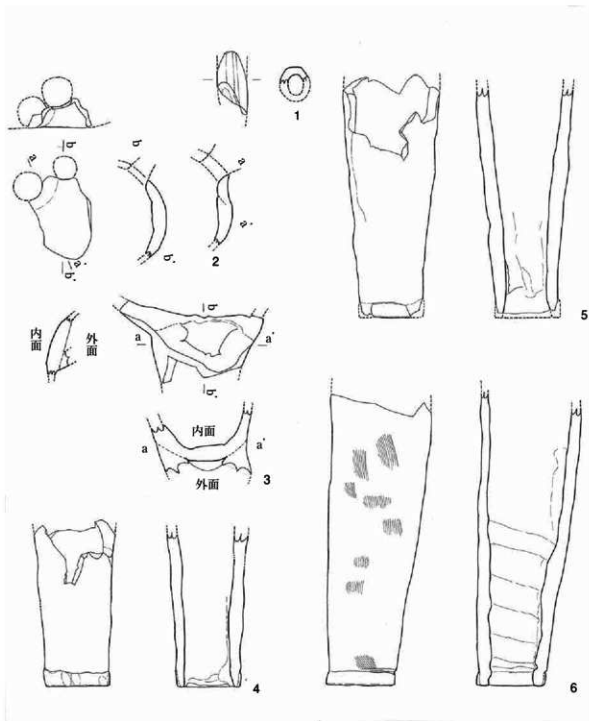


图 4-66 東造出 犬形埴輪 1-1②



0 20 cm
 (S=1/4)

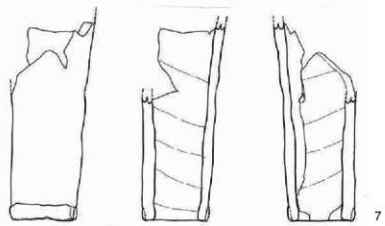
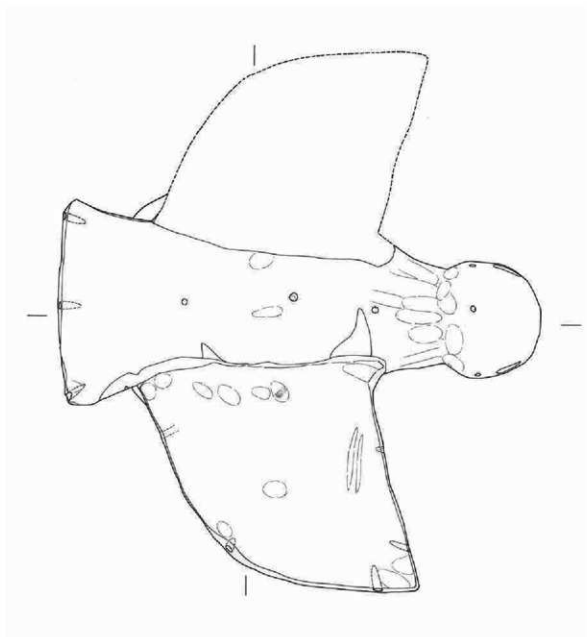


图 4-67 東造出 動物埴輪



0 20 cm
(S=1/4)

図 4-68 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-1①

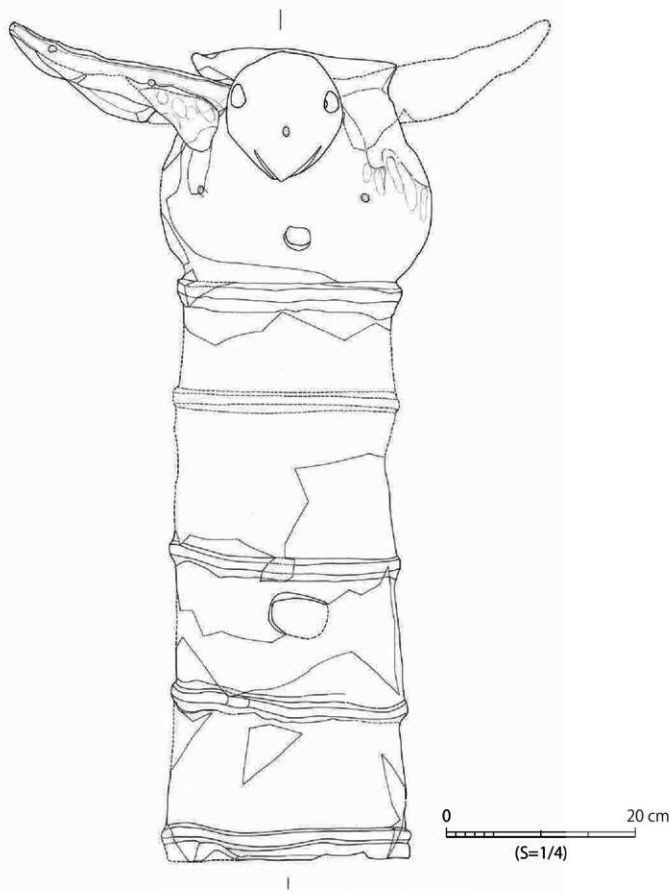


図 4-69 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-1②

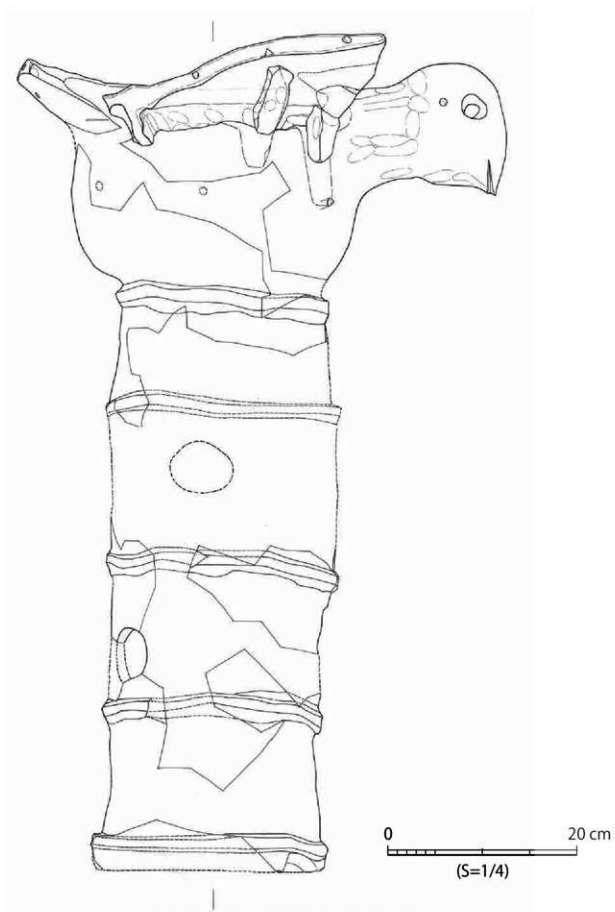


図 4-70 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-1③

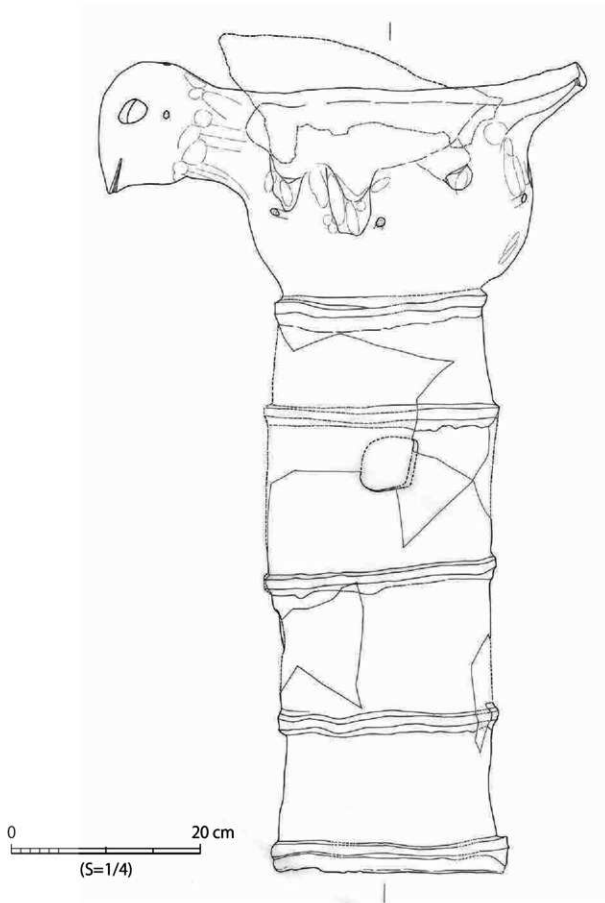


図 4-71 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-1④

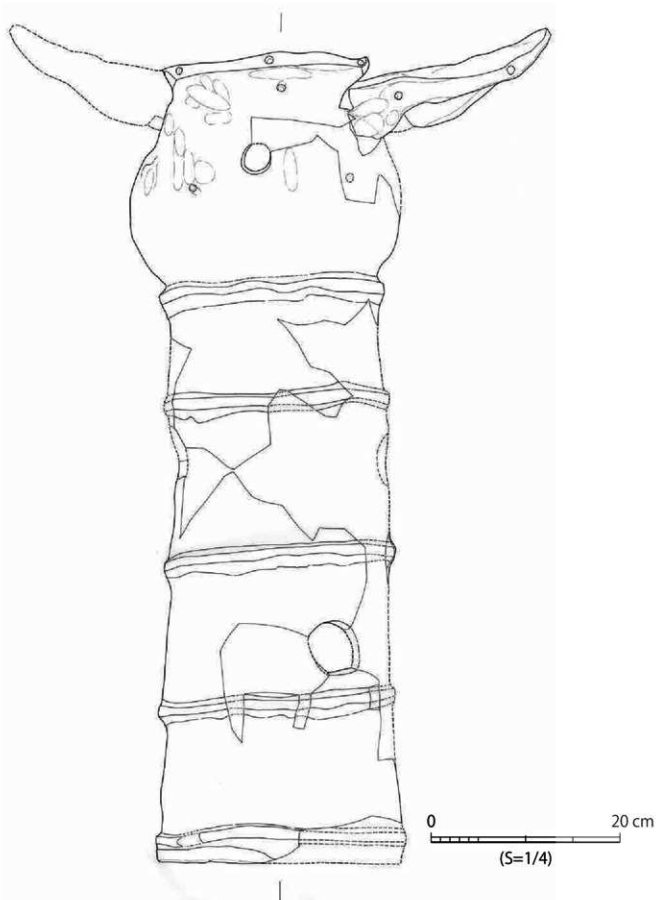


図 4-72 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-1⑤

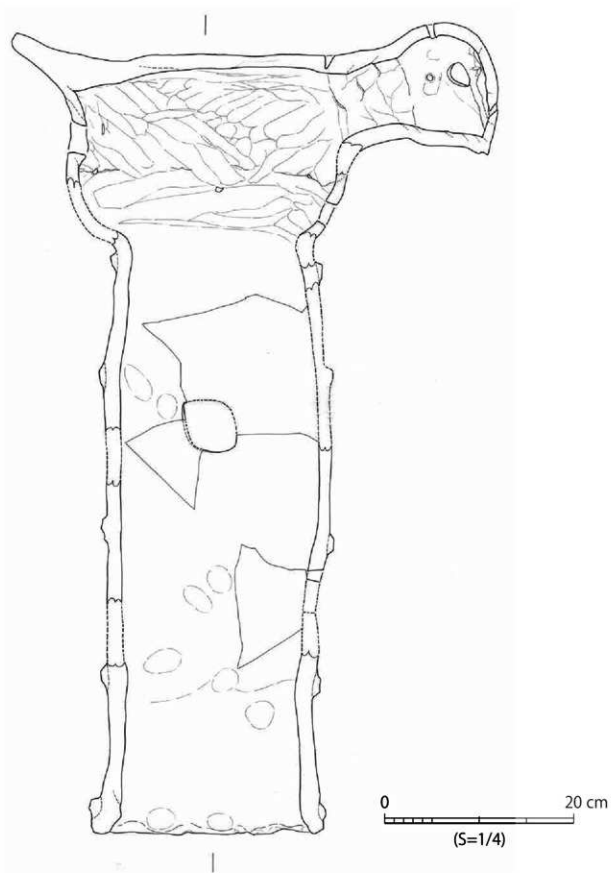


図 4-73 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-1⑥

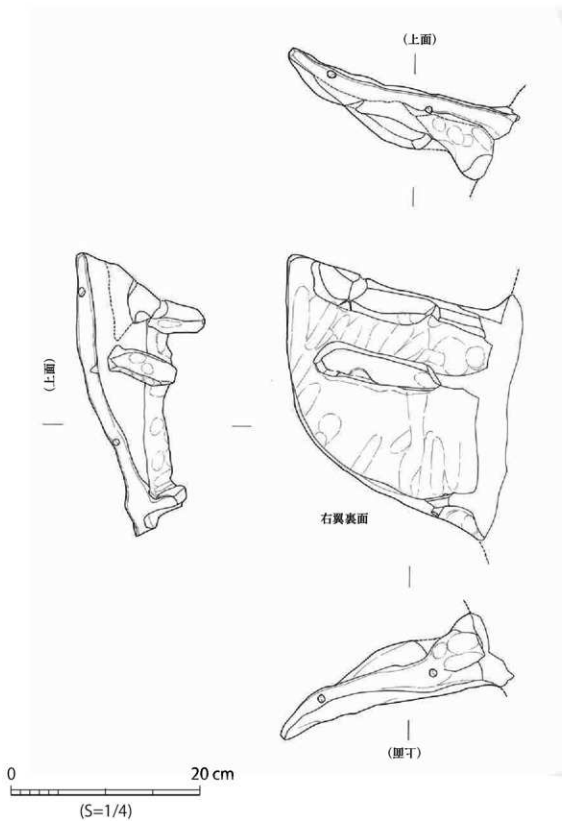


図 4-74 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-1⑦

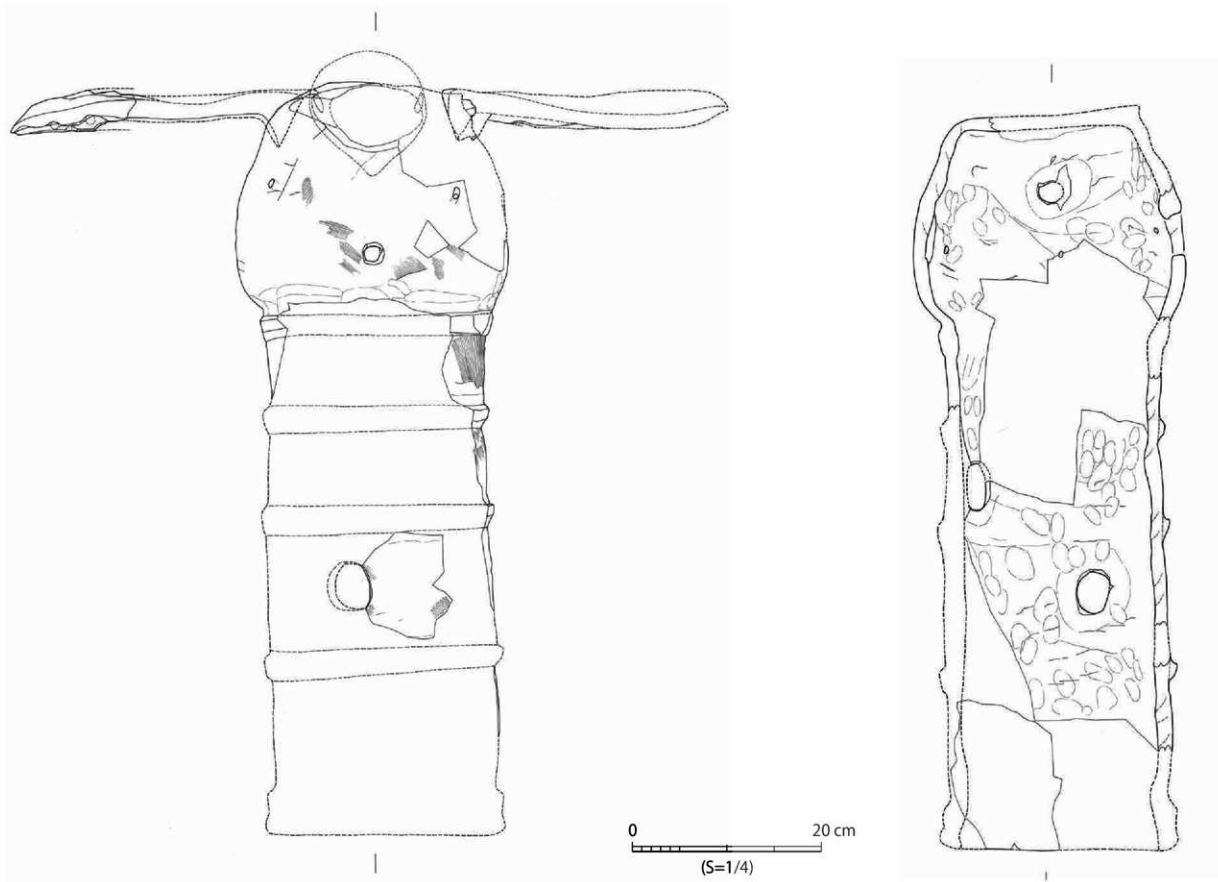


图 4-75 東進出 翼を広げた鳥形埴輪 1-2①

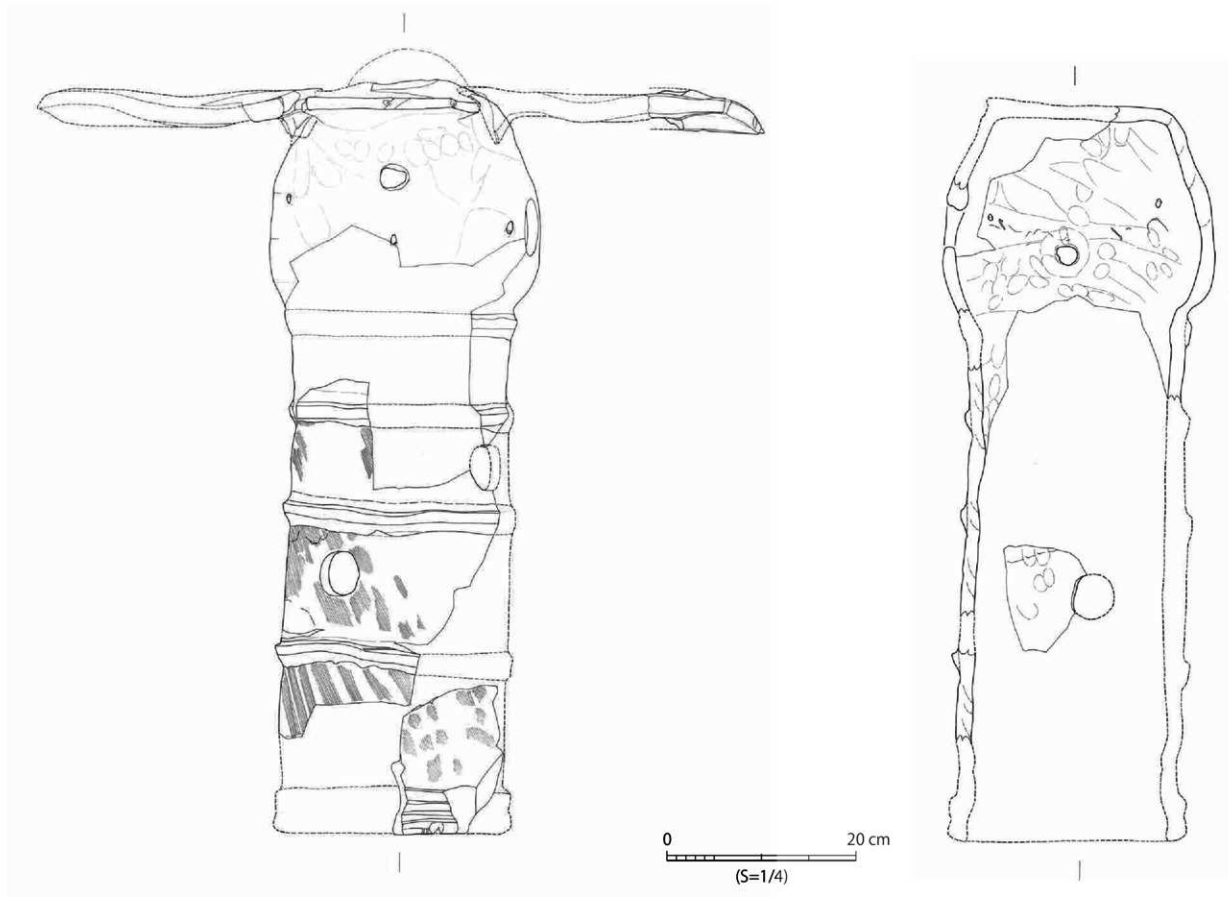


図 4-76 東進出 翼を広げた鳥形埴輪 1-2②

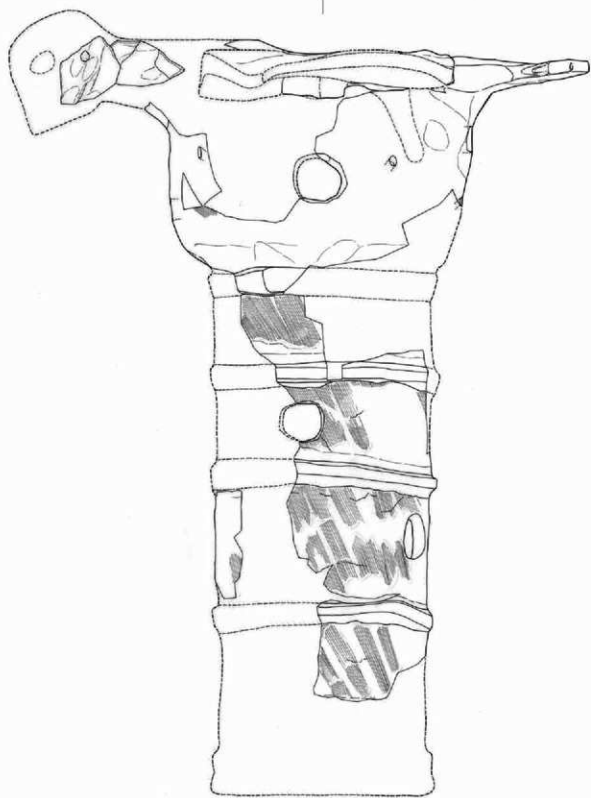
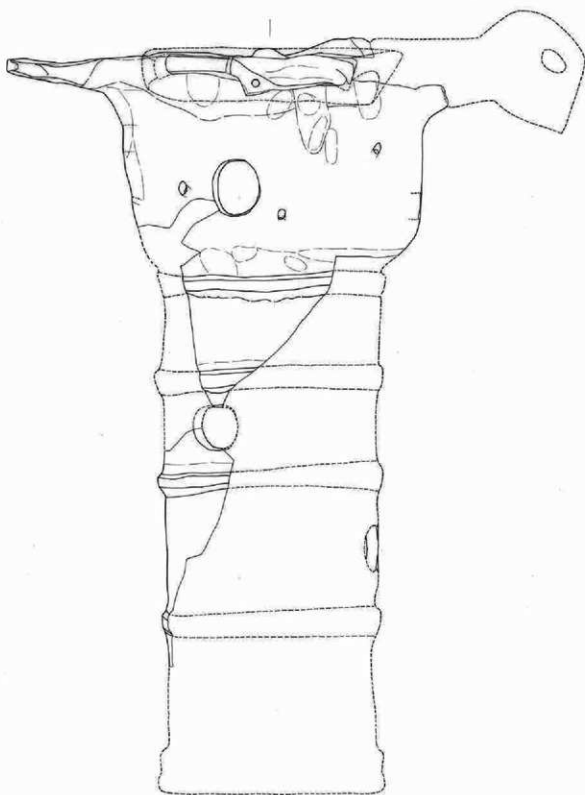


図 4-77 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-2③



0 20 cm
(S=1/4)

図 4-78 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-2④



図 4-79 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-2⑤

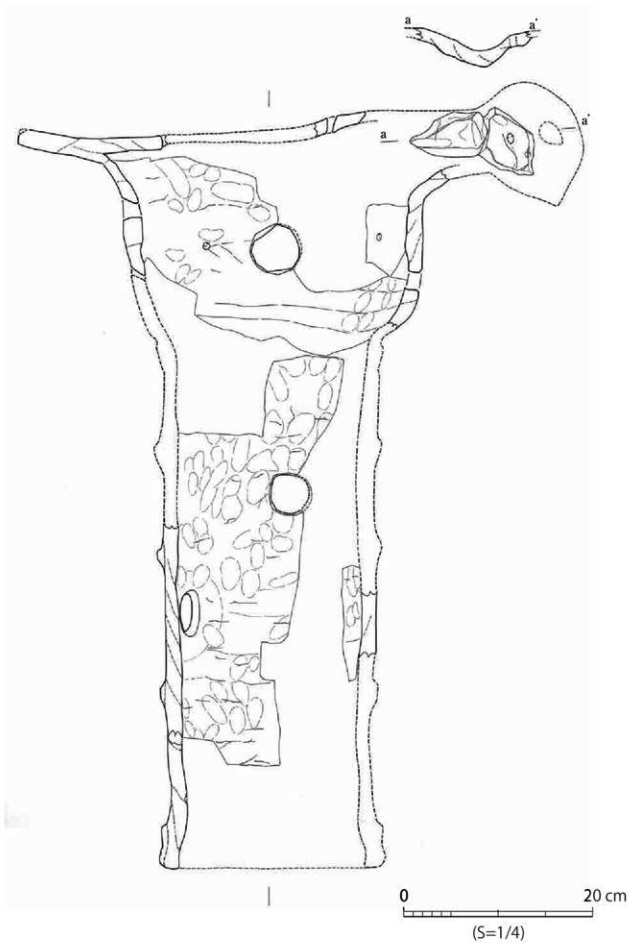
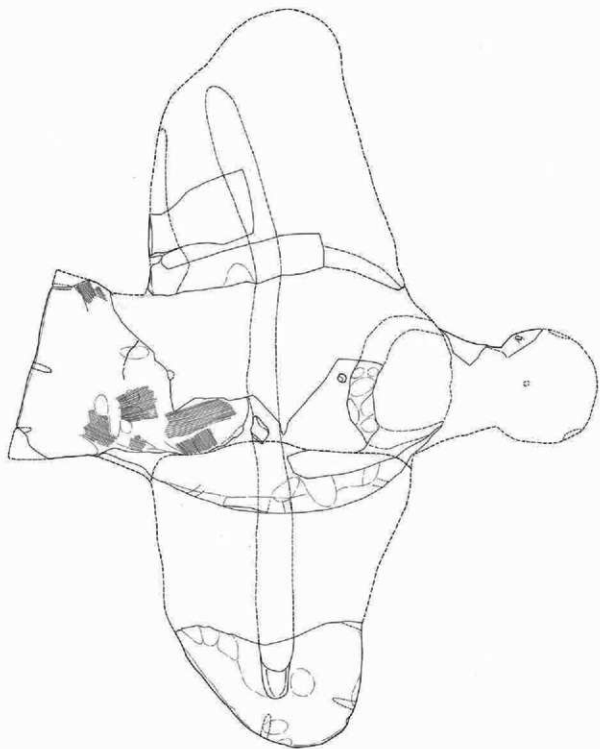


図 4-80 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-2⑥



0 20 cm
(S=1/4)

図 4-81 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-2⑦

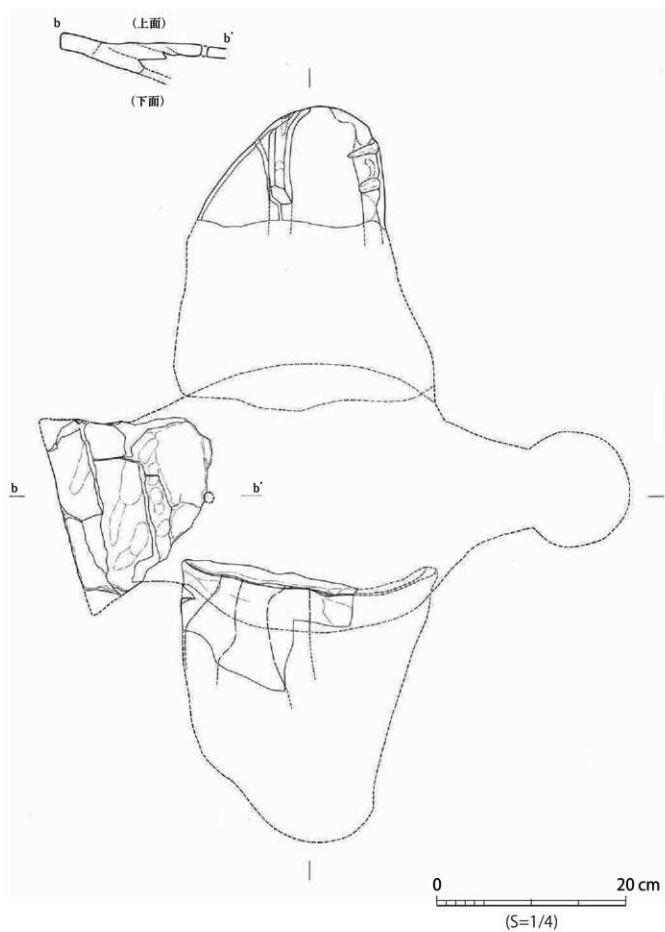


図4-82 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-2⑧(裏面)

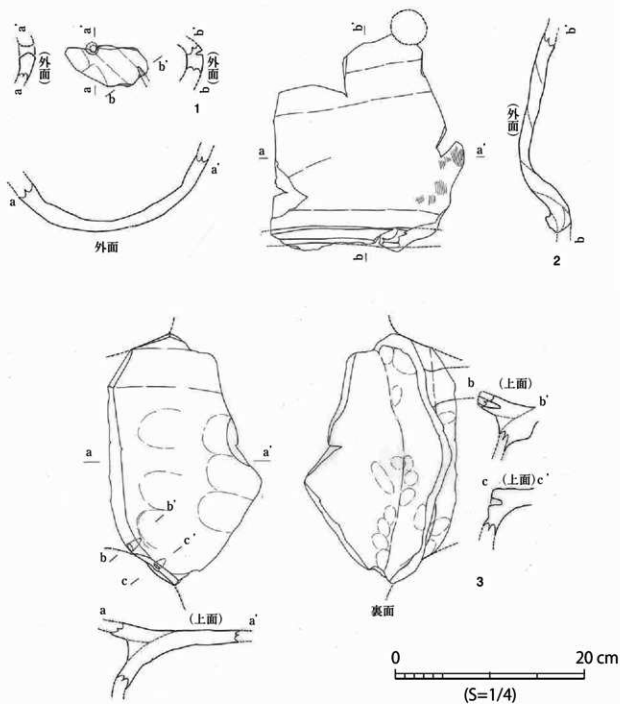
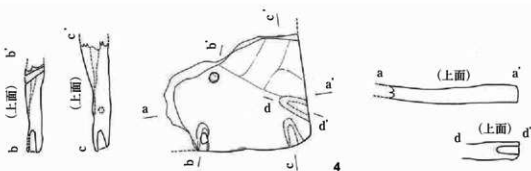


図 4-83 東造出 翼を広げた鳥形埴輪 1-3 ほか①



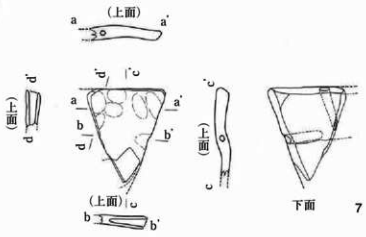
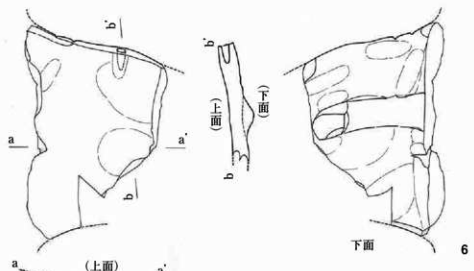
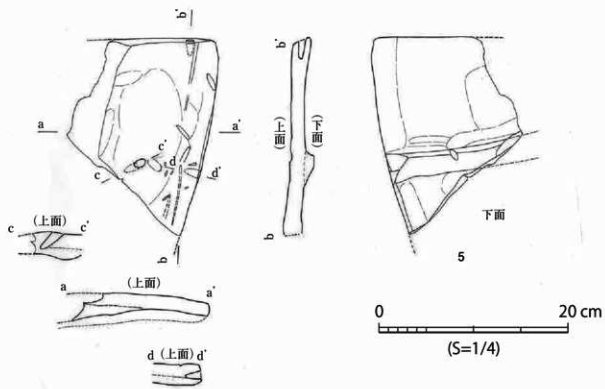


図4-84 東造出 翼を広げた鳥形埴輪1-3ほか②

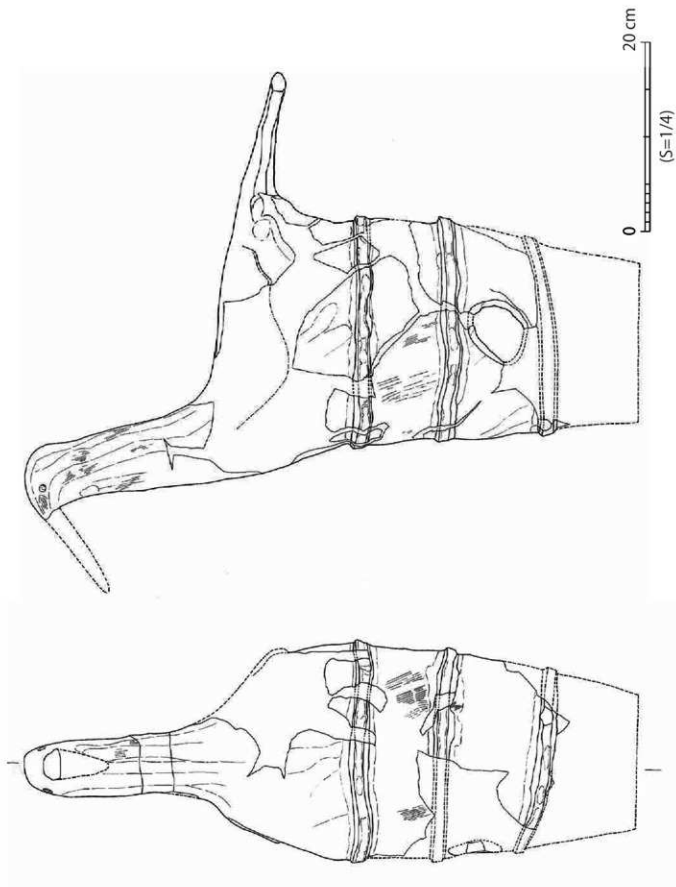


图 4-85 東造出 水鳥形埴輪 1-1①

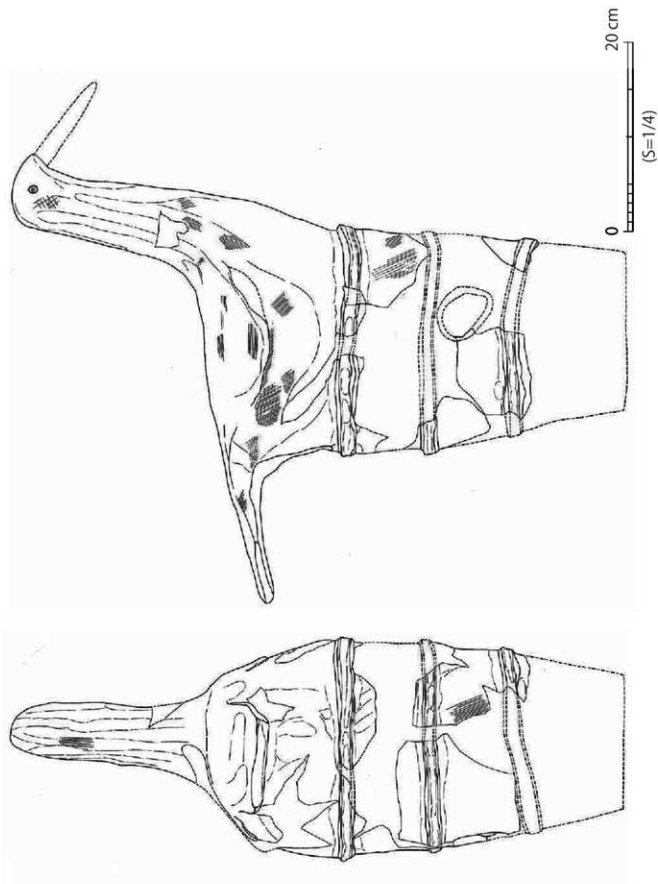


圖 4-86 東造出 水鳥形埴輪 1-1②

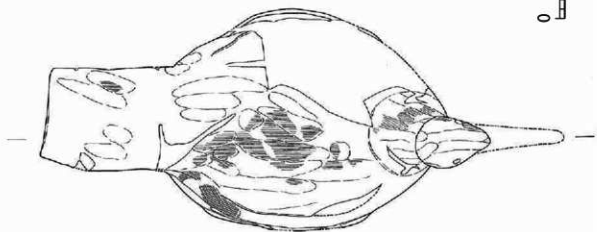
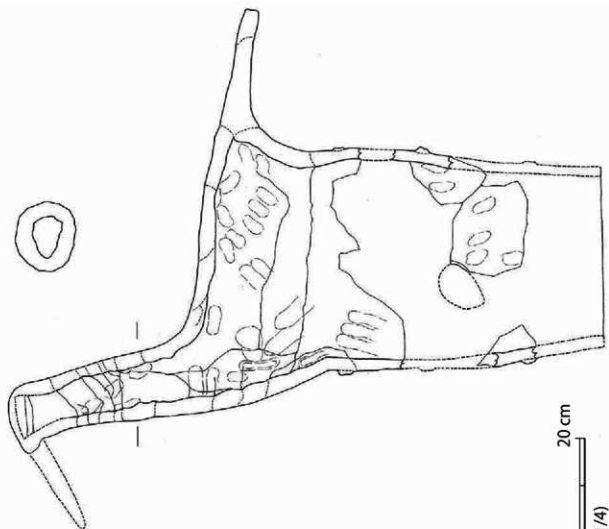


図 4-87 東造出 水鳥形埴輪 1-1③

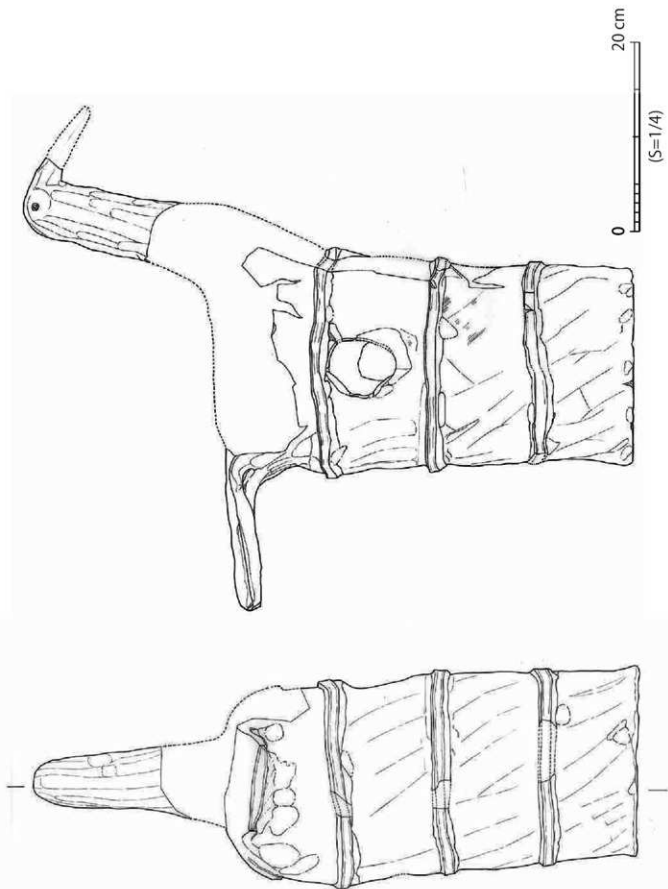


图 4-88 東造出 水鳥形埴輪 1-2①

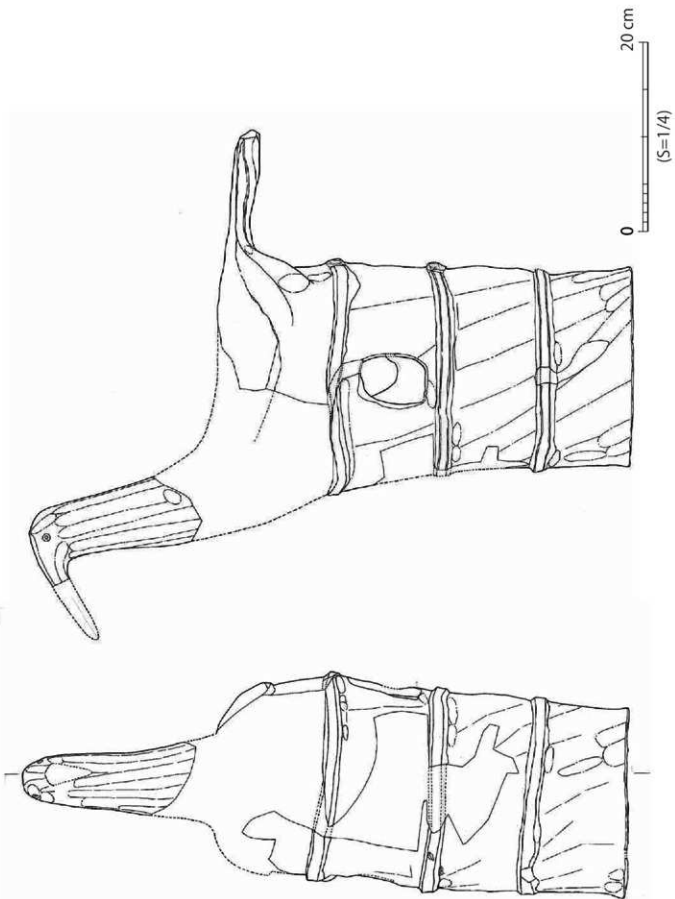


图 4-89 東造出 水鳥形埴輪 1-2②

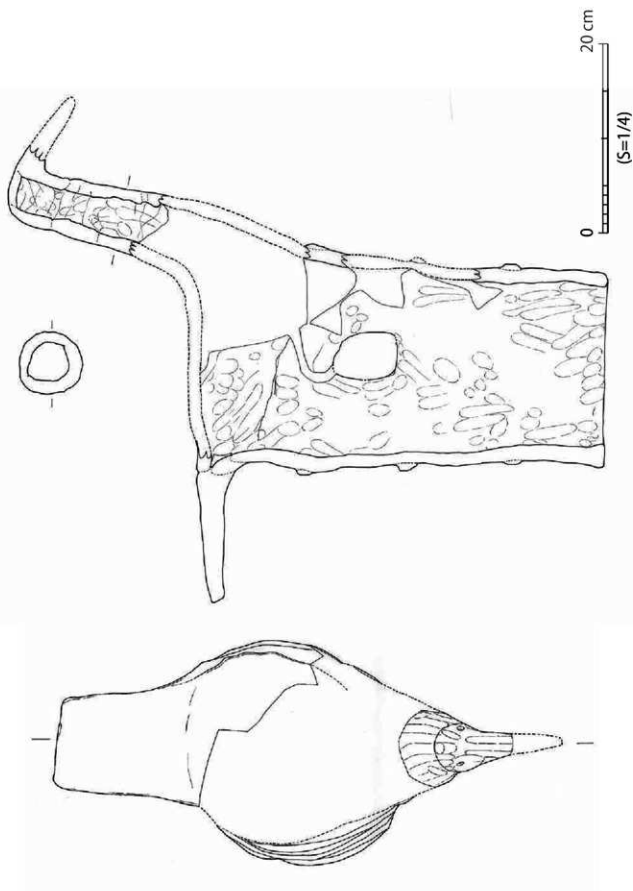


圖 4-90 東造出 水鳥形埴輪 1-2③

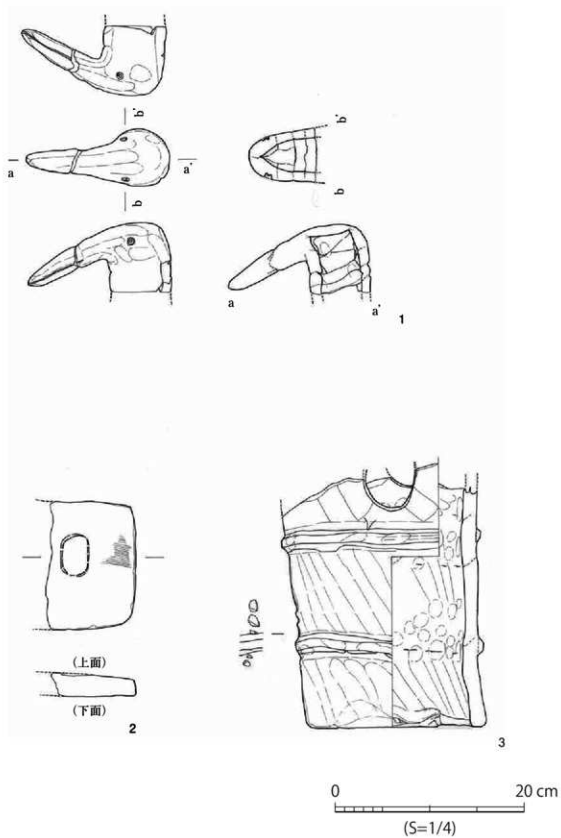


図 4-91 東造出 水鳥形埴輪 1-3

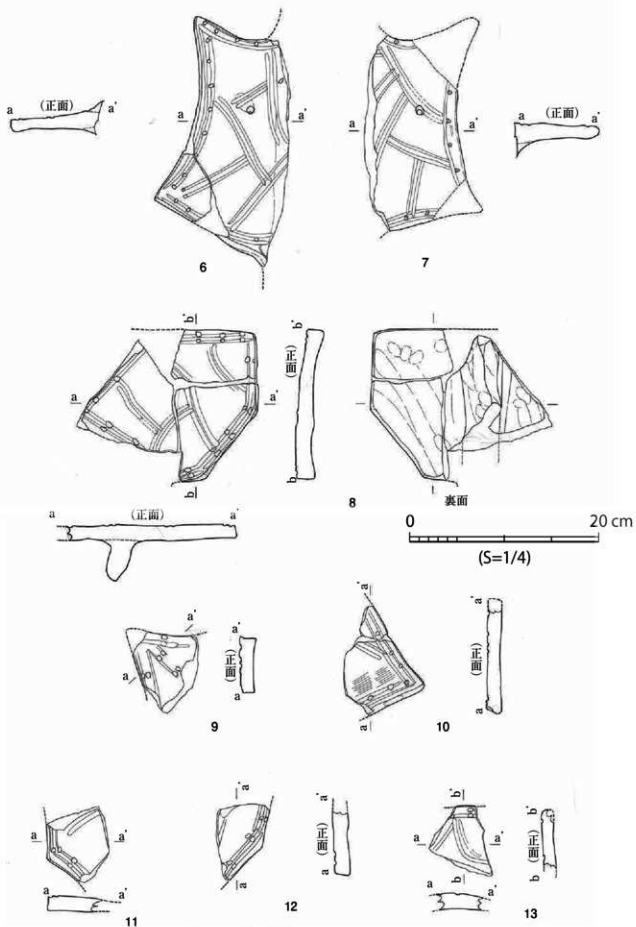


图 4-92 東造出 器財埴輪①(大刀・靱)

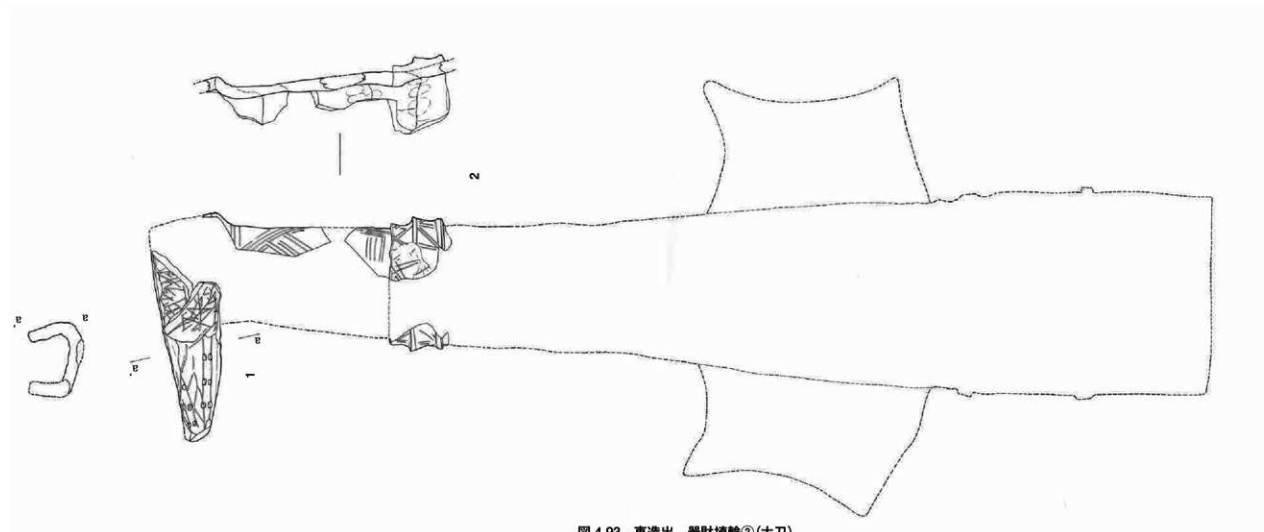
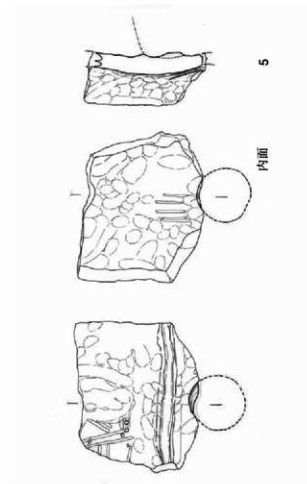
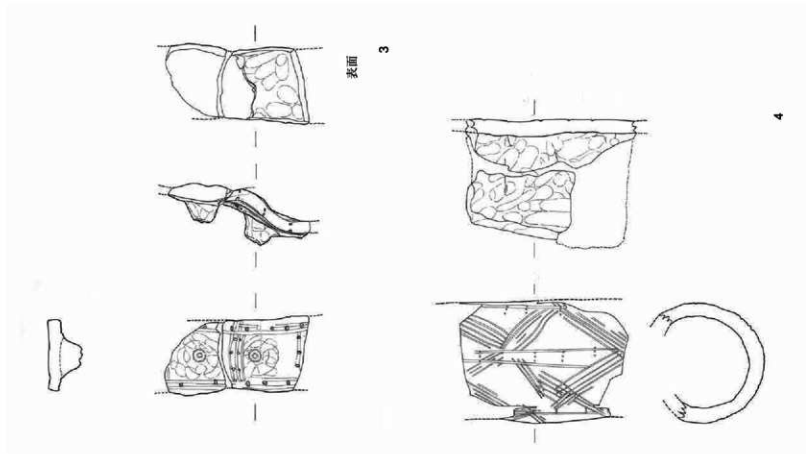


图 4-93 東造出 器財埴輪②(大刀)



0 20 cm
(S=1/4)

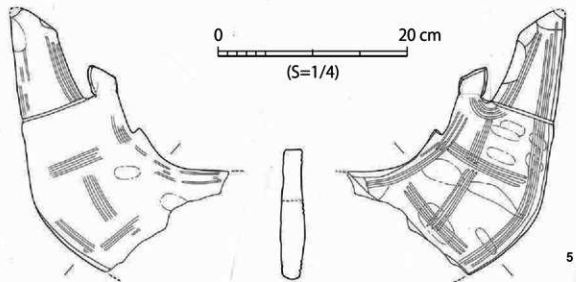
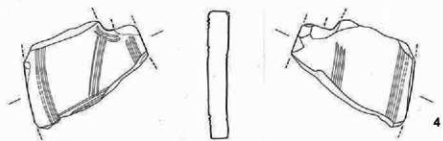
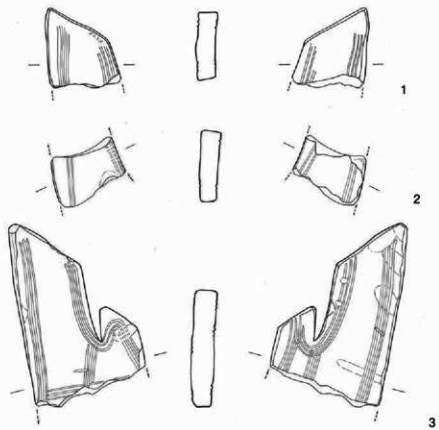


图4-94 東造出 蓋形埴輪①

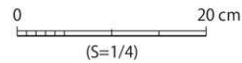
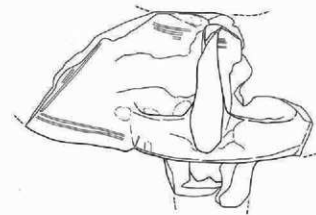
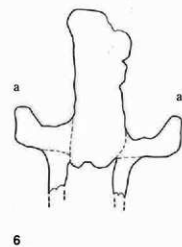
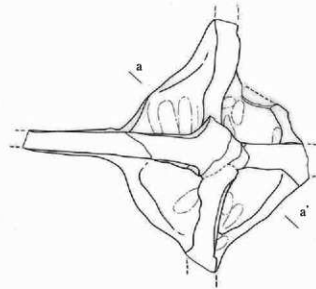
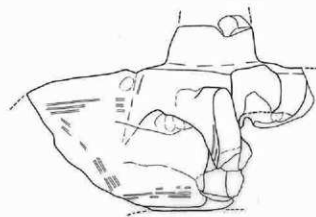


图4-95 東造出 蓋形埴輪②

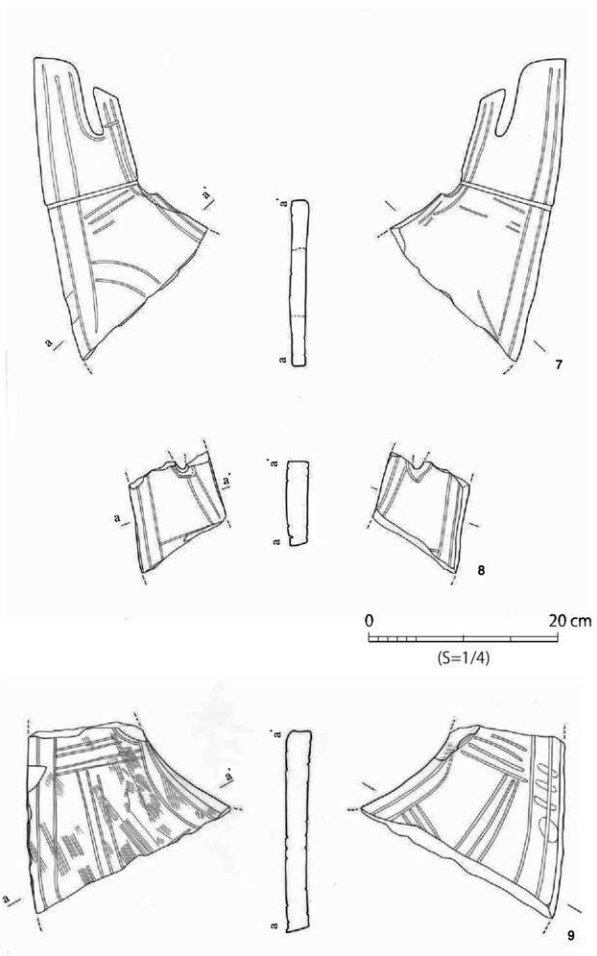


图 4-96 東造出 蓋形埴輪③

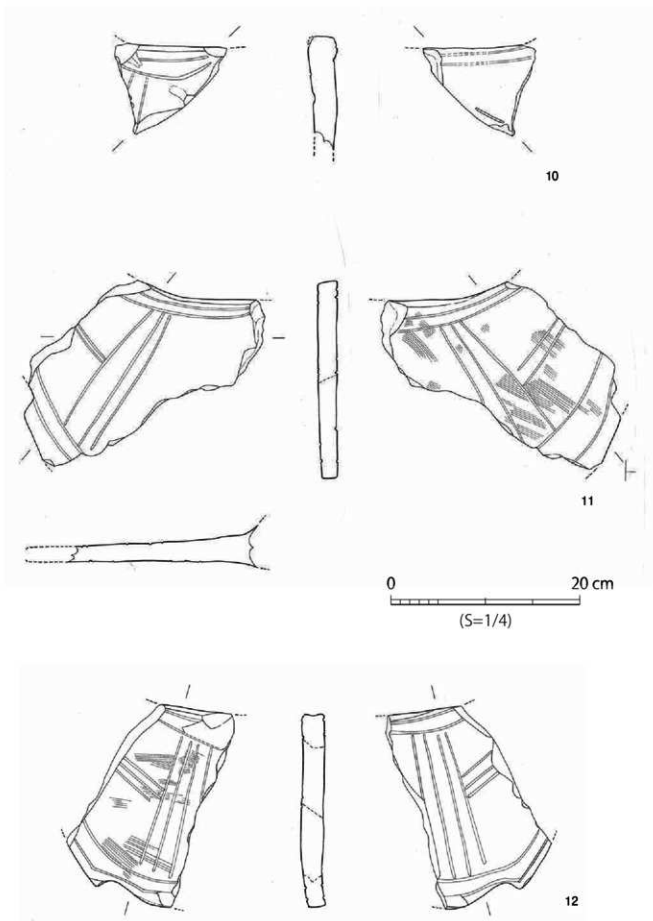


图 4-97 東造出 蓋形埴輪④

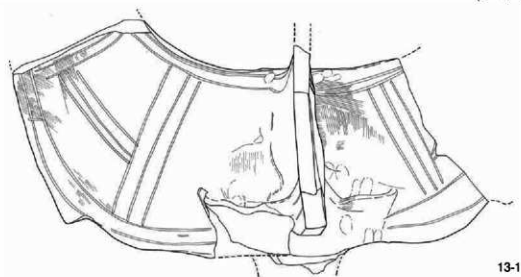
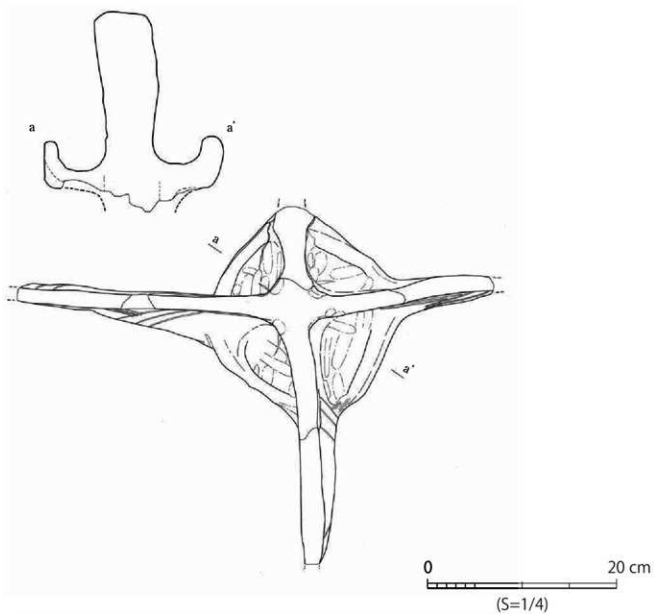


图 4-98 東造出 蓋形埴輪⑤

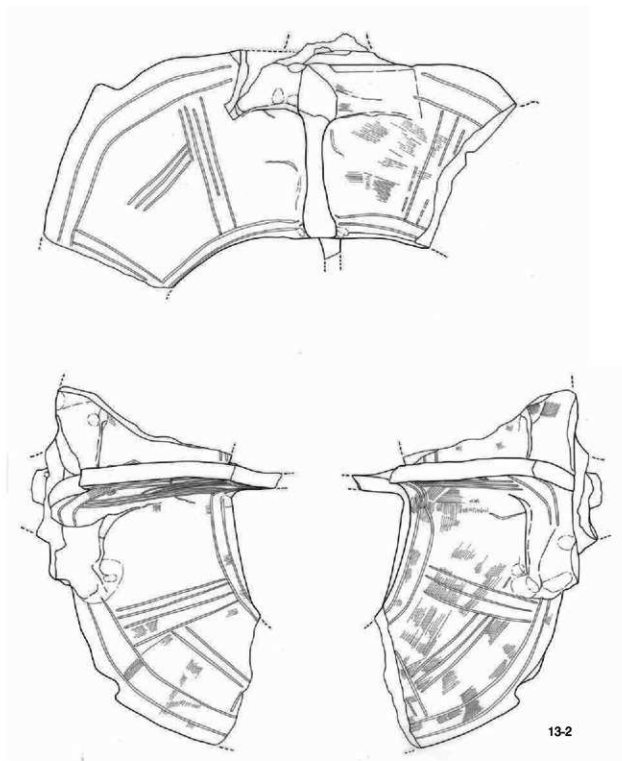
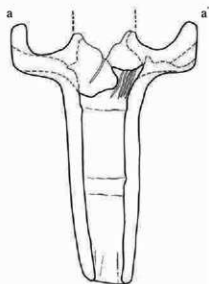
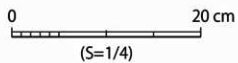
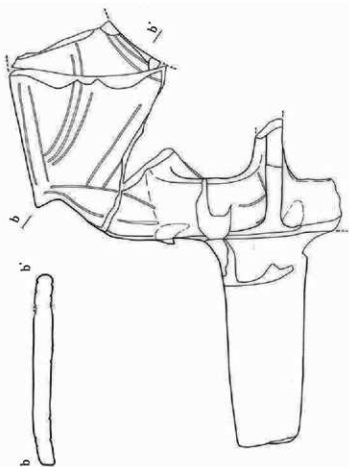
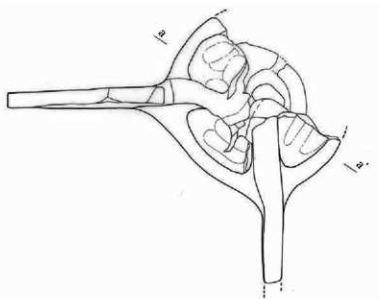


图 4-99 東造出 蓋形埴輪⑥



14-1

图 4-100 東造出 蓋形埴輪⑦

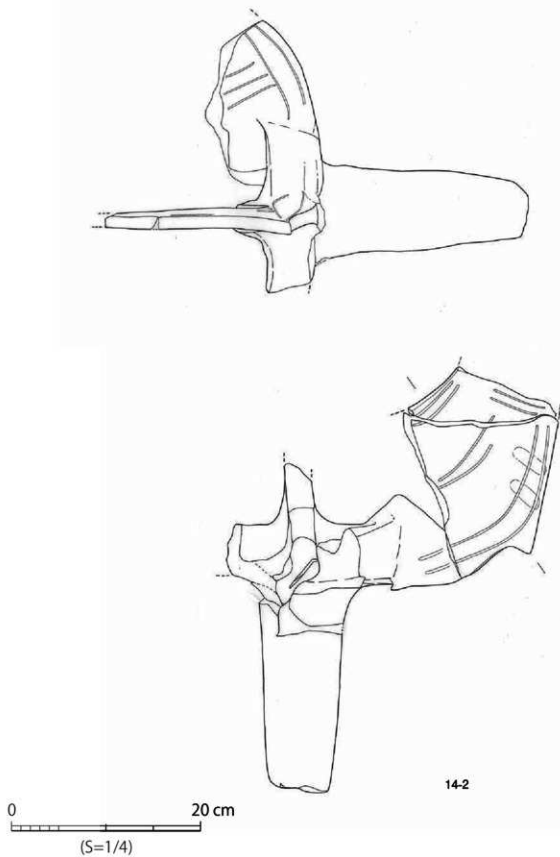
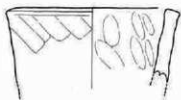
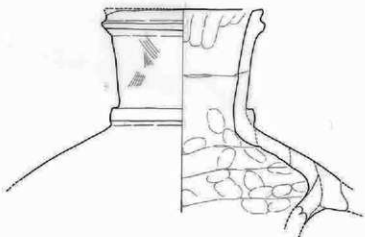


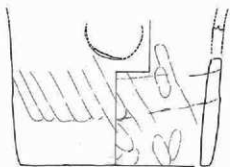
图 4-101 東造出 蓋形埴輪⑧



15



16



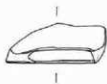
17



18



20



19



21



22

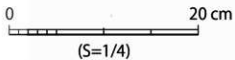


图 4-102 東造出 蓋形埴輪⑨

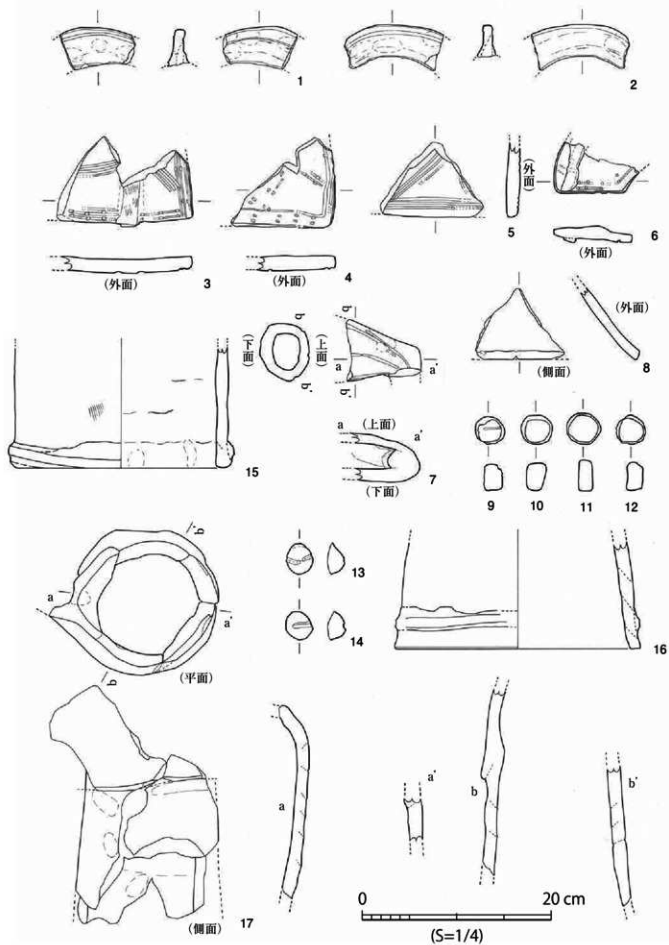


图 4-103 東造出 不明形象埴輪 形象埴輪基部

第5章 西造出の形象埴輪

第1節 家形埴輪 (図5-1～5-6)

西造出からは入母屋造の上屋根(家形埴輪5-1)をはじめ、家形埴輪の壁(家5-2)のほか、多数の破片が出土している。家形埴輪5-1(図5-1～5-4)は、入母屋造上屋根部分(切妻部)で東造出のような分割焼成の家形埴輪で、3分割になるのか、2分割になるのかは不明である。破風上部には千木が取り付けられない形態で、破風には小孔と円形の線刻が施され、鞭懸状の突起が取り付け。中空の棟木にも小孔と円形の線刻が認められる。妻側の壁には一部円形のスカシ孔が残存する。大棟上には鱗状の棟飾りがあり、堅魚木は取り付けられない。棟飾りと屋根部分には斜め上方からの小孔と2条一括沈線による格子状の線刻が施され、線刻の一部は破風の裏面にまで及ぶ。この家形埴輪に取り付けると推測できる方柱状の棟持柱(図5-2)があるが、直接接合しない。

家形埴輪5-2(図5-5・6～9)は、身舎の壁部分で、長方形の出入口が確認でき、平屋身舎あるいは分割焼成の高床上の身舎の可能性もある。沈線と刺突文で施文している。調査では現地に据え付けられた状態と考えていたが、基部は接合面で剥離した形状である。基部が剥離後に偶然正置の状態になった、もしくは基部を打ち欠いた後に据え付けた、などの可能性が考えられる。

家形埴輪5-4(図5-5・1～5)は、2条一括沈線で線刻を施した障隠板、寄棟の屋根軒先の破片で、胎土や出土地点から家形埴輪5-2と同一個体の可能性がある。家形埴輪5-3としたものは、筭の付いた棟押さえ(図5-6・1～7)や屋根軒先(図5-6・8)、身舎基部(図5-6・11)、裾廻突帯の可能性もある個体(図5-6・9・10)、高床の円柱とそれが取り付け高床部または基部の破片(図5-6・12～18)が出土し、胎土や出土地点から同一個体と推測するが、同じような特徴の家形埴輪が複数存在することは否定できない。家形埴輪5-3や5-4の軒先は2条沈線の線刻であるが、3～4条の線刻の屋根軒先があり、胎土も異なるため、家形埴輪5-5とする(図5-6・19・20)。

西造出では、全体像を復元できる個体がなく、個体数の把握は難しい。家形埴輪5-1と5-2は胎土が違うため別個体と推測できるが、出土地点が近いこと、家形埴輪5-2(身舎)の上に5-1(入母屋上屋根)がのっていたことを完全に否定することはできない。家形埴輪5-3と5-5は5-1・5-2と出土地点が違うため別個体の可能性が高い。したがって、西造出では少なく見積もると、家形埴輪5-1・5-2、家形埴輪5-3、家形埴輪5-5の3個体の把握しかできないことになる。

第2節 人物埴輪 (図5-7～5-19)

西造出の人物埴輪には、双脚輪状文冠帽をかぶった人物、両面人物、武人、盛装男子、両面人物をあげる人物、巫女がある。双脚輪状文冠帽をかぶった人物は2体確認でき、5-1(図5-7)は、美豆良と垂髪を付けた男性像で、美豆良には線刻で髪を束ねた表現をするが、垂髪には線刻は施されない。沈線のみで施文された双脚輪状文冠帽をかぶる。5-2(図5-8)は、5-1と同様の冠帽をかぶるが、冠帽は沈線と刺突文で施文される。線刻表現の美豆良が確認できるが、5-1と違って垂髪には線刻が施されている。5-1・5-2ともに首以下の体部は不明である。

両面人物埴輪(図5-9)は、頭部の前後に顔を作り出した全国初例の人物埴輪で、美豆良がある男性像で、体部は不明である。頭頂部には表現がないことから、冠帽などをかぶっていた可能性もある。一方の顔には矢羽の線刻、もう一方には矢尻の線刻があり、両面とも顔に線刻が確認できる。武人頭部(図5-10)は、眉庇付背と衝角付背の両方を合わせた形態の背をかぶる。頭頂部

は円形のスカシ孔状になり、何らかの部材が差し込まれていた可能性がある。全体的に沈線と円形浮文が施される。直接接合する体部は確認できない。盛装男子と考えられる個体は、首から肩部（図5-11-1）、腕2本（図5-11-2・3）があり、同一個体であると推測している。東造出の盛装男子1-1に類似する特徴を持つが、線刻も少なく、円形浮文も認められない。腕には手甲をはめている。武人の甲部分（図5-12-1）は、沈線と刺突文で小札状の表現を描いている。図5-12-2は甲の一部と推測でき、図5-12-1と同一個体の可能性もあるが、弧状の線刻の向きが異なる。草摺部分は2個体確認でき、図5-12-3は綾杉文の線刻が施される。図5-13は格子状に3条一括沈線と2点一括刺突文で施文する。刺突文と沈線で施文された方形の貼り付け部分があるが、何を表現したものか判然としない。図5-12-4は人物の腰部部分のスカート状になった箇所、上部に沈線が確認できる。男性と女性のいずれのものか確定できない。板状の両側面が前方へ張り出す形態の人物埴輪基部（図5-14・15）は、草摺（図5-13）の下層より出土し、草摺と組み合わせる可能性があるが、直接接合しない。板状の両側面と、円筒状の台部両側面には円形のスカシ孔があり、台部側のスカシ孔は円周上に粘土を貼り付けている。円筒部の背面右側に突起状の貼り付けがあり、形状から足（かかと）の表現である可能性がある。かかとの表現とすると、埴輪上部はひざまづいた人物となる。ただし、この上部に草摺がのると、草摺の形状からひざまづいた格好は少し想定しづらくなる。井辺八幡山古墳でも同形態の基部が出土しており（佐藤ほか2007）、基部を椅子とみなして、坐像の人物とする想定もあり（若松2012）、検討の必要がある。

両手をあげる人物は（図5-16・17）、東造出の力士のようなしっかりとした両足を作り出し、両手は上方にあげる姿勢をしている。文様のない比較的簡素な服を着ているが、3条一括沈線で装飾された帯をしている。帯正面の下側は何か剥離した痕跡がある。調査時点では馬形埴輪の近くから出土したことから、馬曳き（馬子）という想定もあったが、しっかりとした両足や両手をあげること、立派な帯を巻くことなどから、馬曳きではなく、少し地位の高い人物であろう。巫女は、頭部（図5-18）、腕（図5-19-1～5）、袈裟状衣（図5-19-6）があり、腕の数から4～5体の巫女がいたことがわかる。袈裟状衣下部にはヘラ状工具で切り込んだ穿孔が認められる。

第3節 動物埴輪（図5-20～5-36）

西造出の動物埴輪は、四足動物（馬形埴輪）と鳥（翼を広げた鳥形埴輪）が出土している。馬形埴輪は、西造出中央に樹立されていたもので、ほぼ完全な形で2頭復原できた。細部に違いがあるものの、たてがみから背中、尻尾、頬、脚部の作り方など2頭はほぼ同形・同大のものと推察でき、東造出の馬形埴輪とも同形態と考えられる。馬形埴輪5-1（図5-20～27）は、ほぼ全身が残存するが、尾や鏡板など一部を欠損する。杏葉は3箇所確認でき、3個の鈴が取り付けられ、沈線と竹管文、円形浮文、刺突文で施文する。障泥は2条一括沈線と2点一括刺突で施文し、鏡を貼り付けた痕跡を残すが、鏡自体は両面とも剥離する。後述する刺突文を施す不明形象埴輪片（図5-53-11）が壺鏡であるとする、剥離部の大きさから、この馬形埴輪に取り付けていた可能性がある。帯や鞍（前輪・後輪）は沈線と竹管文で施文し、鞍などの刺突文は2点一括である。脚端部は八字状に開き、一部縦方向に接合痕が観察できるので、切開再接合技法による可能性がある。体部両側面に2箇所ずつスカシ孔があり、頭部下側に2箇所、体部下側（腹部）に1箇所スカシ孔がある。頬部分は板状に作り出す。体部内面には補強突帯が貼り付けられる。

馬形埴輪5-2（図5-28～35）は、5-1とほぼ同じ形態・特徴をもつが、頭部は大きく欠損する。

鐘は貼り付けではなく、線刻によって輪鐘が表現される。また、鞍の前輪と後輪は沈線と竹管文で施文し、2条一括沈線と2点一括刺突文で施文される障泥を除いて、鞍や帯などは3点一括刺突文で施文する。障泥内部の表現も右側面は5-1と同様に2条一括沈線と2点一括刺突文で施文するが、左側面は1条ずつ描いた2条沈線内に2点一括刺突文を施すなど違いをみせる。杏葉の形態も5-1とは異なっている。尾は紐状のものを巻きつけて束ねている。脚端部は八字状に開き、内面には切開再接合技法の可能性がある縦方向の接合痕が観察できる。体部内面には補強突帯が貼り付けられる。両側面のほか、尻部、背中後ろ寄りの部分、腹部にスカシ孔が存在する。

東造出の翼を広げた鳥形埴輪に類似する尾(図5-36-1)とスカシ孔のある体部(図5-36-2~4)があり、体部や尾などには小孔が確認できる。図5-36-4は補強突帯があるため、羽が取り付く部分と推測でき、東造出の翼を広げた鳥形埴輪1-2と同様に体部側面にスカシ孔があることがわかる。これらは数個体とも考えられるが、重複する部位がないため1個体の可能性もある。

第4節 器財埴輪(図5-37~5-52)

西造出の器財埴輪には、胡篋形埴輪、鞍形埴輪、蓋形埴輪がある。胡篋形埴輪(図5-37・38)は2個体確認できる。胡篋形埴輪5-1は全身が復原でき、上半部には5本の矢羽の線刻がある。裏面には中央部の補強突帯と左右に円筒部から続く補強突帯があり、中央部の補強突帯から円筒部に取り付く棒状の補強材が確認できる。外周部は沈線と3点一括刺突文で施文する。矢の収納部は、外面に直弧文風の文様を施し、上端面は3点一括刺突文を施す。収納部外面には勾玉状金具の可能性がある貼り付けがあり、収納部外面上端には紐状の結び目が貼り付けられる。胡篋形埴輪5-2(図5-39)は、下半部を欠損しているが、矢羽の線刻は7本である。外周部の刺突文は、左側・上側には5-1と同様のやや大きめの刺突、右側には小さい刺突を用いて3点一括で施文される。裏面には縦方向に3条の補強突帯が貼り付けられる。同一個体と推測できる収納部があり、外面には直弧文風の文様、上端面には2点一括刺突文が確認できる。

鞍形埴輪5-1(図5-40・41)は、欠損部が多いものの、全体が把握できる個体である。矢尻を上に向けた5本の矢の線刻があり、外周は2条一括沈線と2点一括刺突文で施文する。上半部の内部は直弧文風の文様で、下半部は格子状の文様となる。裏面には補強突帯が確認できる。

蓋形埴輪の立飾部は、3条一括沈線で、胎土は明褐色のもの(図5-42~48)と、1条ずつの沈線で、外周は2条帯、内部は3~4条帯で構成し、黄褐色の胎土で、表面にハケ目を残し、幅広のもの(図5-49・50)の2種類が確認できる。笠部(図5-51・52)も東造出と同様の形態である。

第5節 不明形象埴輪・形象埴輪基部(図5-53)

線刻のある細長い板状の個体(図5-53-1~4)は、人物埴輪などの帯と推測できるが、屈曲部がある1は人物の垂髪の可能性もあり、2・3は一端が三角形で、帯の先端部と推察できる。図5-53-5は細い帯状の粘土を輪にして押しつぶして作り出すもので、人物や馬などに取り付く部材であろう。図5-53-6~8は美豆良の可能性があり、6・7は形状から同一個体と推測できる。図5-53-9は家形埴輪の基部の可能性があり、図5-53-10・11は2点一括刺突文を施す個体で、10は尖った帽子の先端、11は馬形埴輪の壺鐘の可能性が考えられる。西造出では形象埴輪の基部は現地調査で複数確認されたが、実測できたのは3点のみである(図5-53-12~14)。

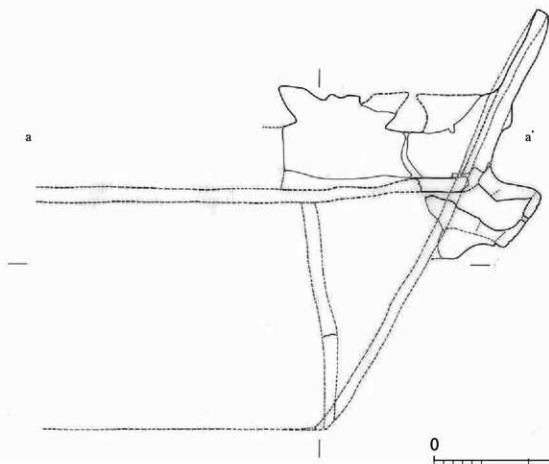
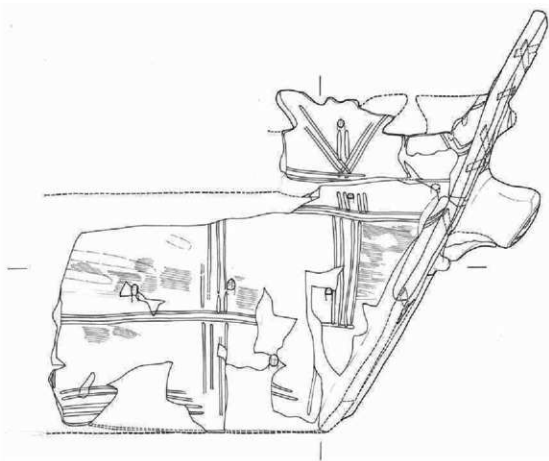
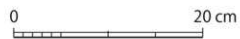
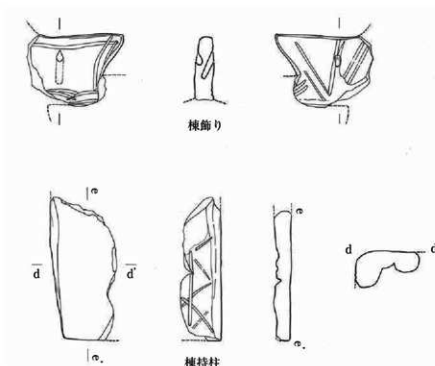
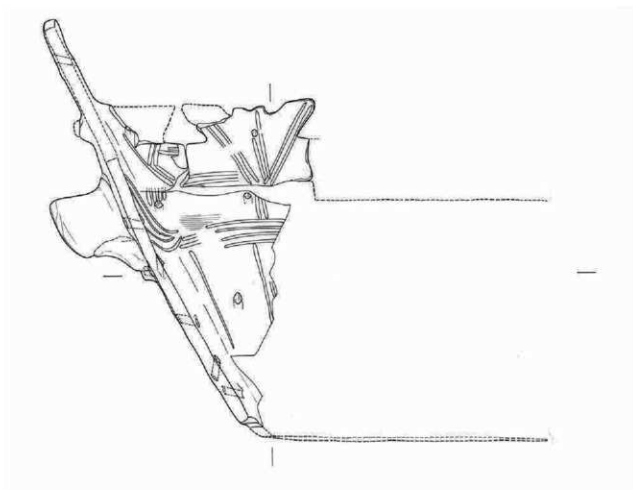


图 5-1 西造出 冢形埴輪 5-1①



(S=1/4)

图 5-2 西造出 家形植輪 5-1②

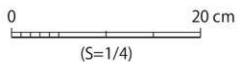
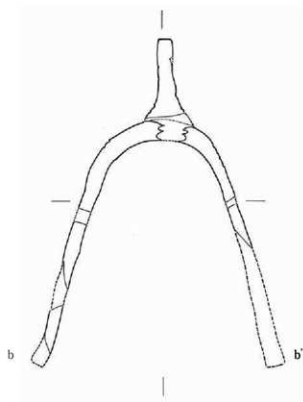
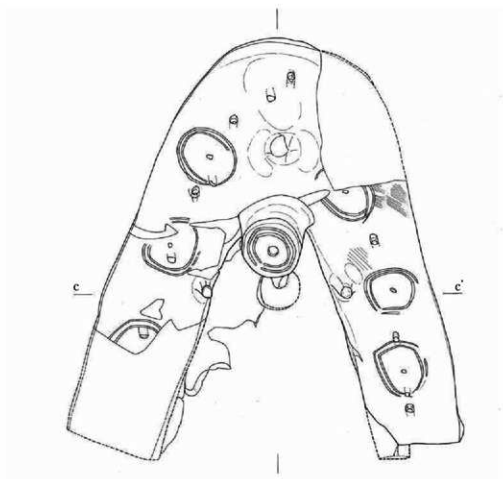


图 5-3 西造出 冢形埴輪 5-1③

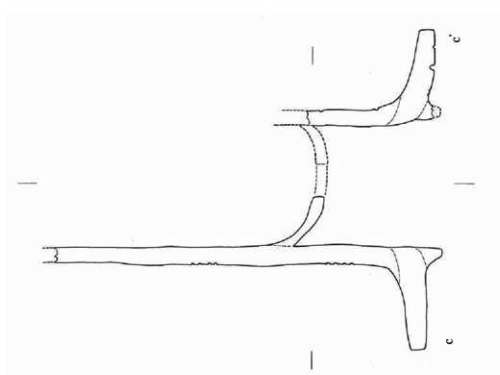
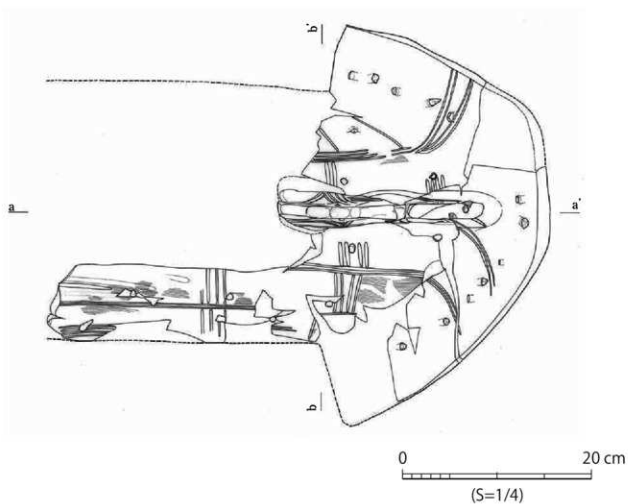


图 5-4 西造出 家形埴輪 5-1④

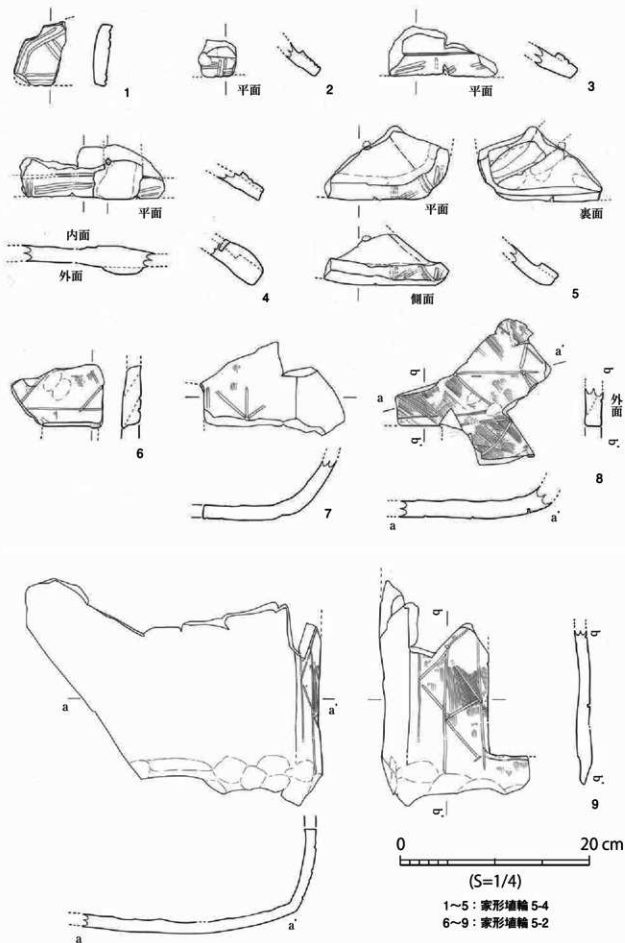


圖 5-5 西造出 家形埴輪 5-2、5-4

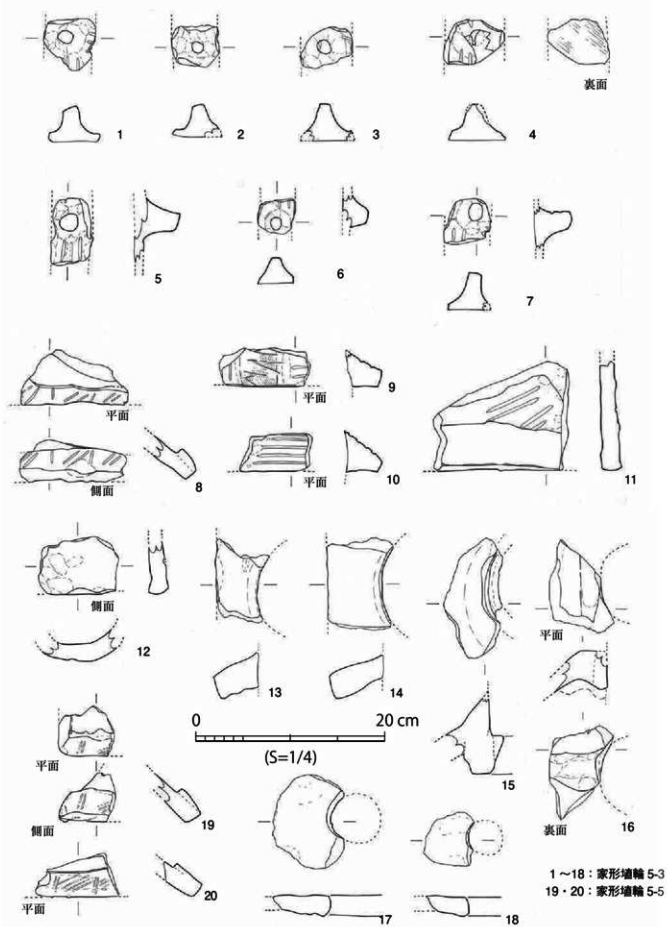


图 5-6 西造出 家形埴輪 5-3、5-5

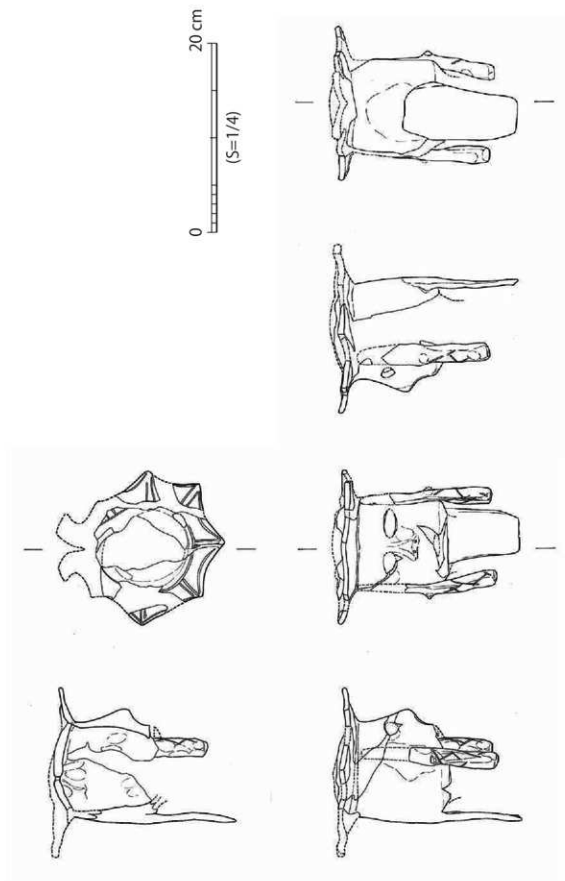


図 5-7 西造出 人物埴輪（双脚輪状文形冠帽をかぶった人物 5-1）

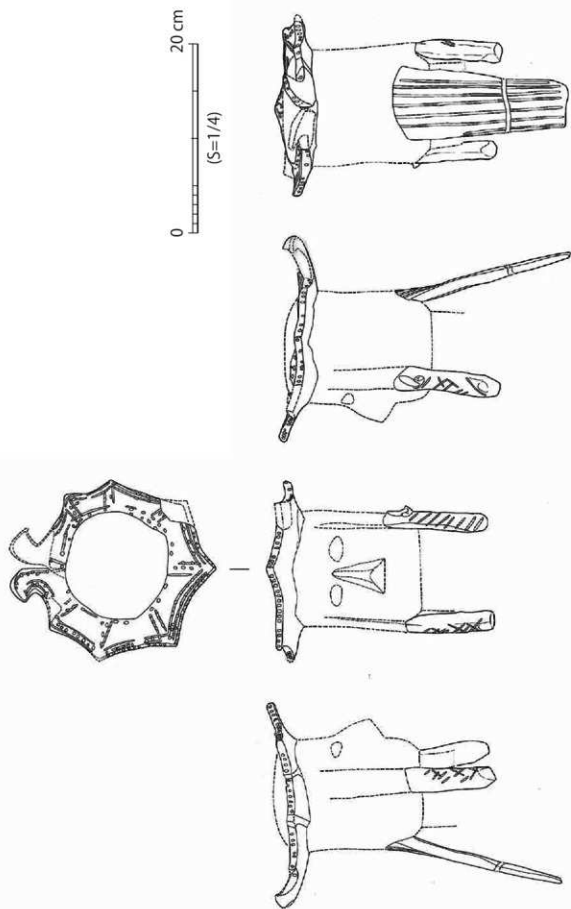


图 5-8 西造出 人物埴輪（双脚輪状文形冠帽をかぶった人物 5-2）

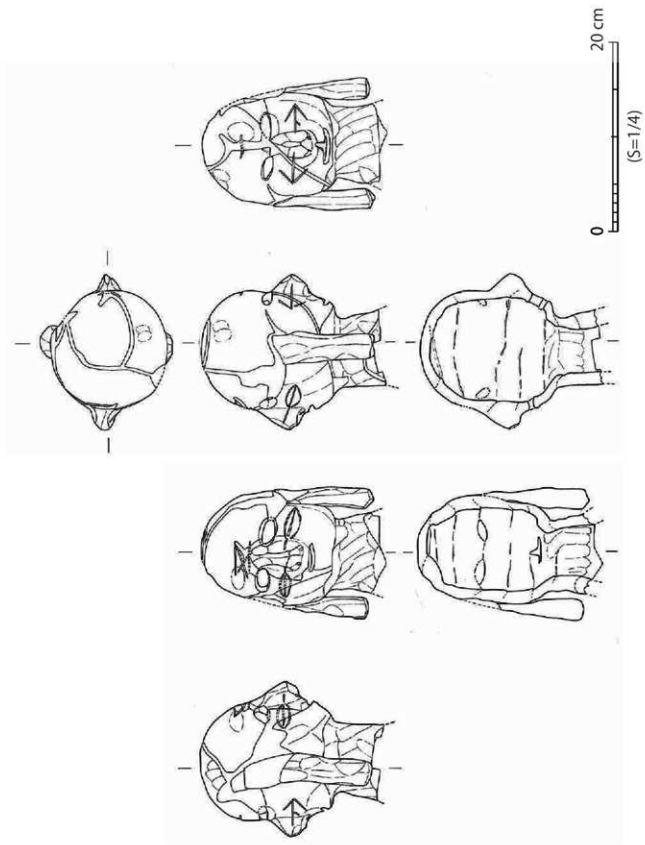


图 5-9 西造出 两面人物埴輪

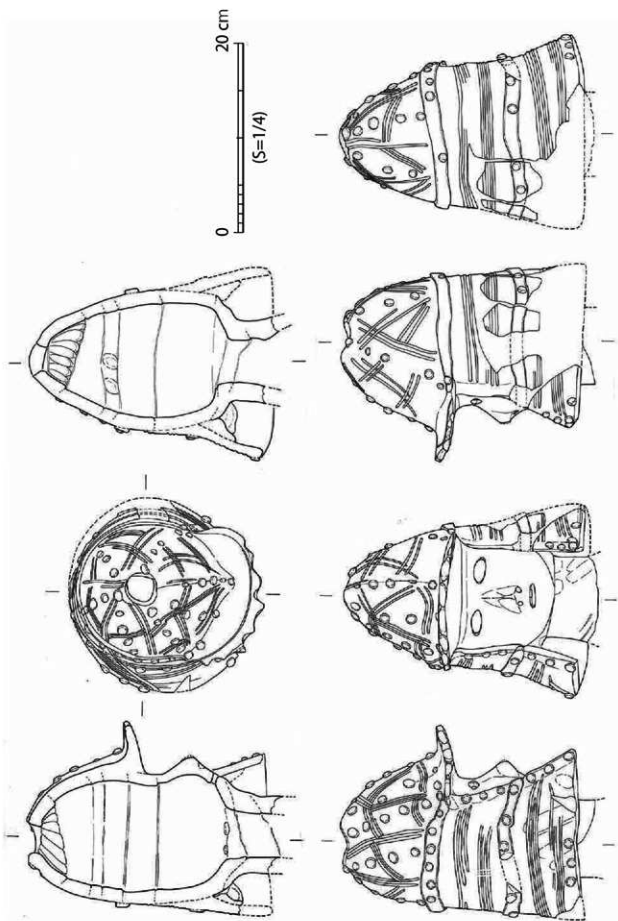


图 5-10 西造出 人物埴輪 (武人頭部)

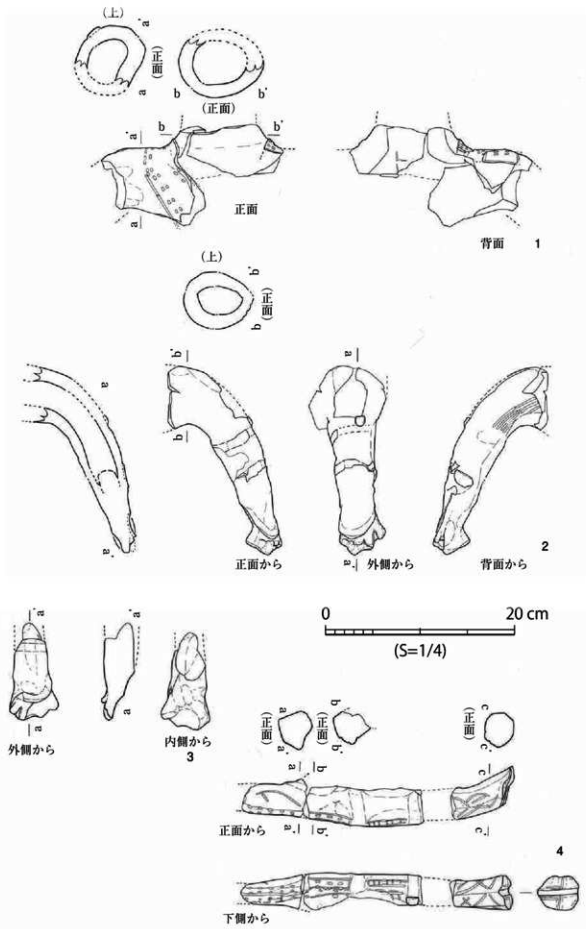


図5-11 西造出 人物埴輪 (盛装男子・大刀)

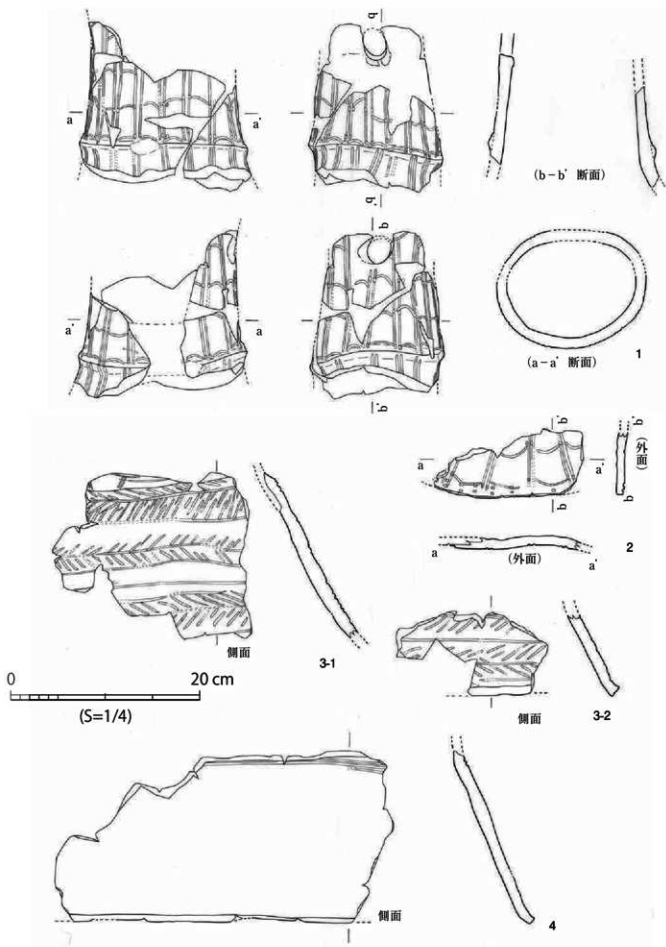


图 5-12 西造出 人物埴輪 (武人ほか)

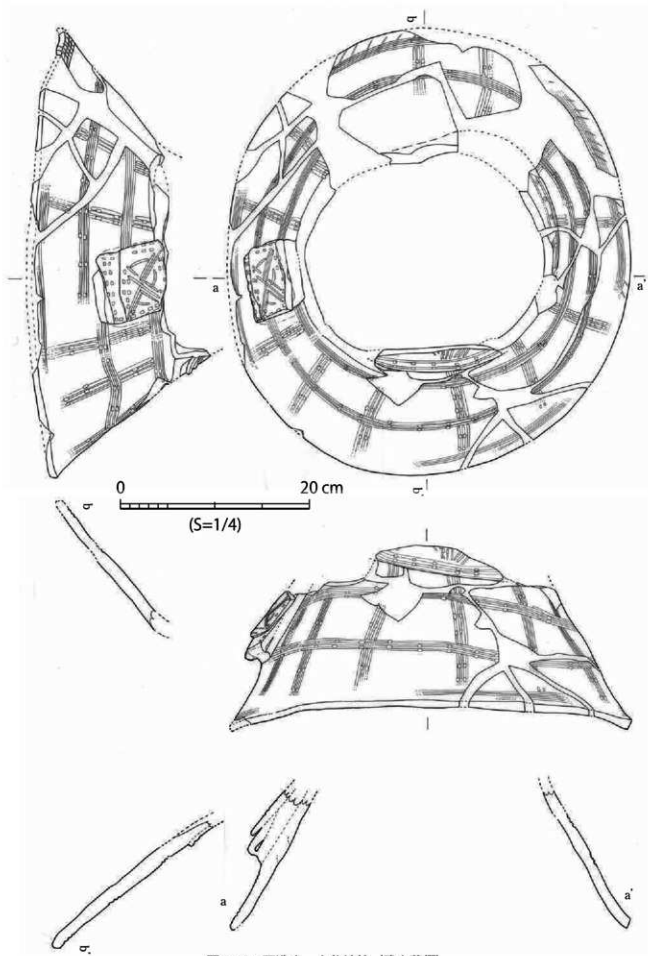


图 5-13 西造出 人物埴輪 (武人草摺)

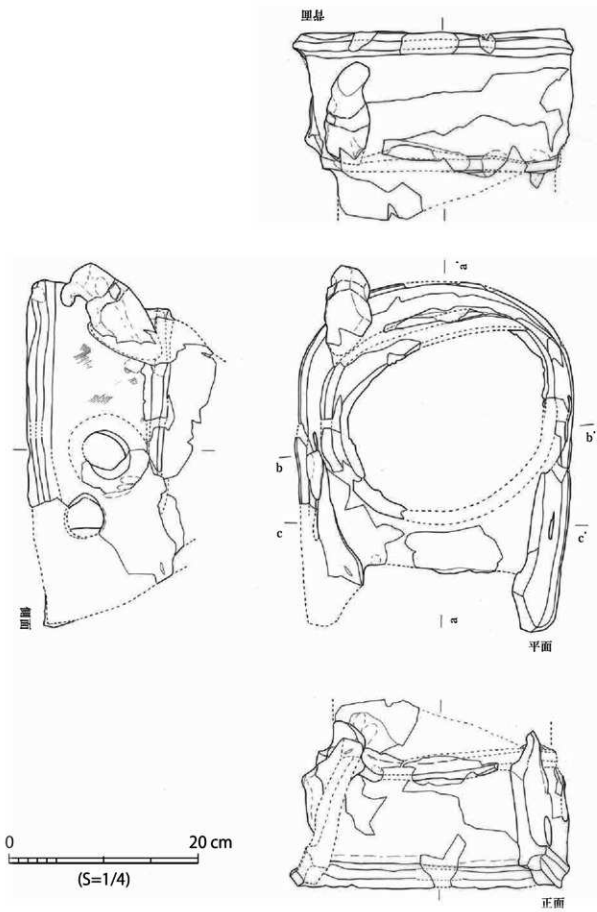


图 5-14 西造出 人物埴輪 (人物埴輪基部①)

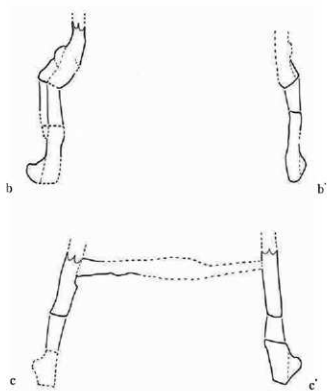
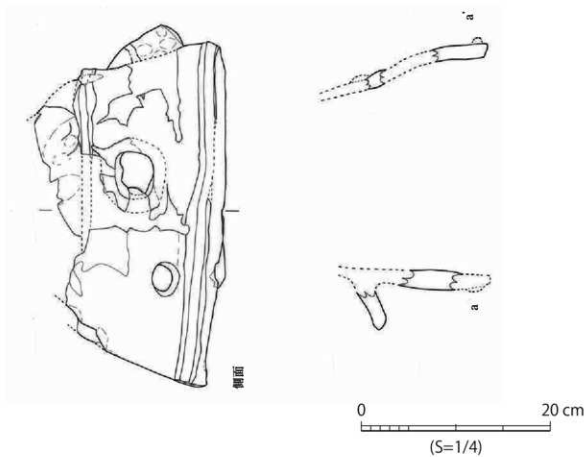


图 5-15 西造出 人物埴輪 (人物埴輪基部②)

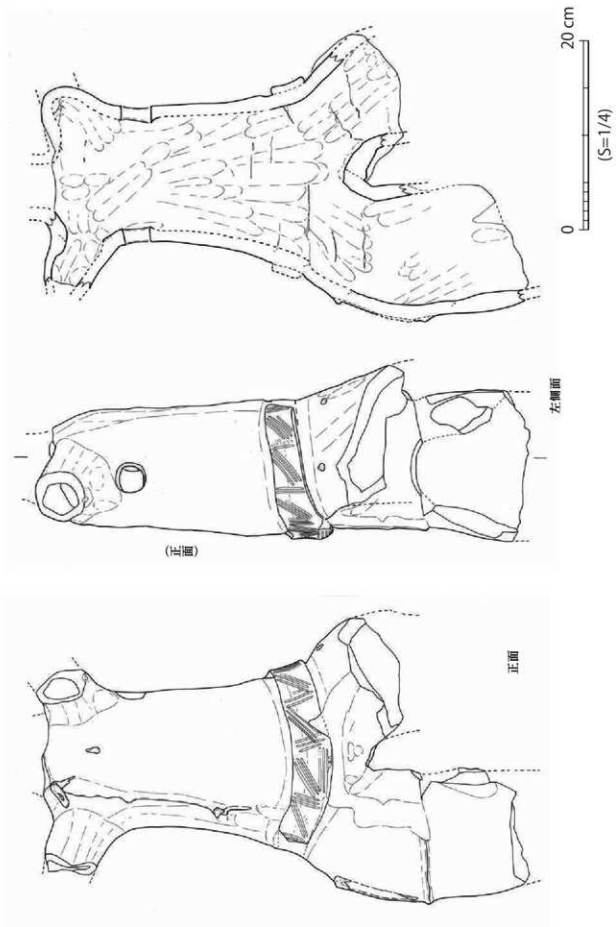


図 5-16 西造出 人物埴輪 (両手をあげる人物①)

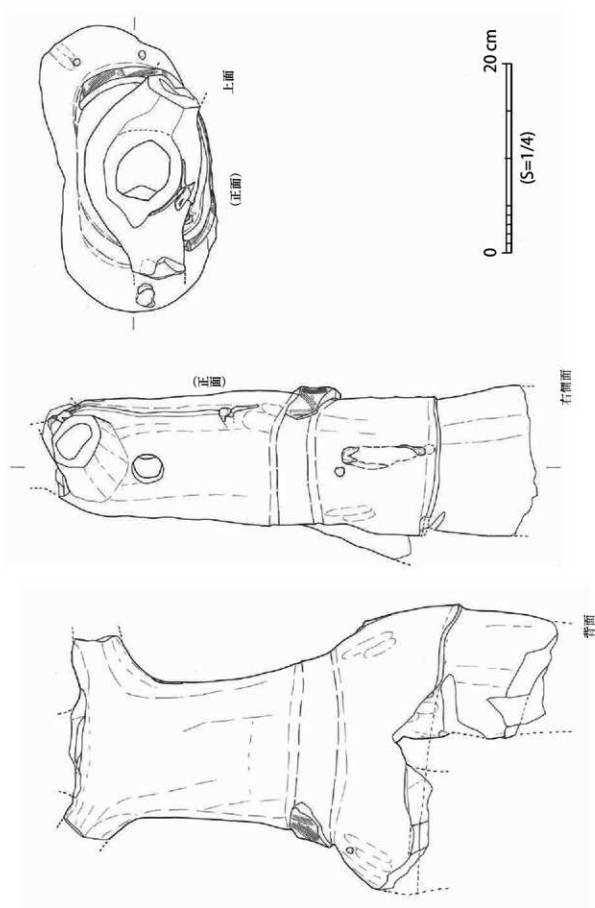
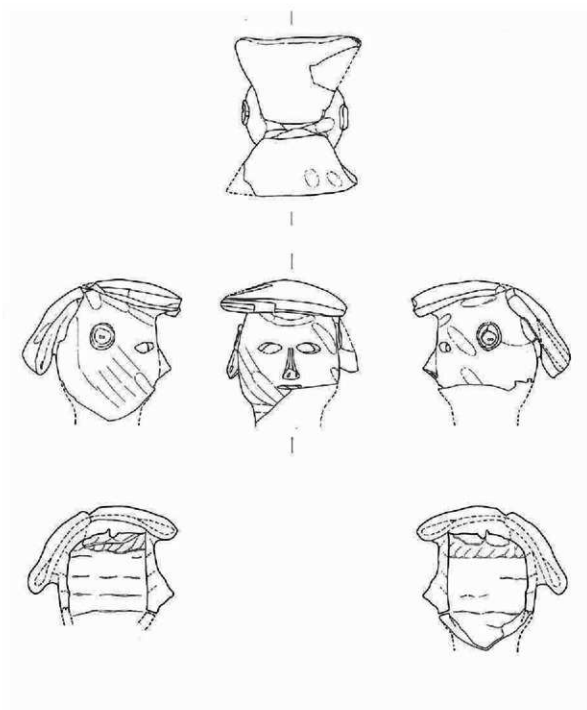
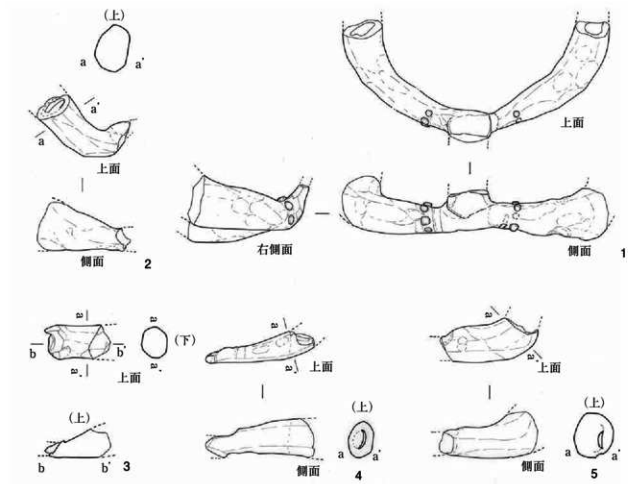


図 5-17 西造出 人物埴輪 (両手をあげる人物②)



0 20 cm
(S=1/4)

图 5-18 西造出 人物埴輪 (巫女頭部)



0 20 cm
(S=1/4)

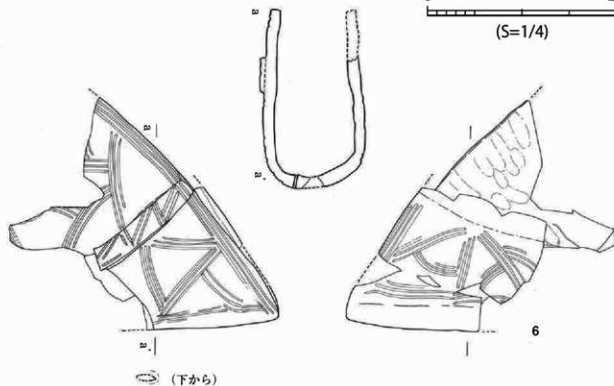


图5-19 西造出 人物埴輪 (巫女)

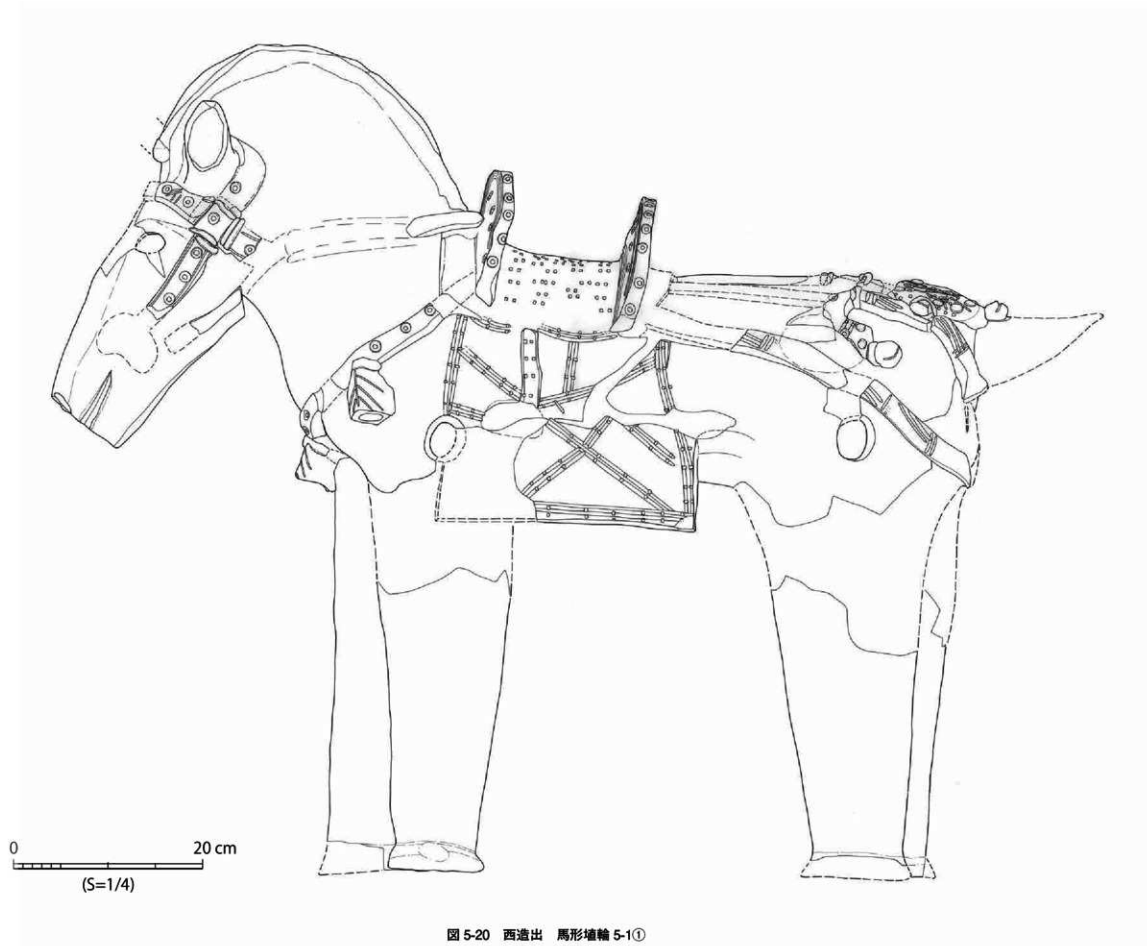


图 5-20 西遼出 馬形璽輪 5-1①

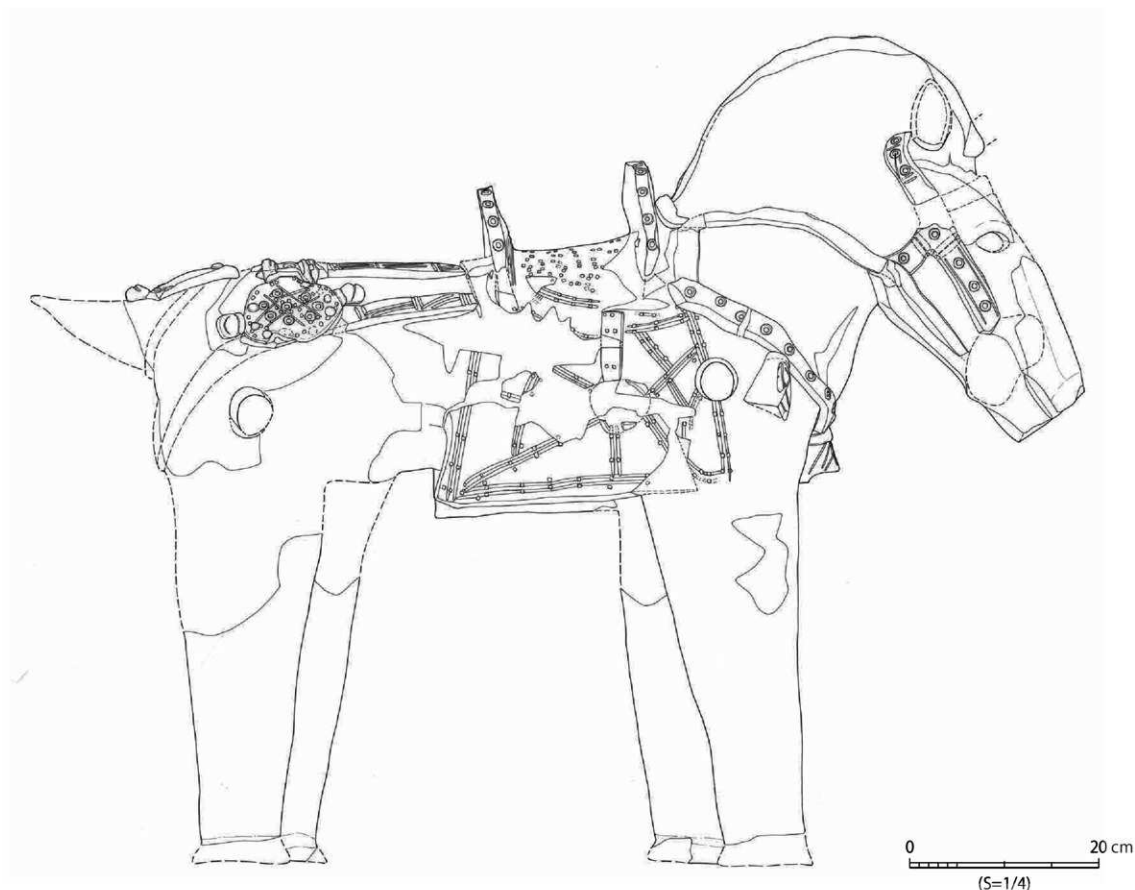


图 5-21 西造出 馬形植輪 5-1②

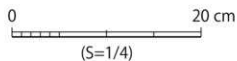


图 5-22 西遼出 馬形埴輪 5-1③

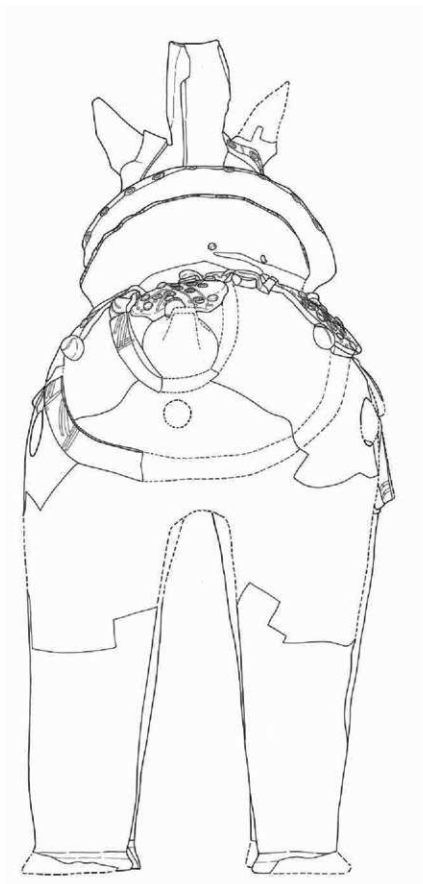


图 5-23 西造出 馬形埴輪 5-1④

0 20 cm
(S=1/4)

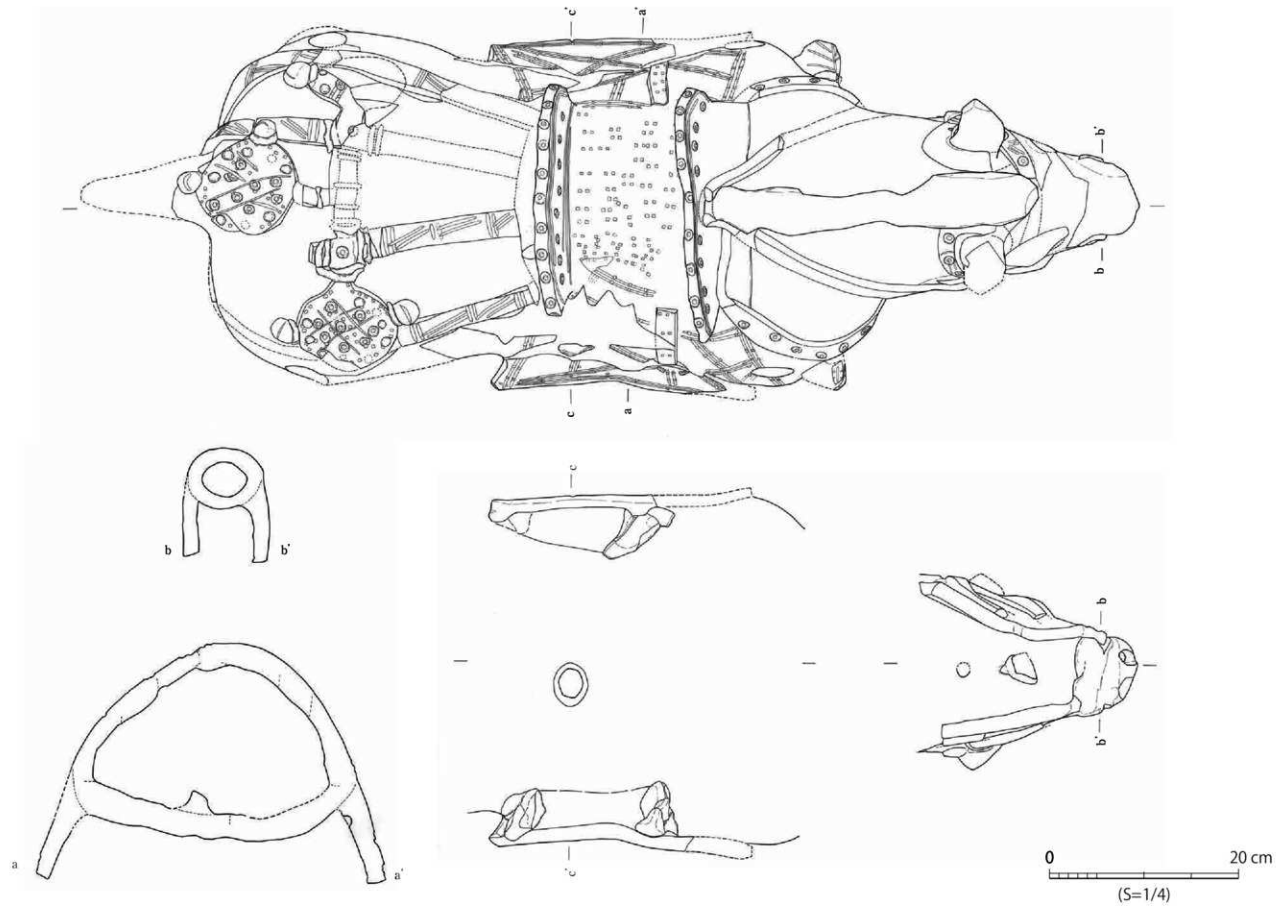


图 5-24 西造出 馬形埴輪 5-1⑤

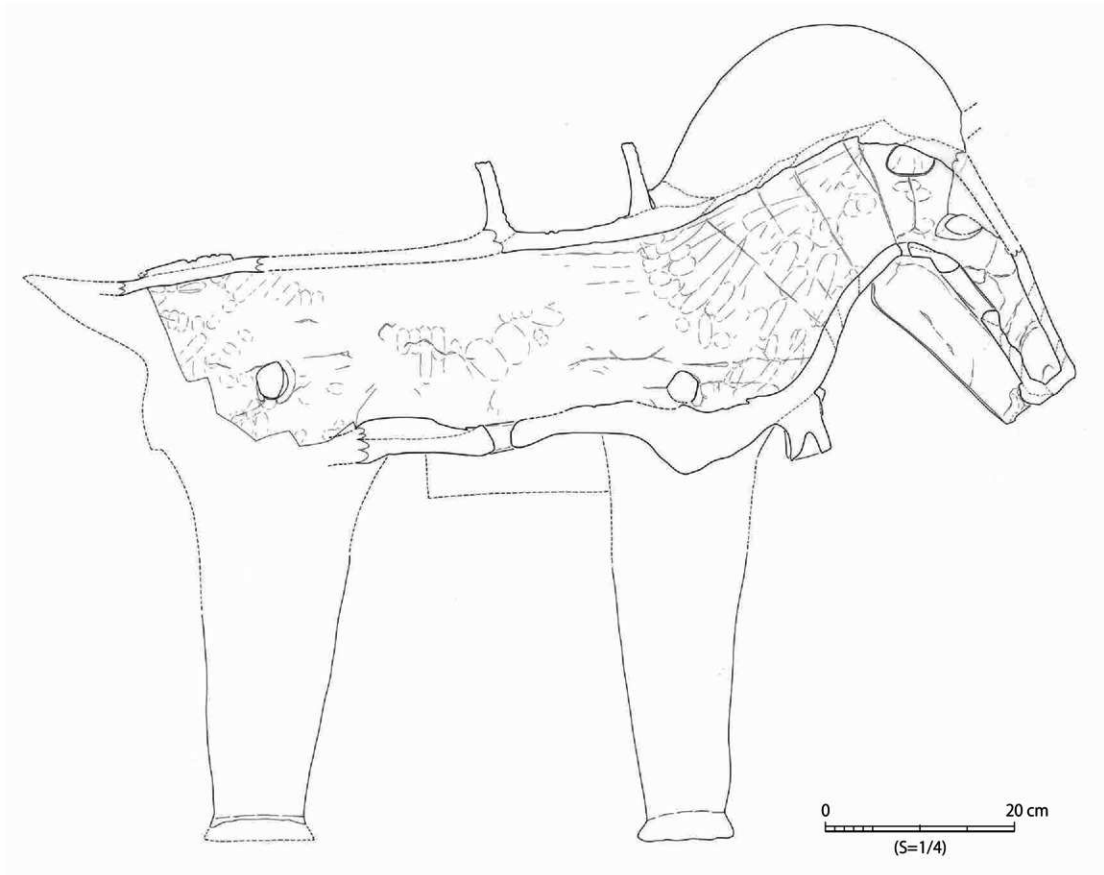


图 5-25 西造出 馬形埴輪 5-1⑥

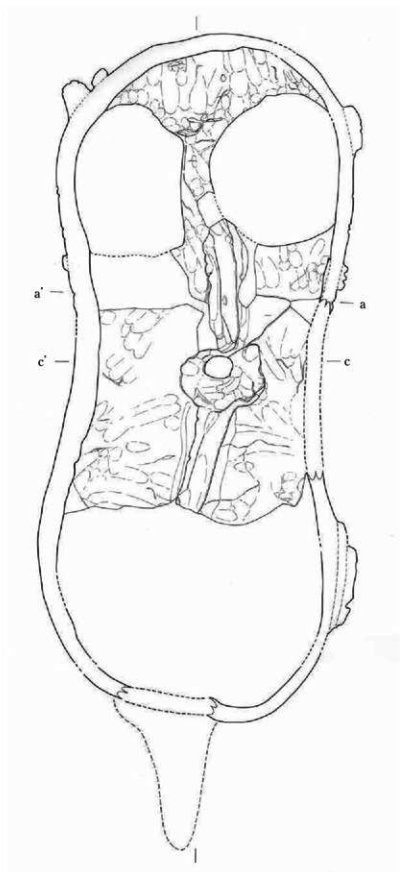


図 5-26 西造出 馬形埴輪 5-1⑦

0 20 cm
(S=1/4)

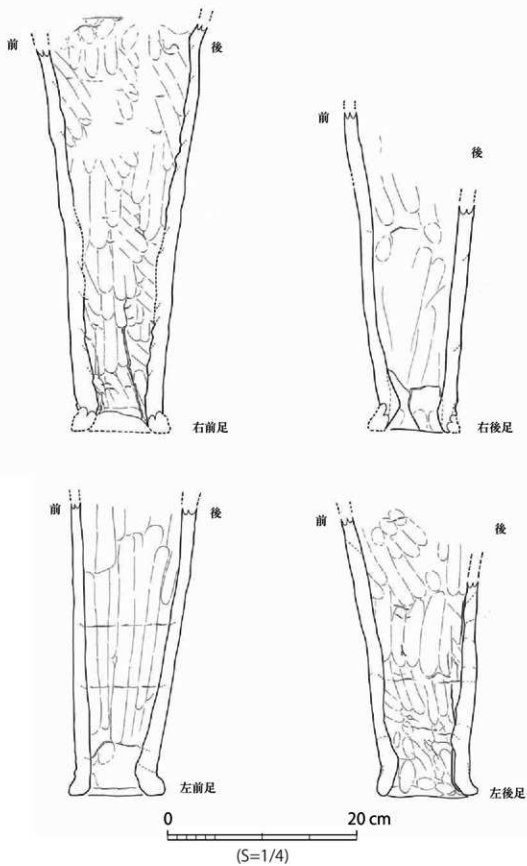


圖 5-27 西造出 馬形埴輪 5-1⑧

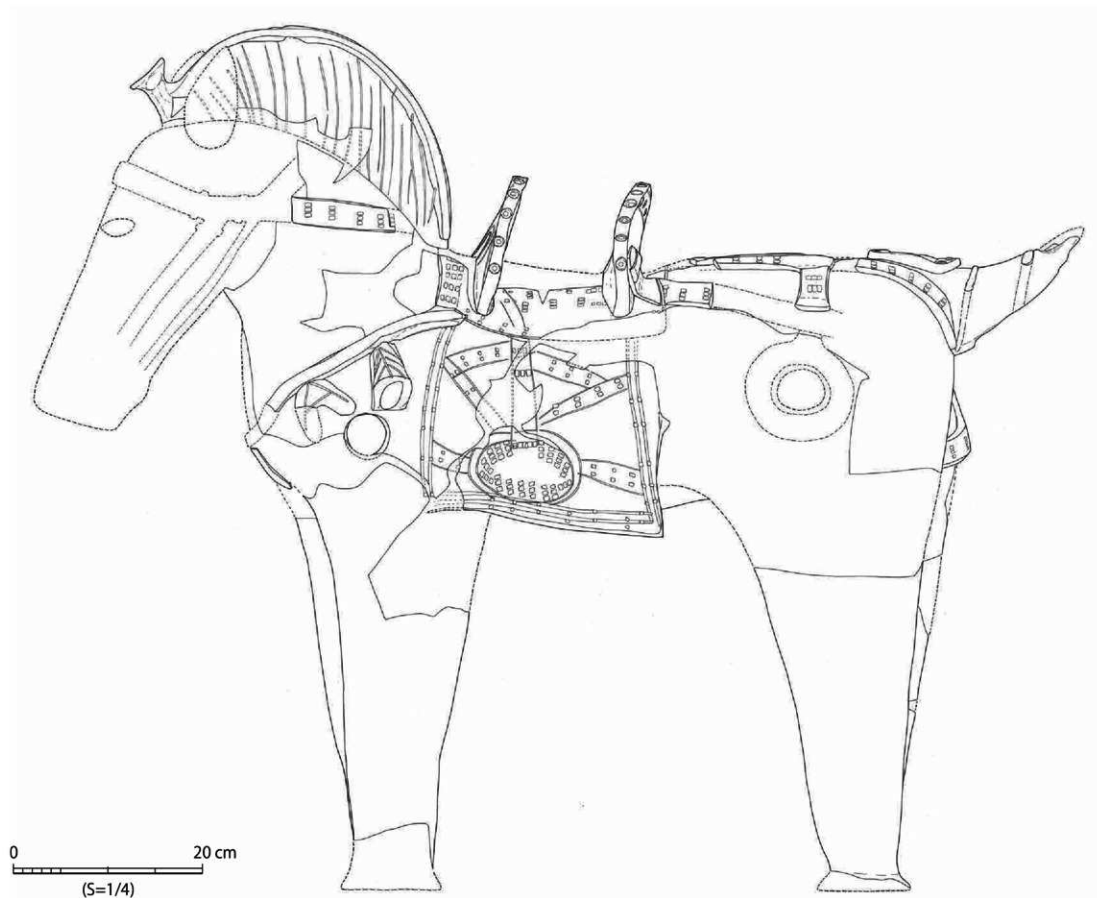


图 5-28 西造出 馬形埴輪 5-2①

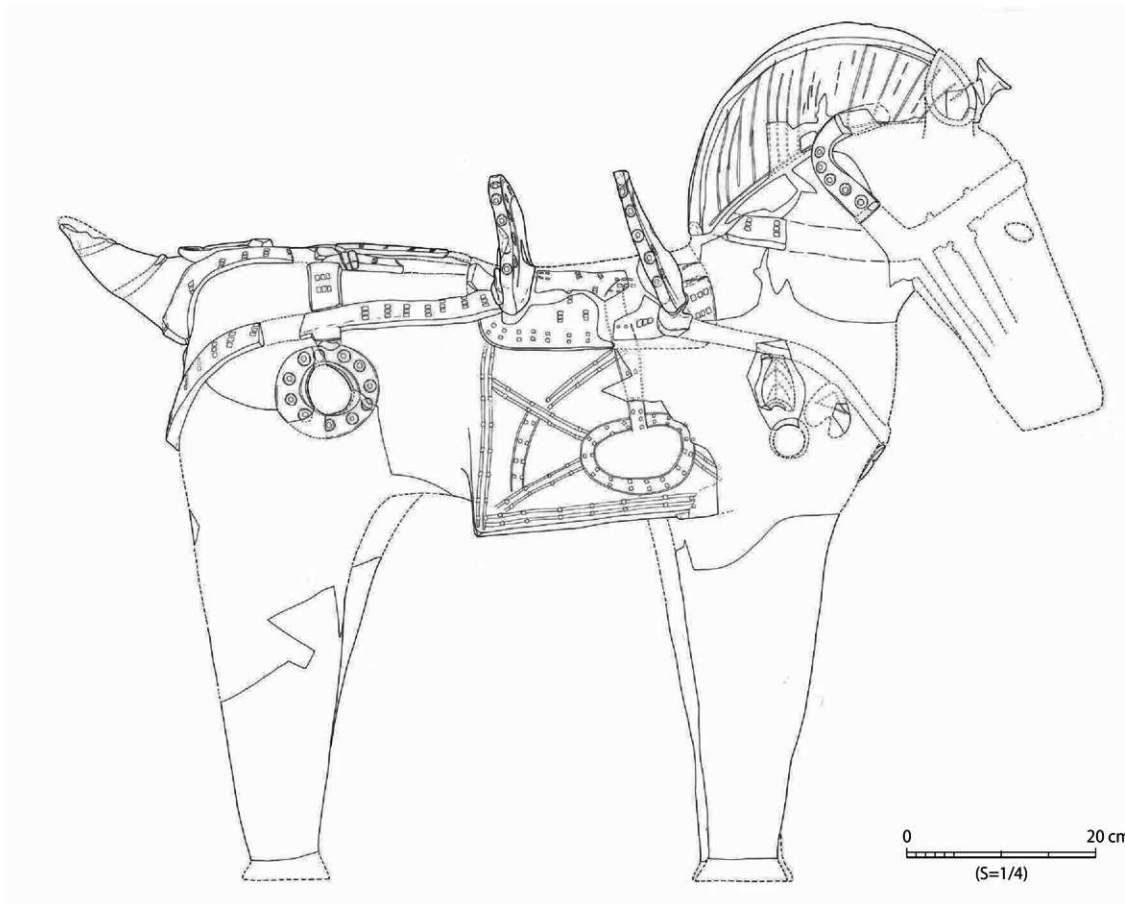


图 5-29 西造出 馬形埴輪 5-2②

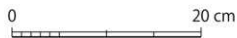
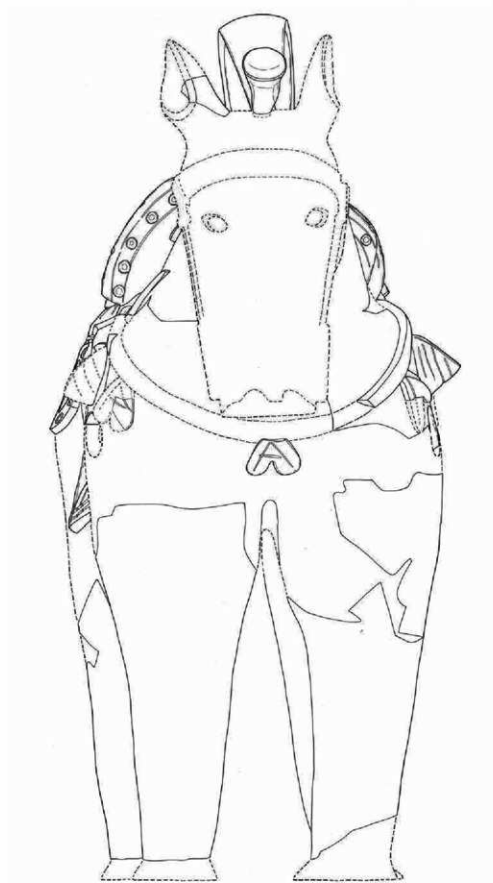
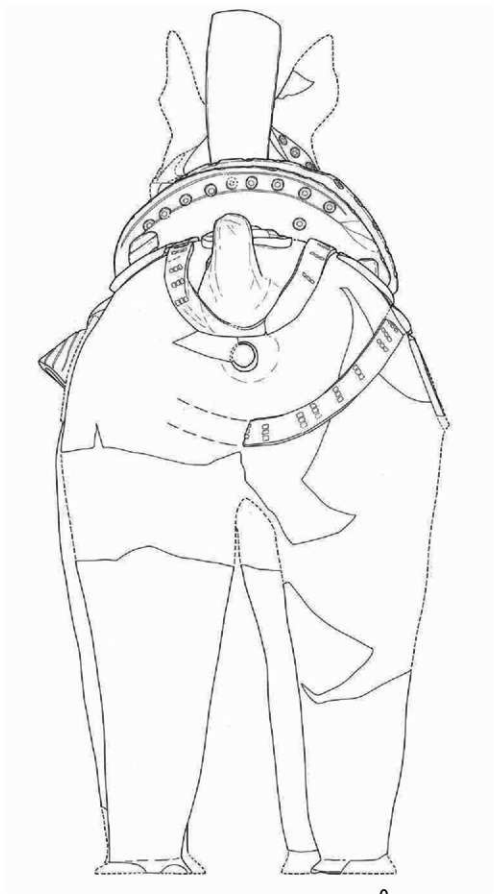


図 5-30 西造出 馬形埴輪 5-2③

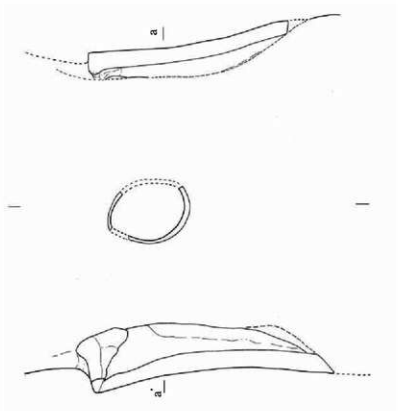
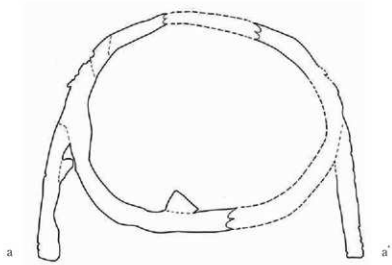
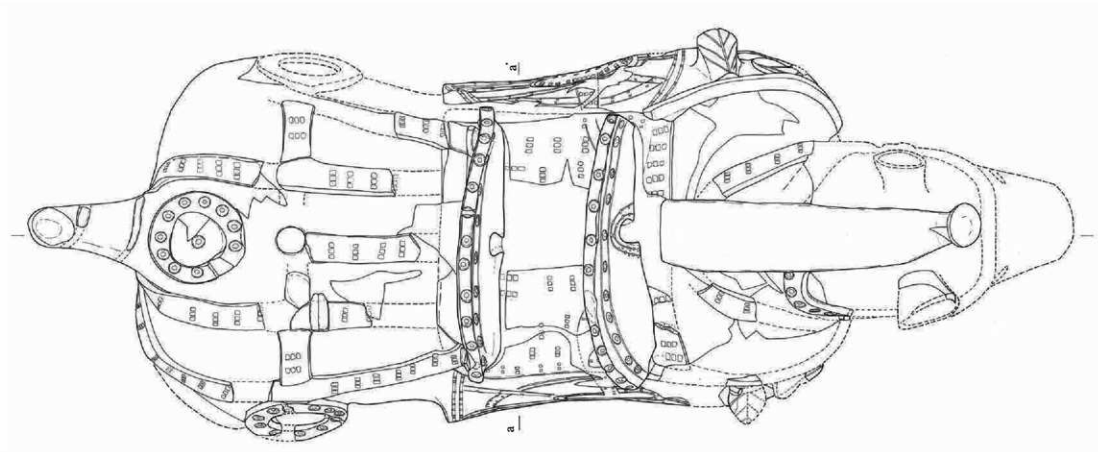
(S=1/4)



0 20 cm

图 5-31 西造出 馬形埴輪 5-2④

(S=1/4)



0 20 cm
(S=1/4)

图 5-32 西造出 馬形埴輪 5-2⑤

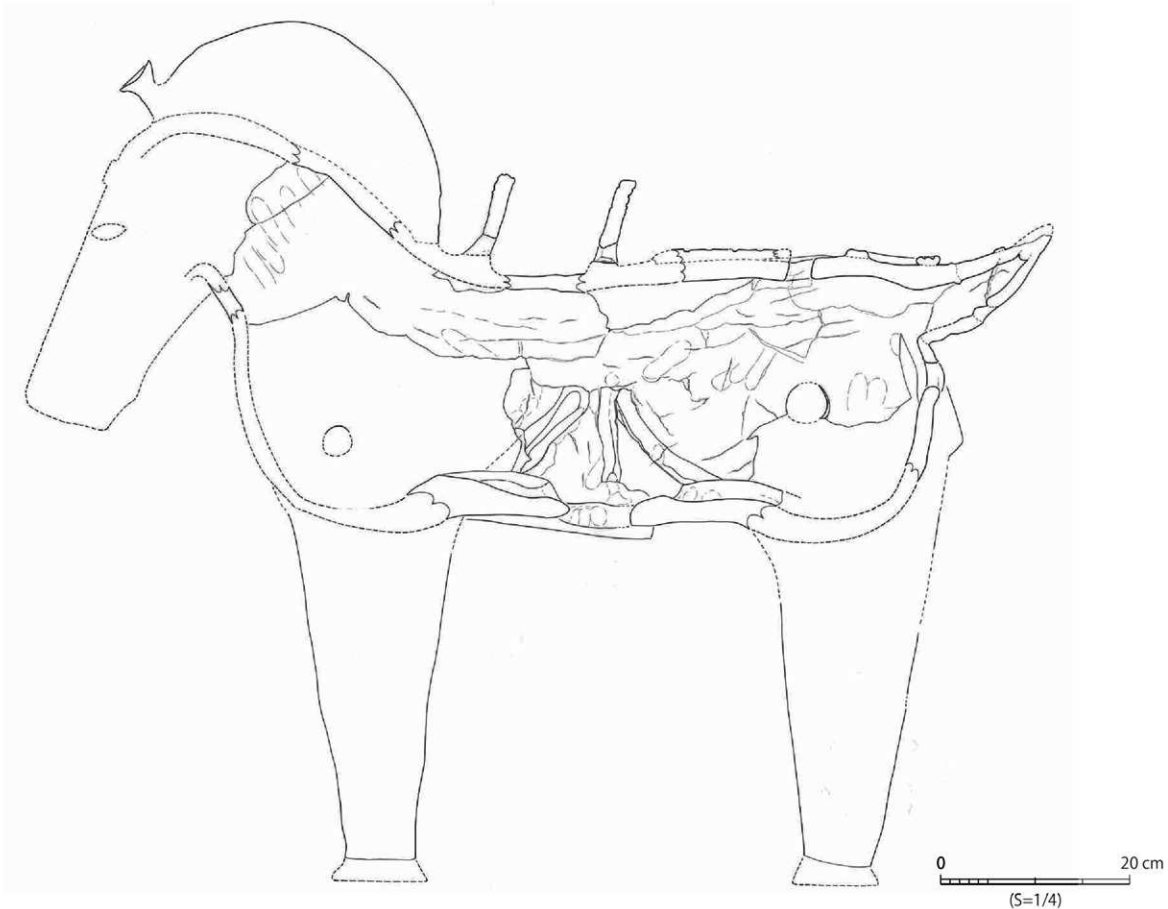


图 5-33 西造出 馬形埴輪 5-2⑥

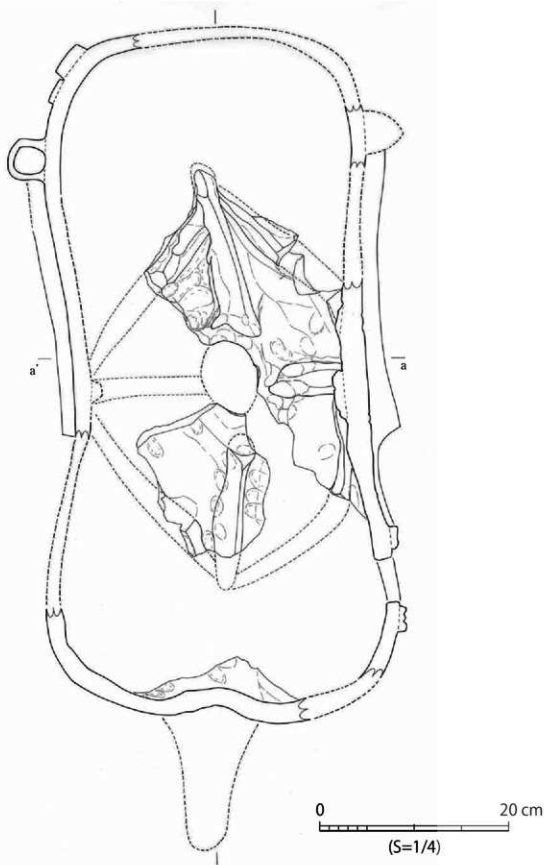


圖 5-34 西遺出 馬形埴輪 5-2⑦

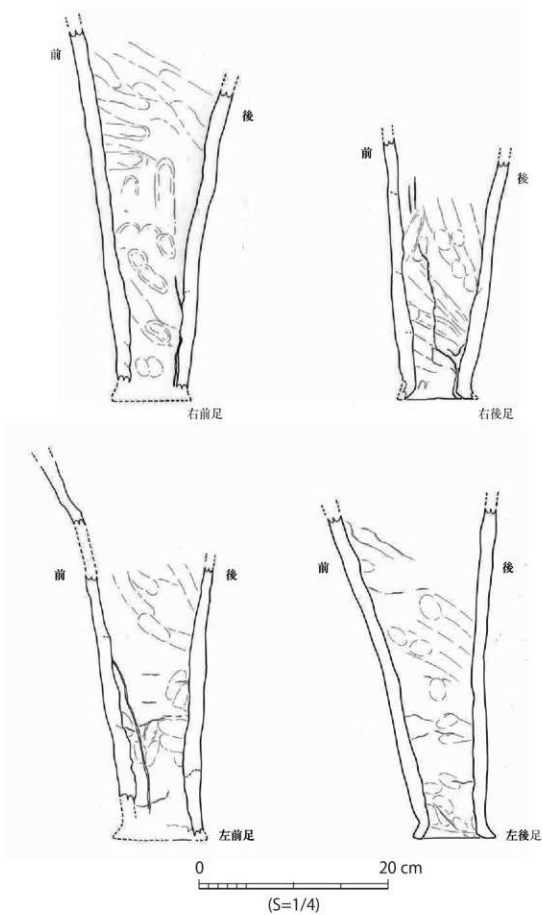
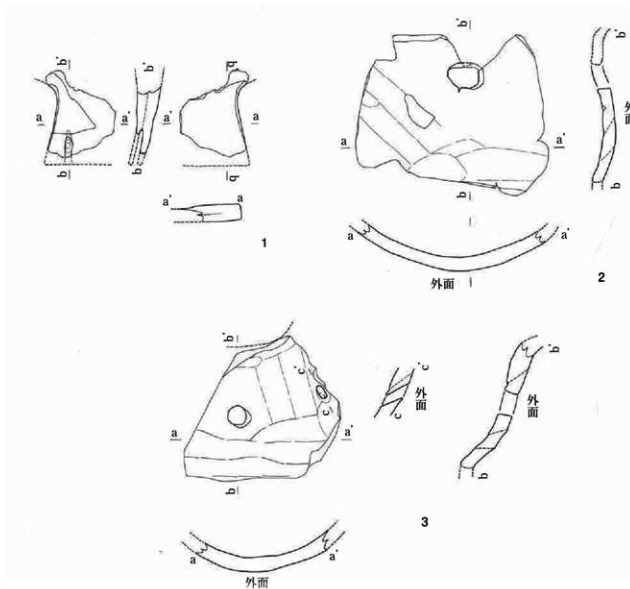


圖 5-35 西造出 馬形埴輪 5-2⑧



0 20 cm
(S=1/4)

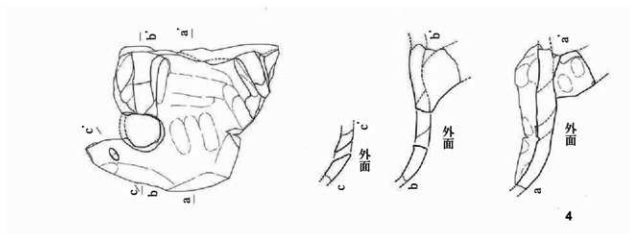


図 5-36 西造出 翼を広げた鳥形埴輪

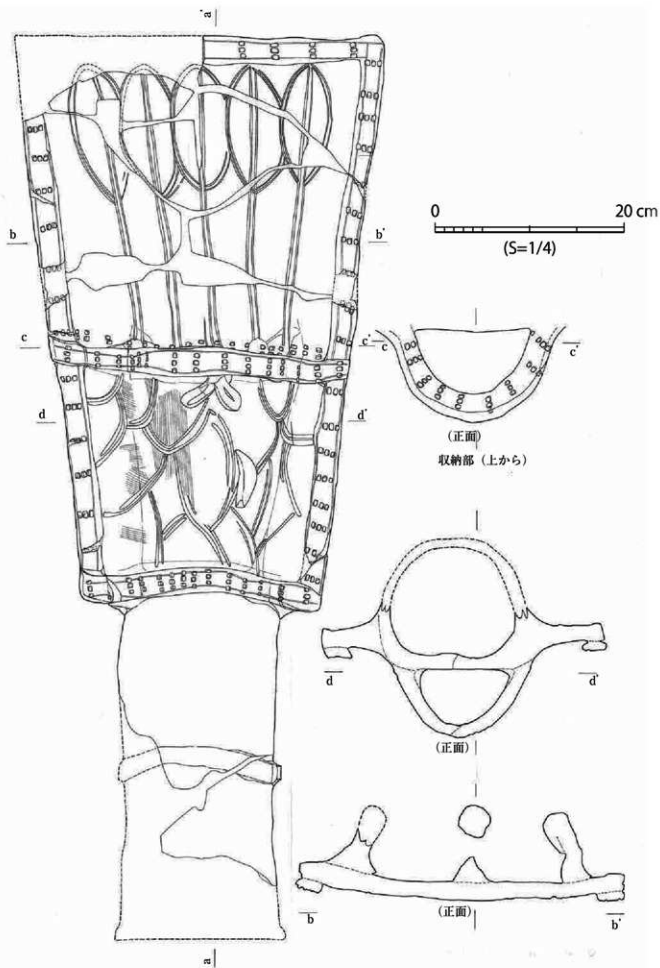


图 5-37 西造出 胡録形埴輪 5-1①



图 5-38 西造出 胡鐐形埴輪 5-1②(裏面・断面)

(S=1/4)

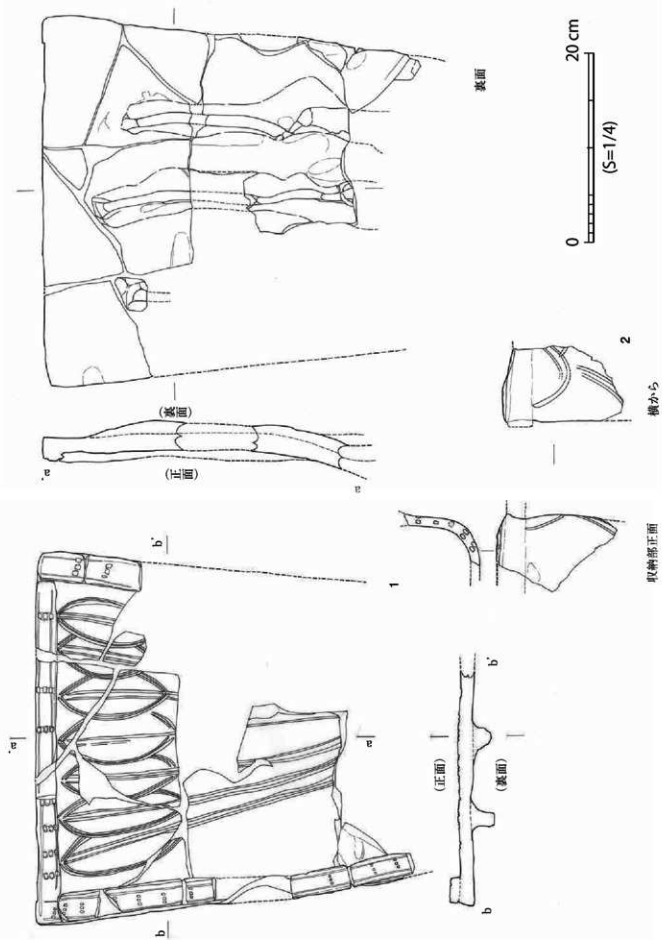


图 5-39 西造出 胡錄形埴輪 5-2

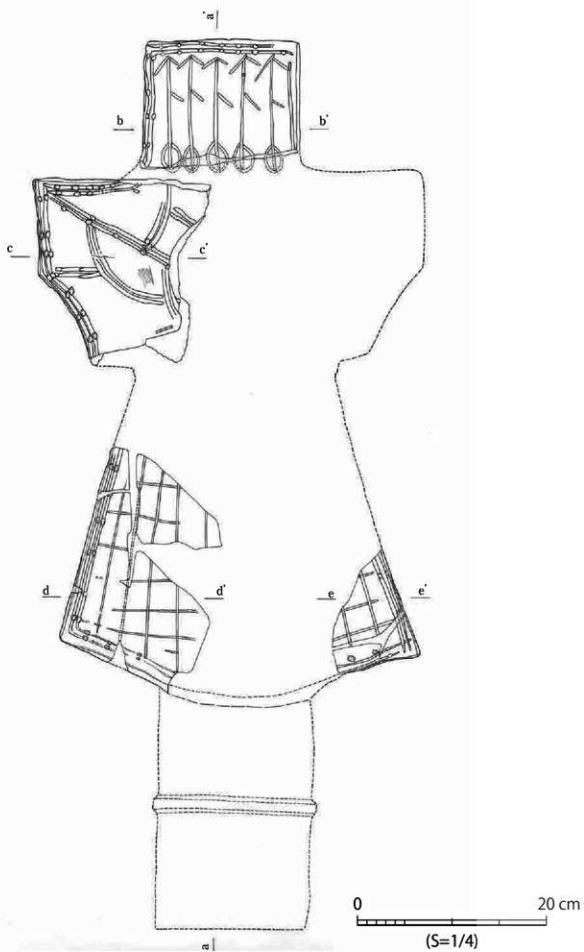


图 5-40 西造出 鞍形埴輪 5-1①

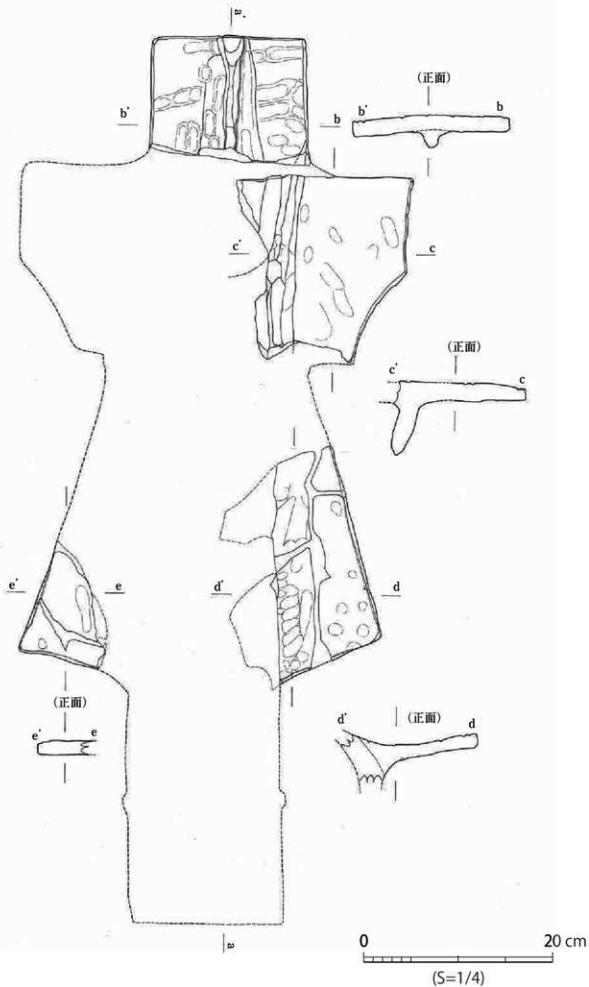


图 5-41 西造出 轂形埴輪 5-1②(裏面)

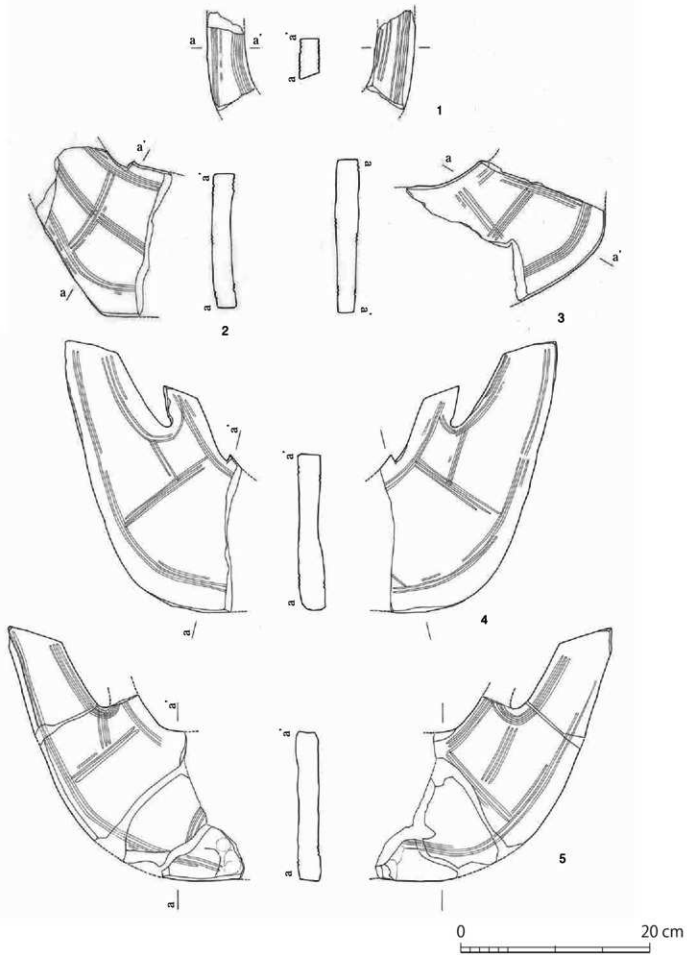


图 5-42 西造出 蓋形埴輪①

(S=1/4)

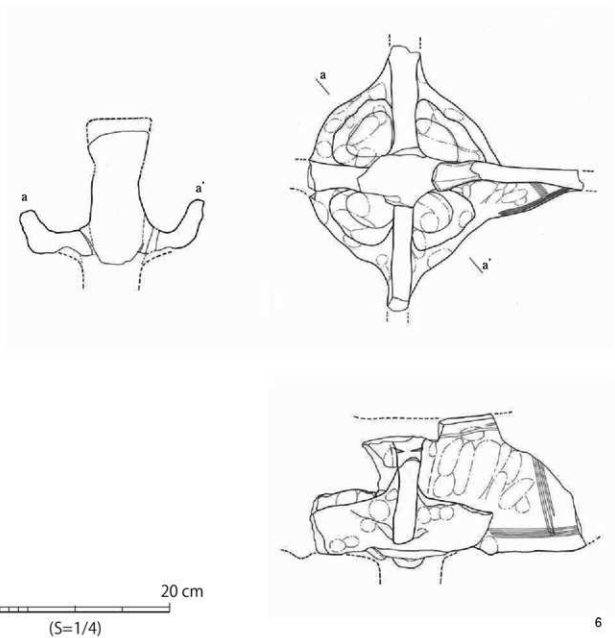


图 5-43 西造出 蓋形埴輪②

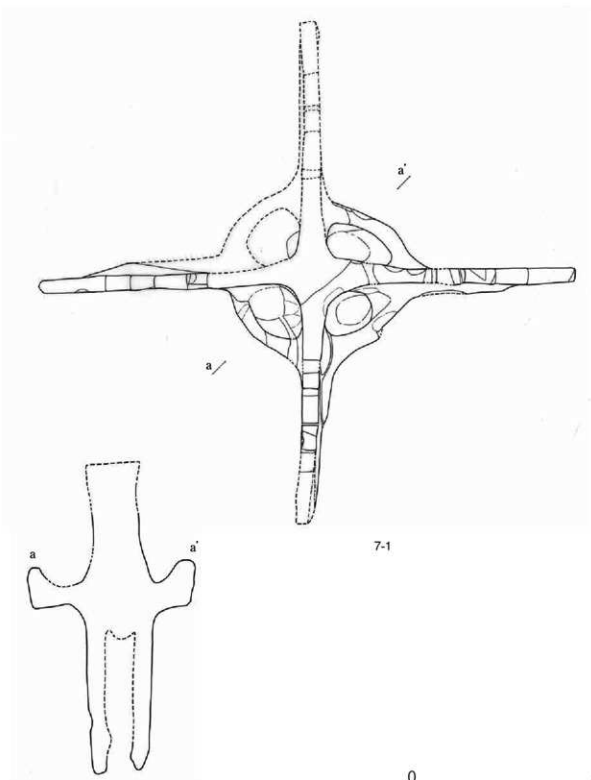


图 5-44 西造出 蓋形埴輪③

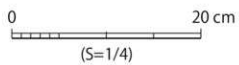
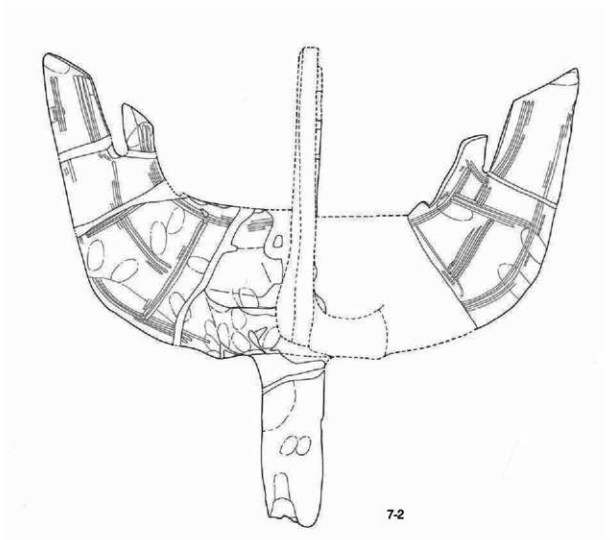


图 5-45 西造出 蓋形埴輪④

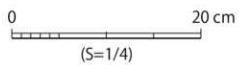
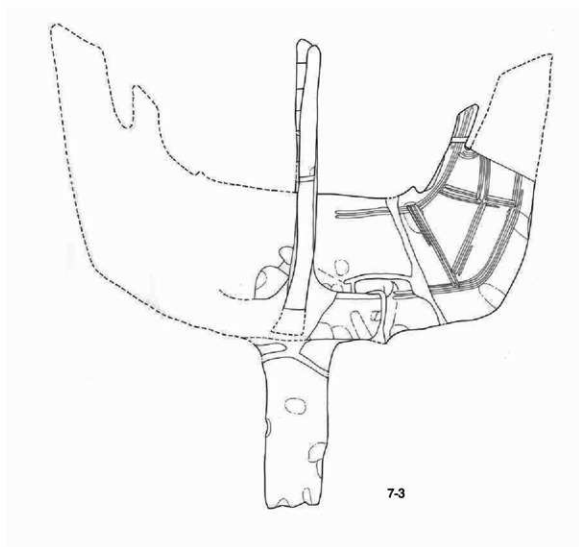


图 5-46 西造出 蓋形埴輪⑤

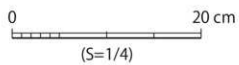
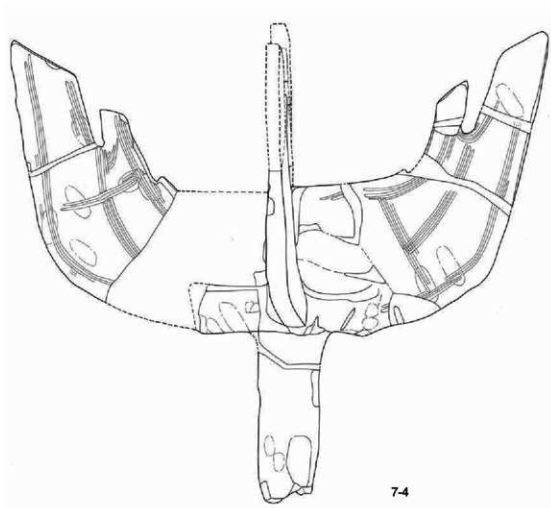


图 5-47 西造出 蓋形埴輪⑥

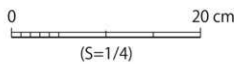
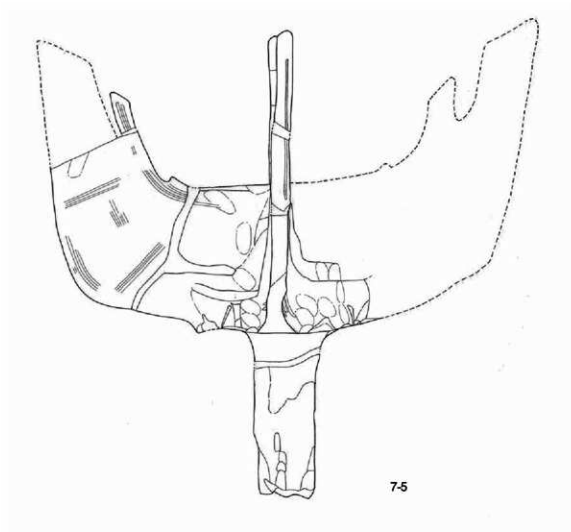


图 5-48 西造出 蓋形埴輪⑦

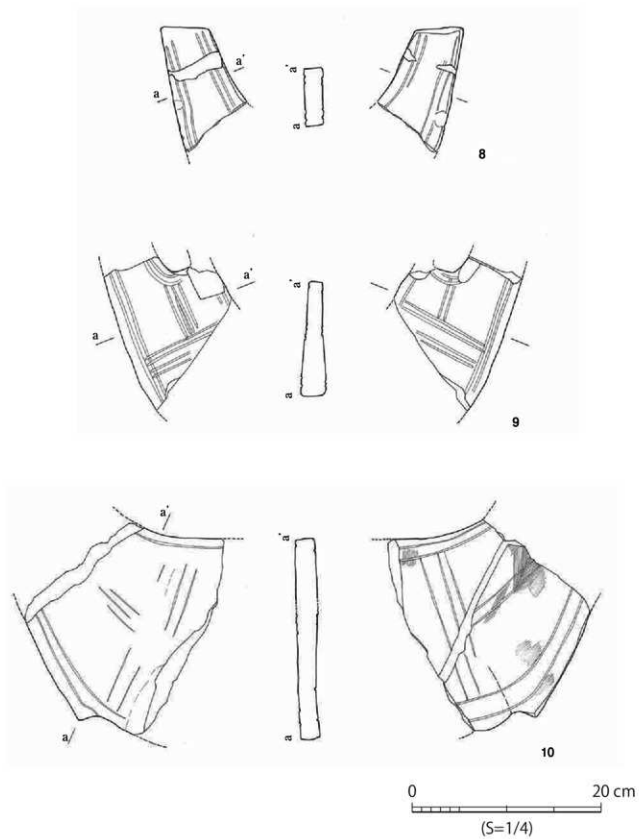
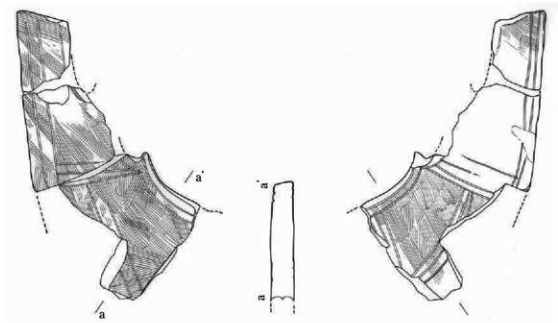
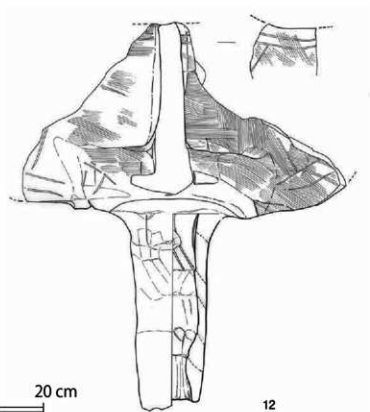


图 5-49 西造出 蓋形埴輪⑧



11



12

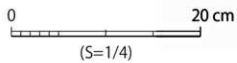
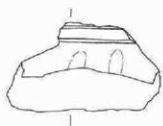
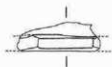


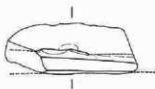
图 5-50 西造出 蓋形埴輪⑨



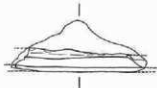
13



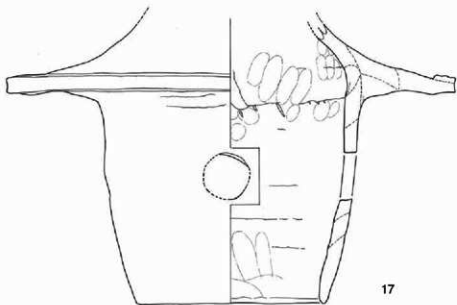
14



15



16



17

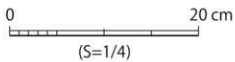


图 5-51 西造出 蓋形埴輪^⑩

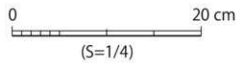
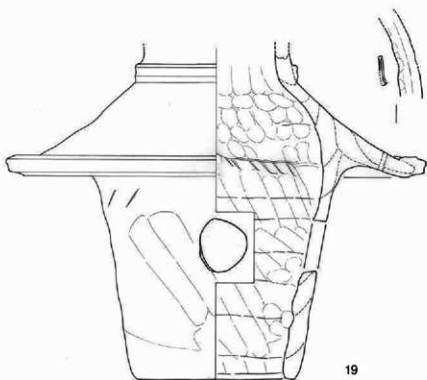
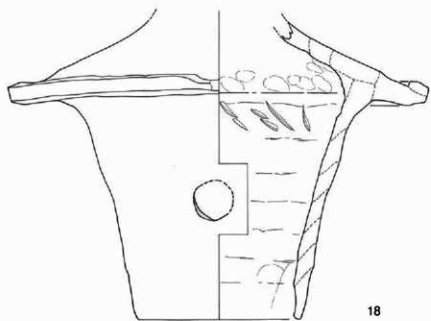


图 5-52 西造出 蓋形埴輪①

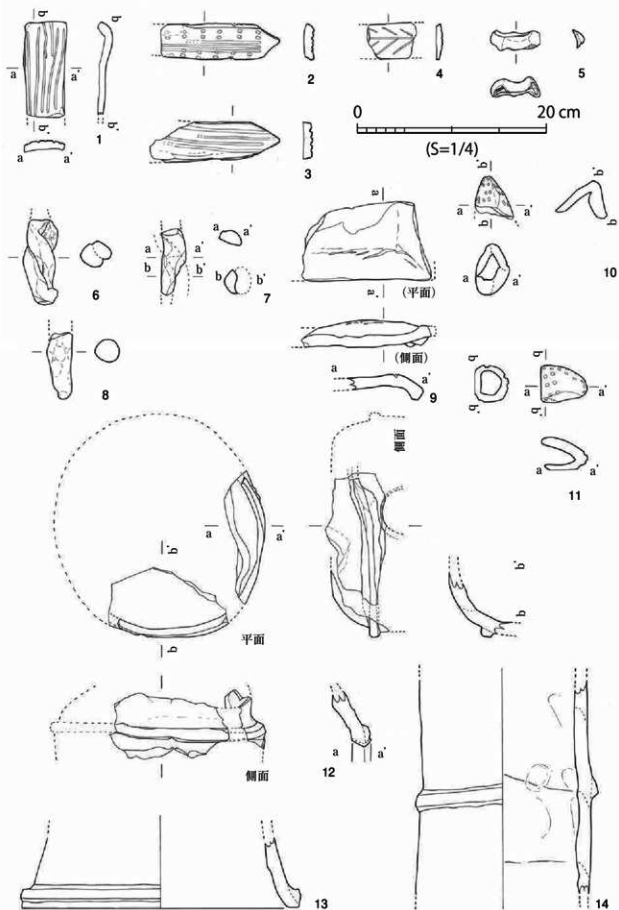


图 5-53 西造出 不明形象埴輪・形象基部

第6章 円筒埴輪・朝顔形埴輪

第1節 円筒埴輪 (図6-1～6-5)

円筒埴輪は、原位置の基部は限定的にしか取り上げていないため、全体を復元できたのは図6-4-19のみである。大日山35号墳出土の円筒埴輪は、形態や製作技法、胎土などの違いから大きく2つに分類できる。一方は、2次調整に横ハケを施し、明橙色の胎土で、Ⅳ群系あるいは紀伊型（環畿内型）と称される円筒埴輪である（図6-1～6-3）。もう一方は、横ハケ2次調整を施さず、黄褐色の胎土で、Ⅴ群系あるいは畿内型と称される円筒埴輪である（図6-4・6-5）。

Ⅳ群系円筒埴輪は全体を復元できたものはないが、図6-1-2や図6-2-6などから4条5段以上であることは確実である。復元できたⅤ群系円筒埴輪の器高は約60cmで、それと同じ器高を想定すると5条6段に復元できる。ただし口径が大きい図6-1-1などは5条6段以上になる可能性も考えられる。スカシ孔は下から2・3段目にあるものがある（図6-1-4）が、2段目にスカシ孔がなく、3段目以上にあるものもある（図6-2-9）。上からは2・3段目にあるもの（図6-2-5・6）と、3・4段目にあるもの（図6-1-2）がある。突帯は断面が低いM字形で、ほぼ水平に貼り付けられ、突帯の間隔はほぼ一定である。突帯はほとんど剥離していないので確認できないが、突帯設定技法を用いた可能性が高い。Ⅳ群系円筒埴輪は、さらに色調の違いにより、橙色（図6-1-1～4）とにぶい橙色（図6-2-5～9）を呈するものに分類することができる。ただし、橙色の方がやや口径が大きい傾向にあるものの、段数やスカシ孔の位置など他に大きな違いを見出せず、製作方法などは共通している。Ⅳ群系円筒埴輪は、1段目テラスや造出の円筒埴輪列の大部分に設置されていた。また、2段目斜面からも破片が出土することから、墳丘上にも設置されていた可能性が高い。

Ⅴ群系円筒埴輪は、全体を復元できた図6-4-19などから、4条5段で構成されることがわかる。底部高（1段目）が比較的高く、2段目と4段目にスカシ孔がある。突帯貼り付け前の縦ハケ（斜めハケ）1次調整のみで、横ハケ（2次調整）は確認されない。突帯は断面台形で、突帯設定技法は用いておらず、突帯が水平に貼り付けられていない箇所がある。焼成は、土師質のものが多く、一部は須恵質になっているものがある。底部は板状工具によるナデで調整される。口縁部付近に波状の線刻を有するものがある（図6-4-19）。Ⅴ群系円筒埴輪は基壇テラスの円筒埴輪列のすべてと、造出や1段目テラスの円筒埴輪列のごく一部に設置されていた。また、2段目斜面からも破片が出土することから、墳丘上にも設置されていた可能性が高い。

第2節 朝顔形埴輪

朝顔形埴輪も円筒埴輪と同様にⅣ群系（図6-3-17・18）・Ⅴ群系（図6-5-26・27）が出土している。Ⅳ群系の朝顔形埴輪は、縦ハケ1次調整・横ハケ2次調整が確認でき、明橙色を呈し、突帯の形態も断面が低いM字形である。体部や底部だけでは円筒埴輪と区別できないため、Ⅳ群系朝顔形埴輪の底部は特定できておらず、全体を復元できたものはない。

Ⅴ群系の朝顔形埴輪は、黄褐色を呈し、Ⅴ群系円筒埴輪に類似する形態や特徴を有する。ただし26・27は調整が不明瞭でハケ目が観察できないが、おそらく縦ハケ1次調整のみと推測できる。一部欠損するものの全体を復元できたのは図6-5-27のみである。

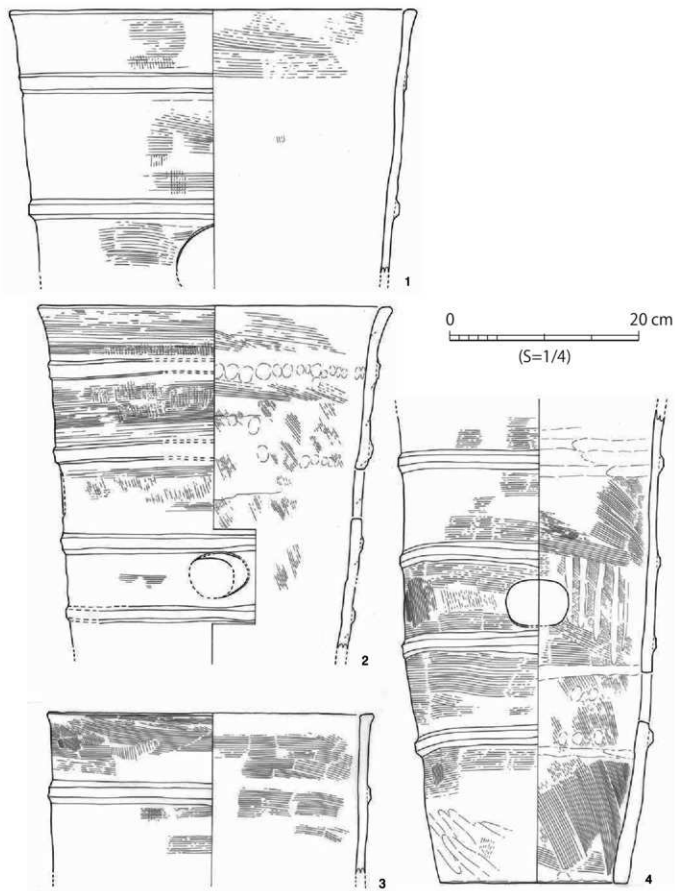


图 6-1 IV 群系円筒埴輪

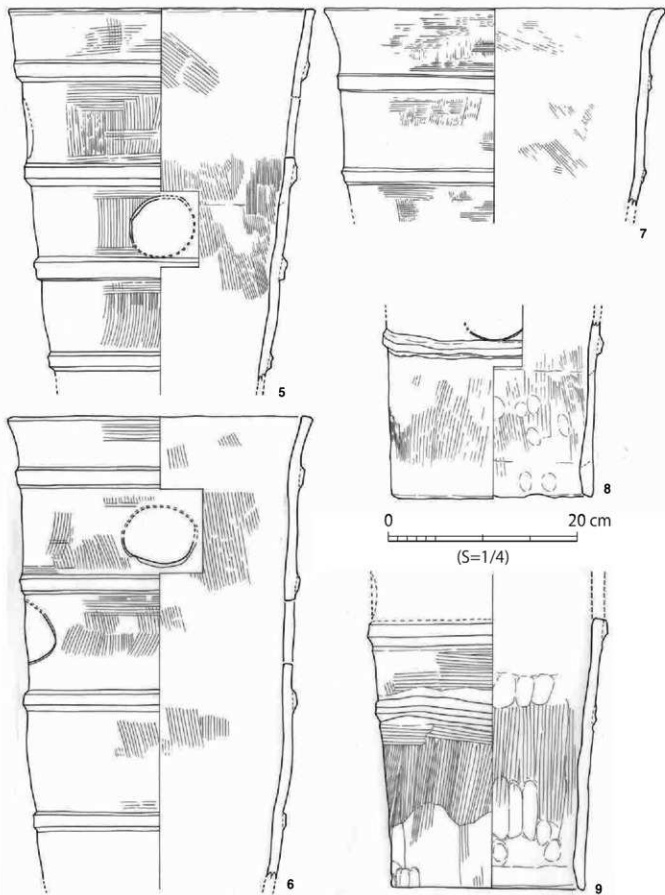


图 6-2 N 群系円筒埴輪

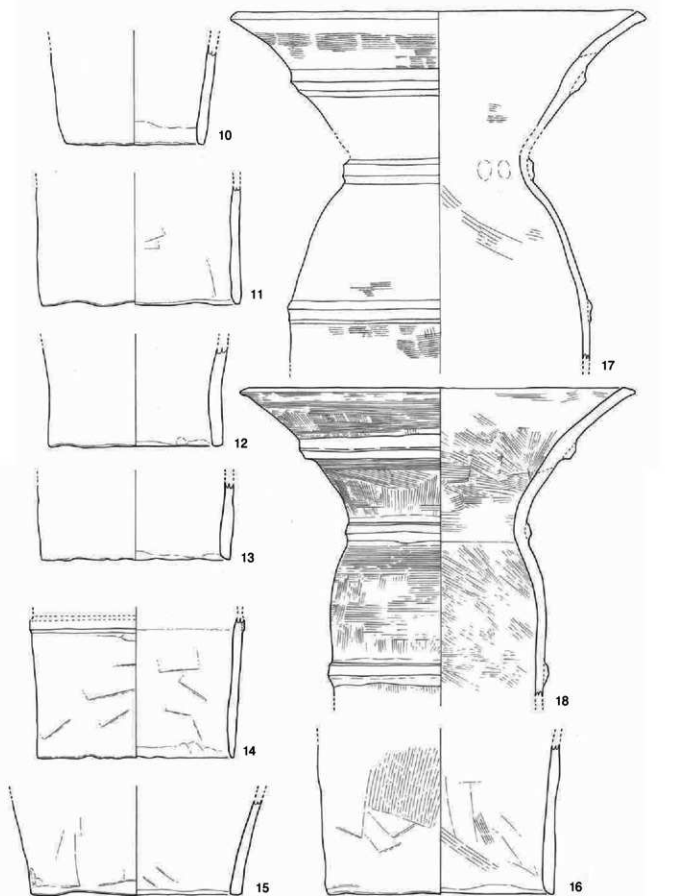


図 6-3 IV群系円筒埴輪 朝顔形埴輪

0 20 cm

(S=1/4)

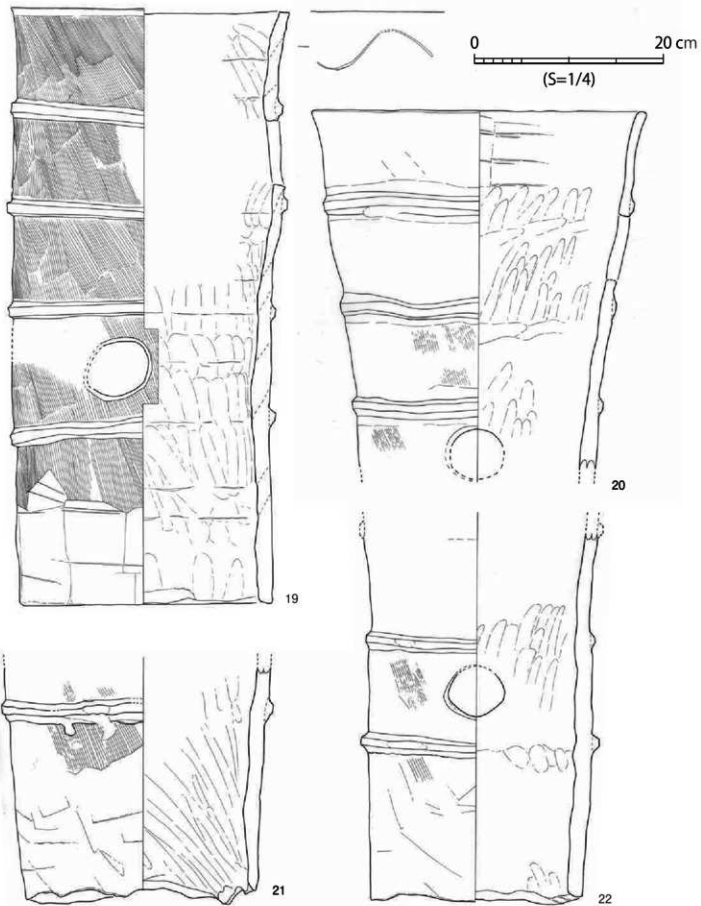


图 6-4 V 群系円筒埴輪

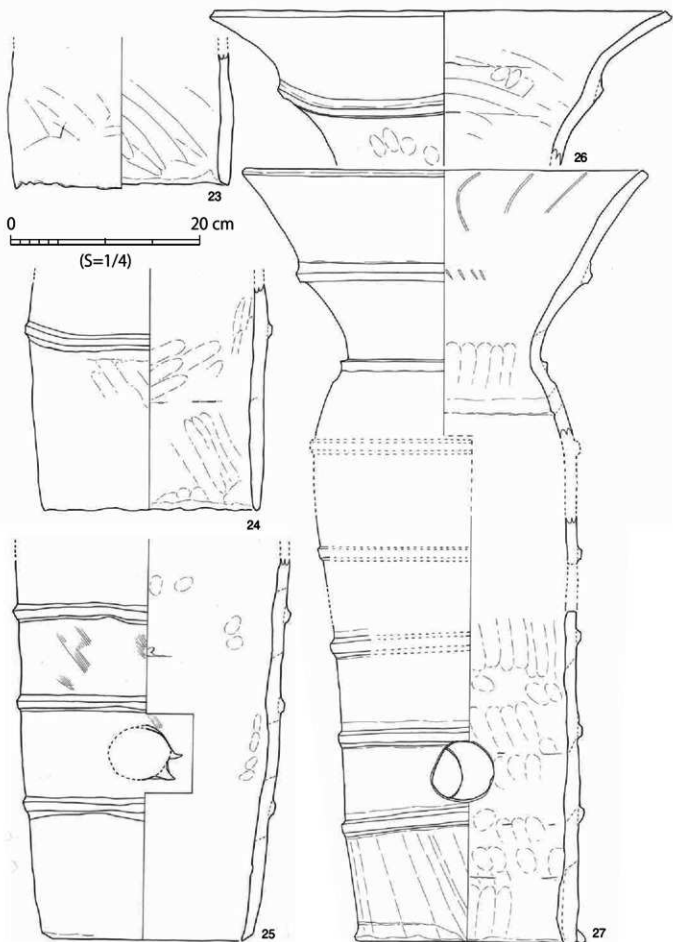


图 6-5 V 群系円筒埴輪 朝顔形埴輪

第7章 東造出・西造出の須恵器・土師器

第1節 東造出出土の須恵器 (図7-1・2)

1～11・17は東造出出土の須恵器である。1は壺類かそうで、肩部に僅かに稜があり自然軸が付着する。2は高杯で3方にスカシを穿つ。3・4は器台杯部で、3は波状文が施文され、下半には平行タタキ、内面にも同心円文タタキが残る。4はカキメの後に波状文が施文され、中には沈線があり、下位にはタタキ目が残る。5～11は器台脚部で、2～3条の沈線を境に上下に波状文が施文され、長方形および三角形のスカシが穿たれている。11は器台脚部で、カキメの後に2条沈線と波状文が施文される。17は大甕で、口頸部上部には2段の沈線と波状文が施される。体部は縦方向の平行タタキで調整され、内部には同心円文タタキが顕著に残る。

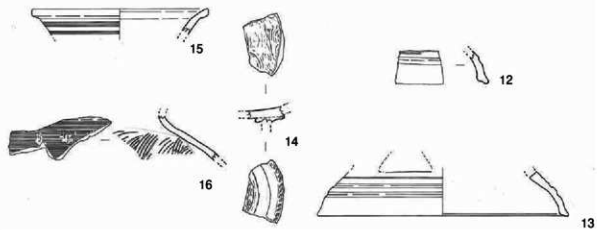
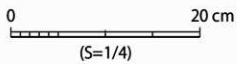
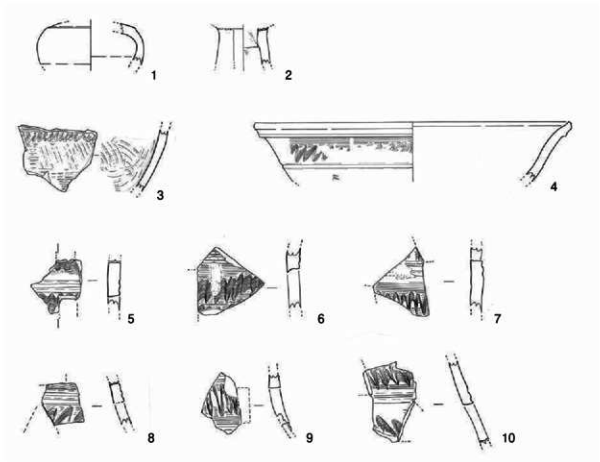
12～16は東造出側の2段目斜面で出土した須恵器で、墳丘上から転落したものである可能性がある。12・13は器台裾部で、12は1条沈線が施されている。13は3条沈線が施され、上方には三角形スカシが穿たれている。14は器台の杯部と脚部の接合部で、接合部の貼り付け凸帯端部には刺突文が施文される。15は壺の口縁部で、頸部に2段のカキメが施される。16は甕の口頸部の破片で、器面はタタキ調整の後、カキメ調整、内面には同心円文タタキが残る。

第2節 西造出出土の須恵器・土師器 (図7-3～6)

1・3は有蓋高杯の蓋で、つまみ部分が残る。2は壺の蓋の可能性があり、天井部には沈線を挟み刺突文が施文される。天井部と口縁の境には僅かに稜線を残す。6は有蓋高杯の蓋で、天井部と口縁の境の稜はあまい形状を示す。4・5・7～10は蓋杯の蓋と考えられ、天井部に回転ヘラケズリが確認できる。8・9は、天井部と口縁部の境の稜は沈線風で、9の天井部にはヘラ記号がある。11～14は杯身で、11は見込み部には同心円文タタキの痕跡が遺存する。12・13は口縁部を欠損し、12は推定口径が12cm前後。13は口径が18.0cmを超える。14は口縁部の立ち上がり小さく、高杯の可能性もある。15～34は高杯の脚部で、15・16は長脚2段の高杯脚部で、3方に長方形スカシを持つ。17～22・31～34は形状がほぼ同じタイプである。2段スカシで上方が長方形、22・31～34には下段に三角形スカシが確認できる。23は15・16に類似する可能性がある。24～27は法量が類似するが端部の形状がやや異なる。28～30はやや大形の脚部で、28は三方スカシで長方形と三角形のスカシが認められ、裾部には波状文が施文される。29・30は三角形のスカシが穿たれる。35・36は手持ち裝飾壺あるいは裝飾器台に取り付く小壺で、両者とも体部に長方形スカシがある。37は器台杯部、38～40は器台脚柱部、41は器台脚部で、いずれも波状文が施文される。42は直口壺か広口壺の頸部である。43～46は甕で、口径はそれぞれ18.3cm、19.3cm、22.6cm、45.4cmをはかる。いずれも内面は同心円文タタキの痕跡が顕著である。43～45はタタキの後にカキメで調整されている。46は口頸部上部に2段の沈線と波状文が施されている。

図7-4 1～7は西造出出土の土師器で、1は碗か高杯の杯部、2～5は高杯の脚部、6は壺の口縁部、7は壺の体部である。

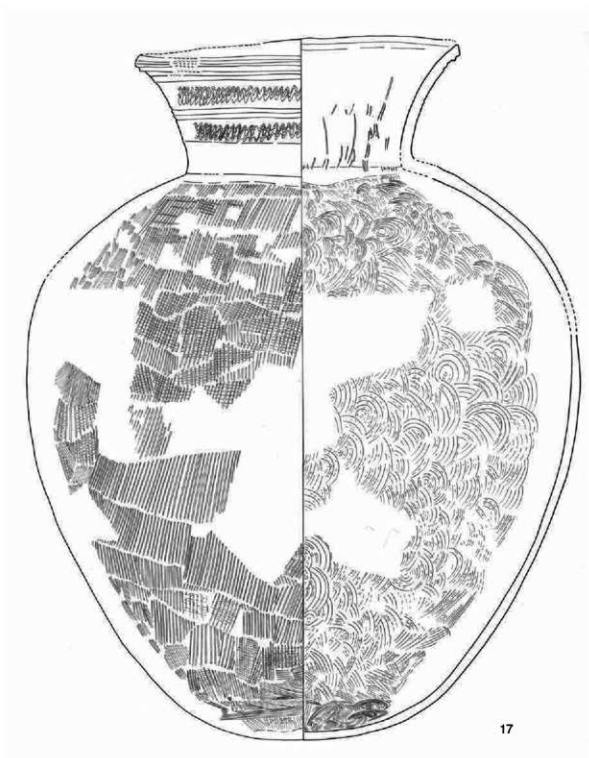
東造出・西造出出土の須恵器の所見としては、高杯及び器台が蓋杯を凌駕する。肉眼観察では、黑色砂粒、片岩を含む個体が多く認められ、岩橋丘陵南側に展開する吉礼砂羅谷窯の製品である蓋然性が高い。吉礼砂羅谷窯の開始が6世紀初頭であることも矛盾しない。



1~11：東造出土

12~16：2段目斜面出土

图 7-1 東造出 須惠器①



0 20 cm
(S=1/4)

图 7-2 東造出 須惠器②

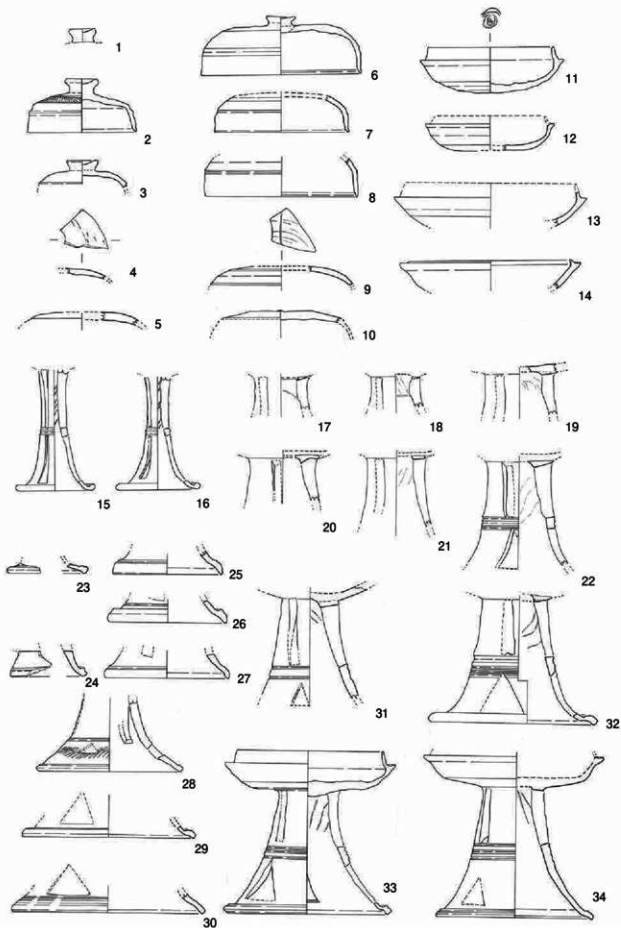
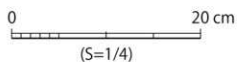
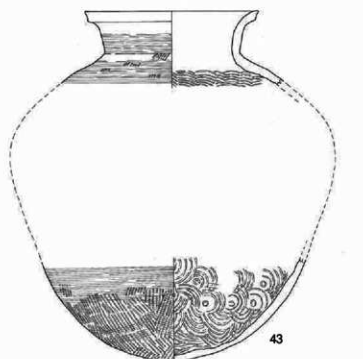
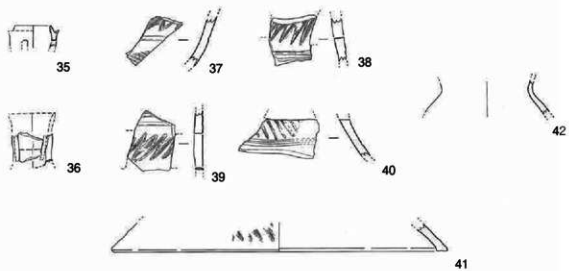


图 7-3 西造出 須惠器①

0 20 cm
(S=1/4)



35~43：須惠器
1~7：土師器

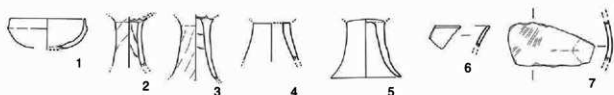
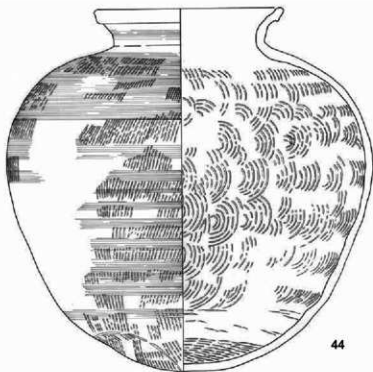
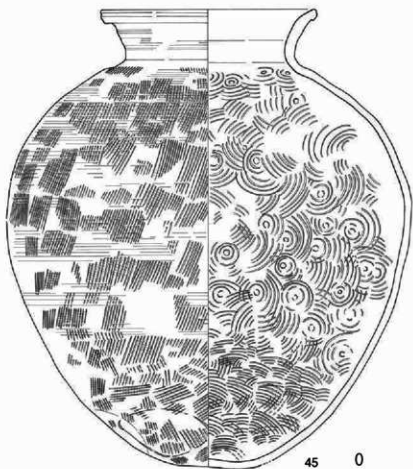


图 7-4 西造出 須惠器②・土師器



44



45



(S=1/4)

图 7-5 西造出 須惠器③

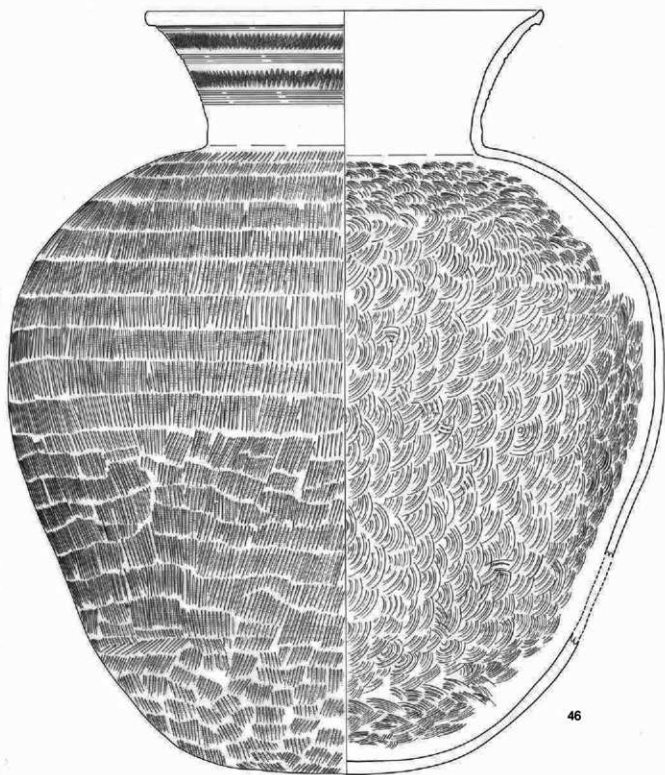


图 7-6 西造出 須惠器④

第8章 総括

岩橋千塚古墳群中で最大規模の前方後円墳である大日山35号墳の墳丘規模や構造を確認する目的で発掘調査を実施した。調査の結果、以下のことが判明した。

①墳丘 墳丘は3段構成となり、最下段は総長約105mの盾形の基壇で、その上に2段築成で墳長約86mの前方後円墳形の墳丘を構築している。

②円筒埴輪列 基壇テラスおよび1段目テラス、東西造出で円筒埴輪列を検出した。円筒埴輪は、2次調整に横ハケを施し、明橙色の胎土で製作されたⅣ群系（紀伊型）を称されるものと、横ハケ2次調整を施さず、黄褐色の胎土で製作されたⅤ群系（畿内型）と称されるものが出土し、前者は1段目テラスや造出に多く使用され、後者は基壇テラスに使用されている。両者が1つの古墳で出土するのは県内で唯一の例となる。円筒埴輪列中に5～6本に1本程度朝顔形埴輪が含まれる。朝顔形埴輪にもⅣ群系・Ⅴ群系の2種類が出土している。

③造出 基壇上の墳丘1段目の東西くびれ部に造出が取り付き、両造出から多量の形象埴輪が出土した。東造出では基部が据え付けられた状態で見つかった埴輪はほとんどなく、家形埴輪の屋根などがひっくり返されたような状態で出土し、水鳥や力士の一部が造出外の墳丘側で出土するなど、人の手が加わって大きく動かされたと考えられるものがある。しかし、ある程度まとまりをもって出土する傾向があり、出土地点に近い場所に樹立されていたと推測することができる。東造出中央部には3分割焼成の家形埴輪や盛装男子が、東造出西側には翼を広げた鳥や水鳥、力士などが、東造出北側では犬、猪、牛などが出土している。家形埴輪の一部や巫女などは東造出南東側で集中して出土しているが、本来の樹立地点はもう少し中央部寄りであった可能性がある。基壇テラス付近で馬が出土しているが、東造出内にあったものが転落したと推察している。

西造出では馬や人物の草摺・人物基部など一部で据え付けられた状態を保って出土した埴輪がある。西造出中央部では人物埴輪が集中しており、それを囲むように馬や器財が出土する傾向にある。翼を広げた鳥は西造出西斜面で出土しており、本来は西造出北西部付近に樹立されていた可能性がある。

④形象埴輪 家形埴輪（盛装男子、武人、力士、巫女ほか）、動物埴輪（馬、牛、猪、犬、水鳥、翼を広げた鳥）、器財（大刀、胡篋、靱、蓋）埴輪が出土した。このうち、両面人物埴輪や翼を広げた鳥形埴輪、胡篋形埴輪は全国初例となる。3分割焼成された高床式入母屋造の家形埴輪は、今城塚古墳（高槻市）に類例がある。水鳥形埴輪はツル・サギ類を模したもので、西日本では初例となる。横座り用の短冊形水平板を取り付けた馬形埴輪は、西日本では音楽谷古墳（木津川市）に次いで2例目となる。牛形埴輪も今城塚古墳や音楽谷古墳などに類例があるが、全国的にも数十例しか確認されていない貴重な発見である。このように今城塚古墳などと共通する要素がある一方で、ここだけのオリジナルな埴輪が出土したことは特筆すべき点である。

⑤須恵器 両造出とも須恵器の甕が据え付けられた状態で出土した。甕のほかに器台や高杯、杯なども出土している。須恵器周辺には埴輪の出土が少ないため、造出には埴輪を樹立する空間とは別に須恵器を置く空間を作り出していたと推測できる。

⑥時期 出土した埴輪や須恵器から大日山35号墳は6世紀前半に築造されたと考えられる。

【引用・参考文献】（※第2章の【岩橋千塚古墳群調査関連報告書】掲載分は省く。発行機関は初出のみ掲載。）

- 青柳泰介 1995「家形埴輪の製作技法について」『日本の美術 348 家形はにわ』（至文堂）・2004「埴輪配列論」『考古資料大観』10（小学館）・2007「家形埴輪の製作技法について再論」『埴輪論考Ⅰ－円筒埴輪を読み解く－』（大阪大谷大学博物館）
- 青柳泰介・小栗明彦 2003『西日本出土の形象埴輪集成』（1999～2002年度文科省科研費（基礎研究C2、11610430）研究成果報告書）
- 一瀬和夫・車崎正彦編 2004『考古資料大観』4、稲村繁 1999『人物埴輪の研究』（同成社）、井上裕一「馬形埴輪の研究」『古代探査Ⅱ』（早稲田大学出版部）、大野謙夫 1986「双脚輪状文埴輪片の表面採集」『古代学研究』111（古代学研究会）、小栗明彦 2007「蓋形埴輪編年論」『埴輪論考Ⅰ』、買米孝代 2002「埴輪の鳥」『日本考古学』14（日本考古学協会）・2003「鳥の埴輪の雌と雄」『山口大学考古学論集 近藤高先生退官記念論文集』・2009「鳥形埴輪の表現」『埴輪研究会誌』13（埴輪研究会）、加藤優平 2010「スズガイ由来の器財と文様」『考古学研究』57-1、かみつけの里博物館 2008「力士の考古学」、鎌方正樹 1999「2条突帯の円筒埴輪」『埴輪論叢』1（埴輪検討会）・2003「円筒埴輪の地域性と工人の動向」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会）、河内一浩 1988「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求真能通』（興三郎先生古稀記念論集刊行会）・1992「紀伊出土の埴輪祭祀遺書」『埋蔵文化財研究会 15周年記念論文集』（15周年記念論文集編集委員会）・2001「紀伊における埴輪の受容と拡散」『紀伊考古学研究』4（紀伊考古学研究会）・2002「和歌山県の円筒形埴輪編年素描」『埴輪論叢』3・2003「埴輪にみる後期「岩橋千塚」古墳集団の階層性」『紀伊考古学研究』6・2003「古墳時代後期における円筒形埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』4・2004「紀伊型円筒形埴輪再考」『地域と古文化』（『地域と古文化』刊行会）、小浜成 2008「古墳における儀礼の場の変遷過程と儀王権」『埴輪群像の考古学』（青木書店）、杉山晋作・井上裕一・日高慎 1997「古墳時代の横走り乗馬」『古代』103（早稲田大学考古学会）、鈴木徹 1999「女子埴輪、袷袢衣の孔」『埴輪論叢』1、高橋克彦 1992「器財埴輪」『古墳時代の研究』9（雄山閣）・1996「歴史発掘⑨埴輪の世紀」（講談社）・2004「埴輪まつりのうつつりかわりと今城塚古墳」『発掘された埴輪群と今城塚古墳』（高槻市立しろあ歴史館）・2005「音楽谷古墳出土埴輪の特質」『奈良山発掘調査報告Ⅰ』（独）奈良文化財研究所）・2006「埴輪一塚から群像に迫る」『列島の古代史』5（岩波書店）・2008「王権と埴輪生産」『埴輪群像の考古学』、田中秀和 2003「畿内における鞍形埴輪の検討」『続文化財学論集』（文化財学論集刊行会）、丹野拓 2011「岩橋千塚山B地区で表探された胡蹄形埴輪」『紀伊考古学研究』14、塚田貞道 1992「鷹匠」と「馬剣」『同志社大学考古学シリーズV考古学と生活文化』（同志社大学考古学シリーズ刊行会）・2007「人物埴輪の文化史的研究」（雄山閣）、辻川哲朗 1999「円筒埴輪の突帯設定技法の復元」『埴輪論叢』1・2003「突帯－突帯間隔設定技法を中心として－」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』・2010「市尾墓山古墳出土埴輪の再検討」『同志社大学考古学シリーズX考古学は何を語るか』・2010「井辺八幡山古墳出土「力士埴輪」に関する一考察」『古代史の海』61（『古代史の海』の会）、服部伊久男 2003「畿内の大刀形埴輪」『同志社大学考古学シリーズⅧ考古学に学ぶ（Ⅱ）』、日高慎「横走り乗馬再考」『同志社大学考古学シリーズⅨ考古学に学ぶ（Ⅲ）』、富加見泰彦 2008「井辺八幡山古墳出土力士埴輪について」『公開シンポジウム岩陰と古墳』（財）和歌山県文化財センター）・2009「井辺八幡山古墳出土力士埴輪の再検討」『郵政考古紀要』47（郵政考古学会）、藤井幸司 2007「小古墳にみる円筒埴輪生産の具体相」『埴輪論考Ⅰ』・2012「地域の展開 近畿周辺」『古墳時代の考古学』2（同成社）、藤原勝剛 2002「岩橋千塚における形象埴輪配列について」『紀伊考古学研究』5・2003「紀伊における円筒形埴輪の編年」『埴輪論叢』4・2006「古墳時代後期における円筒形埴輪の様相－いわゆる紀伊型埴輪（環畿内南部型）埴輪について－」『紀伊考古学研究』9、前田真由子 2009「製作技法からみた家形埴輪の変遷とその両側」『古文化談叢』61（九州古文化研究会）、松田茂 2010「造り出しにみる埴輪配置の構造Ⅱ－和歌山市井辺八幡山古墳の事例から－」『同志社大学考古学シリーズX』、宮崎康雄 2004「今城塚古墳の発掘成果」『発掘された埴輪群と今城塚古墳』・2008「大阪 今城塚古墳」『埴輪群像の考古学』、望月幹夫 1995『日本の美術 347 器財はにわ』（至文堂）、森田克行 1992『動物埴輪の技法』『古墳時代の研究』9（雄山閣）・2003「今城塚古墳の調査成果」『日本考古学』15・2008「新・埴輪雲能論」『埴輪群像の考古学』・2011「シリーズ「遺跡を学ぶ」077 よみがえる大王墓 今城塚古墳（新泉社）、若狭徹 2009「もっと知りたいはにわの世界」（東京美術）、若松良一 1992「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』9・1991「双脚輪状文と貴人の帽子」『埼玉県考古学論集－設立10周年記念論文集－』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団）・2002「埴輪の地域性－紀伊の埴輪のありかたから探る－」『研究紀要』第17号（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団）・2012「井辺八幡山古墳の形象埴輪体系とその解釈」『古代学研究』195

